國譯禪學大成

第二十卷

國譯禪學大成第二十卷凡例

一、本大成第二十卷に收載する所の書は、佛光圓滿常照國師語錄四卷及び五家參詳要路門一卷の二部五卷なり。

一、以上の中、佛光圓滿常照國師語錄は、略して『佛光國師語錄』、又は『佛光錄』とも稱し、鎌倉時代に來朝して、鎌倉圓覺寺の開山となりし無學祖元禪師の遺錄なり。本書は室町時代の貞治六年、初めて開板せられて以來、弘く禪林の間に行はれ、且つ數度の上梓を見るに到れり。乃ち慶安三年刊の一卷本、寶永二年刊の三卷本、寬文四年刊の六卷本、享保十一年刊の十卷本及び同年再刊の五卷本等あり。今次、國譯するに當り、享保再刊の五卷本中、附錄（行狀、年譜、塔銘を載す）一卷を除いて、爾餘の四卷を譯註せり。

一、五家參詳要路門は、近代我が禪界の巨擘白隱禪師の神足、伊豆龍澤寺の東嶺和尚の編述する所のものなり。本書は禪門五家（臨濟、雲門、曹洞、潙仰、法眼）の宗要を詳論し、五派の要路各異なりと雖も、結局は一源に歸する所以を說き、以て參學入門の資糧に供したるものなり。附錄に臘八示衆、看經榜の二篇を添ふ。而して本書は天明

丹州法常皇寺の大觀和尚が校訂して上梓せしもの、文政十年に至り、丹州法常皇寺の大觀和尚が校訂して上梓せしも

のなり。今次、國譯するに際しては、此の文政の刻本に據り、傍ら大觀和尚の稿本をも參照せり。

一、以上二部の書中、佛光錄は、當時、來朝僧中に最も繁興せし佛光派の代表的著書にして、古來弘く叢社の間に愛讀せられしのみならず、今猶ほ數々提唱に供せらる。されば本書は國師の眼睛と其の詞藻とを窺ふに足ると共に、又鎌倉時代の禪風の一般と元寇の史實とを究めんとするには必須の書たり。五家參詳要路門に至りては、彼の五家の差別と其の根本とを徹見するに、之に越したる指南車はなく。且つ又之に依つて近代禪林に活を入れたる鵠林の禪風をも窺ふことを得べし。

昭和五年八月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十卷

目次

國譯佛光圓滿常照國師語錄

解題

佛光國師は法を無準師範に嗣いで台州（今の浙江省臨海縣）の眞如寺に住し、元の至元十六年（我が弘安二年）北條時宗の聘に應じて來朝し、鎌倉建長寺に住す。尋で北條氏、圓覺寺を創するや、これが開山第一世となる。本錄は乃ち此の三會の語要を集めたるものにして、編者は何れも師の侍者一眞、德溫、眞慧等なり。而して本錄の刻本に數種あることは、既に凡例に於て述ぶるが如し。現時最も弘く世に流布するものは、享保十一年刊行の五卷本と十卷本となり。今此の兩者を比較するに、後者には普說小佛事、建長普說、法語、佛祖贊、偈頌、拾遺など、前者に無きものを可なり多く收載せり。是れ師の遠孫磧隆、自穩等が、舊版を訂正增補して開板せしものなればなり。今次は頁數の都合などに因り、前者を採擇せり。而して其の內容を考察するに、第一卷には師が在宋當時の住山たる台州眞如寺語錄を載せ、第二卷には拈古、禮祖塔、往來偈頌を錄し、第三卷には來朝後の住山たる建長寺語錄、第四卷には圓覺寺開山語錄を收錄せり。而も其の言句たるや、文辭淳深にして雅健、簡にして切ならず、麗にして浮ならず、其の偈頌に至つては、眞に詞林中、稀に見るの名手と謂ふべし。

我が國、禪宗の流傳二十四派の多きに及ぶと雖も、其の最も繁興したるは無準と松源の二派に如くはなし。佛光國師は乃ち此の無準の高足にして、東福寺開山聖一國師とは兄弟の間柄なり。而も其の下に佛國國師を出し、佛國の下に夢窓國師を生みて法脈次第に繁榮し、松源派の大應國師一派と共に、互に轡を並べて臨濟の禪風を天下に鼓揚せり。されば本書は、此の佛光派を代表するの名著たるのみならず、又國師の眼睛を窺ふには唯一の好著たり。加之、本書は鎌倉禪風の一般と又當時の史實とを確むるに就いても重要なるものの一と稱せらる。

師の傳を案ずるに、諱は祖元、字は子元、無學と號す。俗姓は許氏、支那明州慶元府（今の浙江省甌海道慶元縣）の人なり。父は伯濟、母は陳氏、南宋理宗皇帝の寶慶二年（我が後堀河帝の嘉祿二年、皇紀一八八六）を以て生る。七歳にして家塾に就いて書を讀み、強記群童に絕す。年十二にして父兄に隨ひて山寺に遊び、僧の「竹影掃レ階塵不レ動、月穿二潭底一水無レ痕」と吟ずるを聞いて、師懷に默契す。已に在俗の意なし。年十三にして父を喪ひ、秋七月、師兄に隨つて臨安府に之き、淨慈寺に投じて出家す。冬十月、住持北磵簡和尚を禮して落髮受具す。翌年徑山に登りて、佛鑑無準範禪師に見え、十七歳にして「狗子無佛性」の話に參じ、僧堂を出でざること五年、一夜、首座寮前の板聲を聞いて忽然として己事を發明す。卽ち偈を作つて曰く、「一槌擊碎精靈窟、突出那吒鐵面皮。兩耳如レ聾口如レ啞、等閒觸著火星飛」と。無準に呈す。準少しく之を可となす。而して準亦示すに、香嚴擊竹の頌を以

てす。師契はず。既にして準示寂す。即ち靈隱に到りて石溪月禪師に見え、明年育王に往いて偃溪聞に參ず。再び徑山に上りて石溪に見ゆ。偶々松源の普說を閲して頓に所得を忘ず。既にして鷲峯庵に往いて虛堂愚禪師に參扣す。虛堂一日、僧を送るの頌を師に示す、師熟看して曰く、「和尙、此の頌は都て是れ閒說、中間都て些子の禪なし」と。堂頌子を拈起して云く、「這箇、聻」と。師答へんと欲す。堂劈面に一摑す、師當下に脫然として省あり。翌年、觀物初に大慈寺に依り、持淨すること二年、一日井樓に登つて水を汲む、轆轤を牽動して大いに無礙の機用を發し、無準の向に示す所の香嚴撃竹の頌、狗子無佛性の話など斯に於て消息を絕す。時に師年三十六なり。

明年、邑宰羅季勉、東湖の白雲庵を以て師を招く。移りて母を養ひ、居ること七年、母亡じて後、靈隱寺の退耕寧の鎚下に歸し、第二座に居る。咸淳五年秋、大傅平章賈似道の請により台州（今の浙江省臨海縣）の眞如寺の主となる。居ること七年、學者雲集す。德祐元年秋、元兵、中國を騷す。師難を溫州雁蕩山の能仁寺に避く。翌年、元兵、溫州を陷す。衆皆逃竄すれども、師獨り堂中に坐して去らず。元兵、刃を以て師の頸に加ふ、師神色動ぜず、頌を述べて曰く、「乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風」と。衆兵之を聞いて、悔謝作禮して去る。次年、天童山に往いて法兄環溪和尙を訪ふ。環溪留めて第一座に居らしむ。時に我が建長寺席を虛しうす、副元帥北條時宗、書幣を具へて師を聘して東渡せしむ。是に於て師將に東航せんとするや、環溪、無準の法衣を以て

之に授く。五月、太白を離れ、六月、船に登り、八月太宰府に着く。是れ本朝の弘安二年なり。秋、鎌倉に下り、建長寺に入りて開堂演法す。北條時宗、その道化を仰高して遂に弟子の禮を執る。

弘安五年冬、時宗、圓覺寺を創し、師を延いて開山始祖となす。開堂の日、群鹿筵に臨む、因つて師之を吉徴となし、瑞鹿山を以て名となす。學者臻り萃り、歡聲雷動し、生佛の應世に似たり。是れより先き、弘安四年の春、師、「莫煩惱」の三字を書して時宗に呈す。時宗曰く、「是れ何の言句ぞ」と。師曰く、「春秋の交、博多騷擾せん。而も日ならずして靜謐せん。公慮とすること勿れ」と。果して五月、元兵壹岐を侵し、翌月太宰府を犯す。閏七月、元軍の千艦、風濤のために覆沒す。時宗問うて曰く、「和尙何を以てか之を先知すや」と。師笑つて曰く、「二年を過ぎなば、太守に說くべし」と。後三年、即ち弘安七年四月、時宗俄かに卒す。師歎じて曰く、「吾が宗の外護、云に亡ぶ。正法を興すものは誰ぞ」と。未だ幾ならざるに、鼓を鳴して遽かに圓覺を退き、建長に歸る。檀越屢〻請へども固く辭して從はず。秋に至りて疾を示す、自悼の頌七首を作る。八年夏大いに旱す。新太守貞時、師に請うて雨を祈らしむ。乃ち甘雨沛然として降ること三日、歲大いに稔る。九年夏、庭前の桂橘、故なくして枯る。左右駭然たり。師曰く、「吾れ將に逝かんとす」と。九月三日、手づから遺書を記して將軍及び故舊に別る。晚に至りて偈を書して衆に示して曰く、「諸佛凡夫同是幻、若求實相眼中埃。老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰」と。夜三更に至り、衣を易へて端坐し、筆を索めて偈を書して曰く、「來亦不前、去亦不

後。百億毛頭師子現。百億毛頭師子吼」と。筆を置いて泊然として寂す。壽六十一。僧臘四十九。龕を留むること三日、靈骨を同寺の後麓に藏む。勅して佛光國師と諡す。光嚴帝、更に號を圓滿常照國師と賜ふ。弟子を度すること三百。就中、一翁院豪、高峯顯日、白雲慧崇、規庵祖圓、太古世源、雲屋慧輪、耕叟仙原、見山崇喜、大用慧堪、雄峯奇央等は膝下の麟鳳たり。

國譯(イ)佛光圓滿常照國師語錄卷一

住ニ大宋(ロ)台州眞如禪寺一語錄一

侍者一眞編

師、(ハ)咸淳五年十月初二日に於て、臨安府(ニ)靈隱の(ホ)首座寮、(ヘ)尚書省の箚(ト)差請を被り、眞如禪寺に住持す。衆の勸請を受け、衆に對して(チ)拈箚。箚を呈起して云く、「朝廷に在つては、之を(リ)宣布號令と爲し、山僧に在つては、之を提持の(ヌ)鉗斧と爲す。(ル)印文已に(ヲ)聲前に在り、諸人自ら(ワ)緇素を分て。」

此の月二十日、入院、

山門を指して云く、「大衆、只だ諸人が脊を掉

(イ)佛光。諱は祖元、字は子元、別號は無學、宋の明州慶元府鄞縣の官族許氏、父は伯濟、母は陳氏、無準師範に嗣ぐ、日本に東來せしは後宇多天皇の弘安二年八月二十日、翌二十一日入ニ院建長一、宋の帝昺祥興二年、元の世祖至元十六年、この年宋亡ぶ、日本にてはその前年七月二十四日、建長開山蘭溪大覺禪師寂す、東福開山聖一國師の寂せしは翌年にして、元寇の二年前なり、師は弘安元年九月三日寂す、世齡六十有一、勅して佛光國師と諡す、北朝の光嚴天皇、重ねて圓滿常照國師と賜ふ。

(ロ)台州眞如。大傳賈秋壑、聘請す。

(ハ)咸淳五年。南宋の度宗の年號、日本の龜山天皇文永六年なり。

(ニ)靈隱。師の傳に「靈隱の寧退耕の鎚下に歸して、第二座に居す」とあり。

(ホ)首座寮。叢林の第一座。則ち

つて㋕直入し、臂を掉つて直出せんことを要す。切に㋵平地上に向つて、自ら門限を立つることを得ざれ。」喝一喝。

既に佛殿を指して云く、「天上天下、唯吾獨尊、儞㋟錢あれば客を留めて醉はしむ。我れ寧ろ馬に騎つて㋹人の門に傍はんや。」香を以て爐を扣くこと三下して云く、「瞿曇莫レ怪㋞空疎。」

擧室、橫に拄杖を按じて云く、「㋡擊石火㋧啐啄の機、二九十八、㋤鳳林咤枝。」

江湖疏を拈じて云く、「我れを貶すこと太だ姸、我れを褒むること太だ醜。㋶魚は謝郎が船に在り、劍は甑人の手に握る。」

法座を指して云く、「機、機を奪ひ、毒、毒を攻む、珍重す燈王如來、㋰猛虎伏肉を飡せず。」

大衆の首位に居る人の寮舍、多年遍參の功成りて大事了畢の者を以て任ずるの職なり、六頭首の一。

㋬尙書省。史官なり、天子の言行をしるす官省なり。

㋣差請。差は「つかはす」と讀む、請は請待のこと。

㋠拈劄。劄は鍼を以て刺すなりと註す、正字通に牘劄用つて以て事を奏す、表に非ず、狀に非ざるものを劄子といふ、敎令又は上書の一體なりと、又は錄子ともいふ。

㋷宣布令。天子の詔令をふれ出すこと。

㋦鈯斧。提持は住山の規範を提唱把持するなり、鈯斧は斧のこと、一大事因緣を鈯斧子といふ、荊榛を截斷する器なれば、古昔の宗師、その弟子に住山を許す時の信表となすと。

㋸印文。印は信なり、許な、たとへば石の玉を藴んで玉の潤はざるが如し。

㋾聲前。音聲未發以前の一句の意にて、三世諸佛出世以前の句、又思慮分別を絕したる那一句なり。

㋻緇素。緇は黑、素は白なり、僧と俗と、又は善惡の意に用ふ。

㋕直入。直下證入の義。

㋵平地上。無用の事のこと。

㋟有錢。錢あらば馳走するのは自分の任意じや。

㋹傍人門。袖乞ひはせぬ。

㋞空疎。無あしらひのこと。

㋡擊石火。閃電光の對句にして極めて僅かなる時間、又は非常に機敏の意に用ふ。

㋧啐啄機。學人と師家との機機投合するにたとへる。

㋤鳳林咤枝。前に出づ。

㋶魚在謝郎。謝は玄沙、甑は首

此の一瓣の香は、恭しく爲に祝延したてまつる。今上皇帝聖壽無疆、伏して願はくは長く㋒九五の尊として、正に文武の統を傳へたまはんことを。

此の一瓣の香は、爐中に爇向して、仰いで　太傅平章相國公を祝す。伏して願はくは邦國の㋖雄基を闢開し、太平の事業を康濟せんことを。此の一瓣の香は、仰いで　判府待制侍郎㋹闔郡尊官を祝す。伏して願はくは高く祿位を躋り、永く㋔明時を佐けんことを。」座に就く。僧問ふ、「一佛出世地㋻金蓮を涌す、和尚出世何の祥瑞かある。」師云く、「天上天下。」進んで云く、「祝聖の一句、作麼生か道はん。」師云く、「㋳華山靑岌岌。」進んで云く、「如何なるか是れ和尚親切爲人の處。」師云く、「㋰我れに鉢水なし、汝針を投ずること勿れ。」進んで云く、「便ち是れ和尚爲人の處なること莫しや。」師云く、「拂却す古巖の雪。」僧禮拜す。乃ち云く、「㋘化育の本、黨なく偏なく、佛祖の㋡源、㋙彼なく此なし。歷歷として象外に淸標たり、堂堂として寰中に樞運す。纖洪長短、各其の宜しきを得たり、春夏秋冬、適として可ならざるはなし。㋓用、狸奴白牯に在り、功、㋢露柱燈籠に歸す。

・切り役人。
㋰猛虎。識心をいふ。
㋒九五。天子の位なり、易卦に下より數へて、五つ目の陽爻の稱。
㋖雄基。天下の基業なり。
㋹闔。殘らず。
㋔明時。太平の時節。
㋻涌金蓮。地から出る四指云云。
㋳華山。太華山なり、岌岌は高きこと。
㋰我無鉢。おれにも錢がない、が、われもむだ錢をつかふなよと。
㋘化育。天地の化育の本源はこれは上より下に被らしむる、徒黨も偏倚もないと。
㋡源。本源なり。
㋙無彼。水銀無レ假、阿魏無レ眞となり。
㋓用。作用なり、功は勳なり。
㋢露柱。牆壁瓦礫も。
㋜儱々。ぶらりなり、顢々は大

㋐儱儱侗侗、顢顢頇頇、便ち見る清塞帶劍の客を卻け、度關鷄鳴の人なきことを。然りと雖も衲僧家、能く幾箇あつて、慚を知り愧を識る。千車合轍し難し。萬派自ら朝宗。」「叙謝錄せず。」

復た㋚寶壽開堂、㋖三聖、一僧を推し出すの公案を擧す。拈じて云く、「三聖、佛面に向つて金を剝ぎ、他の寶壽多少の光彩を添ふ。眞如が拄杖、也た㋴多きことを較べず、只だ是れ人の喫することを解するなし。」

當晚小參、僧問ふ、「麟龍瑞を爲さず、㋱草木光輝を生ずる時如何。」師云く、「渭川釣客なし。」進んで云く、「璞を抱いて師に投ず、請ふ師一鑑。」師云く、「㋯南北東西何の限りかあらん。」乃ち云く、「宗門を提唱することは、須らく滴水氷を生ずる處に向つて、身を轉得して、方に是れ衲僧の巴鼻なるべし。有る底は一向に照と說き用と說き、有る底は一向に妙と說き玄と說き、有る底は一向に懸崖峭壁、有る底は一向に石火電光。斯の如きの擧唱、甚の交涉かあらん。山僧三十年行脚、東風西水、南去北來、固に是れ㋛長鞭馬腹に掛らず、曾て㋽天津橋上に向つて、晝官更を打す。然りと雖も、玉解連環易、珠穿九曲難。」

擧す、㋪平田、㋲茂源和尚を訪ふ、源纔に身を起す、田把住して云く、「開くときは則ち失し、閉づ

面をして、人を輕蔑するなり、しさいらしいかほをいふ。

㋚寶壽。沼、臨濟に嗣ぐ。

㋖三聖。然、同上。

㋴不較多。三聖行くこと一尺、この眞如行くこと一寸と。

㋱草木。一莖艸を以て、丈六の金身となす。

㋯南北。おれがやうなうろたへもの、澤山あろとなり。

㋛長鞭。とかく痒處にとどかぬと。

㋽天津橋上。伶俐の漢をさす、官吏は時刻なうつ官の時間計。

㋪平田。普岸、百丈海に嗣ぐ。

㋲茂源。孝義空に嗣ぐ、空は丹霞然に嗣ぐ。

るときは則ち喪す、此の二途を去つて、請ふ師別に道へ。」源、手を以て鼻を掩ふ。田云く、「一歩は較易く、兩歩は較難し。」源云く、「甚の死急をか著く。」田云く、「若し是れ師にあらずんば、洎んど諸方に檢責せられん。」拈じて云く、「平田兵を礪して馬に秣ふ。將に謂へり萬里勝つことを決して還ると。茂源一鏃未だ施さず、甚に因つてか羊を牽き璧を納る。」喝一喝。

㊆華書記を謝する上堂、大方外なく、大圓内なし。海月山雲、面面相對す。昨夜東風北風に轉ず、遼空一鏃三關の外。

冬節小參、僧問ふ、「一陽來復の時如何。」師云く、「六六依然として三十六。」進んで云く、「和尙順水に帆を張ることを解して、逆風に柂を把ることを缺く。」師云く、「若し諸方に到らば、但だ與麼に擧せよ。」乃ち云く、「冬至月頭なれば被を賣つて牛を買ふ、冬至月尾なれば牛を賣つて被を買ふ。今年節令稍遲し、諸人と相見せんことを要す。故に敢て手を出し脚を露さず。謾に㊅洞山の果子と說かば、牙齒先つ寒し、更に㋑皓老の布裩と說かば、毛髮倶に豎つ。是れ善く機に隨はざるにあらず、只だ曾て霜雪を經るが爲なり。然りと雖も、千金の資あれば、千金の病あり、萬里の智なければ、萬里の憂なし。休みね休みね、言ふこと莫れ、㋺李廣侯に封ぜられずと。曾て藍田に向つて石頭を射る。」

上堂、「大功不宰、掩息灰の如し。懸崖絕壁、枯木華開く。」良久して、「雨餘人不レ到、日影落二蒼苔一。」

㊆華書記、不詳なり。
㊅洞山。洞山の果子、前に見ゆ。
㋑皓老、玉泉の布裩、これも前に出づ、毛髮倶に豎つとはおそろしいといふこと。
㋺李廣。此の故事、前に見ゆ。

臘八上堂、「今朝臘月八、瞿曇不丈夫、端なく黃と說き黑と道ひ、鬼を謼し神を瞞す。知らず當初甚の冬瓜・茄子・瓠子・落蘇をか見る。」卓拄杖、「早く知る今日の事、悔ゆらくは當初を愼まざることを。」

㋩古田屋西堂を謝する上堂、「作住深山の破院、客を見て事事乖踈。祥符尊屬到來すれば、轉た覺ゆ㋥臂長うして袖の短きことを。略東山の暗號を展ぶ、如何ぞ仰面して天を看る。話して中峰の㋭沙盆に到つて、又卻つて低頭して地を覷る。眞如、直に是れ歡喜不徹、手に就いて他と與に西河の獅子を一捻し、彼此且く一班を弄す。

上堂、「有句無句は、藤の樹に倚るが如し、赤脚にして刀山に上り、披毛にして火聚を行く。」喝一喝して下座。

歲除小參、僧問ふ、「年窮り歲盡く、事作麼生。」師云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「和尙漏逗少からず。」師云く、「明朝又是れ大年朝。」僧禮拜す。乃ち云く、「舊年の佛法新年㋬將ち去らず、新年の佛法舊年挽けども來らず。挽き來らず將ち去らず、朕兆を絕する處、切に忌む承當することを。棲泊すること勿れ、時に亂走することを得ざれ。如是如是、無端無端、不是不是、大難大難。卓拄杖一下して、「㋣火官頭上風車轉じ、迦葉門前刹竿を倒す。」

㋠北禪和尙、露地の白牛を烹るの公案を舉して、拈じて云く、「北禪好語、只だ是れ飽病醫し難し。

㋩古田。德垕は斷橋倫に嗣ぐ、無準三世なり。
㋥臂長。どちらへもひきたらぬ、修行に難行して痩せ衰へたるをいふ。
㋭沙盆。破れすりばち。
㋬將。異本には「推」に作る。
㋣火官頭上。方語に推さずして自ら轉ず。
㋠北禪。前に出づ。

新正上堂、元正啓日、和氣藹然、燈籠笑ひ得て口濶く、露柱拜し得て㋷膝穿つ。甚に因つてか此の如くなる、㋦義は豐年より出づ。

新舊兩班を謝する上堂、開正方に十日、氣象一齊新なり。東邊の㋸知事も也た新なり、西邊の㋶頭首も也た新なり。忽ち人あつて出で來つて道はん、新なることは則ち新なり矣、爭奈せん猶ほ是れ舊時の面目なることをと。唱へ來つて唱へ去らす、一擧一回新なり。

元宵上堂、燈火空を燒く、時三五に當る。處處連街接巷、舞ふ底は舞ひ、吹く底は吹き、唱ふる底は唱へ、拍する底は拍す。然も是の如くなりと雖も、左右を顧視して、且く道へ、眞如が面皮厚きこと多少ぞ。

㋻毒果空海の二首座を謝する上堂、「佛祖の巴鼻、人天の眼目、空中の印の如く、毒樹の果の如し。一印一切印、一殺一切殺。」卓拄杖。

上堂、我れに一句あり、四角六張、靴を穿つて水上に立ち、日午三更を打す。

㋕銷舊會、駱駝を燒く。秉炬の偈、吉祥災疫性本空、虛谷の衆響に答ふるが如くなることあり。衆響高低閙かなといふこと靡し、其の蹤由を詰るに了に跡なし。汝が身本自ら㋵空中の有、能く㋟性空廣大の力を具す、廣大無邊有情を利す、還つて性空を運して災殄し去る。亦復た放出す三昧の光、

㋷膝穿。ひざがしらの出た袴な著けた。
㋦義出。家々が富貴だと客が多い。
㋸知事。今の執事なり。
㋶頭首。六頭首あり。
㋻毒果空海。未詳なり。
㋕銷舊會。消災の祈禱法、要に香など燒く。駱駝は香なり。
㋵空中有。諸の所有を空ず。
㋟性空。第一義空なり。

一切の毛畜類を照見す。衆生本際の情を動ぜず、種種㋹如幻の事に游戲す。我れ今偈を說いて證明を作す、天龍八部皆歡悅す、稽首す如來大願王、成就す一切の㋞諸善法。

上堂、法に定相なし、緣に遇ふて卽ち宗、者裏鹽賤く米貴く、那邊水溢ひ柴豐なり。李華は白く桃華は紅。牛頭は自南し自北し、馬頭は自西し自東す　何ぞ似かん東山の大脫空。

上堂、是れ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず。㋡寒山子行くこと太だ早く、十年歸ること得ざれば、來時の道を忘卻す。

佛涅槃上堂、擧す、「世尊、衆に告げて云く、『若し吾れ滅度と謂はば、吾が弟子に非ず、若し吾れ不滅度と謂はば、亦吾が弟子に非ず』と。黃面瞿曇、雜劇打了、㋥戲衫を把つて呆底に脫與せんことを要す。吾れ當時若し見ば、他の與に一蹈に蹈倒して、他の身を轉ぜんを待つて、更に一蹈を與へん。一傚らざれば二休せず、寸釘木に入る、熱熬油を添ふ。休みね休みね休みね。」卓拄杖、「大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」

啓建㋤壽崇節上堂、天下に母儀として、㋶重華を育す、千歲の蟠桃一華を著く。縹緲たる玉樓天漢直く、㋰袞衣長く捧ぐ七香車。

㋒乾會節上堂、法身蕩蕩、復た巍巍、吾が

㋹如幻。三昧なり。
㋞諸善法。大衆信受奉行。
㋡寒山子。これは寒山子の極祕の境界なり。
㋥戲衫。鶉臭布衫なり。
㋤壽崇節。皇后の壽節。
㋶重華。民をいふ。
㋰袞衣。袞龍の衣なり。
㋒乾會節。天子の壽節。

皇福壽の基を培作す。指を拶すれば光中塵到らず、（キ）四河の香水須彌を遶る。

上堂。（ノ）應庵、桃華を詠じ。（オ）靈雲、桃華を悟る、等しく是れ與麼の時節。一家一家を知らす。且く道へ。眞如が意何くにか在る。圖らざりき草を打てば、只だ蛇を驚かさんことを要す。

尼、風恙を懺し陞座を請ふ、拄杖を拈じて、「（ク）一念普く觀ず無量劫、無去無來亦無住、是の如く三世の法を了知せば、（ヤ）諸の方便を超えて（マ）十力を成せん。」拄杖を拈起して、「看よ看よ、山河大地、日月星辰、情と無情と、一印に印定す。諸人還つて信得及すや。若し信得及せば、是の如く受用し將ち去れ、是の如く荷擔し將ち去れ。若し信不及ならば、老婆禪を說き去らん。三世の諸佛出世度生、也た只だ是の如く、魔軍を降し法輪を轉ずるも、也た只だ是の如く、一切の業障山を破るも、也た只だ是の如く、一切の功德海を成就するも、也た只だ是の如く、（ケ）因も也た是の如く、（フ）果も也た是の如く、迷も也た是の如く、（コ）悟も也た是の如く、山僧が說法も也た只だ是の如く、諸人の聽法も也た只だ是の如し。是の如きの法を以て、是の如きの座に陞り、（エ）是の如きの座に卽して、是の如きの法を說く。一絲頭を添ふることを得ず。

（キ）四河。一に殑河、二に尼連、三に信度、四に私岡。
（ノ）應庵。曇華、虎丘に嗣ぐ。
（オ）靈雲。志勤禪師。
（ク）一念普。三世古今當念を出でずとなり。
（ヤ）諸方便。三世古今。
（マ）十力。佛を稱す、如來證得の智は、一切に了達して、よく之を壞する者も勝つ者もなきが故に、力となづく、これに十種あり、今之を略す。
（ケ）因也。娑婆來往八千返。
（フ）果也。三十二相八十種好。
（コ）悟也。寂滅道場。
（エ）卽如是座。見聞に充つることなくして。

一絲頭を滅ずること得ず。便ち見る㋢三祖、㋐二祖に問ふ、『弟子が身、風恙に纏はる。乞ふ師、懺罪。』二祖云く、『罪を將ち來れ、汝が與に懺せん。』三祖云く、『罪性を覓むるに了に不可得なり。』二祖云く、『已に汝が與に懺罪し竟んぬ。』此の際に當つて、世醫手を拱して、萬病脫然、風の空に行くが如く、水の壑に赴くが如く、渡に船を得るが如く、暗に燈を得るが如く、睡夢の覺むるが如く、蓮華の開くが如し。造作すること得ず、㋚裝點すること得ず、便ち是れ㋖具足三昧を證する時節なり。何の罪か懺すべく、何の福か求むべきあらん。千佛出世、是の如くの印を以て、是の如くの心を印し、印印相承して今日に到る。此の印を將つて印破して、普く業障疑團を超えんことを要す。」卓拄杖、「鐵圍山岳都べて崩盡し、歷劫の無明一掃空ず。」

㋙結座、罪性本來空、四大も亦復た然り。普く風恙に纏はることを超ゆ、㋱設供罪根を懺す。㋯罪根無所住、只だ一念の中に在り。此の金剛王に仗つて、㋛大疑網を裂破す。稽首す㋓三界の尊、賜ふに大安樂を以てす。此の無上道を證して、永く諸有の苦を超ゆ。

州府滿散、壽崇節陞座、「大いなる哉㋪法性、號して心王と曰ふ。之を仰

㋢三祖。僧璨大師。
㋐二祖。慧可大師。
㋚裝點。前支度のこと。
㋖具足三昧。一と走らしめ、七と拈得すなり、擧手動足についてなり。
㋙結座。滿散なり、最修の法要。
㋱設供。設齋供養。
㋯罪根。衆罪根性。
㋛大疑網。髻中の明珠。
㋓三界尊。佛世尊。
㋪法性。心地は物として生ぜずといふことなし。
㋲六合。東西南北上下四維。
㋝萬化。大と爲り、小と爲る。
㋜天地之母。萬物の根據となり。
㋑臺儒。莊子の語なり。
㋺與一切、諸界に入つて諸境に

ぐに其の表を観ること莫く、之を窮むるに其の邊を見ること莫し。超然として(モ)六合の上に出で、混然として(セ)萬化の中に融す。壽は數を以て計ふべからず、福は數を以て量るべからず。蕩蕩として三際に廓周し、恢恢として十方に通徹す。(ス)天地の母と作り、(イ)槖籥の宗と爲る。譬へば太虚の倶に衆象を含んで、(ロ)一切と和會せず、亦彼の衆象の發揮を拒まざるが若し。此れは是れ諸佛の妙門、正に聖人の化體に合す。」拂子を撃つて、「只だ天の並に堪ふるあり、更に山の齊しうすべきなし。」

結座、(ハ)后土、(ニ)休を儲けて幾千載ぞ、夢月の昌期今日に在り。臣僧仰祝す福壽の基、是れ世間聞見の法にあらず。(ホ)浮幢王刹廣無邊、劫火(ヘ)三災壞すること能はず。此れは是れ諸佛(ト)三昧の境、願はくは聖人の(チ)福も亦是の如くならんことを。天上の磐石四十里、仙衣三千年に一拂、拂石銷する時一劫と爲す。願はくは聖人の(リ)壽も亦是の如くならんことを。稽首す十力三界の尊、成就す聖人如是法。永く 皇圖を輔く億萬年、金輪統御す大千界。

結制小參、僧問ふ、「如何なるか是れ圓覺伽藍。」師云く、「門を出でて戸に入らず。」進んで云く、「如何なるか是れ平等性智。」師云く、「東行、西行の利を見ず。」乃ち云く、「(ヌ)蜀魄連宵に叫び、(ル)鶏鳩終夜啼

染ます。

(ハ)后土。土の神のこと。

(ニ)儲休。休は否、儲は國家を護持す。

(ホ)浮幢。これが夢月の昌期。

(ヘ)三災。風火水の三災。

(ト)三昧境。正受、自受、用他受用。

(チ)福。福智のこと。

(リ)壽。眉壽長久。

(ヌ)蜀魄。ほととぎすのこと。

(ル)鶏鳩。鶏は「たどり、」又は「えびすどめ」といふ。北方の砂漠に産する小鳥なりと。鳩は「よしはらすずめ、」又は「てうせんうぐひす」ともいふ。

く。圓通門大いに啓く、何事ぞ雲泥を隔つ。甚麼の雲泥を隔つとか說かん、我が者裏直に得たり、聖凡倶に泯し、水乳和同することを。菩提涅槃、眞如解脫、業識無明、顚倒妄想、一絲毫の同相なく、一絲毫の別相なし。九十日の中、只だ諸人是の如く禁足し、是の如く㋾護生せんことを要す。水洗つて面皮光り、茶を歠つて嘴を濕却す。南山華映ず北山の紅、東澗水流る西澗の水。然も是の如くなりと雖も、甚に因つてか觀世音菩薩、錢を將つて胡餅を買ふ、手を放下すれば卻つて是れ饅頭。」卓拄杖、「人㋻遠き慮なければ、必ず㋕近き憂あり。」

擧す、僧、雲門和尙に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」頌に云く、「東山水上行、面レ南看二北斗一、眼上更安レ眉、㋵烏藤劈脊摟。」

上堂、㋟絲來り線去る、斬㋹丁截鐵、百丈耳聾、黃檗吐舌。

上堂、參禪貴ぶらくは眼皮穿たんことを要す、百尺の竿頭㋞正偏勿し。霹靂一聲龍蛻骨、禹門舊に依つて浪滔天。

上堂、寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す。者裏鼠を趁つて角に入れ、那邊賊の與に梯を過す。禹力到らざる處、河聲流れて西に向ふ。

㋾護生。殺生せぬこと。
㋻遠慮。實參實悟を要すといふことなり。
㋕近憂。早く隻手の聲をきけよとなり。
㋵烏藤。杖子をいふ。
㋟絲來線去。絲買が來ると線香賣が去ると。
㋹丁。釘なり。難問に答ふると、名劍の物を截るが如きをいふ。耳聾や吐舌の案をいふ。
㋞正偏。照用なし、却來向去。

上堂「我が東山下の說禪は、上將軍の兵を用ふるが如く、一般なり、號令を明宣せず、也た金鼓を羅列せず。㋡顏良が頭、知らず覺えず已に袖裏に在り、盡大地の人只だ眼を眨得す。」卓拄杖して下座。

上堂、東東西西、絡絡索索、一時に㋧抖擻して諸人に說與し了れり也。未審し那一句の中に在つて吾れを見る。若し句、言外に在り、意、聲前に在りと道はば、山僧、㋤拔舌地獄に入らん。

上堂、眞如が說禪、且く草を積んで糧を聚めず、東頭を移して西頭に向ひ、南頭を移して北頭に向ふ。諸人若し㋶封皮を將つて信傳と作さば、卻つて山僧を怪むこと得ず。

上堂、㋰大火西に流れ、長江東に去る。風動き塵起り、雲騰り鳥飛ぶ。」顧視良久して、驀に拄杖を拈じて、卓一下して、「舊に依つて是れ儞にして始めて得ん。」

解制小參、山前一片の閑田地、叉手叮嚀祖翁に問ふ、幾度か賣り來り還つて自ら買ふ。爲に憐む松竹の淸風を引くことを。眞如、二百年後に生れて、只だ一句と作して諸人に分付せん。我が此の一衆、徹證分曉する底あらば、出で來つて衆に對して、㋒四至界畔を點當して表を看ば、九十日功成り行滿

㋡顏良。皆皆が護布も鼻褌も短刀を取り上げて、喪禮衿を著せろ。
㋧抖擻。除去なり。
㋤拔舌。謗二斯經一故獲レ罪如レ是。
㋶封皮。藥の効能書。
㋰大火。陽精のことなり。
㋒四至。四方の地の界なり。
㋖牛馬。村田の牛馬で、祖先の骨折りを思ひ出す。

つるの工夫なり。」良久顧視して、膝を拍つて、「兒孫不レ識犂鉅面、(十)牛馬空懷舊主恩。」

擧す、僧(ソ)曹山に問ふ、「佛未だ出でざる時如何。」山云く、「曹山は如かず。」僧云く、「出世して後如何。」山云く、「曹山に如かず。」拈じて云く、「事を聽くこと眞ならざれば、他の釋迦老漢を累して、出頭することを得ざらしむ。」

解制上堂、四月十五結、上下四圍一團の鐵、七月十五解、百川倒流鬧聒聒。寒來暑往、燕去り鴻歸る。長く客を送る處に因つて、憶ひ得たり別家の時。

上堂、一葉落ちて天下秋なり、一塵起つて大地收る。身を動して影に連り、舌を動して喉に連る。是れ吾が家裏の客、我が羞を知らざることを笑ふ。

(ホ)非臺首座を謝する上堂、菩提樹なく、明鏡臺に非ず。烏飛び兎走り、玉轉じ珠回る。大衆見るや、階前の下馬臺を踢倒せよ。

菊節上堂、九日今朝是、黃華笑轉た新なり。君が與に一曲を歌ひ、聊か慇懃に當つ。天高く兮地迥にして、秋水兮垠なし。鴈過ぎて兮歷歷、落葉兮聲頻なり。眞如主賓の句を識らんと要せば、但だ看よ沽酒挈瓶の人。

上堂、「山僧二十年後、(ク)自己自己を管帶し、三十年後　自己自己を忘卻し、四十年後、自己只だ是

(ソ)曹山。證、洞山价に嗣ぐ。
(ホ)非臺。未詳なり。
(ク)自己。本來の面目。

れ自己。」驀に拄杖を拈じて、卓一下して、「拄杖髑髏を穿過し、㋳露柱眼睛を突出す。」喝一喝。

開爐上堂、三世の諸佛、只だ火を截ることを解し、六代の祖師、只だ火を撥ふことを解す。山僧が者裏、只だ是れ種火、儞が通身紅爛ならんことを待つて、大笑一聲せば、方に知らん眞如が開爐底の時節を。

上堂、初一禪を說かず、併せて今朝に在つて說く。一莖草上現二瓊樓一、不レ知弄レ巧翻成レ拙。

至節小參、「若し此の事を論ぜば、直に是れ㋮說き難し、說著せば人に怪笑せ遭れん。有る底は便ち道はん、眞如、㋕紫羅帳裏金馬堂前に向つて、大いに東閤を開いて高賓を延接すと。殊に知らず黃葉堆頭、昨夜霜威較重し。青灰滿面、鉢囊破綻して縫ひ難し。」驀に拄杖を拈じて、卓一下して、「一冬二東、叉手當胸。大衆會すや。」又卓拄杖、「蛇呑二鼈鼻一、虎咬二大蟲一。」連喝兩喝。

潙山、仰山に問ふ、仲冬嚴寒年年の事の公案を擧す。拈じて云く、「潙仰父子、久貧乍ち富む、便ち見る手滿ち脚滿つることを。中間更に㋻些子の諸訛あり、首座に留與して點出せしむ。」

冬節上堂、「自古自今、一日の風雲を觀て、一年の氣候を驗す。眞如が者裏、青黃黑白の雲競ひ起り、東南西北の風交作る。是れ汝諸人、作麼生か眼を著く。」良久して、「㋙果然。」

㋳露柱。大黒柱が目をあけた。
㋮難說。止止不レ須レ說。さてさてと。
㋕紫羅帳。紫の幕のうち、美しきことをいふ。
㋻些子。多少の意。
㋙果然。果せるかな。又はそりやこそなり。

舊兩序監收を謝する上堂。「一進一退、一東一西、妙、轉處に在り、用、力の齊しからんことを要す。大家相聚つて虀虀を喫す、誰か道ふ黄金泥似りも賤しと。」卓拄杖して下座。

臘八上堂。仰觀星斗逼レ人寒、那箇(ニ)瞳人有ニ(ホ)兩般一、堪レ笑(ヘ)老胡無ニ(ト)合殺一、今朝拋出是非團。

(チ)八疊和尚を謝する上堂。行は說處に在り、說は行處に在り。行の時終日途に在つて家舍を離れず、說の時偈河沙に似て初めより一語なし。(リ)全殺全活、全賓全主、何ぞ似かん金牛鉢を托して舞ふには。

除夜小參。「尋常一年只だ三百六十日あり、今年山僧正月初一より、指を屈して數へて臘月三十夜に到らば、恰恰三百九十八日あり、(ヌ)循環住らず、尋刻停らず。春聲未だ轉せず、銅壺更籌斯に半を過ぐ矣。未だ透關せざる底は、往往鐘を喚んで瓮と作し、已に透關する底は、何ぞ妨げん馬を指して驢と作すことを。甚に因つてか此の如くなる。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して、「西天胡子沒ニ髭鬚一。」

擧す、金牛因に臨濟來る、乃ち橫に拄杖を按じて、方丈前に坐す、濟遂に掌を拊つこと三下して堂に歸る、牛卻つて下り去る。人事し了つて便ち問ふ、「賓主相見は各軌儀あり、上座何ぞ無禮なるこ

(ニ)瞳人。うろたへもの。
(ホ)兩般。「隋影難レ分雪梨レ梅」
(ヘ)老胡。ここでは釋尊をいふ。
(ト)合殺。一切を殺すなり、殺は散の貌なりとありて、一切の悉く散じ去るを云ふ、少少勘定ちがひと云ふこと。
(チ)八疊和尚。不詳なり。
(リ)全殺。殺すも活すも、みな一切殺、一切活、一切賓、一切主。
(ヌ)循環。向去向住。

とを得たる。」濟曰く、「甚麼と道ふぞ。」牛、口を開かんと擬す。濟便ち打つこと一坐具、牛倒るる勢を作す。濟又打つこと一坐具。牛曰く、「今日便を著ず」と。乃ち方丈に歸る。拈じて曰く、「金牛只だ舞を作すことを解す、也た陷虎の機あり。」

正月旦上堂、「歲朝筆を把る、萬事皆吉なり、一つには願ふ天下太平、二つには願ふ萬民樂業、三つには願ふ潙山の水牯牛。㊁水草長く甘ひて、觜長く角瘦するを致す毋からんことを。」卓拄杖して下座。

燈節上堂、「村村の燈火神社に喧し、處處の笙歌畫樓に咽ぶ。笑ふに堪へたり眞如が定力無きことを、人前に輥出す百華毬。」拄杖を擲下して、連喝兩喝して下座。

遊山して歸る上堂、山僧一出二十五日、往還五百餘里。章安を渡り秀嶺を穿ち、雁蕩に游び、江心を看る。或は萬仭の頂、或は九重の淵、或は淺草平田、或は魔宮虎穴、處處都べて到る。最も是れ谿山雲月、陰晴明晦。但だ咳嗽變動するのみに非ず。又且つ步を舉げ㊂形を換ふ。吾が與に眉毛を檢點して看よ、端的知んぬ他幾莖をか剩す。

上堂、「簷頭滴滴、分明歷歷、釋迦老子、脚下泥深きこと三尺、達磨大師、脚下泥深きこと三尺。且く道へ眞如が拄杖子、還つて此の過を免れ得んや也た無や。」良久して丈を靠けて、「也た得也た得。」

結夏小參、「少室峯前、曹溪路上、鑊湯爐炭を突出し、劍樹刀山を豁開す。文殊㊃「三處に夏を度り、

㊁水草長。水足り草足り。
㊂換形。衣をぬぐこと。
㊃三處度夏。前に出づ。

彌勒一向に放憨す。盡く道ふ劍を拔いて相助くと、誰か知る五逆雷を聞くことを。各各眉毛を救ひ得、彼彼通身紅爛。黥を息め劓を補ふこと未だ其の方あらず。禁足安居、豈に㋣淈湑を容れんや。」卓拄杖して、「㋲匹上足らず、匹下餘りあり。」

擧す。古德、拄杖を拈起して曰く、「拄杖子を識得せば、一生參學の事畢んぬ」と。拈じて曰く、「玉堂金馬、茅舍疎籬。」卓拄杖して、「有レ錢有レ酒同歡笑、無レ米無レ柴各皺レ眉。㋝參。」

結制上堂、「護生は㋜須らく是れ殺すべし、殺し盡して初めて安居。與麼與麼。妖狐變じて師子と作る、不與麼不與麼。師子變じて妖狐と作る。」良久して拂子を擊つて下座。

上堂、藏主の秉拂都寺の齋を謝す、拄杖を拈じて、「都寺は乳酪醍醐を以て、佛事を爲す、藏主は無示無說を以て佛事を爲す。東廊にも也た慚愧と叫び、西廊にも也た慚愧と叫ぶ。又出で來つて道ふものあり、等しく是れ一聲の慚愧、中間得不得ありと。山僧聞き得て手を以て合掌す。將に謂へり此の衆人なしと。慚愧慚愧。」

重午上堂、今日重午の節、大衆を供養すべきなし。也た俗禮に效ふて鬭飣些少、諸人と箇の暖熱を作さん。㋑金剛圈、㋺栗棘蓬、㋩鐵酸餡、趙州の茶、衆中呑吐得下する底あること莫しや、出で來れ、

㋣淈湑。にごること、混流なり。
㋲匹上。上に向ければ足らず、下に向ければ餘りあり、これは帶に短し襷に長しと同じこと。
㋝參。參問し來れとなり。
㋜須是殺、猫が鼠を捕つて、一滴の血をあまさぬ如くに。
㋑金剛圈。佛心に喩へ、或は一圓相にたとへる、圈は區域、金剛は不易なり。
㋺栗棘蓬、惡辣に喩ふ。
㋩鐵酸餡、てつのあんころ。

我れ急に一箇半箇酬酢主伴を作さんことを要す。」復た良久して、「眞如が禮數、多子なし、君懷を開かずんば怎奈何。」膝を拊つて下座。

㋥雅藏主至る上堂、颯颯たる涼風景、同人寂寥を訪ふ。秋蟲古砌に鳴き、落日荒郊を照す。壁上燈籠破れ、床頭木枕凹し。東山の左邊底、漁父夜巣に棲む。

解夏小參、今夏諸人と同じく此に安居、敢て佛法の二字を將つて、諸人の耳朶を汙染せず、諸人各各知道せんことを要す。前年官訟去年收めず、常住の柴米油鹽、事事缺典、麥飯黃虀、此の冷落に委す。如今秋初夏末、禪和家大いに罵つて門を出でゝ去る。向に道ふ、竹を惜みて鸞鳳を棲ましむることを要す、池を開いて專ら明月を待つ。儞が罵るを待つて話行はるゝを得ん。山僧別に㋭箇の道理あり。

舉す。此庵和尚、此の山に住し、或庵和尚、此の山に在り、藏神の笑ふを見て悟道す。頌あり、曰く、「商量極處見二㋬題目一、途路窮邊入二㋣試場一、拈二起毫端一風雨快、者回不レ作二探華郎一。」拈じて云く、「我れ當初若し見ば、只だ兩指を將つて鼻を夾んで之を示さん、擬議不來ならば、劈脊に便ち摟たん、臥床の內、豈に鼾睡の人を容れんや。」

解夏上堂、道は㋠物外に非ず、物外道に非ず、禮義は富足より生じ、盜賊は貧窮より起る。大衆會

㋥雅藏主。不詳なり。
㋭有箇道理。別に子細があるぞとの意味なり。
㋬題目。牌中、數箇の字。
㋣試場。白衣宰相なり。
㋠物外。言外聲前。

せば則ち杖頭に挑げ去れ、會せずんば且く麁心なること莫れ。

中秋上堂、㋷素魄今宵已に十分、㋦廣寒宮闕重門を啓く、㋸青冥の風露丹桂を飄す、誰か是れ㋾心空及第の人。

九日㋻竹房首座・孟知客・淵侍者を謝する上堂、「秋風客衣を吹く、君に問ふ知るや知らずや。孟嘉猶ほ落帽を缺く、㋕淵明白衣を望斷す。眞如、臂長く袖短し、一杯聊か佳期に應ず。」良久して、「且喜竹房人解レ醉、免レ教三黄菊笑二東籬一。」

㋵軒藏主・淵侍者を謝する上堂、「㋟大藏小藏、三喚三應、㋹針頭鐵を添へず、秤尾蝿を立せず。今朝此の擧を聞いて、必定山僧を罵らん。甚に因つてか此の如くなる。」卓拄杖して下座。

㋞無等和尚の爲に入祖堂、目送秋雲過二雪溪一、千山木落雁行低、叢林宿將歸二何處一、劫外唯聞㋡木馬嘶。故我前住當山虎巖堂上無等和尚、七十九年五處の爐鞴、妙峯の鉗鎚を握つて、衲僧の寃對を作す。有る時は兩を放ち二を抛つ、有る時は貴く買ふて賤く賣る、有る時は㋤一莖草上、玉殿瓊樓を現じ、有る時は蟭螟眼中、世界を恢張す。水晶宮裏夜半身を抽んで、雙桂堂前白日捉敗す。丹青を假らず、面目見在、祖堂

㋷素魄。月の異名。
㋦廣寒宮、月の都。
㋸青冥。おほぞらをいふ。
㋾心空及第。光境倶に忘れ盡して。
㋻竹房。その他、不詳なり。
㋕淵明。陶淵明なり。
㋵軒藏主。不詳なり。
㋟大藏。大藏は淵侍者に、三喚は軒藏主にたとへる。
㋹針頭。すりきつた世帯。
㋞無等和尚。眞如寺に住す、入祖堂はその靈牌を祖師堂に入れて法要をなすこと。
㋡木馬嘶。我れ唱ふれば泥牛吼え、汝和すれば木馬嘶く。

風冷じく夜光寒し、㋤千古萬古人に與へて看せしむ。

開爐上堂、「噫嘻吁會すや也た無や。少室山空しく落葉ち、㋶濟北風高く浪麤し。會するものは便ち火色を知る、會せずんば且く寒爐を守れ。」卓拄杖して下座。

上堂、「終日茫茫として那事か妨なけん。㋰東湧西沒、七圓八方、珠盤を走つて分撥はざるに自ら轉じ、鳥空に飛んで分意に任せて翺翔す。龍門宿客なく、官路私商あり。」拂子を擊つて下座。

上堂、「荒田に入つて揀ばず、手に信せて拈じ來れば差錯あることなし。㋒麻三斤、㋼乾屎橛、㋨庭前の柏樹子、㋔丈林山下の竹筋鞭。」喝一喝、「只だ事の眼前を逐つて過ぐることを知つて、覺えず老の頭上從り來ることを。」

冬夜小參、「主丈頭邊、破蒲團上、正與麼の時、也た一線半線の諸訛あり。我が此の一衆、盡く是れ㋗參玄の上客、各各眉下眼を帶ぶ。人の緇素得出するなしとは道はず、只だ恐らくは人の包裹し得去ることなからんことを。若し一一爆綻し出し來らば、但だ洞山の果子分文直らざるのみに非ず、他の皓老の布裩を累して、醜拙尤も多し。㋳事一向無うして㋮罪重ねて科

㋧一莖草。世尊、地を指してこの處、梵刹を建つべし、帝釋一莖草を挿んで云く、「梵刹を建つることは已に竟んぬ」と、これは大小廣狹の二見を離れ、無限無礙の境界の妙用を示せるなり。

㋤千古。古今の人に看せてあるぞと。

㋶濟北。臨濟の宗風。

㋰東湧西沒。東に顯はれ西に隱る、出沒自在を云ふ。

㋒麻三斤。洞山の。

㋼乾屎橛。雲門の。

㋨庭前柏樹子。趙州の。

㋔丈林山下。竹筋「しつこん」とよむ。

㋗參玄。撥草參玄の上士。

㋳事無。物に表裏慣用あり。

㋮罪重。其の中の重罪だけで刑罰を定める。

㋘馬載。馬が參を載せ、牛が粟を載せて。

あらず。」拄杖を靠けて、「拋向江南與江北、從敎㋘馬載及驢駝。」

擧す、南泉和尙、衆に示して云く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。」師曰く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。㋫碧眼㋙黃頭、果然として失照。」

至節上堂、㋓書雲の佳節、法の說くべきなし、諸人に點向して、各自に甄別せしむ。東は是れ東弗于岱、西は是れ西瞿耶尼、南は是れ南瞻部州、北は是れ北鬱單越。莫把綵雲爲彩鳳、休將飛雪作楊華。

上堂、「直下是、直下是、動着することを得ず。」拄杖を靠けて下座。

上堂、「新舊兩序監收㋢弘維那を謝す。「參禪伎倆なし、謾に住山の人と作る。且喜すらくは東序も也た人を得、西序も也た人を得、監收も也た人を得、修造も也た人を得たり。灼然として相謝すべきなし、主丈只だ顰に效ふことを得たり。」卓拄杖兩下して、「茶は再請なし、酒は添巡を要す。」復た卓一下して、「㋐興化㋚克賓を打つに何似れ。」

臘八上堂、明星一見して轉た疑を添ふ、畢竟沙を蒸して飢を療さず。爭か似かん儂家㋖脚を伸べて睡らんには、從敎あれ華は發く向南の枝。

歲除小參、「若し佛祖頂門の一著を論ぜば、造化の㋴推移ると一般なり。新舊往來盡く今夜に在り、

㋫碧眼。達磨をいふ。
㋙黃頭。釋尊をいふ。
㋓書雲。冬至をいふ。
㋢弘。未詳なり。
㋐興化。奬、臨濟に嗣ぐ。
㋚克賓。興化に嗣ぐ。
㋖伸脚睡。臥床題、豈に鼾鼻の人を容れんや。
㋴推移一般。時時夢を作し、一日、一日を讀得す。

鬼神も亦其の蹤跡を知らず。」良久して云く、「山僧事巳むことを獲ず、只だ諸人に(メ)點向することを得たり。看よ看よ二十四氣、七十二候、只だ三鼓已前二鼓已後に在り。華は發く向南の枝、枯楊(ミ)左肘を生ず。阿呵呵、釣魚船上謝三郎、拈二得鼻孔一失二却口一。」

趙州(シ)蘿蔔の公案を擧す。頌に云く、「蘿蔔三斤重、誰云出二鎭州一、有時乘二好月一、不レ覺過二滄洲一。」

歳旦上堂、一雨元正を潤し、萬物光彩を舒ぶ。春水虚碧を濛し、春山潑黛濃なり。我が(ヱ)鋪席の新なるを添へて、直に是れ人をして愛せしむ。笑ふに堪へたり(ヒ)長汀の老禿丁、手裏箇の破布袋を抱くことを。

峯聖の(モ)慈安和尙至る、幷せて石林藏主を謝する上堂、(セ)瑞雲山を出で來り、靑天白雨を撒す。蓮堂老龍蟄す、別に通霄の路あり。全放全收、全賓全主。石林迸出す珊瑚樹

上堂、飜身の師子、角を掛くる羚羊、(ス)面目見在、(イ)各各眼を帶ぶ。

佛涅槃上堂、當年(ロ)不レ合二手摩一レ胸、累及二兒孫一赤骨窮、只箇死屍(ハ)無二著處一、(ニ)至レ今紅爛百華叢。

(メ)點向。時をしらず、爲に太鼓をうつ、初夜より後夜に至るまで一更を五分して五點となす、總じて二十五點となる、點を報ずるを向といふか。
(ミ)左肘。後の符をいふ。
(シ)蘿蔔。前に出づ。
(ヱ)鋪席。店と同じ、住居を云ふ。
(ヒ)長汀。布袋和尙。丁は賤者の稱なり。
(モ)慈安。未詳、石林も未詳。
(セ)瑞雲。峯聖の山號か。
(ス)面目。人天の眼目。
(イ)各各帶眼。明明に龍の如く虎の如く、猫犬の如く、狸奴に似たり、各各皆長く肚裏空しきこと莫れと。
(ロ)不合。いらざることになり。
(ハ)無著處。買手がない。
(ニ)至今。狼藉たり年年二月の春と。
(ホ)蓮・意。未詳なり。

(ホ)璉藏主。意藏主至る上堂。故人踏レ雨到ニ(ヘ)香山ニ、何事燈籠也淚潸、門外溪山千萬疊、灼然相見一番難。

上堂。有る時は行、說處に在らず、有る時は說、行處に在らず、有る時は行、說處に在り、有る時は說、行處に在り。笑ふに堪へたり(ト)西來の碧眼、(チ)今に至るまで轉身を會せざることを。

浴佛、兼ニ(リ)諸山ニ及び道舊至る上堂、隻手は天を指し、隻手は地を指す。儞あつて我れなく、我れあつて儞なし。眞如五逆(ヌ)寃を成さず、又得たり諸公痛拳を下すことを。

結夏小參、「今夏諸人と同じく此に結制す、四件の事あり、諸人に奉告す。第一に(ル)進前して參ずることを得ざれ、第二に(ヲ)退後して領ずることを得ざれ、第三に(ワ)者邊より來ることを得ざれ、第四に(カ)那邊に去ることを得ざれ、坐は但だ坐し、行は但だ行じ、飢うるときは則ち同じく飯し、臥するときは則ち同床、金鷄の粟を啣むに一任す、且つ鼠糞の羹を汙すなし。甚に因つてか此の如くなる。」卓拄杖して、「(ヨ)薰風自南來、殿閣生微涼。」

文殊、三處に夏を度るの公案を擧す、頌に云く、「(タ)法筵箭令不ニ虛傳ニ、百億文殊一串穿、要下

(ヘ)香山。白居易の居りしところ。

(ト)西來。達磨を云ふ。

(チ)至今不會轉身。但だ月の圓、月の缺を看て、未だ月の缺、月の圓を知らず。即ち行の說處に在るを見て、說の行處に在るを見ず。

(リ)諸山。五山以外の各本山をいふ。

(ヌ)不成寃。事、孤起ならず。

(ル)進前。心所の路をいふ。

(ヲ)退後。本來の會を著せず。

(ワ)者邊。正與麼になり。

(カ)那邊。切に忌むじや。

(ヨ)薰風。東坡の句なり。凡そ弓に傷く鳥は、纔に曲木を見て回避す。

(タ)法筵云云。無功者は賞せられ、有功者は罰せらる。

與老胡重拔本、一聲砧杵落誰邊。」

結制上堂、大圓覺を以て我が伽藍と爲す、今日明日、㋹前三後三。㋞潘閬が蹇驢華岳を看、㋨善財の煙水百城の南。

㋧都寺の齋、首座の秉拂を謝する上堂、都寺の辦齋如勝中の如勝、首座の秉拂奇特中の奇特。㋤教中に道ふ、「於食等者於法亦等、於法等者於食亦然。」食輪と法輪と齊しく轉じ、㋶金烏と玉兎と交馳す。眼睫盲毛都べて落ち盡して、㋰住山贏ち得たり憨癡を放にすることを。

端午上堂、文殊、善財をして藥を採らしむるの公案を擧す。我れ當初若し見ば、只だ他に向つて道はん、大士刀瘡は沒し易く、惡語は消し難しと。若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、卻つて許す㋒他の毘耶城裏に疾を問ふことを。

上堂、結夏已に一月、㋼眞如法の說くなし、眼上各眉を安じ、口中各舌を含む。西天の人唐言を會せず。剛ひて烏龜を把つて證して鼈と作す

上堂、擧す、僧、古德に問ふ、「寒暑到來如何が回避せん。」德云く、「鑊湯

㋹前三後三。前から數へても後から數へても違はぬこと。
㋞潘閬。此の兩句、謂つべし紅絹幼婦と、吾れ若し諸人に向つて說かば、恐らくは兒孫を喪せん。
㋨善財。童子華嚴經に出づ、五十三問の故事。
㋧都寺。前に出づ、辦齋は齋をふれまふ、秉拂の解も前に出づ。
㋤教中。淨名經なり。
㋶金烏。日、玉兎は月なり。
㋰住山。住持と同じ。
㋒他。諸人をいふ。
㋼眞如云云。無間の造業を招か

爐炭裏に回避せよ。」僧云く、「鑊湯爐炭裏に如何が回避せん。」德云く、「衆苦到ること能はず。」頌に云く、「老去他鄕見ニ故知ー、迢迢攜レ手卻同歸、夜深且盡ニ樽前酒ー、㋨莫レ說ニ天涯脚痛時ー。」

上堂、是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、㋔劈腹剜心、君に說與す、恰も眞如が舌の痛むに値ふ。大衆還つて會すや、㋗即ち賣弄して果して是れ瘡を生ずるに非ず。

上堂、即心即佛、赤脚にして刀山に上る。非心非佛、㋳地を耕して蒺藜を種う。不是心、不是佛、不是物、㋮黃蘗樹頭木蜜を生ず。第一句下に薦得せば、儞に許す眞如が堂に升ることを。第二句下に薦得せば、儞に許す眞如が門に入ることを。第三句下に薦得せば。」驀に拄杖を拈じて、「休みね休みね、好語說き盡すべからず。道人道著すべからず。」卓拄杖して、「趙州親見老㋘南泉、㋫睦州拶折㋙雲門脚。」

解夏小參、僧問ふ、「僧、㋓風穴に問ふ、『九夏㋢賞勞、請ふ師言薦したまへ。』穴云く、『㋐一把の香蒭拈ずるに未だ暇あらず、㋚六鐶の金錫遙空に響く』と、意旨如何。」師云く、「若し諸方に到らば、錯つて擧することを得ず。」

ざらんと要せば、如來の正法輪を謗ること莫れ。

㋨莫說天涯。團地一下、儘なる手形が出ると、從來の千辛萬苦、皆是れ大法財なり。

㋔劈腹。滿腹の赤心を吐露す。

㋗即非賣弄。更に汝に向つて說かば、舌頭兩片とならん。

㋳耕地。遍地是れ刀鎗。

㋮黃蘗。苦中に甘草のあきなひ。

㋘南泉。願なり。

㋫睦州。陳なり。

㋙雲門。偃なり。

㋓風穴。沼、南院顒に嗣ぐ。

㋢賞勞。慰なり、一夏中の功勞を賞するをいふ。

㋐一把香蒭。この二句は虛堂錄の卷九、徑山後錄解夏上堂に出づ。

㋚六鐶金錫。六鐶は錫杖の頭にある六つの環のこと。

拄杖を拈じて、「一夏已に滿つ、聖制圓を告ぐ。數日來、些少の佛法を鬪揍し、要今夜打開するに在り。我が見前の大衆を供養して、以て九旬汗馬の勞を表す。粗分に羞を知り恥を識る、古人に效ふことを欲せず。拄杖頭上䕺草影邊に向つて、胡亂に拈出せば、笑を識者に取らん。所以に道ふ、藜羹藿飯、決して尊貴の珍とする所に非ず、鳳髓龍肝、是れ樵夫の食にあらず、我れ恰恰相當ることを要す、誰か與に一轉語を代らん。」大衆を顧視して、拄杖を靠けて、「在レ舍只言爲レ客易、臨レ淵方覺取レ魚難。」

擧す。僧、㋖雪竇に問ふ、「達磨西來單傳心印、諸方甚麼としてか各異端を說く。」竇云く、「誰そ。」僧云く、「卽今を爭奈何。」竇云く、「西天令嚴なり。」僧云く、「與麼ならば則ち水に入つて長人を見る。」竇云く、「㋙韓信、朝に臨む底。」師曰く、「雪竇一向の擧令、㋜自身を虧了すること一半、者の僧麤心大膽。也た屋を縛して天を蓋はんことを要す。」

解夏上堂。十五日已前、㋝闍梨を坐殺し、十五日已後、闍梨を走殺す。正當十五日。秋雲依依、秋草離離。蛩、古寺に吟じ、華、疎籬に放る。㋞高安灘上の客、臨濟㋟小厮兒、腦後猶ほ一椎を缺く。

中秋上堂、甚だ奇絕中秋の月。㋠光皎潔として欠缺なし。叵耐なり謝三郎。㋡也た絲綸を把つて掣く。

㋖雪竇。俊なり。
㋙韓信。方語に「生命別人の手裏に在り、頭落ちたり死活を知らず」と。
㋜虧了自身。北斗裏に身を藏し、南辰後に齋藥を賣る。
㋝坐殺闍梨。坐者立者、喪身失命することを免れず。

上堂、至道無難。(セ)言端語端、(ス)高亭橫に趨つて去る、(イ)雪峯九たび洞山に到る、鱉、釣魚竿を咬み、蛇、老鼠尾を啣む。

開爐、(ロ)質藏主至る上堂、浙浙霜林起晚風、同人撥草訪巖叢、灰寒火冷休相笑、且向階前掃落紅。

巾峰(ハ)奚翁和尚・喜書記・鑑藏主・通侍者至る上堂、「兄弟十字を添ふ、(ニ)夫子書を識らず。(ホ)左轉右轉、三應三呼、一等に(ヘ)寃憎會苦、最も嫌ふ一箇眉麤なることを。」卓拄杖して、「刹竿寒影轉、明月上平蕪。」

上堂、「大衆諸方一句を道へば、眞如も也た一句を道ひ、諸方兩句を道へば、眞如も也た兩句を道ふ。等しく是れ與麼の時節、中間の用處同じからず。忽ち箇の漢あり出で來つて、翳晴の法を用ふることは、須らく是れ眞如にして始めて得べしと道はゞ。」拂子を以て禪床を擊つて、「三千年に黃河一度清し。」

冬夜小參、僧問ふ、「寒暑不到の處、衲僧如何が步を進めん。」師云く、「馬あれば馬に騎り、馬なければ步行す。」乃ち云く、「枯木巖前、冷灰堆裏、住山の活計苦多きことなし。三(ト)篾履を束ねて分に隨つて過ぐ。甚の砂飛び石走るとか說かん。且つ看る凍茅簷より落つることを、(チ)

(シ)高安。大愚和尚の居處。
(エ)小厮兒。こわつぱのこと。
(ヒ)光皎潔。今夜一輪滿つ、淸光何の處にか無からん。
(モ)也把絲綸。依然として魚蝦を撓る。
(セ)言端語端。松濤と夕雨と。
(ス)高亭。德山に嗣ぐ。
(イ)雪峯。存なり。
(ロ)質。未詳なり。
(ハ)奚翁。以下みな未詳なり。
(ニ)夫子。このやうな文字はこめぬ。
(ホ)左轉。茶がにえました、なに雨がふる。
(ヘ)寃憎會。汝負吾、吾負汝。
(ト)篾。竹の皮、又わり竹なりといふ。
(チ)衣穿。すりきりたる貧乏。

衣穿ち肘露はる可憐生、免れず貧兒舊債を思ふことを。且く道へ甚麼の債をか思ふ。二祖見二少林一、無レ端禮三拜。」

擧す、趙州一日、衆に示して云く、「至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言あれば是れ揀擇、是れ明白。老僧は明白裏に在らず、是れ爾、諸人還つて(リ)護惜すや。」時に僧あり、出でて問うて云く、「既に明白裏に在らずんば、又箇の甚麼をか護惜せん。」州云く、「我れも亦知らず。」僧云く、「和尙既に知らずんば、甚麼としてか道ふ、明白裏に在らずと。」州曰く、「事を問ふことは卽ち得たり、禮拜し了つて退け」と。師云く、「趙州 勢に倚つて人を欺き、甲を棄て兵を曳くことを料らず。」

冬節上堂、一陽生じて萬物亨る、短者は自ら短、長底は 自ら長。老胡如し此れを會せば、應に(ヌ)蕭梁に見えざるべし。

臘八上堂、「六載雪山に坐す、(ル)巧を弄して拙謀を成す。賊を攤いて星月に與ふ、星月常に悠悠。賊を攤いて(ヲ)含識に與ふ、含識(ワ)點頭せず。」卓拄杖して、「是非空落釣魚舟。」

新舊兩序を謝する上堂、「大衆、此の事は滄溟に舟を泛ぶが如く、篷帆艫棹(カ)矴柁釣竿、皆少くこと得ず。有る時は逆風に帆を張り、有る時は順風に柁を把る。只だ要す船上の人、同聲相應じ、同氣相

(リ)護惜。愛惜守護、大切にすること。
(ヌ)蕭梁。梁の武帝は蕭氏なり。
(ル)弄巧成拙謀。久しく坐して動を思ふ。
(ヲ)含識。含靈に同じ、有情則ち衆生をいふ、心識を具有するもの一切なり。
(ワ)點頭。がてんすること。
(カ)矴柁。矴は「いかり」、柁は「かぢ」なり。

求む。同行同到、同放同收せんことを。」卓拄杖して、「(ヨ)一擧六鼇連十洲。」

除夜小參、僧問ふ、「一言に道ひ盡す時如何。」師云く、「老僧が性命汝が手裏に在り。」乃ち云く、「一言に道ひ盡す萬法皆如なり、一句截流千差合轍。有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩倶奪、有る時は人境倶不奪。(タ)袖短うして臂膊長し、貧富の裝裹を作す。六隻の骰子滿盤紅なり、君前に撒向して活鱍々。」良久して、「謾に說く(レ)北禪露地を烹ると。風流出格眞如に讓れ。」

擧す、趙州、(ソ)茱萸を訪ふ。萸云く、「箭を看よ。」州云く、「箭を看よ。」萸云く、「過。」州云く、「中れり。」師云く、「一看箭二看箭、茱萸と趙州と髑髏兩片と成る。山悠悠、水悠悠。(ツ)閭閻聽小子、談笑覓封侯。」

歲旦上堂、「元正啓祚、庶物發生す、鳥獸魚鼈(ネ)咸若たり、森羅萬象崢嶸たり。且く道へ(ナ)誰が恩力をか承く。」卓拄杖して下座。

上堂、「垂絲千尺、三寸の鈎頭、地轉じ天回り、風高く月冷じ。」卓拄杖、「會するときは則ち親しく(ラ)船子に見ゆ、會せずんば去つて(ム)夾山に問へ。」

結制小參、僧問ふ、「(ウ)大力量の人、甚に因つてか脚を擡げ起さざる。」師云く、「(ヰ)到江吳地盡、隔岸越山多。」乃ち云く、「有佛の處住することを得ざれ、荒草天に連る。無佛の處急に走過し、髑髏野に遍し。一條の路。

(ヨ)一擧。釣り出してなり。
(タ)袖短臂膊長。貧乏と富貴と同時に受用じや。
(レ)北禪。賢、北禪露地に白牛を烹ること前に出づ。
(ソ)茱萸。前に出づ。
(ツ)閭閻。里中の門、轉じて村里の身分ひくき者を云ふ、史記の李斯傳に「斯は閭閻を以て諸侯を歷て、入つて秦に事ふ」と、この故事をここに引く。
(ネ)咸若。みな、したがふなり。
(ナ)承誰恩力。千斤の重きを承くるも其の身を能くせず。

千人萬人共に行いて、千人萬人到らず。我れ今只だ諸人籠頭を脫却し、腰帶を卸下せんことを要す。交渉なき處に向つて、力を盡して板を擔ひ得るも三十棒、一棒も也た較ぶることを得ず。」

擧す。僧、趙州に問ふ「學人乍入叢林、乞ふ師指示せよ。」州云く「喫粥了や未だしや。」僧云く「喫粥了。」州云く「鉢盂を洗ひ去れ。」師云く「趙州只だ順水に船を推すことを解す。後代の兒孫をして、箇箇句下に死在せしむることを致す。」

結制上堂、四月十五結、盡十方空。欠闕なし、店面を豁開して又重新、只だ金を陪して生錢を買ることを得たり。

上堂、結夏已に一月、寒山子作麼生。乞は再面なし、語は要す隨鄉。

上堂。山僧が受用、諸人と初めより兩樣なし。諸人終日舍に在つて、途中を離れず。山僧終日途に在つて、家舍を離れず。大衆喚んで入理深談と作すことも也た得たり。喚んで向上の提持と作すことも也た得たり。各自に參取せよ。

上堂。副寺を祗請す。至道無難日に萬端に應ず。柴を量り米を數へ、官を接し官を送る。是れ

舩子。德誠なり。
夾山。善會なり。
大力量。松源の三轉語。
到江。物極まれば變通あること、吳越は國の名。
籠頭。馬の「おもがい」、身心の自由を束縛してあるなり、煩惱妄想に喩ふ。
豁開店面。有利無利、行市を離れず。
只得陪金。ねだん次第に、誰が買ふてくれるやうぞ。
この上堂。頭注に「此の段、恐らくは鈌文ある歟」とあり。
隨鄉。他國のことばでは關所は通れぬぞよと。
自。これも「す」とよむくせなり。
量柴。副寺の事務は、いそがはしいにより、列ね擧ぐ。
官。官人なり。

牛、犂を牽き杷を拽く、是れ馬、鐵を銜み鞍を負ふ。一句大衆に(コ)擧似せん。入レ水也要レ占レ乾。

上堂、九夏豁開す天地の爐、若しくは凡若しくは聖、親疎沒し。通紅百煉重ねて炭を添ふ。只だ要す(テ)男兒是れ丈夫ならんことを。

上堂。擧す。風穴和尚、衆に示して云く、「若し一塵を立すれば家國興盛し、野老顰蹙す。一塵を立せずんば家國喪亡し、野老安貼なり。此に於て明め得ば、闍梨分なく全く是れ老僧。此に於て明めずんば、老僧分なく即ち是れ闍梨。闍梨と老僧と、亦能く天下の人を迷却し、亦能く天下の人を悟却す。老僧を識らんと要すや。」右邊手を以て拍一拍して、者裏即ち是、闍梨を識らんと要すや。」左邊拍一拍して、「者裏即ち是。」頌に云く、「(ヲ)一鏃破三關、乾坤盡開闢、南北東西十萬程、馬鞭不レ過二長三尺一。眞如風穴、(サ)殺活不レ同、端的誰收汗馬功。」卓拄杖。

上堂、涅槃煩惱何の形段ぞ、逆順知んぬ他(キ)幾多に較る。頂上豁開す千聖の眼、何ぞ妨げん臘月に蓮華を看ることを。

除夜小參、僧問ふ、「明眼の人甚に因つてか井に落つ。」師云く、「高處は高平、低處は低平。」乃ち云く、

(コ)擧似。似は示と同じ。
(テ)男兒是丈夫。人人皮袋子、那裡にか安著せん、丈夫にして始めて大器を成ぜん。
(ヲ)一鏃破三關。公案、階級を經ることなく、一超して本分の田地に到るをいふ、一鏃とは一筋の矢、三關とは三界三世、一切の差別を透得して一超直入如來地の意なり。
(サ)殺活。同生同死なり。
(キ)幾多。どれほどのおもみぞ。
(ニ)匆匆。匆匆はせはしいことなり。

「朝（ユ）匆匆暮匆匆。（ヌ）南より北より、或は西或は東。（ミ）黄鶴樓前に百戰し、頭を回せば歳蕭き年窮る。窮するときは則ち變じ、變ずるときは則ち通ず。金殿の鎖を掣開し、玉樓の鐘を撞動す。便ち見る東隣西舍交相慶賀し、燈籠露柱滿面の春風。甚に因つてか此の如くなる。睡足不ㇾ知山月上、踏ㇾ華方見馬蹄紅。」

擧す、僧、馬大師に問ふ、「如何なるか是れ佛。」馬云く、「卽心卽佛。」後來又道ふ、「非心非佛、不是心、不是佛、不是物。」師云く、「天地玄黄、宇宙洪荒、日月盈昃。」拄杖を以て、劃一劃して、「若し住念を截つて口滑を得ずんば、幾乎ど念じて（シ）新年に到らん。」拄杖を靠けて下座。

正旦上堂、新に鳳曆を頒つて堯庭より下る、山嶽齊しく呼ぶ萬歳の聲。拄杖は知らず甚麼をか見る、也た來つて隊を趂ふて新正を賀す。卻つて道ふ我れ栗栗枳枳、棱棱層層たりと雖も、儞が與に（ヱ）東に拄へ西に拄へ、横に撑へ竪に撑へんことを要す。撑撑拄拄、窮坑を跳出す、（ヒ）五湖煙浪の裏、別に好商量あり。

結夏小參、僧問ふ、「如何なるか是れ道。」師云く、「穀を種ゑて豈苗を生ぜず。」乃ち云く、「（モ）食輪轉すれば法輪轉じ、食輪轉せざれば法輪轉ぜず。眞如今夏、既に是れ糧を缺く、佛法禪道情を盡し、之を

（ヌ）自南自北。さてさて客の多いことじや。
（ミ）黄鶴樓。崔顥、嘗て詩を題す。
（シ）到新年。目出度い處でも念佛申すものじや。
（ヱ）東拄西拄。どの座にも開帳じや。
（ヒ）五湖。どこもかも、面白い正月じやと。
（モ）食輪轉。豐年は凶年に勝る。

束ねて高く閣く。有る底は道ふ、是は則ち是、水を換へて魚を養ふも、㊆未だ尖新の頭角を見ずと。行者、者の僧を認取せよ。」

擧す。世尊、外道論議す。外道云く、「我れ一切不受を以て義と爲す。」世尊云く、「儞受を見るや否や。」外道㊇拂袖して便ち去る。途中に至つて乃ち悟つて云く、「當に回つて首を斬つて以て世尊に謝すべし」と。頌に云く、「杳杳㋑華源路不ﾚ通。回ﾚ頭方見藥鑪空。雪晴海濶千峰曉、同上㋺天山十二重。」

解夏小參、僧問ふ、「大火西に流れ、凉風野に入る、正恁麼の時如何。」師云く、「天台。南岳。峨嵋。五臺。」僧云く、「便ち恁麼にし去る時如何。」師云く、「枯木巖前㋩差路多し。」僧禮拜す。乃ち云く、「箇の事を提持せば、蒼龍の珠を翫ぶが如く、地に墮せず、空に住せず、㋥收放自在、呑吐自由。四方但だ見る光閃地なることを。只だ洞山示衆の如く、『兄弟秋初夏末、直に須らく萬里寸草なき處に向つて去るべし。』石霜云く、『門を出づれば便ち是れ草』と。者裏豈に儞が眨眼を容れんや。㋭蚯蚓蝦蟇空しく自ら咄咄。」

擧す。僧、風穴に問ふ、「九夏賞勞、請ふ師言薦。」穴云く、「一把の香獮拈ずるに未だ暇あらず。六鐶

㊆未見尖新。此の座敷を買ひ盡した者は、此の語の妄ならざるを委悉せん。

㊇拂袖。そでをうちはらふなり、怒つて立ち去る時の氣勢を云ふ。

㋑華源。桃源なり。

㋺天山。日本でならば富士や淺間の嶽の煙雲。

㋩差路多。はきそこなふなと。

㋥收放自在。おれも呑吐したいが、咽喉が窄くて出來ぬ。

㋭蚯蚓蝦蟇。みみずやひきがへるが、井中の說法、ここもと暖か。

の金錫遙空に響く。」師拈じて云く、「風穴好語、惜しいかな者の僧、(ヘ)更に一歩を進むることを解せざることを。」

解制上堂、「一結一切結、一解一切解、佛病も也た解し、祖病も也た解し、衆生の病も也た解す。病既に解し了つて、混融せずといふことなし。水、水に入り。空、空を藏す。諸人但だ絲綸上を看て、蘆華の蓼紅に對することを看ること莫れ。

(ト)大行皇帝。升遐上堂、十載華夷樂晏然、旌幢忽返夜摩天、斷絃又得二鸞膠續一、(チ)玉葉騰芳億萬年。

(リ)衛叟監寺及び新舊を謝する上堂、(ヌ)凍台千林萬木僵、饑荒(ル)老鼠齧二生薑一、祖翁活計無二(ヲ)多子一、相與扶持折脚鐺。

臘八上堂、(ワ)王宮を棄てて雪山に坐す、什麼を見てか便ち恁麼なる。既に恁麼ならば、(カ)是れ什麼ぞ、黃金城郭草(ヨ)離離、天上人間付二與誰一。

(タ)瑫・了・居の三侍者至る上堂、「昨日同參來る、拄杖子敢て(レ)匙を攙き筯を亂さず。今日衣鉢道舊相訪ふ、拄杖子只だ響に效ふことを得たり。」橫に拄杖を按じて、「一を分つて二と作し、二を破つて三と作す。滄海渺渺、泰山巖巖。」顧視良久して、「(ソ)彭八剌札。怪しむこと莫れ空疎なることを。」

(ヘ)不解更進。はきちがへるな、菜油餉じや、衲僧の布袋頭は、

(ト)大行。天子の崩御せられて、未だ尊號なきあひだを申す。

(チ)玉葉。皇統、騰芳は隆昌。

(リ)衛叟。未詳なり。

(ヌ)凍合。すりきつたしんだいじや。

(ル)老鼠。方語に、「也た吞吐不下」とあり。

(ヲ)多子。俗にいふ、造作なしの

冬至小參、僧問ふ、「一物不將來の時如何。」師云く、「㋡羅公鏡を照す。」僧云く、「便ち是れ和尙爲人の處なること莫しや。」師云く、「㋧狗、赦書を銜む。」乃ち云く、「寥落たる叢林、拄杖子全く㋤巴鼻なし、空疎たる活計、法堂前葉空堦に滿つ。年盡き歲究るに㋶逗到して、轉た覺ゆ寸は長く尺は短きことを。古人誰か道ふ、今朝ありと。我れも㋰亦知らず當日の事、有る底は與麼に道ふことを聞いて、只だ道ふ山僧刀刮り水洗ふと。三十年前也た㋒曾て老鼠に七條を咬破せらる。」

擧す、僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ百非を絕して、請ふ師西來意を直指せよ。」祖云く、「我れ㋼汝が與に說き得ず、智藏に問取せよ。」藏云く、「何ぞ和尙に問取せざる。」僧云く、「敎へ來つて藏に問はしむ。」藏云く、「我れ今日頭痛、海兄に問取せよ。」海云く、「我れ者裏に到つて卻つて不會。」僧回つて馬祖に擧似す。祖云く、「㋨藏頭白海頭黑。」師云く、「者の僧是れ獃漢なりと雖も、馬祖父子、但だ㋔賊に和し款を納れて、便ち是れ㋗隱寄するのみに非ず、亦㋳他に勘將し出し來らる。山僧曾て㋮瓜田に履を納れず、大衆各自に歸堂せよ。」

意。
㋦棄王宮。金輪の位を棄ててなり。
㋕是什麼。是れ臘月か是れ正月か。
㋵離離。裂けみだるること。
㋟璋丁居。何れも未詳なり。
㋹攙匙不亂筯。はしを取つて食なくはす。
㋞彭八剌札。曲の拍子なり。
㋡羅公。方語に、「老不レ知レ羞、」會元十一、洛浦が臨濟に答ふるの句なり。
㋧狗銜。「狗は尤も賤しく、書は尤も貴し」と方語にあり。
㋤巴鼻。つかまへどころないこと。
㋶逗到。逗は投に通ず。
㋰亦不知。今日牛を牽いて價を求むる人が居るか、しかと見えぬ。
㋒曾被老鼠。これはおれも忘れた、吾が計較成らんことを待

上堂。「一氣自ら循環、萬化終始なし。拄杖複條を拈んで、華開いて世界起る。」卓拄杖して、「(ケ)老胡打失す當門の齒。」

除夜小參。去去實に不去、來來實に不來。去來(フ)朕跡なし、今古兩つながら悠なる哉。所以に道ふ過去心も不可得、未來心も不可得と。道聲未だ絶えざるに、忽然として一隊の(コ)驅儺、面前に突在す。(エ)朱衣畫袴、鬼面神頭、千般萬様、一齊に送り將ち出し來つて、直に是れ(テ)活鱍鱍地なり。山僧、牙關を咬定して、看來り看去る、也た覺えず呵呵大笑す。(ア)甚に因つてか此の如くなる。將に謂へり黃連蜜似りも甜しと、誰か知る蜜は黃連似りも苦きことを。

擧す、(サ)張拙秀才、(キ)長沙和尙に問ふ、「百千の諸佛、但だ其の名を聞く、未審し何の國土にか居す。」沙云く、「黃鶴樓崔顥題して後、秀才曾て題すや。」拙云く、「曾て題せず。」沙云く、「(ユ)無事一篇を題取せよ。」頌に云く、「萬里中原暗二(メ)阪圖一、中興事業隱二樵漁一、金鷄一拍扶桑曉、喚二得英雄一出二草廬一。」

二月旦上堂。「(?)寧ろ狐と裘を謀らんよりは、(シ)羊と羞を謀り難し。暗裏

て。

(キ)不與汝說。口中がいたんで說く能はず。

(ネ)賊頭白。智藏の頭は白く、懷海の頭は黑しと云ふ句の義なり。極めて平凡なるが如くも、諸法實相の理を示す、柳は綠、花は紅と同じ。

(オ)賊。賊が盜みたる物をいふ、贓物にまぜて、納欵は白狀した。

(カ)縁奇。よりよするなり。

(ヤ)他。百千年後に。

(マ)瓜田。人に疑はるべき事を爲さざるをいふ、或抄に少しこくさい處もあると。

(ケ)老胡。達磨をさす、達磨を胡鈌齒などといふ。

(フ)朕迹。物の形迹、一切萬象の差別の相を云ふ。

(コ)驅儺。鬼やらひ、驅疫なり。

(エ)朱衣畫袴。あかれの衣、小倉じまの袴。

橫骨を拈んで、明中舌頭に坐す。」卓拄杖、「(ヱ)魯人は東家の丘を重んせず。」

元宵上堂。(ヒ)簡・聞・直の三侍者の至るを謝す、國師三喚復三應、燈火燒レ空月滿レ城、千簇畫樓歌管裏、與レ君攜レ手御街行。

佛涅槃。手を引いて胸を捫して云く、「眞如手づから(モ)胸を摩す、卻つて瞿曇と別なり。當初只だ道ふ黃金を得と、今日看來れば是れ(セ)生鐵。戶破れ家殘ふて、百醜千拙、一回水を飮み一回咽ぶ。」

護國の(ヌ)象外和尙至るを謝する上堂。「眞如平昔鼓を打たんことを要す、三峯一味(イ)嘍搜に隨す。些子の心肝五臟、(ロ)其の抖擻都盡せらるること、我れも也た明明自知す、只だ是れ(ハ)管し得ること能はず。今日既に尊訪を蒙る、鼓を撾つて陞堂、又是れ一番(ニ)話墮す。且つ兩箇の舌頭なし。」良久して拂子を擊つて、「(ホ)巖頭撑渡、雪峯輥毬。」

浴佛上堂。湔拂泥猪疥狗身、洋銅百灌恨方伸、眞如不レ惜二湯添一レ沸、要下(ヘ)輟二餘薪一待中後人上。

結制小參、「去らんと欲して去らずんば去に礙へらる、住まらんと欲して住まらずんば住に礙へらる。(ト)元上座、一條の拄杖、尋常硬きこと生鐵の

(テ)活鱍々。さつぱりとしてなり。

(ア)因甚。なにを笑ふた。

(サ)張拙秀才。前に出づ。

(キ)長沙。景岑なり。

(ユ)無事。また風に別調の中に吹かる。

(メ)販圖。原文、販を板に作るも、誤りならんか。

(ミ)寧與狐。狐は「くつれ」とよむ方雅ならん。

(シ)與羊謀羞。符子に「魯は孔子を用ひんと欲して、三桓を召し、之を議す、左丘明云く、周人千金の裘を爲るものあり、狐と其の皮を謀ず、少牢の珍を見んと欲して、羊と羞を謀る」とあり。

(ヱ)魯人。丘は孔子の名なり。

(ヒ)簡聞直。何れも未詳なり。

(モ)摩胸。むねがいたいので。

(セ)生鐵。眞金と生鐵と殊なること有り。

如し。今日（チ）四稜蹋地、身に和して放倒、也た諸人の知道せんことを要す。身を藏す處、沒蹤迹、（リ）沒蹤迹の處、身を藏さず。江山晝永く、殿閣涼高し、綠陰未だ（ヌ）庭槐に轉ぜず、淸風先づ（ル）蘋末に起る。拂子を擊つて「猛虎起屍、猫兒歃血。」

擧す、僧、古德に問ふ、「如何なるか是れ道。」德云く、「（ヲ）墻外底。」僧云く、「者箇の道を問はず。」德云く、「甚麼の道を問ふ。」僧云く、「大道。」德云く、「大道長安に透る。」師云く「惺惺靈利を賣與し、懵懂瞌睡を賣與す、等しく是れ恁麼の時節、諸人且く作麼生。」

滿散　壽崇節上堂、妙德莊嚴河沙の福、聚むる所種種の形を示現して、此の（ワ）摩耶體に誕す。譬へば天樹王の如く、高廣世に比なし。一

（ス）象外。未詳なり。
（イ）嘆。嘆は「とりなく」、又は言多しなどなり。
（ロ）其。象外をさす、抖擻はかつさらへ。
（ハ）管得。管待なり。
（ニ）話墮。負け墮つるなり、論議などの時に敗を取ることをいふ。
（ホ）嚴頭。全豁をいふ。
（ヘ）輟餘薪。人人薪を添へて、熱鍋を扶けんことを要す。
（ト）元上座。佛光自らをいふ。
（チ）四稜蹋地。稜は楞、又は棱に作る、木の角のこと、蹋は榻床、こしかけなり、こしかけの四隅の足が地につき居ることで、不動著なるをいふ、安心の處に喩ふ。
（リ）沒蹤跡。三千里外、錯つて擧することを莫れ。
（ヌ）庭槐。さてさてまだ庭木は青い。
（ル）蘋。うきぐさ。
（ヲ）墻外底。この語、前に出づ。
（ワ）摩耶。佛母なり。
（カ）佛母陀羅尼。般若波羅蜜のことを佛母といふ、楞嚴神咒の前序と咒後の咒心とをいふ。
（ヨ）大寶曆。御治世をいふ。
（タ）曆應咸淳。南宋度宗の年號なり。
（レ）佛以一音。維摩の佛國品の文。
（ソ）異類。畜生の中に行くの意。
（ツ）劫火。劫は長時間のこと、此の世界が成立してより、再滅に至るまでには成住壞空の四劫あり、其の空に歸するには此の世界が水災、火災、風災に由つて壞滅す、之を壞劫の三災といふ、此の火災を劫火といふ。
（ネ）熾然。さかんにもゆるなり。

華一佛坐し、三世一時に攝す。㋕佛母陀羅尼功德不思議、我が㋵大寶曆を福し、永く世の依怙と作らん。

乾會節上堂、九天閶闔貫二流虹一、㋟曆應咸淳馭二六龍一、寶運更開二三萬劫一、須彌頂上一聲鐘。

消災會、駱駝を焚く。㋹「佛一音を以て法を演說す。人天隨類各得解、汝既に身㋞異類の中に行く、衆生處處の著を拔かんことを要す。點破す五濁如幻の事、煩惱を斷せず實相を證す。」火を以て一圓相を打す。㋡「劫火海底常㋭熾然、風鼓二須彌一自相擊。」

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷一　終

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷二

住大宋台州眞如禪寺語錄二

拈古

南泉示衆、昨夜文殊普賢、(イ)佛見法見を起す。各二十拄杖を與へて、二鐵圍山に貶向す。趙州、衆を出でて云く、「(ロ)和尚の棒、誰をしてか喫せしめん。」泉云く、「王老師、甚の過かある。」州、禮拜す、泉、方丈に歸る。

「南泉、贓を抱いて(ハ)判牘す、人口を塞斷すること能はず。趙州、(ニ)訐を以て直と爲す。爭奈せん也た曾て汁を呷ることを。如今還つて蓋覆する底ありや。」良久して、「若し頻に涙を下さしめば、滄海も也た須らく枯るべし。」

潙山、仰山に問ふ、「(ホ)妙淨明の心、汝作麼生か會す。」仰云く、「山河大地、日月星辰。」潙云く、「(ヘ)汝只だ其の事を得たり。」仰云く、「和尚適來甚麼をか問ふ。」潙云く、「妙淨

(イ)起佛見。まつすぐに言へば、占波國に膏藥を賣る。
(ロ)和尚棒。和尚の賣りのこりの膏藥は誰が買ふぞ。
(ハ)判牘。判斷牘案なり。
(ニ)訐。訐曲なり。
(ホ)妙淨明心。楞嚴經の文なり。
(ヘ)汝只其事。子を知ることは父に如かず。

明心。」仰云く、「喚んで事と作し得てんや。」潙云く、「如是如是。」

㋣投子の道ふ底。

㋠石樓因に僧問ふ、「未だ本來性を識らず、乞ふ師方便して便ち指せ。」樓云く、「石樓㋷耳朶なし。」僧云く、「某甲自ら非を知る。」樓云く、「老僧還つて過あり。」僧云く、「和尚の過、甚麼の處にか在る。」樓云く、「過汝が非なる處に在り。」僧禮拜す。樓便ち打つ。

棒あり、者の漢を打たずんば、㋦也た平生に㋸孤負せん。

本生一日、拄杖を拈じて示衆、「㋾我れ若し拈起せば、儞便ち未だ拈せざる時に向つて道理を作さん、我れ若し拈起せずんば、儞便ち拈起の時に向つて主宰と作らん。且く道へ山僧が爲人、甚麼の處にか在る。」時に僧あり出でて云く、「敢て㋻妄に節目を生ぜず。」生云く、「也た知る闍梨分外にあらざることを。」僧云く、「低低たる處、之を平ぐるに餘りあり、高高たる處、之を觀るに足らず。」生云く、「節目上更に節目を加ふ。」僧無語、生云く、「㋕鼻を掩ふて香を偸み、空しく罪犯を招く。」

「㋵指を以て指の指に非ざるに喩へんより、若かじ指に非ざるを以て、指の指に非ざるに喩へん

㋣投子道底。方語に、「渾崙不會」と。

㋠石樓。石頭遷に嗣ぐ。

㋷耳朶。石樓は耳に蓋がない。

㋦也孤負平生。棒で育てぬ子は、門を出でて師に耻を與へるものなり。

㋸孤負。そむくこと、又辜負ともかく。

㋾我若拈起。暗裏に横骨を抽き、明中に舌頭を坐す。

㋻妄生節目。私は松風を唇皮にして是非を説いたことがない。

㋕掩鼻。李下に冠を整さず、瓜田に履を納れず、子は別人のそしりを招く。

㋵以指。莊子の齊物論にある語なり。

には也。馬を以て馬の馬に非ざるに喩へんより、若かじ馬に非ざるを以て、馬の馬に非ざるに喩へんには也。」喝一喝。

潙山、仰山の方丈の外より過ぐるを見て、兩手を以て拳を握り、相交へて之に示す、仰山便ち女人拜を作す。

仰山の拜處、若し更に深きことを放さば、潙山兩箇の拳頭、㋦甚れの處に向つてか安着せん。

㋸天仙因に僧來り參ず、才かに坐具を展ぶ。仙云く、「時暄を通ずることを用ひず、㋾我れに文彩未だ彰れざる時の道理を還し來れ。」僧云く、「口あり啞却す、卽ち閑に苦死して箇の㋻臘月の扇子を覓めて甚麼か作ん。」仙、棒を拈じて打つ勢を作す、僧把住して云く、「我れに未だ拈ぜざる時の道理を還し來れ。」仙云く、「我れに隨ふ者は隨つて南北に之き、我れに隨はざる者は東西に死住す。」僧云く、「隨と不隨とは卽ち且く從す、請ふ師東西南北を拈出し來れ。」仙便ち打つ。

「天仙、這の僧の肚腸を飽盡することを要す、者の僧、天仙の倉庫を空盡することを得んと要す。當初只だ道ふ、相逢ふことを喜ぶと。到底翻つて㋕怨離別と成す。」喝一喝。

㋦向甚處。開眼ばかりあろまい。
㋸天仙。仙の字は傳燈等には「僊」に作る。
㋾還我文彩。此の事は暗中に字を書するが如し。
㋻臘月扇子。無用物なり、何の渡世になると。
㋕成怨離別。中間の一歩は宛然として物外に超ゆ。

潙山一日雨を看る、僧云く、「好雨。」潙云く、「甚れの處か是れ好處。」僧無語、潙却つて云く、「大好雨。」僧云く、「什麼の處か是れ好處。」潙雨を指して之に示す。僧又無語、潙云く、「何ぞ大智にして默することを得たる。」

等しく雨を看る、一人あり、㊉身上濕はず、且く道へ、是れ那一人か身上濕はざる。或は云はん、者の僧身上濕はずと。衲子讒じ難し。

天仙、因に僧參ず、作禮せんと擬す。仙云く、「者の野狐、箇の什麼を見て便ち禮拜す。」僧云く、「者の老和尚、箇の甚麼を見てか便ち恁麼に道ふ。」仙云く、「苦なる哉苦なる哉。」天仙失前忘後、僧云く、「要且つ時を得、終に補失せず。」仙云く、「爭か此の如くならざらん。」僧云く「誰か甘ふ。」仙大笑して云く、「遠うして遠し矣。」僧目を以て回顧して便ち出づ。

天仙、照物の手あり、這の僧透淸の眼あり、若し人辨得せば、也た是れ㋶赤土牛㋰嬭を塗る。

玄沙云く、「㋒一法を見ざる、是れ大過患。」且く道へ什麼の法を見ざる。」鏡淸、露柱を指して云く、「是れ者箇の法を見ざること莫しや。」沙云く、「浙中の淸水白米は汝が喫するに從す、佛法は未だ夢にだも見ざることを在り。」

㊉身上不濕。ふたり行く一人はぬれる雨かな。

㋶赤土。赤土の淸淨なるを、牛乳でぬつたがために、汚穢となりしかたち、これは說明すればするほど眞理に遠くなるをいふ。

㋰嬭、乃咱の反、「ねい」、母なり、乳なり、牛乳をいふ。

㋒一法。之れは玄沙が天下の衲僧の悟りの垢を拔く洗油箭なり。

是は則ち是、樂しきときは則ち懽を同じうす。知らず㋼家活を罄盡することを。

潙山坐する次で、仰山と香嚴と侍立す、潙云く、「㋨如今總に與麼なるものは少く、不與麼なるものは多し。」嚴、東より西に過ぐ。仰、西より東に過ぐ。潙云く、「這の則因縁、三十年後擲地の金聲ならん。」仰云く、「須らく是れ和尙の提唱にして始めて得べし。」嚴云く、「卽今も亦少からず。」潙云く、「狗口を合取せよ。」

「潙山、子を養つて、恩威並び行ふ、只だ是れ二子向背異あり。且く道へ諸訛、甚麼の處にか在る。」喝一喝。

張拙秀才、因に㋔禪月大師、指して㋗石霜に參せしむ。霜問ふ、「秀才何の姓ぞ。」張云く、「名は拙。」霜云く、「巧を覓むるすら尙ほ不可得、拙何れより來る。」公忽ち省あり、乃ち偈を呈して曰く、「光明寂照徧河沙、凡聖含靈共我家、一念不生全體現、六根纔動被二雲遮一、斷二除煩惱一重增レ病、趣二向眞如一亦是邪、隨二順世緣一無二罣礙一、涅槃生死等空花。」

須彌、藕絲に繫がる。

㋳豁上座、德山に到る、山見て便ち禪牀を下つて、坐具を抽んづる勢を作す。豁云く、「者箇は且く置く、忽ち心境一如底の人來るに遇はば、伊に向つて什麼と道ふてか、卽ち諸方の檢責を被らざら

㋼家活。いへのくらしむき、家計なり。

㋨如今總。一年三百六十日は、冬至に至つて始めて一線の長きを添ふ。

㋔禪月大師。貫休、唐の昭宗時代の人。

㋗石霜。慶諸に嗣ぐ、諸は藥山儼に嗣ぐ。

㋳豁。岩頭なり。

ん。」山云く、「猶ほ㋮昔日の三步に較ぶること在り、別に箇の主人翁と作り來れ。」簑便ち喝す、山不語。簑云く、「這の老野狐の咽喉を塞却す。」後に僧あり、潙山に擧似す。山云く、「簑公便宜を得と雖も。爭奈せん耳を掩ふて鈴を偸むことを。」

「潙山恁麼に㋕道地在り、殊に知らず、德山、簑公に靠倒せらるることを。還つて㋻簑公の與に屈を雪むる底ありや。」喝一喝。

米胡因に僧問ふ、「古へよりの上賢、還つて眞理を達すや也た無や。」胡云く、「達。」僧云く、「只だ眞理の如きんば、作麼生か達せん。」胡云く、「霍光、假銀城を賣つて單于に與ふ、契書是れ什麼人か做す。」僧云く、「某甲直に得たり口を杜ぢて言なきことを。」胡云く、「平地に人をして㋵保を作らしむ。」

會すや、㋟誰か知る歌舞の地、元是れ戰爭の基なることを。

聚樹因に僧辭す、乃ち云く、「若し諸方に到つて人あり、儞に老僧が此間の法道を問はば、作麼生か祇對せん。」僧云く、「他の問を待つて卽ち道はん。」樹云く、「何れの處にか口なき底の佛ある。」僧云く、「祇だ者れ也た還つて難し。」拂子を豎起して云く、「㋹還つて見るや。」僧云く、「何れの處にか眼なき底の佛ある。」樹云く、「只だ者れ也た還つて難し。」僧禪牀を遶ること一匝して出づ。樹云く、「善く能く祇對す。」僧便ち喝す。樹云く、「老僧子を識らず。」僧云く、「識らんことを要し

㋮昔日三步。外國の土を踏むやうな。
㋕道地。佛道の種子、卽ち成佛の種子を植うるところの義。
㋻簑公。簑公今日の鈍置。
㋵保。保は「とりで」城堡なり。
㋟誰知云云。日本でならば、大阪の道頓堀は、もと眞田が陣を張つた處じや。
㋹還見麽。風何の色をか作す。

て作麼せん。」樹、牀を敲くこと三下。

衆樹と者の僧と也た行くこと七五歩を得、中間一兩步、乾坤の外に出づ。見るや。葉零零兮秋暮半凋、草青青兮春暖齊發。

潙山坐する次で、仰山侍立す、潙云く、「寂子近日、宗門中の令嗣作麼生。」仰云く、「大いに(ワ)此の事を疑着す。」潙云く、「寂子又作麼生。」仰云く、「某只管困じ來れば眼を合し、健なれば即ち坐禪す、所以に(カ)未だ會て說著せず。」潙山云く、「者の田地に到ること也た得難し。」仰云く、「某が見處に據らば、此の一語を著くることも也た得じ。」潙云く、「一人の爲にすること也た得ず。」仰云く、「古より聖賢盡く皆是の如し。」潙山云く、「(ヨ)大いに人あり、汝が與麼の祇對を笑はん。」仰云く、「某を笑ふことを解するものは、是れ某が同參。」潙云く、「出頭して作麼せん。」仰、禪牀を遶ること一匝、潙云く、「古今を裂破す。」

仰山前頭は些子に較れり、後頭は又却つて深深、荒草堆頭に埋在す。潙山力を盡して牽き得出で來るも、已に是れ(タ)去死十分。(レ)還つて今日仰山に連累せらるる處を知るや。(ソ)摘楊花摘楊花。

藥山、僧あり到る、山問ふ、「甚れの處よりか來る。」僧云く、「南泉。」山云く、「三十年後、一頭の水牯

(ワ)疑著此事。未だ安眠がならぬ。
(カ)未曾說著。二枚の舌で。
(ヨ)大有人。大いに盲人の傀儡を開するあり。
(タ)去死十分。十分に死に終ふせたるを云ふ、大死一番なり。
(レ)還今日。まきぞひに出會つた。
(ソ)摘楊花。俗語のおさらばおさらば、支那にて別るる人に楊の枝を人の袂に入るる風ありこれを云ふ。

牛と作り去れ。」僧云く、「彼の中に在りと雖も、曾て(シ)他の食堂に上らず。」山云く、「儞口西北の風を吸へ。」僧云く、「和尚錯ること莫れ、自ら把筯の人あること在り。」

者の僧、者裏に向つて(ヱ)路を借つて經過す、藥山、那邊に在つて(ヒ)物を覩て稅を收む。是れ千載一遇と雖も、只だ是れ土曠れ人稀なり。

仰山、(モ)東寺に問ふ、「一路を借つて那邊に過ぎ得てんや。」寺云く、「大凡そ沙門は只だ一路なるべからず。別に更に有りや。」仰山良久す、東寺却つて仰山に問ふ、「一路を借つて那邊に過ぎ得てんや。」山云く、「大凡そ沙門は只だ一路なるべからず。別に更に有りや。」東寺云く、「只だ此れあり。」山云く、「大唐の天子決定姓は金。」

一人は歸り了つて去ること得ず、一人は去り了つて歸ること得ず、何が故ぞ。牧羊河畔(セ)女貞花、倚馬橋邊(ス)望夫石。

仰山、中邑に問ふ、「如何なるか見性することを得去らん。」邑云く、「譬へば一室に其れ六窻あり、內に一獼猴あり、外に一獼猴あり。東邊より猩猩と喚べば、獼猴即ち應じ、六窻倶に喚べば倶に應ずるが如し。」仰山禮拜して起つて云く、「適譬喩を蒙つて了知せずといふことなし、只だ內の獼猴睡するが如きんば、外の獼猴見んと欲する時如何。」邑、禪牀を下つて、山の手を

(シ)他食堂。飯は食はぬ。
(ヱ)借路。婆が君子を借りて婆年を拜す。
(ヒ)覩物收稅。飯を看て飢を忘れ鹽を看て渇を忘る。
(モ)東寺。如會、馬祖に嗣ぐ。
(セ)女貞花。「ねずみもち」白き花を開く、實はまろく、一名蠟樹といふ、葉は冬青(もち)に似たり、又さかきに似たり。
(ス)望夫石。化石なり、遠方へ行く夫の離別を悲み、遙にその後姿を望み立ちて、そのまま死して化成せりといふ石。

執つて舞を作して云く、「猩猩汝と相見し了れり也。」
中邑將に謂へり、仰山謾ずべしと。㋑他に一鞢せられて、便ち見る尾巴倶に露はるることを。
本生因に僧、太原より來る。生云く、「近離那邊の風景如何。」僧云く、「此間と別ならず。」生云く、「且く道へ、此間の風景如何。」僧云く、「和尚と某甲と同じからず。」生云く、「㋺草鞋を踏破して、當に何の事の爲ぞ。」僧無語、生云く、「卽古卽今、箇の問處を出づること也た難し。乃至老僧も亦出不得。」
　本生這の僧に一坐せられて、天地黯黑。
潙山、僧問ふ、「如何なるか是れ道。」潙云く、「無心是れ道。」僧云く、「不會。」潙云く、「不會底を會取せよ。」僧云く、「如何なるか是れ不會底。」潙云く、「只だ是れ儞是れ別人にあらず。」
　糞を擔つて茄子を栽うることは、須らく是れ潙山にして始めて得べし。
性空因に丁行者來つて才に見ゆ、便ち打つこと一棒して云く、「㋩汝が本來の眼を瞎却す也。」丁云く、「但だ今日のみに非ず、古人も亦此の令を行ず。」空云く、「誰か汝に向つて古今を道ふ。」丁拂袖して出づ。空云く、「㋥靑天白日、路に迷ふ人あり。」丁云く、「指示を要すること莫しや。」空便ち打つ、丁云

㋑被他一鞢。他に一鞢せられて、直に得たり忘前失後することを。
㋺踏破草鞋。一法を見ずんば大過患、且く道へ、什麼をか見ずと。
㋩瞎却汝本來眼。本道の契券を失ふ。
㋥靑天白日。ああ性空、慈悲のための故に、話兩橛となる。

く、「人の眼を瞎却すること莫くんば好し。」空云く、「俗人の眼を瞎却す、甚の過かあらん。」丁行者只だ性空の舌頭を坐斷せんことを要す。㋭性空の長處を見んと要せば、直に是れ天地懸に殊なり。

㋬白水示衆、「眼裏沙を著くること得ず、耳裏水を著くること得ず。」僧問ふ、「如何なるか是れ眼裏沙を著くること得ざる。」仁云く、「㋣應眞無比。」僧云く、「如何なるか是れ耳裏水を著くること得ざる。」仁云く、「白淨無垢。」

綿綿密密、頭正しく尾正し、只だ是れ閨閤裏に坐在す。然りと雖も、分ち易きは雪裏の粉、辯じ難きは墨中の煤。

浮石上堂、「山僧箇の卜舖を開いて、能く人の貧富生死を斷る。」僧便ち問ふ、「生死貧富を離却し、五行に落ちず、請ふ師直指。」石云く、「金木水火土。」

浮石命懸絲の若し。

㋠三平一日、侍者に問ふ、「姓は甚麼ぞ。」者云く、「和尚と同姓。」平云く、「㋷我が姓甚麼ぞ。」侍者云く、「問頭何くにか在る。」平云く、「幾時か曾て儞に問ふ。」者云く、「姓といふ者は誰ぞ。」平云く、「汝が初機を念ふて、汝に三十棒を放す。」

若し是れ今日ならば、寧ろ僧堂を閑却すべけんや。何が故ぞ。㋦石牛攔㆓古路㆒、一馬沒㆓雙蹄㆒。

㋭性空長處。おれの齒當が痛んで、どうもいへぬ。
㋬白水。本仁、洞山价に嗣ぐ。
㋣應眞。羅漢の境界なりと。
㋠三平。義忠、大顚通に嗣ぐ、通は石頭遷に嗣ぐ。
㋷我姓甚麼。おれの姓はないぞ。
㋦石牛云云。聽者は聾で、看者は盲。

丹霞、龐居士に見ゆ、門前に居士の女靈照、菜を洗ふを見る。霞云く、「居士在すや。」女、籃子を放下して手を斂めて立つ。霞又問ふ、「居士在すや不や。」女、籃を提げて便ち行く、霞便ち回る。居士外より歸る、女子前話を擧す。士云く、「丹霞在すや。」女云く、「去れり。」士云く、「(ル)赤土牛嬭を塗る。」只だ(ヲ)毒を以て毒を攻むることを知つて、知らず骨肉分離することを。

天仙因に披雲到る、才に方丈に入る、仙便ち問ふ、「未だ東越老人に見えざる時、作麼生か物の爲にす。」雲云く「只だ雲の碧嶂に生ずるを見て、焉ぞ知らん月の寒潭に落つることを。」仙云く、「只だ恁麼ならば也た得難し。」雲云く、「是れ未だ見えざる時なること莫しや。」仙便ち喝す、雲兩手を展ぶ。仙云く、「錯つて人を怪むものは、甚麼の限りかあらん。」雲耳を掩ふて便ち出づ。仙云く、「這の漢の平生を死却す也。」

天仙は非中に是あり、披雲は是中に非あり、各二十棒を與へん。何が故ぞ。中人以下には、(ワ)以て上を語るべからず也。

米胡、僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「藥山。」米云く、「藥山老子、近日如何。」僧云く、「大いに一片の頑石に似て相似たり。」米云く、「恁麼に(カ)鄭重なることを得たり。」僧云く、「儞が提掇の處なけん。」米云く、「但だ藥山のみに非ず、米胡も亦恁麼。」僧近前顧視して立つ。米云く、「看よ看よ頑石動せ

(ル)赤土塗牛嬭。其の父を見んと要せば、先づ其の弟子を見よ。
(ヲ)以毒攻毒。此の赤土、蠱毒鄉を過ぐるが如し。
(ワ)不可以語上。中書堂裡の事は未だ樵漁の家に入らず。
(カ)鄭重。赤心片片。

り也。」

這の僧恁麼に特達、是れ米胡にあらずんば、他の藥山多少の光彩を減せん。

潙山一日、野火を見て、乃ち道吾に問ふ。「還つて火を見るや。」吾云く、「見る。」潙云く、「何れの處よりか起る。」吾云く、「經行坐臥を除却して、請ふ師別に道へ。」㋵潙便ち休し去る。

惜むべし潙山末後の句なきことを、他の爲に一語を代らんと欲す。又恐る潙山甘はざらんことを、放過せば又恐る道吾に孤負せんことを。必竟如何。㋟赤脚にして桐城を下る。

㋹石樓因に元康來る、樓才に見て便ち足を收めて坐す。康云く、「恁麼に威儀周足なることを得たり。」樓云く、「汝適來箇の甚麼をか見る。」康云く、「端なく人に領過せらる。」樓云く、「是れ恁麼ならば始めて眞見と爲ん。」康云く、「苦なる哉、幾人をか㋞賺却し來る。」樓便ち身を起す、康云く、「見ば即ち見よ矣、動せば即ち動かず。」樓云く、「㋡力を盡して道ふとも定を出でず也。」康、掌を拊つこと三下。僧、南泉に擧似す、泉云く、「天下の人、者の公案を斷ずることを得ず、若し斷じ得ば他と同參。」

石樓末後、箇の力を盡して道ふとも定を出でずと道ふ也。惜むべし前功俱に費すことを。元康

㋵潙便休去。潙山も免れず、賊手、金を分つことを。
㋟赤脚下桐城。又是れ袈裟に草鞋を裹む。
㋹石樓。汾州、石頭遷に嗣ぐ。
㋞賺。賺は「すかす」「だます」ことなり、却は助字なり。
㋡盡力道。一事公門に入る、九牛拽(ひ)けども出でず。

掌を拊つこと三下、乞兒小利を見る、各三十棒を與へん。却つて是れ南泉(ネ)代つて喫す、何が故ぞ、他の結款了ぜざるが爲に、累山僧に及ぶ。屈あり也た(ナ)叫ぶ處なけん。

金峰示衆、「我れ若し擧し來らば、又恐らくは人の脣吻に遭はん、若し擧せずんば、又恐らくは(ラ)人に怪笑せ遭れん。其の中間に於て、如何ぞ卽ち是ならん。」時に僧あり出づ、金峰便ち方丈に歸る。別に僧あり、請益して云く、「和尙甚麼に因つて、者の僧の話に答へざる。」峰云く、「大いに失錢遭罪に似たり。」

衫を著け帽を裹むことは、(ム)他の三代相門に還す。

丹霞、龐居士に問ふ、「昨日の相見、今日に何似れ。」士云く、「如法に昨日の事を擧し來れ、儞が與に箇の宗眼を著けん。」霞云く、「只だ宗眼の如きんば、還つて龐公に著得せんや。」士云く、「我れ儞が眼裏に在り。」霞云く、「某甲眼窄し、何れの處にか安身せん。」士云く、「是の眼何ぞ窄く、是の身何ぞ安せん。」霞無語、士云く、「更に一句を道取せば、便ち此の語の圓なることを得ん。」霞亦無語、士休し去る。

是れ丹霞の兩默にあらずんば、龐公爭か(ウ)葛藤椅子を露出することを得ん。

天仙因に僧來參、才に坐具を展ぶ。仙云く、「者裏に會得するも、早く是れ平生に孤負せん。」僧云

(ネ)代喫。身がはりで面が赤い。
(ナ)無叫處。こゑがかれて了つた。
(ラ)人怪笑。客の挨拶さへ怪笑せらる。
(ム)還他三代。お客の錢で酒を買ふやうな眞如の拈古じや。
(ウ)葛藤椅子。葛藤は文字言句にまとはれること。

く、「者裏に向つて會得せずんば、又作麽生。」仙云く、「者裏に向つて會せずんば、又甚れの處に向つてか會せん」といつて便ち打す。

(キ)柱に膠し絃を調ぶることは則ち故に是、若し者の僧の口を塞斷せんと要せば、(ク)驢年ならん。

潙山因に僧問ふ、「從上の諸聖より直に如今に至る、和尙の意旨如何。」潙云く、「目前是れ甚麽ぞ。」僧云く、「只だ著れ便ち是なること莫しや。」潙云く、「阿那箇ぞ。」僧云く、「適來祇對する底。」潙云く、「儞那箇に擬し去つて事を生ずること莫れ。」

「鈎錐不及の處、甚れの處にか潙山を見ん。」喝一喝。

潙山、僧問ふ、「如何なるか是れ百丈の(オ)眞。」潙禪牀を下つて叉手す。又問ふ、「如何なるか是れ和尙の眞。」潙禪牀に上つて坐す。

(ク)懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。

(ヤ)大川因に江陵の僧到る、川云く、「幾時か發足す。」僧、坐具を提起す、川云く、「特に遠來を謝す。」僧、禪牀を遶ること一匝して便ち出づ。川云く、「若し恁麽ならずんば、焉ぞ眼目の端的なることを知らん。」僧掌を搊つて云く、「人を苦殺して洎んど合に錯つて諸方を斷るべし。」川云く、「甚だ禪宗の道理を得たり。」後に僧あり、丹霞に擧似す、霞云く、「大川の法道は即ち得たり、我が這裏は即ち然

(キ)柱。琴柱なり。即ち鐘聲鼓響を屑皮にして無根の談論をするは、之れでもよい。
(ク)驢年。十二支の中になき年なれば、いつまでもはてしなきをいふ。
(オ)眞。肖像なり。
(ク)懷州云云　隻手の聲を聞くと粟も黍も京も田舍も、皆鼻孔下の賑じや、精を出せ。
(ヤ)大川。石頭遷に嗣ぐ。

らず。」僧云く、「和尚の此間作麼生。」霞云く、「㋐猶ほ大川の三步に較ぶること在り。」僧禮拜、霞云く、「錯つて諸方を斷るもの多し。」

「丹霞徒に㋕此の語あり、要且つ大川を識らず。」喝。

潙山、方丈の內に在つて臥す、仰山入り來り、潙乃ち轉回して裏に向つて臥す。仰云く、「某は是れ和尚の弟子、跡を形ることを用ひず。」潙起きる勢を作す、仰便ち出で去る。潙召して云く、「寂子。」仰乃ち回り來る、云く、「老僧が箇の夢を說くことを聽け。」仰、低頭して聽く勢を作す。潙云く、「我が爲に原せよ看ん。」仰、一盆の水、一條の手巾を取り來る、潙面を洗ひ了つて才に坐す。香嚴入り來る。潙云く、「我れ適來寂子と一上の神通を作す、小小に同じからず。」嚴云く、「某下面に在つて了了として知ることを得たり。」潙云く、「子試に道へ看ん。」嚴乃ち一椀の茶を點じ來る。潙嘆じて云く、「二子の神通鶖子に過ぎたり。」

面を洗ひ了り、茶を喫し了つて、將に謂へり、者の老漢醒了と。知らず寐語轉た多きことを。仰山香嚴到底㋒惺惺にして、到底他に迷魂㋓寨裏に牽在せらる。然りと雖も、今日茶あり、也た一碗を著得せん。

仰山、東寺に參じて云く、「已に相見了也、上來することを用ひず。」仰云く、「恁のごとくの相見當ら

㋐猶較大川。大川行くこと三步なれば、丹霞行くこと半步。
㋕有此語。大川、吸物に氣げ儀じや。
㋒惺惺。靜なり。
㋓寨裏。木柵なり、又壘なり。

ざること莫しや。」寺便ち方丈に歸つて門を閉却す。仰山、潙山に舉似す、潙云く、「寂子是れ甚の心行ぞ。」仰云く、「若し恁麼ならずんば、爭か伊を識得せん。」

東寺の險は、何ぞ潙山の險に似かん。

丹霞、龐居士を見る、士面前に在つて立つこと少時あつて便ち出づ。霞顧みず。士却つて入り來る。霞と相對して坐す。霞却つて士の前に向つて立つこと少時、便ち方丈に歸る。士云く、「儞入り我れ出づ、未だ事あらざること在り。」霞云く、「老老大大、出出入入、甚の了期かあらん。」士云く、「略些子の慈悲なし。」霞云く、「者の老翁を引き得て、者の田地に到らしむ。」士云く、「什麼を把つてか引く。」霞乃ち把住し、㉝幞頭を拈却して云く、「恰も箇の師僧に似たり。」士卻つて幞頭を將つて、霞の頭上に在いて云く、「一へに箇の俗人に似たり。」霞、應諾諾。士云く、「猶ほ昔日の氣息あること在り。」霞、幞頭を抛下して云く、「㉞一へに箇の烏紗巾に似たり。」士、應諾諾。霞云く、「昔日の氣息爭か忘るることを得ん。」士、彈指して云く、「天を動じ地を動ず。」

丹霞は是れ一代の龍門、分毫上に向つて利を取る。是れ龐公にあらずんば、幾乎ど㉟幞頭を失却せん。

貞溪、僧あり來參す。溪、拂子を竪起して云く、「貞溪老漢、還つて㊱眼を具すや。」僧云く、「某甲敢

㉝幞。頭巾なり。
㉞一似箇烏紗巾。昔は此の頭巾に似たり。
㉟失却幞頭。質に入れて淡に流して了つた。
㊱具眼麼。盲人の眼が具すや。

て人の過を見ず。」溪云く、「老僧、闍梨が手裏に死在す。」僧、手を以て胸を指して便ち出づ。溪云く、「闍梨、先師に見え來る。」晩に至つて溪、請じて茶を喫せしむ。僧、盞を拈起して云く、「者箇は是れ諸佛出世邊の事。作麼生か是れ未出世邊の事。」溪、手を以て盞を撥却して云く、「闍梨、老僧が手裏に死在するに到る。」僧云く、「五里の牌は郭門の外に在り。」溪云く、「故なくして師僧を惑亂す。」僧便ち起つて茶を謝す。溪云く、「特に相訪ふことを謝す。」

貞溪と者の僧と、皆是れ曾て㋖霜雪を經るの人、猩猩酒を飲む、奈ともすることなし。忍俊不禁にして、未だ免れず一時に喪身失命することを。咄。㋙幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦なるは是れ新羅。

天童首座秉拂。

除夜秉拂。僧問うて云く、「孟嘗門下、鷄鳴關を出づる時如何。」師云く、「汝は關を過ぐる客に非ず。」進んで云く、「法堂新創す、還つて新底の佛法ありや也た無や。」師云く、「梁は方に柱は圓なり。」進んで云く、「記得す、昔日僧、嵩山和尚に問ふ、『如何なるか是れ大修行底の人。擔枷帶鎖』と。此の意如何。」師云く、「㋟青天電影なし。」進んで云く、「如何なるか是れ作業底の人。修禪入定と。此の意又作麼生。」師云く、「空室に居せず。」進んで云く、「山復た云く、『個我れに善を問へば、善、惡に從はず、我れに惡を問はば、惡、善に從はず。』意旨如何。」師

㋖經霜雪之人。何れも罷參の宗匠じや。
㋙幽州。中人以上は以て上を說くべからず。
㋟青天無電影。おれの處には奕のつかへたものはない。

云く、「牛皮、露柱を（ミ）鞔る。」進んで云く、「者の僧悟り去る、又作麼生。」師云く、「錯。」進んで云く、「今日和尚に問ふ。如何なるか是れ大修行底の人と。」師云く、「獼猴。漆甕に入る。」進んで云く、「如何なるか是れ大作業底の人。」師云く、「汝が境界に非ず。」進んで云く、「兩頭倶に坐斷して、一劍（シ）天に倚つて寒し。」師云く、「靴を隔てて痒を抓く。」進んで云く、「幾年か抱負す荊山の玉、今日方に才に賞音に逢ふ。」師云く、「果して是れ錯つて承當す。」

師乃ち云く、「一冬兄弟と火爐頭邊に眉毛厮結び、鼻孔厮拄ふ。大都そ家法森嚴、一語も敢て亂に發せず。新正改旦、滿頭の青灰、抖擻し落さざることを覺ゆるに似て、只だ諸人を引いて、宿鷺亭外、東行西行することを得たり。也た東家の籬落、西家の雞犬、風光高下平田に接し、暖日發生して春草緑なることを知らしめんと要す。」左右を顧視して、「大衆還つて會すや。（エ）太白峰頭大いに雪の在るあり。」復た雲門乾屎橛の公案を頌す、乃ち云く、「劈腹剜心、千古無レ對、師子咬レ人、（ヒ）韓獹逐レ塊。」

結夏秉拂、師索話に云く、「古佛場開く、（モ）斬新の號令。當軒の布鼓、阿誰か擊つことを解す。」僧出でて問うて云く、「山前麥熟すること多時にし了る。一一機に當つて爲に舉揚す。正恁麼の時、請ふ師提唱。」師云く、「（セ）月子彎彎幾州をか照す。」進んで云く、「護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始

（ミ）鞔。ひきのばすの意なり、毛をむしりとるといふの字にして餘計なことをするをいふ。
（シ）倚天寒。電光影裏。
（エ）太白。天童山なり。
（ヒ）韓獹。極めて俊捷なる犬を云ふ、戰國策に故事あり。
（モ）斬新號令。春風刀の如し。
（セ）月子彎彎。月、彎弓に似ば、雨少くして風多し。

めて安居。箇の中の意を會得せば、鐵船水上に浮ぶ。如何なるか是れ護生は須らく是れ殺すべし。」師云く、「五釆、牛頭に畫く。」進んで云く、「如何なるか是れ殺し盡して始めて安居。」師云く、「牛頭は北に向ひ、馬頭は南。」進んで云く、「如何なるか是れ箇中の意。」師云く、「（ス）大地も載せ起さず。」進んで云く、「如何なるか是れ鐵船水上に浮ぶ。」師云く、「大石波斯看不破。」進んで云く、「九旬禁足魚網に游ぎ。物外の安身鳥籠に入る、生殺盡くる時蠶繭を作す。如何なるか這の三種を透得せん、應庵の意作麼生。」師云く、「三十三天氣毬を輥ず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「（イ）機、機を奪ひ、智、智を遣る、雙放復た雙收、雙全復た雙破。大衆還つて會すや。（ロ）萬松關、翠鎖亭前に到り、妙高臺、太白峰頂に到る。坦坦蕩蕩、岧岧嶤嶤。頭頭是れ生殺の機、處處（ハ）佛祖の路を斷ず。圓覺伽藍、十風五雨、平等性智、水流れ花開く。所以に道ふ、峰巒嶠峙、鶴機を停めず、靈木岧然、鳳依倚なし。止不止、擬不擬、籬邊の燕雀空しく呢喃、大鵬一展九萬里。笑ふに堪へたり西來の碧眼胡、人に（ニ）當門の齒を打落せらるゝことを。」

復た佛は是れ西天の老比丘の公案を擧す。乃ち頌に云く、「佛是西天老比丘、畢竟（ホ）眞金（ヘ）不レ博レ鍮。

（ス）大地云云。地の山を載するが如くし。
（イ）機奪機。去れば則ち印住し、住すれば則ち印破す。
（ロ）萬松關。翠鎖亭、妙高臺、みな天童の名所。
（ハ）斷佛祖之路。釋迦でも達磨でも面(つら)出しは出來ぬ。
（ニ）當門齒。ここは寒いで話が出來ぬ。且く暖處に待て。
（ホ）眞金。眞金には自ら眞假あり、沙を和して人に賣與せず。
（ヘ）不博鍮。諸人、鍮を看て金を看す。

「放二是非一輕入レ耳、從前知己反爲レ讐。」

冬至秉拂。師云く、「天童門下、古佛堂前、銅壺箭あり、誰をしてか敢て正眼に覷著せしめん。迦葉の三昧。固より阿難の知る所に非ず。既に曰ふ、半座を平分すと。（ト）此れを外にして別に條章を立つべからず、只だ其の中間に就いて、子午卯酉を點出することを得たり、還つて會すや。若し也た會せずんば、重新點出せん。大衆一年十二月あり、一日十二時あり、一明一暗、一敲一唱、朝より暮に至り、暮より朝に至る。情を盡して諸人に（チ）攤向す、別に佛法の道理なし、只だ諸人の知道せんことを要す。今年冬至定んで是れ十一月二十九申の末未の初め、夜三刻を減じ、晝九釐を添ふ、陰極り陽生じて、循環住まらず。便ち見る無今無古、無去無來、無斷無續、無缺無餘。所以に道ふ、一切過去劫、未來今に安置し、未來見在劫、過去世に安置す。玄機迅速、箭影同旋、（リ）斗轉じ星移つて、眨眼を容れず。忽ち箇の久參の士あり、出で來つて道はん、儞は是れ東山下の兒孫、豈に知らずや（ヌ）瓜田に履を納れず、李下に冠を整へざることを。」良久して云く、「若し頻に涙を下さしめば、滄海も也た須らく乾くべし。」

（ル）鎖口訣

（ト）外此別云云。此の座敷を離れて、あきなひするでもない。

（チ）攤向。撒向に同じ、散の意。

（リ）斗轉星移。濫く言ふ、今朝早を打して起くと、門前自ら夜行の人なり。

（ヌ）瓜田不納履。是れが隻手の聲の中に居る人は見えぬ。

（ル）鎖口訣。衲僧の口皮を鎖斷するの口訣なり。

諸佛妙門、列祖的旨。繼繼繩繩、貴在ニ㋾密契一、㋻尺圍綸合、

綱紐沈細、㋕綿密無縫。隱ニ括㋵幽祕一、遠兮非レ遙、近兮非レ邇、

措無レ所レ遺、擧無レ不レ備。橫亘ニ十方一、竪窮ニ三際一、理外無レ事、

事外無レ理、具ニ一切相一、含ニ一切義一、啓無レ所レ開、闔無レ所レ閉、

出無ニ所從一、入無ニ所詣一、二兮非レ一、一兮非レ二、

用則雙用、遮則雙遮。隨處㋟卽宗、㋹如ニ身影一爾。

世尊拈花、達磨分髓。曹溪南嶽、百丈臨濟、

楊岐白雲、圜悟妙喜、洎レ至ニ應庵一、五十一世、

㋞或開或遮、或權或體、或逆或順、或淨或穢、

或明或暗、或行ニ異類一、激揚鏗鏘、波流嶽逝、

如ニ師子筋一、如ニ象王鼻一、如ニ天鼓聲一、如ニ鴆鳥尾一、

百千機緣、河沙妙偈。出沒卷舒、三昧游戲。

深慈痛慈、布ニ無緣施一、絕レ見絕レ聞、絕レ情絕レ謂、曰レ放曰レ收、

控ニ惡馬銜一、曰レ錯曰レ綜。奪ニ魔王幟一、箭擲レ空鳴。風行塵起。

龍蛇天淵、迷悟金屎。不レ入ニ此宗一、徒勞ニ擬議一。

㋾密契。冷暖自知なり。

㋻尺圍。隻手の契券。

㋕綿密。外へは水も洩さざるやうに。

㋵幽祕。深幽秘藏。黃金の鎖を擊開し、玉樓の鐘を擊碎す。

㋟卽宗。或時は身を寫して影を寫さす。

㋹如身影。或は身を移し或は影を移す。

㋞或開。これより口訣。

禮祖塔

禮二心鏡禪師塔一

(ツ)咒聲一出鬼神愁、甘露縵山百毒收、(ネ)小白嶺分南北路、至レ今蛇咬二石饅頭一。

禮二(ナ)宏智禪師塔一

浮圖三遶月明中、五葉重芳憶二(ラ)遠公一、古殿百年今又冷、(ム)鳳棲無三復到二梧桐一。

禮二(ウ)應庵師祖塔一

(キ)悞入二桃源深處路一、灼然流水隔二天涯一、(ノ)一聲鷄唱千年後、老却劉郎幾度花。

禮二(オ)密庵師祖塔一

謾說二沙盆一重レ似レ山、不レ施二三拜一也應レ難、黃金不レ鑄二黃金像一、(ク)松竹相爭夜夜寒。

禮二(ヤ)石門進禪師塔一

一十九人齊悟道、不下將二名字一上中傳燈上、我來聊爾(マ)伸二三拜一、

(ツ)咒聲。禪師のまじなひには、八萬の夜叉鬼神、九十六種の外道も直に蹤を潜む。

(ネ)小白。心鏡墓前に小白嶺、巍巍として路が分る。

(ナ)宏智。覺なり。

(ラ)遠公。浮山なり。

(ム)鳳棲。鳳の如く麟の如き來宿もない。

(ウ)應菴。曇華なり。

(キ)悞入灼然。路に迷つて武陵桃源に入つたが、目前の流水青山は仙鄕ではない。

(ノ)一聲、老却。蹤蹤は未だ鷄の唱ふる邊に在らず、此の鷄聲の中、劉郞眼中の桃花は、何

要救㋘乾溪喫䭜僧。

禮石橋

㋫陣陣炊煙畫作圖、似聞鐘鼓出雲闕、眞如不展羅齋鉢、
尊者家貧見客難。

往來偈頌

壽㋙物初師兄

空山無人月入樓　耿然東望㋓鄮嶺頭、不知此夕是何夕、
白玉菡萏吹高秋、㋢九龍蜿蜒不敢傍、釋梵天邊花雨響、
年年此日苦炎熱、長與塵寰作清冷。

寄㋐象潭和尚

㋚絲毫落地盡情翻、要得渾崙直是難、水遠山長太孤絕、
㋖幾回同往不同還。
君方背負須彌至、我入針鋒影裏藏、消息盡時重會面、
㋴一條古路沒人行。

ん落ちたか數を知らぬ。
㋔䆫菴。咸傑なり。
㋗松竹相爭。併し松聲雨竹、時時に金玉を鳴すことあつて、澗東の夜色未だ寂寥ならず。
㋳石門進。傳は未詳なり。
㋮伸三拜。坐具を伸べて三拜するより外はない。
㋘乾溪。溪の流水に鉢盂を洗はしめんことを要す。
㋫陣陣。連ることなり。「五峯山上雲蒸飯」より出づ。
㋙物初。名は大觀、北礀簡に嗣ぐ、大惠四世。
㋓鄮嶺。天童の名所なり。
㋢九龍。神龍擁護すれども、つらは出さぬ。
㋐象潭。名は滿泳、白雲に住す。大歇謙に嗣ぐ、松源三世。
㋚絲毫。一絲毫頭に、佛界も衆生界も訪れが斷ゆ。
㋖幾回。吾れと同床に生じて同床に死せず。

（メ）寄二石林和尙一

歲晚天寒信不レ通、上方應レ念白雲窮、柴頭米粒重敲點、（ミ）細雨斜風滿二浙東一。

寄二龍石一

方木從來不レ逗レ圓、幾回相摻下二（シ）黃泉一、回レ頭拽斷來時路、塞北安南正悄然。

寄二在庵一

（ヱ）開レ口明明是禍門、相逢彼此避無レ因、（ヒ）三千條令從レ頭擧、今古希レ逢二不犯人一。

海中夜泊、懷二仲擧師兄一

破頭船子打頭風、咫尺仙凡信不レ通、偸眼幾回著二五兩一、夜潮誰在二海門東一。

（モ）送三橫川主二鴈山靈巖一

百戰金吾出二鳳城一、不レ論二滅レ竈與一レ添レ兵、（セ）天高蕩月涼レ如レ水、誰聽（ス）虛弓落鴈聲。

天巖法師、寄二示大禮禱晴疏一

（ユ）一條。有利無利。行市を離れず。
（メ）石林。名は行鞏、滅翁禮に嗣ぐ、松源三世、淨慈に住す。
（ミ）細雨。細雨の浙東に今に斷えれば業識の未だ斷えざるがためたり。
（シ）黃泉。高々山頂行、深々海底行。
（ヱ）開口。如何なるか是れ臨濟下、口を開けば是れ禍門行。
（ヒ）三千。三千の威儀、八萬の細行。
（モ）橫川。名は行洪、滅翁禮に嗣ぐ。松源三世、育王に住す。
（セ）天高。すみ渡つた空じや。
（ス）虛弓。雁の長空に過ぐるおと。

柴門剝啄送二嘉音一、(イ)一鷲失山中補襪針、半幅御爐煙上禮、三冬黃葉地爐心。

送二恩絕崖一

雖三然吐二得蕉頭甜一、畢竟難レ收(ロ)醬裏鹽、話到二靑燈滄海角一、不レ堪レ回二首百城南一。

送二章竺卿一

機先一探便抽レ兵、(ハ)彼彼難レ揩(ニ)古劍腥・吳楚盡頭回レ首望、滹沱風急正流レ氷。

一語當頭略不レ分、便將二拄杖一靠二松根一、(ホ)山深自是多二狼虎一、未レ到二黃昏一著レ閉レ門。

曲江夜話

大家相聚喫二莖虀一、(ヘ)不二敢堂堂路拾一レ遺、針脚放開毫髮許、(ト)水天空濶鴈聲微。

湖上諸庵鬮辭、勸二晦巖法師一、再主二南湖一

敎眼通身會者難、雲生二華頂一萬尋寒、渾崙不レ用重華擘、擲二入鄞江一普請看。

塵塵剎剎布二全威一、華雨堂前宿將旗、(チ)刁斗只聞空劫外、灼然誰敢犯二重圍一。

(イ)鷲失。あまり面白さに笑倒して破襪を綴る針を失却した。
(ロ)醬裏鹽、自然に相應して跡を見ずと。
(ハ)彼彼。互に。
(ニ)古劍。兩刄交レ鋒。
(ホ)山深。前途、虎に逢はば須らく回避すべし。
(ヘ)不敢堂堂。一度蛇に咬まれて、斷井索を看るを怕る。
(ト)水天。然れども今何が目に入つてゐる。
(チ)刁斗。軍器、銅にて造る、晝は飯を焚き、夜は之を擊つて士卒を警む。

衲僧門下(リ)論ニ知己ー、熱血相噴(ツ)不レ露レ齒、好花不ニ肯當面貼ー、
各抱ニ不平ー憤憤地、幾回(ネ)欲レ道道不レ及、片板各自擔ニ到底ー、
浙東山浙西水、與レ君借レ路略經過、也是波斯入ニ鬧市ー。

寄三少野圭ニ等慈席ー

(ナ)棒頭翻覆雨傾レ盆、雙放雙收用不レ停、(ラ)報化佛頭重按斷、
寒潮不三敢下ニ滄溟ー。

與ニ雲溪ー夜話、有レ作

揣ニ剝家私ー徹骨貧、一絲一線不ニ相存ー、(ム)通玄峰頂無ニ人到ー、
雨滴巖花襯ニ冷雲ー。

送ニ東溟ー

祖師門下絕ニ名模ー、無レ蟻難レ穿九曲珠、一(ウ)蹴ニ睹驢ー玄路絕、
鷓鴣啼在ニ百花圖ー。

慈雲諸公作レ頌、美ニ(キ)玉几(ノ)物初和尚作塗之功ー、亦隨喜ニ一偈

大海滔滔沒ニ反回ー、濤山浪屋雪崔嵬、一鍬翻轉魚龍窟、
(オ)香積不下從ニ天外ー來上。

財も、電光中の敕書なり。

(レ)證龜成鼈。金瓦、價を同じうし、龜鼈、步を并す。

(リ)論知己　士は己を知る者のために身を忘る。

(ツ)不露齒。白い齒はみせぬ。

(ネ)欲道。山を荷ふて蟻穴に入るが如し。

(ナ)棒頭。洞山三頓の棒、落處が見えると、三千大千世界の雨のかずかずに命絲をつなぐ。

(ラ)報化佛頭。婆婆往來八千度。

(ム)通玄峯頂。天台山にありと、親しき者は到らず、到るものは親しからず。

(ウ)蹴睹驢。睹驢を蹴つて斷溪橋を踏む。

(キ)玉几。育王山なり。

(ノ)物初。大觀、作塗はかべのぬりかへならん。

(オ)香積。世界、禪宗では庫司をいふ。

鐵鞭高擧趂二耕牛一、　栗棘花開佛也愁、
別甑炊レ香只者是、　鉢盂無底更風流。

送二仁練溪(ク)國清(ヤ)後板一

天台南石橋北、　三脚驢子弄レ蹄行、
未レ擧已是舌頭顙、　差二之毫釐一失二千里一、
薦不薦兮落二第二一、　大野霜飇天宇空、
孤鴻縹(マ)渺從レ何起、　不レ用那邊重斫額、
勾頭有レ路滄溟窄、　坐二斷當頭一付二飽參一、
南泉座上有二黃檗一。

寄二南山維那(ケ)平田一

興化打二克賓一、　克賓嗣二興化一、
不レ知蜜苦レ似二黃連一、　盡道一牛還二一馬一、
平田豈甘二同受レ屈、　倒二却紅旗一入二他社一、
纔見二他家令欲レ行、　一錘兩當便擒下、
直要堂頭老古錐、　眼瞎耳聾幷口啞、
更在二再三針箚看一、
只恐瘂聾(フ)元是詐、　阿呵呵、阿魏無レ眞、　水銀無レ假、
浩浩叢林如二海寬一、　作麼爲レ君(コ)提二此話一。

竹寄二古田軒扁一

(エ)南陽一擊憩二窮塗一、　(テ)客思難三將上二畫圖一、　莫レ怪不レ除二當路箭一、
要君來レ此立須臾。

與二象岑一夜二話天平兩錯一

(ク)仁練溪。未詳なり。
(ヤ)國清。寺號、十刹の一、台州天台山敎忠寺。
(マ)渺。異本に「緲」に作る。
(ケ)平田。名は洪、天封に住す、南山斷橋に嗣ぐ、無準三世、南山は淨慈。
(フ)元是詐。盲人は眼開き、跛者は快走し、啞者は能く言語す、

㋐尺短終難レ比ニ寸長一、年深法出㋚轉姦生、僥君收ニ得當時款一、我要重還ニ赦後贓一。

謝ニ玉几本末翁諸友相訪一

放レ君不合到ニ巖栖一、蕩ニ盡生涯一只㋖噬レ臍、有ニ酌レ溪長柄杓一、也隨ニ明月一落ニ前溪一。

送ニ㋴瑞侍者一

自笑㋱塵懸折脚牀、又憐黄髮㋯映ニ斜陽一、山頭老漢如相問、㋛莫レ説蒲鞋有ニ短長一。

送ニ昌兄行脚一

因ニ君別レ我下ニ松庵一、不レ覺回レ頭㋽滿面慚、去去却煩輕蓋覆、㋪兔レ令ニ江海罵ニ同參一。

酬ニ月維那一

遙臨ニ寒谷一㋲媿ニ深知一、紅葉聲中踏ニ落暉一、莫レ怪家風苦ニ岑寂一、十年松下掩ニ柴扉一。

次ニ杲翁見レ招韻一

㋙提此話。此の樣な手形は弄する者があるまい。

㋓南陽。香嚴なり。

㋢客思。旅愁の切なること。

㋐尺短云云。人貧にして智短し、馬瘦せて毛長し。

㋚轉姦生。一字公門に入れば、九牛挽けども出でず。

㋖噬臍。臍なかむ程あせつても何もない。

㋴瑞侍者。不詳なり、この頌は送行なり。

㋱塵懸。瑞公が行つたならば、あとで。

㋯映斜陽。家裏の醜態。

㋛莫説。おれが脚に大小あろから、鞋對の長短を語るな。

㋽滿面慚。老眼にホロリと血の涙が出た。

㋪兔令江海。恐らくは海外の同參、佛光が老婆禪を罵倒せん。

㋲媿深知。素寒貧で、家私を見

青山斷處露二雲凹一、　幾把二家私一入二㋑細敲一、　一夜北風雪沒レ屋、
主人太殺不二相饒一。

西天路滑人稀レ到、　最苦難レ禁㋺劈面風、
不三敢機先謾擧二展一、　白雲可レ是㋩手頭窮一。

寄二㋥無文和尚一

歲晚天寒黃葉飛、　飯籮無レ糝已多時、　臨レ風幾度空惆悵、
只憶㋭江西馬簸箕。

裔姪行脚

出レ門㋬荊棘已參天、　不レ解二騰身擧步前一、　放レ汝別參二知識路一、
快須三洒落打二行纏一。

送二小師一鏡行脚一

老矣叢林沒二所成一、　聲前慚應二本師名一、　行行牢記二吾深囑一、
三百年前有二㋣古靈一。

天童琛㋠五戒求レ頌

㋷嶺南消息又萠芽、　米爲レ經レ篩飯泌レ沙、　別有二暗香遮不一レ得、

せろが愧しい。

㋠十年松下。十年來、戶外に人一人來ぬ、此の故に芳草の肥えたるを見てくれよ。

㋷足翁。名は嶙、天童無際派に嗣ぐ、大惠三世。

㋑細敲。互に家裏の些子を論ず。

㋺劈面風。此の風の寒いので。而出しの人がないであらう。擧展は手も足も出ぬこと。

㋩手頭窮。今朝の霜風に手足がこごえる。

㋥無文。名は正傳、癡絕沖に嗣ぐ、松源四世。

㋭江西馬。江西の馬祖曰く、「溪邊の老婆子、我が舊時の名を呼ぶ」と。

㋬荊棘云云。おれが金火箸を吞んで來い。でなければ年貢は入らない。

㋣古靈。名は神贊、百丈に嗣ぐ、これはおれが背中なうつ様に

㋦團團明月轉二菱花一。

送三履姪見二思溪石林和尙一

抛二出燈前一佛卽心、十虛無二地可レ容レ針、㋸草鞋若也欺二行色一、
未レ失青苕見二石林一。

龜蛇石

一石㋾坡陀雨種紋、確然同レ隊不レ同レ羣、㋻通身是汝通身我、
含レ毒那知左顧恩。

天庵

日月㋕兩輪爲二戸牖一、衲僧活計未二蕭條一、不レ知三十三重外、
㋵爛却春風幾許茅。

佛成道

三更㋟犬吠月沈時、酒冷茶寒彼此知、一笑面皮㋹黄似レ我、
令二人特地又相疑一。

象潭見レ寄

湖山碧湖水碧、山靈水靈人共識、高禪著レ屋居二其中一、

なれと。

㋠五戒。五戒を受けたばかりの道心者なり。

㋷嶺南消息。嶺南は六祖、消息は應無所住。

㋦團團明月。世界濶きこと一丈なれば、古鏡濶きこと一丈。

㋸草鞋未失。足に穿いた草鞋の上では相見は出來まいけれども、手に持つた禿箒の上 は相見が出來る。

㋾坡陀。不平の貌なり。

㋻通身是汝。吾れ汝を見ずんば焉んぞ吾れに辜負せん。

㋕兩輪爲。兎飛び烏走り、花開いて葉落つ。

㋵爛却。石爛れ松枯れ、黒火洞然たる後まで、天庵ばかり三災の愁がない。

㋟犬吠。一犬虚を傳へて、萬犬實を傳ふ。

㋹黄似我。其の弟子を見て其の師を知る。

精金不ﾚ待ﾚ增二黃色一、忍彼㋞妙喜洋嶼庵、從來的的家法嚴。
一夏打發十三箇、往往諸方爲二美談一、古之視ﾚ今今視ﾚ昔、
羅庵眼睛如二漆黑一、大都黨ﾚ理不ﾚ黨ﾚ親、一路生機近不ﾚ得、
妙中妙玄中玄、攬ﾚ之不ﾚ及鑽愈堅、殷勤欲ﾚ語東風前、
意輪未ﾚ動牙頰寒。

㋡觀二競渡一

迅雷轟破水晶宮、縹緲㋥寒蛟上二碧空一、一一眼睛方定動、
錦標已㋤在二畫橋東一。

雪佛

一華擘出一如來、㋶六出團團笑臉開、識二得髑髏元是水一、
㋰摩耶宮裏不ﾚ投ﾚ胎。

食二蒲萄一

一夜㋒滂澎雨未ﾚ乾、㋼珠回玉轉影團團、若知二開ﾚ口非ﾚ干ﾚ舌、
不ﾚ在二秋風㋨架下看一。

桂花數珠

金粟全提向上機、秋風影裏走二摩尼一、就ﾚ中一線無二人見一、
老兎推ﾚ輪又過ﾚ西。

㋞妙喜洋嶼。妙喜は大慧禪師の號、洋嶼は福州長樂縣にあり、禪師ここに庵を建てて學徒を說得す。
㋡觀競渡。端午の日、龍舟を浮べて標錦を爭ひ取るなり。
㋥寒蛟。舟をいふ。
㋤在畫橋東。徒に競渡の人、已に迷ひて物を逐ふ。
㋶六出。六出は雪、雪佛に因む。
㋰摩耶。勿論、雙樹下に涅槃はない。
㋒滂澎。水の聲の形容、水波の相擊つ聲。
㋼珠回玉轉。宛轉又宛轉。
㋨架下看。必ずしも珍しき風味は蒲萄棚下ばかりではない。

送二廣南因上座一

祖師門下實堪レ悲、千古雲埋㋞少室衣、此去風幡堂上去、㋳可レ憐無三語寄二闍黎一。

筆工

三寸圓齊藏二甲兵一、光芒直㋮與レ日爭レ明、折レ衝只在二毫端許一、何必防レ胡萬里城。

送二正姪行脚一

荷二擔此一著一、須レ還二筋力漢一、直向二空劫前一、㋕一刀成二兩段一、椎二殺老瞿曇一、翻二轉魔王面一、拋二下當頭熱鐵輪一、塵塵刹刹㋫風雷轉、既明レ如レ是復如レ是、白雲更有二無絲線一、華二倒諸方一歸去來、莫レ教三㋙觸二發流星箭一。

送二友人還一レ廣

相逢眼上各安レ眉、水遠山長彼此知、閑憶趙州曾㋓落節、臺山路上㋢勘レ婆歸。

瓦塔

要レ了二㋐耽源未了緣一、不二曾㋚引レ玉濫拋一レ磚、㋖湘南潭北無二人到一、落二在清溪淺水邊一。

㋭金粟。釋尊をいふ。

㋚少室衣。達磨の屈眴衣も潤色はない。

㋳可憐。佛光の道光を重んぜず、人の爲に說破せざるを重んず。

㋮與ロ爭明。どこへも消息が通ずる。

㋕一刀。般若の一刀。

㋫風雷轉。屋裏の緒餘は門外の露布に同じからず。

㋙觸發流星。流矢に當つて、深村草裏に蟠ることなかれ。

㋓落節。はめでをうつた。

亭山廟接待

堂前作舞呵呵笑、（ニ）餿飯知他欲餧誰、竆鬼又來爭漆桶、
看看（メ）鐘鼓送殘暉。

送秋澗歸西州

五載相從伴寂寥、（ミ）相携無奈路迢迢、
月明後夜重回首、（シ）又隔錢塘幾信潮。

送友歸建寧

通身拚得示條條、背負乾薪被火燒、（ユ）更借一機看豹變、
秋風又上洛陽橋。

送僧承天見（ヒ）退耕

（モ）入戸將何辨主賓、先看握土定千鈞、
絲毫有路休登陟、須信（セ）雙巖不立塵。

天童侍者

（エ）堪笑耽源著賊時、南陽忒殺（イ）棒頭危、（ロ）爭知碧沼青松外、
別（ヰ）放寒鷗不釣磯。

（テ）勘婆歸。婆婆が身代を引つさらへて取つて來た。
（ア）耽源。眞なり。
（サ）引玉亂拋磚。若し價を還さずんば、何ぞ眞僞を辨ぜん。
（キ）湘南。壽塔瞰頭。
（コ）餿、餧。餿はすゑろ、すゑた飯は佛光が處の犬も食はぬ。餧は飼に同じ。
（メ）鐘鼓。かかる賑賑はしき接待も、昏鐘と共に幕を引く。
（ミ）相携。同行したけれども路はろかなるをいかんせん。迢迢は「はろか」なり。
（シ）又隔。錢塘からおれの處まで、何程の寒潮を隔てて、閑夢長からん。信は深なり。
（ユ）更借。偸眼を開いて管孔の豹斑を見よ。
（ヒ）退耕。「ついかん」と讀む。名は德寧、靈隱に住す、無準に嗣ぐ、師と同參。

送ニ隱監寺一

楊岐門外滑如レ苔、(ニ)奪レ食驅レ耕與麼來、四七二三(ホ)無ニ路入一、
游山煙雨漲ニ蓬萊一。

大士開光明

撞牆磕壁證ニ圓通一、五蘊山頭鼓ニ黑風一、翻ニ轉面皮一開ニ天眼一、
不レ知(ヘ)眉底髑髏空。

悼ニ穎侍者一

(ト)芽生ニ舌上一髏生レ唇、呼喚聲中擲レ出レ門、拋ニ下髑髏一師子吼、
(チ)南陽一路少ニ行人一。

碧海

(リ)蕩蕩天開水鏡空、三千里外(ヌ)見ニ魚龍一、竿頭絲線不ニ相到一、
(ル)夜夜波心月似レ弓。

夢窓莊知客

屑詹關隔鎖ニ深幽一、透出虚明六不收、風暖(ヲ)化爲ニ蝴蝶一去、
雙雙(ワ)戲撲睡獅猴。

(モ)入戸。退耕の門戸に入つてなり。
(セ)雙峨。退耕山の山號か。
(ス)堪笑。叫殺、忠國師を訪ふの因緣。
(イ)棒頭危。二十棒にして趁ひ出した。
(ロ)爭知。ここに少し誤訛がある。
(ハ)放寒鶻。是れは龍子を生じたか、鳳兒を滅したか。
(ニ)奪食驅耕。嘗て耕夫の牛を驅つて飢人の食を奪ふ、苗稼益盛んに、長く飢虛を忘ず。
(ホ)無路入。佛も祖も入不得。
(ヘ)眉底髑髏。無邊の刹界も、おれが眼裡の點滴なり。
(ト)芽生舌上。之れが此の侍者の囊裡の穎錐じや。
(チ)南陽。國師三喚三應。
(リ)蕩蕩。平なる意、ゐんぺりと。
(ヌ)見魚龍。魚龍も蝦蟹もすき透つて見える。
(ル)夜夜波心。夜夜、月のみ此の

庵中與二老母一守レ歳

燈前殘藹 (カ)苦レ無レ多、　相對無言意澗、　(ヨ)一錯二路頭一巫峽遠、
(タ)三生煙冷舊磐陀。　風攪二長林一雪滿レ牀、　寒藤無レ葉倚二空桑一、　誰知戸破家殘處、
添得 (レ)黃粱客夢長。
(ソ)東山消息久茫茫、　累レ汝懷耽又一場、　樹樹老松寒照レ雪、
钁頭無レ口孰添レ鋼。

送三古田住二吉州祥府一

(ツ)盧陵米價又翻新、　令 (ネ)肅氷霜斷二要津一、　犬吠 (ナ)青原白家路、
(ラ)月明也有二醉歸人一。

送三伏 (ム)虎巖住二石霜一

出レ門便是草萋萋、　雨洗 (ウ)千年折鏃泥、　眨レ眼只論功蓋代、
何人猶聽五更鷄。
(ヰ)鑷人小徐生求
嘉汝從レ師藝亦精、　牽レ蘿伐二我 (ノ)雪髯髩一、　他年若遇二 (オ)青雲客一、

意を知る、故に特特として見舞に來る。
(ヲ)化。莊知客めが、ばけてなり。
(ワ)戯撲。故事は莊子にあり。
窓内の睡獼猴と窓前の蝴蝶と相撲をとらせる。
(カ)苦無多。餘命いくばくもなき母の身。
(ヨ)一錯路頭。猿の叫びを聞くについて、路を錯つて昔の巫峽や巴峽を遠方にし、母と歳を守る。
(タ)三生。南岳の三生岩、定めし舊遊の地ならん。
(レ)黃粱客夢。黃粱の一炊。隣でやき米を作る夢を見る。
(ソ)東山。東山の左邊底。
(ツ)盧陵。靑原志の因緣。古田の出處のよき米が出ると價が騰る。
(ネ)肅。ぞつとすることなり。要津を斷ずとは、川留めで、賀手を寄せつけぬ。

莫道曾逢垢面僧。

兵後、徐待詔求

世事興亡海上漚、　馬嘶荒草夕陽秋、　一聲彈鑷空三際、
留得青山對白頭。

分水嶺接待

建了精藍捺海塗、　寫成一幅似眞如、　要施摩詰搏香手、
不爲看山展畫圖。

戒犬

汝自耽耽擁砌莎、　任從客賊自經過、
門前不用頻頻吠、　將謂山僧有幾多。

漁樵耕牧

波濤險處見鰲身、　三寸鈎頭百萬鈞、　霹靂一聲天外去、
盲龜猶自隔重津。
末上還他腕力麁、　一肩擔荷更無餘、　黄梅七百閑枝葉、
依舊清風屬老盧。

(ナ)青原白家。青原は支那の酒の名產地、泉州といふところ、此の語は曹山錄にある「青原白家三盞酒云云」に原づきていふ、青原の酒家に三杯の名酒を飲みながら、尙ほ嘗めもせぬといふ意にて、富貴にして尙ほ其の身の不足を訴ふるは何事ぞとなり、この意を轉じてここに用ふるなり。

(ラ)月明。月明中に、又かかる米で造つた三杯の酒に醉ふて逝る人がある。

(ム)虎巖。淨伏、虛舟度に嗣ぐ、度は夢得通に、通は松源に嗣ぐ、徑山に住す、明極俊は師に嗣ぐ。

(ウ)千年折鏃、昔し李將軍も此處で鏃を損じ、自分も泥滑に蹉倒した。

(ヰ)鑷人。あたまそりなり。

(ノ)雪鬢。白髮頭なり。

(オ)青雲客。上方の雲の上人。

祖師心印(サ)鐵牛機、覆レ雨翻レ雲正此時、喜得衆生已成佛、
黃金殿上脫ニ簑衣一。
黃犢村村睡ニ暖煙一、風光高下接ニ平原一、桑麻晝永(キ)孤桐噎、
誰在ニ白雲青嶂邊一。

水簾谷

洞門晝夜不ニ曾關一、千尺(ユ)琉璃到レ地寒、中有ニ谷神呼得應一、
不下將ニ面目一與レ人看上。

(ヌ)天衣舊居

(モ)茅屋三間一釣船、是師當日舊生緣、(シ)烹金爐鞴無ニ今古一、
(ヱ)莫レ看秋風鴈字邊。

栽レ松

一寸青青一屈伸、只圖(ヒ)钁下起ニ龍鱗一、(モ)白頭入レ草渾相似、
不ニ是(セ)周家借レ宿人一。

題ニ(ス)巾峰一

雨後閑登塔院秋、下ニ看危磴一(イ)白雲浮、海門月出(ロ)舒ニ長嘯一、

(ク)彈鏘。鏘を彈じて、三世古今決算が出來た。
(ヤ)一幅。畫圖一幅。
(マ)摩詰。維摩居士を慕ふて、王摩詰といふ名畫人あり。
(ケ)山。分水嶺なり。
(フ)自。一本には自を目に作る。
(コ)耽耽。垂れ耳のこと。
(エ)霹靂。霹靂閃電光中、鰲を釣り去る。
(テ)擔荷。何でも荷ひ起した。
(ア)老盧。六祖大師なり。
(サ)鐵牛機。去れば印住し、住すれば印破す。
(キ)孤桐噎。絲績の聲、蕉桐琴の噎ぶが如し。
(ユ)琉璃。瀧のこと。
(ヌ)天衣。懷禪師。
(モ)茅屋。師は幼時、父に從つて漁す。
(シ)烹金。茅屋釣船が金爐火未だ冷えず。
(ヱ)莫看。師云く、譬へば雁の長

十萬人家盡擧レ頭。

㋩日者求二月斧號一

不レ待二寸鐵一快如レ風、　迥出陰陽造化功、　㋥信レ手一揮天地濶、

㋭廣寒宮殿百千重。

㋬梅　莊

㋣一回爛熟便登レ場、　㋠錯落黄金㋷透レ核香、

彈二破㋦老龐牙頰一後、　至レ今行旅㋸不レ賫レ糧。

鑄レ鐘

百鍊不二相干一、　騰身烈焔前、　騎レ聲蓋レ色漢、

㋾喪却髑髏邊。

傀儡

拍拍歌兮拍拍吹、　羅聲鼓韶不レ停レ搥、　寸絲牽著和レ棚動、

㋻一笑千金付二與誰一。

讀二㋕松源語一

一句無二前後一、　千差水㋵逆流、　機先打二獨脫一、

空を過ぐるが如し。

㋪鑁下。うゑおくこと。

㋲白頭。白い頭で草に入り、みみずの骨をふんだ男は昔の栽松道人に能く似た。

㋝周家。五祖大師なり。但だ鑁を借りて松を栽ゑんことを要す。

㋜巾峰。頭巾きたやうな山をいふ。

㋑白雲。いつも秋の白い雲がうかぶ。

㋺舒長嘯。藥山の緣あり。

㋩日者。天文者のことなり。

㋥信手。吳剛月中の桂を斬つて月光增す。

㋭廣寒宮。月のみやこ、廣寒淸虛の府。

㋬梅莊。うめのある下屋敷なり。

㋣一回。梅の實が。

㋠錯落。交加の貌。

㋷透核。よく熟したることとな

處處錯安レ頭。

月　居

通身都是廣寒宮、　寂寞樓臺閑幾重、　兎子夜挨門扇動、
可レ憐漏二泄我家風一。

煉丹道人

煉二得靈丹一妙入レ神、　紅爐傾出紫霞新、　爲レ君點作㊛眞空劑、
賣二與諸方㊑不病人一。

月　蓬

午夜撑レ船憶二謝郎一、　最㊐難二遮掩一是淸光、　一推推出乾坤外、
兩岸㊒蘆花白レ似レ霜。

休　復

黃閣簾開殺氣收、　盡驅二汗馬一㊓作二耕牛一、　刈二禾鎌子一如二風快一、
也有三將軍打二劍頭一。

獨　照

只這孤明何歷歷、　窮レ幽極レ暗發二光輝一、　更無三一法堪二遮障一、

り。

㊎老龐。龐居士、大梅常を訪ふの故事。

㊍不晉粮。能く萬劫の飢を消す。

㊌喪却。隻手の聲をきくと、三百六十の骨節骨節盡く失却し、八萬四千の毛竅毛竅共に喪盡す。

㊋一笑。厚面の佛光も一笑して。

㊊松源。崇岳なり。

㊉逆流。順行逆行、圓轉縱橫。

㊛眞空。眞空、喉を透ること難し。

㊑不病人。眼中に屑を添へて人には手渡すな。

㊐難遮掩。四方八面、遮瀾を絕す。

㊒蘆花。月明の中にあり。

㊓作耕牛。田地專ら成つた。

㊔天光。秋水與二長天一俱一色。

㊕標。標出なり。

白日青天十二時。

空極

一抹斜陽萬里秋、(ケ)天光長與レ水同流、欲レ(ラ)標三那裏為二疆界一、
(ム)鴈影回邊是盡頭。

(ウ)冷泉聽レ猿

萬里呉江萬里天、盡將ニ客恨一送ニ歸船一、一聲分作ニ三聲一了、
誰在ニ(中)巴山暮雨前一。

夢中作

百丈當年(ノ)捲起時、今朝㰅地自騰輝、火星迸出新羅外、
不レ在ニ(オ)東風著レ意吹一。

送ニ彛姪行脚一

千峯雪後望ニ江湖一、(ク)脚底龜紋轉較麤、(ヤ)破襪正愁無ニ線補一、
又還聞子上ニ京都一。

題レ虎

獨坐枯木巖、一嘯風悄悄、(マ)衆生界未レ空、(ケ)我心終不レ飽。

(ム)鴈影。雁影に於て、おれが涙の乾いた時に言ふて聞かせよう。

(ウ)冷泉。靈隱寺にあり。

(中)巴山暮雨。おれも知らぬ、是の音聲を認め得る者、試みに請ふ之を道へ。

(ノ)捲起。席を捲起した時。

(オ)東風。どこから來て、どこへ行つたやら。

(ク)脚底龜紋。老僧がひびあかぎれが一年ましに多い。

(ヤ)破襪。あかぎれを隱す破れ足袋のひもさへない。

(マ)衆生界。佛の三不能の中。

(ケ)我心。ここに二虎、口を開いてゐる。

(フ)重賞。無功の者は賞し、有功の者は罰せらる。

(コ)碎珊瑚。晋書の石崇傳にあり。

(エ)八陣圖。孔明の八陣圖。

(テ)寂寞。十年歸ることを得たり。

臨濟再參二黃檗一

㋫重賞功前見二勇夫一、鐵鞭高擧㋙碎二珊瑚一、如今欲レ問二當年事一、
鬼哭神號㋓八陣圖。

主賓依レ位

蟬鳴木葉動、日色弄二微明一、草舍路欲レ沒、山田稻半傾、
迎レ風當レ嶽立、倚レ杖看二雲行一、㋢寂寞㋐朱涇口、何人釣艇橫。

寒夜

誰復問二行藏一、塵懸破鉢囊、深灰㋚一點暖、寒谷萬株霜。

寄二象外淨頭一

壁根笤箒重千鈞、妙用縱橫不レ動レ塵、屈レ指威音到二彌勒一、
阿誰堪レ上二㋖糞箕脣一。

無象

太平不レ用斬二癡頑一、鷄犬聲中白晝閒、四海只知天子貴、
㋴不レ知天子作二何顏一。

梅堂

㋐朱涇口。船子の渡子と作りし處、朱水、涇水なり。

㋚一點暖。深く深くはらへば、一點暖なり。

㋖糞箕脣。塵取なり。何を拂つてちりとりに上す。

㋴不知。無象和尚に子細に參ぜよ。

㋱氷霜。是れ一番寒、骨に徹せす。

㋯雪裏。分ち難きは雪裏の梅、辨じ難きは煤中の墨。

㋛不干春。七佛以前は四時春色。

㋽長異苗。家業を富ます。

㋪後代。後代は兒孫、前代は先祖。

㋲南堀。其の子を見て其の父を知る。

㋝白雲菴。行狀の中にあり、邑の宰羅季莊、東湖の白雲菴を以て招く、師移りて母を食ふ、居ること七年、母亡す。

(ヌ)氷霜直與レ死爲レ憐、　(ル)雪裏何人認得親、　壁倒籬坍君自看、
灼然花綻(シ)不レ干レ春。

存耕

深深耕墾在二今朝一、　貴在三他年(エ)長二異苗一、
(ヒ)後代不レ知前代力、　却言(モ)南壠自肥饒。

(セ)白雲庵居咄咄歌

描不レ成兮畫不レ成、　白雲影裏又新正、　寒巖殘雪消將レ盡、
靈草無レ人(ス)滿地青。
參禪(イ)不レ識主人翁、　(ロ)癡拙無三人在二下風一、　一曲村歌爲レ誰發、
海天空闊(ハ)有二孤鴻一。
撈二得文殊一下二五臺一、　滿身風雪(ニ)幾千回、　灼然不レ負平生眼、
古廟香爐上二綠苔一。
刮二盡毛一兮折二盡皮一、　骨頭迥迥任二風吹一、　(ホ)蕭墻禍起憑レ誰救、
撒二手傍邊一獨自歸。
破屋修然(ヘ)萬境忘、　十年松下一藜牀、　不レ知佛法今(ト)何似、

(ス)滿地青。誰か鼠に象牙を拔いて、滿地青し。
(イ)不識。主となることは今はやめた。
(ロ)癡拙。百不知百不能。
(ハ)有孤鴻。村歌の和韻をする。
(ニ)幾千回。しらが頭を何べん開帳するやら。
(ホ)蕭墻。異類中行がここでないと。
(ヘ)萬境忘。無喜無瞋。
(ト)何似。脊が短くて云へぬ。
(チ)蘿蔔。此の調、黄絹幼婦じや。
(リ)可深酬。兎角、産業を沒却して年貢を入れよ。
(ヌ)淸風。方に知る吾に辜負すと。
(ル)禁足安居。高高たる處、之を仰げば足らず、深深たる處、之を見れば餘りあり。
(ヲ)羚羊。子は父の爲に隱し、父は子の爲に隱す。
(ワ)不勞更彫琢。本自天然、何假。

露柱從他自放レ光。
㋠蘿蔔拈來憶二趙州一、不レ知將レ底㋷可二深酬一、偶將二丈子一敲二松樹一、
浩浩㋦清風起二樹頭一。
㋸禁足安居誰似レ我。長松雨過綠陰重、莫レ言圓覺伽藍小、
掛レ角㋾羚羊不レ露レ蹤。
㋻不レ勞更彫琢、本體自天然、懸崖機路絕、枯木夜啼㋕猨、
揭地風雷㋵日月奔、塵沙海口一齊昏、快哉㋟臨濟辭二黃檗一、
三頓烏藤㋹贈出レ門。
千山風雪偃二孤蹤一、回レ首㋞西天路不レ通、憶着㋡普通年遠事、
老猿啼上㋥最高峰。
浩浩叢林擊㋤法雷、白雲燒レ葉擁二寒灰一、三更滴盡茅簷雨、
引二得燈籠一笑口開。
守二盡今宵一是一陽、㋶飯羅無底可憐生、風流出格誰相肖、
月下㋰撐レ船有二謝郎一。
一衲蒙頭息二萬機一、家風凄冷客蹤希、當レ門撞破蜘蛛網、
獨有二春深燕子歸一。

彫琢」の古語より出づ。
㋕猨。猿に同じ。
㋵日月奔。日月光を沈め、乾坤色を失す。
㋟臨濟辭黃檗。子は父に負き、父は子に辜く。
㋹贈出門。待ちなさい、未だ言ひ殘したことがある。
㋞西天路不通。佛も祖も路が斷つてゐる。
㋡普通年遠事。達磨西來のこと。
㋥最高峰。最高峯高うして人見えず、猿啼白日又黃昏じや。
㋤法雷。諸方は賑はしい。
㋶飯羅無底。めしざるに底がないので。
㋰撐船。蜆を撈し蝦を弄す。

(ウ)烏藤突兀冷粘レ雲、貴爾無レ慚(ヰ)道用襯、只合ニ横レ肩入レ深去一、
莫下留ニ影跡一礙中行人上。
破瓶頸短嘴何長、松火微鳴野菜香、畢竟不レ堪ニ(オ)爲レ世獻一、(ノ)幾回提撥可憐生。
(ヤ)衆毒交横日夜煎、法身病在ニ色身前一、(マ)藥翻ニ沙銚一成ニ狼藉一、火亂灰飛落ニ枕邊一。
黄皮裹レ骨露ニ深坳一、(カ)木落山空病轉(ク)聱、
醫不レ得時(コ)誰下レ手、從他突兀拄ニ青霄一。
三喚何曾拔ニ一毛一、三應無レ地レ著ニ秋毫一、就レ中曲直誰分辨、
雨過秋山露ニ石凹一。
未レ言ニ爺諱一(エ)膽先寒、擬ニ欲遮藏一沒レ處レ安。
不レ用西風苦爭戰、白蘋紅蓼自分攤。
(テ)選佛高科貴レ識レ空、誰云無ニ電不レ乘レ龍、
(ア)道吾不レ負ニ(サ)雲巖問一、掙ニ得身一行ニ異類中一。
門掩ニ長林一雪攬レ空、生柴燒火泣ニ寒蟲一、因思達磨(キ)當門齒、
打落神州赤縣東。
黄泥黏レ钁雨初晴、石上開敲一兩聲、(コ)澗底沙禽忽飛出、

(ウ)烏藤突兀。山形となり、雲影となる。
(ヰ)道用襯。扶過ニ斷橋水一、伴歸ニ無月村一。
(ヱ)破。異本「砂」に作る。
(オ)爲世獻。門外には出し惡い家私じや。
(ノ)幾回提撥。只だ氣の毒なことには、淨瓶の水ね出し手がない。
(ヤ)衆毒。砒霜、狼毒など。
(マ)藥翻。急急に須らく回避すべし。
(カ)木落。やせかれて。
(ク)聱。強情なるをいふ。
(コ)誰下手。換骨の靈方にて。

對レ人如レ喜又如レ驚。
(ヌ)蒐魁種得大如レ拳、　不レ怕深冬百衲穿、　火冷雲深消息絕、
(ミ)從教黃葉滿二堦前一。
住山活計苦無レ多、　試問時人會也麼、　白日豺狼趂二麋鹿一、
青霄鬼魅出二煙蘿一、　秋來老竹添二新笋一、　雨後長松墮二爛柯一、
每自興來歌二一曲一、　不レ知(シ)濟北起二寒波一。
閑思(ユ)鍋竈幾千般、　燈盞無レ油紙燃乾、　坐到二三更一室生レ白、
壁邊主丈照レ人寒。
(ヒ)今歲强於二去歲一多、　冷灰隨レ分展二陽和一、　壓レ頭老瓦雖レ無レ幾、
更(モ)剪二長條一引二薜蘿一。
呼レ童芟レ草小窻前、　雨歇黃泥軟レ似レ綿、　不レ覺觸二他蚯蚓一怒、
迅機顚蹶欲レ翻レ天。
不レ依二本分一要二參禪一、　錯把二(セ)封皮一作二信傳一、　不レ識(ス)東山左邊底、
也能著レ屐上二旛竿一。

竹屋

(エ)贈先寒。禪林霞却す。
(テ)選佛高科。心空及第して始めて得べし。
(ア)道吾。眞なり。
(サ)雲巖。晟なり。
(キ)當門齒。鉄齒の故事
(コ)澗底沙禽。鐵壁に驚いて鳥が飛んで出た。
(ヌ)蒐。「やまいも」のことなり。
(ミ)從教。閑人のために生業を擧する意もない。
(シ)濟北。諸方の佛法浩浩たり。
(ユ)鍋竈。鍋釜に大小あり、竈口に曲道あり。
(ヒ)今歲。去年猶ほ卓錐の地あり。
(モ)剪長條。邪魔になる枝を剪る。
(セ)封皮。上書きばかり。
(ス)東山左邊底。五祖法演禪師の故事、東山は師の作庵地。
(イ)交參。朝參暮參。
(ロ)萬里。脚前脚後淸風。

葉葉氷霜動二四維一、　(イ)交參那貴著レ鞭遲、

目前不レ解推レ門入、　(ロ)萬里清風付二與誰一。

梅巖

千歲孤根石一拳、　預將二消息一報二春前一、　工夫不レ到二氷霜外一、　莫レ說吾家(ハ)主丈邊。

(ハ)主丈邊。紛紛として多くは中途の中にあり。

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷二終

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷三

住日本國相州巨福山建長興國禪寺語錄

侍者　㋑德溫　等編

日本國副元帥平　㋺時宗請帖　〔見存圓覺〕

時宗、意を宗乘に留むること積んで年序有り。梵苑を建營し、緇流を安止す。但だ時宗毎に憶ふ、樹は其の根有り、水は其の源有りと。是を以て宋朝の名勝を請じて、此の道を助行せんと欲し、㋩詮・英二兄を煩す。鯨波の險阻を憚ること莫く、俊傑を誘引して、本國に歸り來るを望と爲す而已。不宣。

㋥弘安元年戊寅十二月二十三日

時宗和南

詮藏主禪師

英典座禪師

㋑德溫。もと蘭溪の徒弟なり。

㋺時宗。北條時頼の子、相模太郎、法名は道果、法光寺殿と稱す、北條八代の執權なり、弘安七年薨ず、年三十四。

㋩詮英。皆蘭溪の徒弟なり。

㋥弘安元年。南宋の帝昺祥興元年、元の世祖至元十五年なり。

㋭師、大宋國天童山景德禪寺に在つて受請す。辭衆上堂、天童㋬環谿和尙、衣を付し罷んで、師、衣を拈起して云く、「世尊、金襴を傳ふる外、別に箇の甚麼をか傳ふ。」手を以て指して云く、「師兄が過儞に在り、殃我れに及ぶ。」遂に座に就く。時に僧有り、出でて問うて曰く、「動くことは行雲の若く、止まることは猶ほ谷神の如し。既に彼此に心無し、豈に去來に象有らんや。今日和尙遠く扶桑に赴く、且く道へ有心か無心か。」師云く、「一片の月海に生ずれば、幾家の人か樓に上る。」進んで云く、「和尙、大唐東山の宗旨を將つて徒に示す、今扶桑に往いて、何の方便をか作さん。」師云く、「儞海を隔てて聽取せよ。」進んで云く、「但だ扶桑・雨露を承くるのみに非ず、大唐國裏も亦恩に霑ふ。」師云く、「將に謂へり人無しと。」

師乃ち云く、「祖師海を逾え漠を越えて中華に至る、大法の傳ふ可き有り。今日日本の平將軍、遠く山僧を招く。山僧知らず何の巴鼻か有る。」良久して、大衆を顧視して云く、「所以に道ふ、羽嘉應龍を生じ、應龍鳳凰を生ず、鳳凰衆羽を生ず。但だ看よ雲駛して月運ることを。說くこと莫れ舟行いて岸移ると。諸人若し也た會得せば、朝々相見、其れ或は未だ然らずんば、遠く孤帆を引いて依戀に勝へず。」

㋭師。これより先き四年、南宋の恭宗、德祐元年、亂を溫州の能仁に避く、明年、兵溫の境を壓す、寺衆皆逃竄す、師獨り禪坐す、虜會刃を以て頸に加ふ、神色變ぜず、師、偈を說いて曰く、「乾坤無レ地卓ニ孤筇一、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬ニ春風一」と。群虜慚謝して去ると その翌載四明に歸つて、一環溪を天童に訪ふ、溪留めて前版に居らしめ、衆の爲に說法せしむ。

㋬環谿。一無準に嗣ぐ。

今朝宿鷺亭前の客、明日結座、世路艱危にして故人に別る、相看手を握つて頻なることを知らず。扶桑國裏の雲。

山門疏

日本國建長禪寺本寺住持、見に闕く、㋣大將軍元帥の鈞命を奉り、恭しく太白首座前眞如和尚を請じて、開堂演法せしむる者なり。

右伏して以れば、此土大乘の器有り、老胡廼ち西より來る。我が國闡提の人無し、聖教東に漸流し去る。白叟黄童咸く淘汰に歸す。重臣世主、力めて咨參を爲す。端に導師を請じて、遠く勤命を將つて、共しく惟れば、新命堂頭和尚大禪師、氣佛祖を呑み、眼乾坤を蓋ふ。㋠圓照向上の關を透る。芝溪水千尋浪激す、環谿の第一座を分つ。曇華室萬仭墻高し、日本の爲に司南車と作る。盡大地成佛の分有り、建長に向つて濟北の道を弘む。阿那箇か命根を斷ぜざる、蘭槳江皐に近し、卽ち誠を開士に傾く。金颺秋履に生じ、徑に望を將軍に慰す。正令全提せば、輿情胥悦ばん。

今月　日　山門疏

知事比丘　禪

㋣大將軍、これは鎌倉には惟康親王將軍たり。
㋠圓照、無準の塔名なり。

江湖疏

江湖恭しく審にす　前住眞如無學和尚、日本巨福名山建長禪寺虔請の命に榮赴して、大いに家風を振ひ、益正續を隆にす。詞を合して勸勉する者なり。

右伏して以れば、日本國、佛法に尊事し、以て聲を馳するに足れり。(リ)平將軍家風を嚴肅す、特に爲に主を請ず、大いに四明の開士を以てす。偉いなる哉巨福の叢林、明社輝を增し、宗門慶多し。龔しく惟みれば新命巨福名山建長寺無學和尚、道、人天に冠らしめ、行氷雪を欺く。靈隱。(ヌ)長庚の半座に據り、圓照北礀の全機を起す。台山を拂袖す。未だ礀陸に(ル)考槃することを許さず、機を宿鷺に忘る、豈に園林に坦腹すべけんや。半天の帆藁風に展ぶるを看る、萬里の波夜月を搖すを咲ふ。權聲道を載せ、衣冠人物競つて奔迎し、瑞氣空に凝る、海岳神靈倶に擁衞す。時々授道、處々度生。慧日を中天に掲げ、慈風を大地に扇ぐ。故園の松菊恙無し。應に佳音を寄すべし。晩學衣盂未だ承けず、當に回馭を觀ずべし。謹疏。

今月　日　　江湖比丘　等

普明　克明　定燦　修義　大章　清曉　師夔　慧鏡　淨因　了坤　法通　梵志

(リ)平將軍。北條家は平氏なり。
(ヌ)長庚。天童山をいふ。
(ル)考槃。考は成なり、槃は樂なり。詩經衛風に「考レ槃在レ澗」とあり。

如濟　悟慈　覺心　正心　惟一　聞思　可信　了樞　正玖　宗建　智祥　處恭

(ヲ)弘安二年八月二十一日入院。

山門を指して云く、「兎走り烏飛び、山高く水急なり。一歩相(ワ)到らず、手を把つて挽けども入らず。」

佛殿を指して云く、「釋迦・地藏、(カ)曲を拗して直と作す。今朝狹路に相逢ふ、從頭勘過して始めて得ん。」良久しく云く、「將に謂へり侯白と、元是れ侯黑。」

據室、云く、「大冶の紅爐(ヨ)蚊蚋を容れず。一鎚の下に飜身せば、方に(タ)金毛の獅子を見ん。」

拈箚、箚を呈起して云く、「山僧平日、(レ)木槵子を將つて、天下の人の眼睛に換卻す、今日甚に因つてか卻つて這箇に鼻孔を穿卻せらる。大衆會すや。鞍を負ひ鐵を銜む、方に對頭に遇ふ。」

山門の疏を拈じて云く、「木を擊てば聲無し、空を敲けば響を作す。海濶く山遙に、風高く月冷し。」

江湖の疏を拈じて云く、「(ソ)毀也毀盡し、(ツ)讃也讃盡す。(ネ)佛殿に東司を掘り、茅屋に鴟吻を安す。」

(ヲ)弘安二年。この年五月、天童を離れ、六月日本の太宰府に著く。
(ワ)不倒。親しきものは到らず、到るものは親しからず。
(カ)拗曲。いろいろせわをしてなり。
(ヨ)蚊蚋。大いに蚊蟲、手脚を使す。
(タ)金毛。丈夫の漢の意。
(レ)木槵子。菩提樹の實なり、多くは數珠の珠とす。
(ソ)毀也。惡を以て惡を遣る。
(ツ)讃也。善を以て善を拔く。
(ネ)佛殿。金屎、光を交ふ。

法座を指して云く、「身は虚空に等しく、座は虚空に等し。」良久して云く、「鶴に九皐有り、翼を(ナ)翥げ難く、馬に千里無く、謾に追風す。」驟歩して登座す。祝聖拈香して云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に祝延したてまつる。今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭しく願はくは日の明かなるが如く、天の普きが如し。九州共貫、(ラ)有截の區を幷包す。(ム)三景同光、無疆の祚を申べ錫はんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、仰いで(ウ)大將軍都元帥國公を祝す。(ヰ)祿算を資伏して願はくは福は大地の春の如く、壽は劫石の固きに同じ。倍し、永く邦家を祚せんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、仰いで(ノ)相模太守都總管を祝し、伏して願はくは福、滄海に同じく、壽、須彌に等しく、長く佛法の(オ)金湯と爲り、永く皇家の柱石と作らんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香、懷にし來ること三十餘年、未だ嘗て容易に拈出せず。爐中に爇向して、前住大宋國徑山佛鑑禪師(ク)無準大和尚に供養す。用つて法乳の恩に酬いたてまつる。」

師、衣を斂めて座に就き、索話、「垂絲千尺意深潭に在り、鈎を離れて三寸、道ひ得ること莫しや。」僧問ふ、「平生自ら笑ふ閑なること能はず、迢遞として來登す巨福山、只だ少林の無孔笛を把つ

(ナ)翥。窮屈で氣がつまる。
(ラ)有截。封疆のこと。
(ム)三景。日月星、是れなり。
(ウ)大將軍。惟康親王をいふ。
(ヰ)祿算。壽命のこと。
(ノ)相模太守。北條時宗公なり。
(オ)金湯。金城湯池なり、攻むべからざるをいふ。
(ク)無準。師範、破庵先に嗣ぐ。

て、聲聲吹き出せ萬年歡。學人上來、請ふ師祝聖。」師云く、「㋳南嶽峯頭八字の碑。」僧云く、「未だ宋朝を離れず、已に扶桑に到る。如何なるか是れ不動尊。」師云く、「五月太白を離れ、八月建長に到る。」僧云く、「既に扶桑に到る、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「銅沙羅裏の滿盛油。」僧云く、「記得す、寶壽開堂、三聖、一僧を推し出す、此の意如何。」師云く、「書に據つて客を請ず。」僧云く、「寶壽便ち打つ、又作麼生。」師云く、「家貧にして素食を辨じ難し。」僧云く、「只だ三聖道ふが如き、與麼に人の爲にせば、但だ這の僧の眼を瞎却するのみに非ず、鎮州一城の人の眼を瞎却し去ること在らんと。意作麼生。」師云く、「怪むこと莫れ、坐來頻に酒を勸むることを、別れてより後君を見ること稀ならん。」僧云く、「只だ寶壽拄杖を擲下して、便ち方丈に歸るが如き、又作麼生。」師云く、「一場の狼藉。」僧云く、「且く道へ、今日堂頭和尚、開堂演法、還つて爲人の處有りや也た無や。」師云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ和尚爲人の處。」師云く、「虎を射る眞ならざれば、徒に羽を沒するに勞す。」僧云く、「只だ　相模の太守、和尚を請じて名山を坐鎭せしむるが如きんば、畢竟何の祥瑞か有らん。」師云く、「九包瑞彩を呈し、獨角滄溟を出す。」僧云く、「還つて學人が讃嘆を許さんや也た無や。」師云く、「何の不可か有らん。」僧云く、「近水樓臺先づ月を得、向陽の華木春に逢ひ易し。」師云く、「一半を道ひ得たり。」僧禮拜す。師乃ち云く、「我が法㋮印、世間を利益せんと欲するが爲の故に說く、在所遊方、妄に宣傳すること勿れ　釋迦老子、

㋳南嶽。夏の禹の碑あり。
㋮印。去れば印住し、住すれば印破す。

此の印を將つて摩訶大迦葉に付囑し、摩迦大迦葉二十餘傳して菩提達磨に至り、菩提達磨二十餘傳して此に至る。」大衆を顧視す。良久して云く、「山僧未だ大唐を離れざる已前、將に謂へり日本の衲僧白日に燈を點じ、鹽を將つて渴を止むと。到來するに及んで、箇箇眼横鼻直、人人立地頂天。山僧當初也た㋕如何若何と要す。㋡此に到つて一場の懡㦬、只だ便ち此の印を將つて諸人と一印に印定することを得。更に敢て一絲毫許りを移易せず、甚としてか此の如くなる。」卓拄杖一下して云く、「秋高うして天影直く、海濶うして浪に聲無し。」復た擧す、㋙白侍郎、㋓鵲巢和尙に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」巢云く、「諸惡莫作衆善奉行。」白云く、「三歲の孩兒も也た道ひ得たり。」巢云く、「八十の老翁も行不得。」白、省有り。師拈じて云く、「鵲巢の用處、龍王宮殿の千波萬浪の外に在るが如し。若し白侍郎、海に航し山に梯するに非ずんば、鎭海の明珠、爭か國に到ることを得ん。然り是の如くなりと雖も、我れを笑ふ者は多く、我れを哂ける者は少し。」

當晩小參、僧問ふ、「鐘已に鳴り鼓已に絕え、人天普集龍象交參す、正與麼の時、請ふ師提唱。」師云く、「㋢八角の磨盤空裏に走る。」僧云く、「記得す。德山小參、答話せず、意旨如何。」師云く、「舌頭、地に拕く。」僧云く、「趙州小參、却つて答話す。又作麼生。」師云く、「參天の荊棘。」僧云く、「二大老の如き

㋕如何若何。どうかと怪んだ。
㋡到此。日本に來て顏が赤くなつた。
㋙白侍郎。樂天居士のこと。
㋓鵲巢。鳥窠和尙をいふ。
㋢八角磨盤。前に出づ。磨盤は石臼なり、石臼も圓なれば轉ぜざるにはあらねども、八角にては轉じ難し、然るに空裏を走るといふのは。

一人は答話し、一人は答話せず、意何くにか在る。」師云く、「㋐針箚不入。」僧云く、「且く道へ、答者是か不答者是か。」師云く、「黄河連底の凍。」僧云く、「和尚今夜小參、是れ答話せんか答話せざらんか。」師云く、「已に是れ㋑龜毛長きこと三尺。」僧云く、「㋒樵子の徑に因らずんば、爭か葛洪が家に到らん。」僧禮拜す。師云く、「未だ敢て相許さず。」師乃ち横に主丈を按じ、大衆を顧視して云く、「與麼に來る者も鐵壁鐵壁。不與麼に來る者も㋓鐵壁鐵壁。兩重の關を透得するも、鐵壁復た鐵壁。㋔儞に饒す須彌頂上、金鐘を撃ち、娑竭宮中日月を看ることを。諸方㋕明窓下に按排せば、老僧一棒も也た恕すこと得ず。所以に道ふ、直に盡乾坤大地、纖毫の過患無きことを得るも、猶ほ是れ轉句、一色を見ざるも、始めて是れ半提。㋖全提の時節を見んと要すや。」卓拄杖して云く、「鐵壁鐵壁。」復た擧す、僧、曹山に問ふ、「璞を抱いて師に投ず、請ふ師雕琢。」山云く、「雕琢せず。」僧云く、「甚と爲てか雕琢せざる。」山云く、「須らく信ず可し、曹山好手。」師拈じて云く、「曹山好手、不合に重ねて註脚を下す。山僧に璞を抱いて師に投ず、乞ふ師雕琢せよと問ふこと有らば、棒を喫せしめ了つて、連夜趕ひ出して、三十年後、㋗足を刖るの歎を興すことを免れん。」

㋐針箚不入。本分の地には針を入るるの餘地なし。
㋑龜毛。龜には元來毛なし。
㋒樵子。樵の通ふ險路を通らねば、思ふ人には逢へぬ。
㋓鐵壁。攀ぢ登ることできぬをいふ、難關難關。
㋔儞。從上の鐵壁が見えると。
㋕明窓。明窓下に古教照心するの義。
㋖全提。全分提示なり。
㋗刖足の歎。今日、頭であるくやうな坊主はあるまい。

上堂、㋪快人の一言、快馬の一鞭、便ち恁麽に去るも、此土西天。豈に見ずや、華嚴會上、善財童子、五十餘員の善知識に參ず。末後に毘盧樓閣の前に到つて、方に念を斂めて聞く。彌勒彈指すれば、樓閣門開いて、善財入ることを得、入り已つて還つて閉づ。一歩を移して不可說不可說、微塵の佛刹を過ぎ、無量無邊の智慧海、無量無邊の解脫門、無量無邊の㋲光明藏、無量無邊の福德聚を見る。又塵塵彌勒、刹刹善財なることを見る。彌勒復た云く、「善男子、法性を起すこと是の如し。」善財、兩眼を豁開して睡夢の覺むるが如し。從前の所證、所悟底、一場の㋝懡㦬、能證能悟底、亦消息無し。便ち見る黄金と泥土と同價、古佛と白牯と同參なることを。山僧、只だ諸人一塵を撥せず、一念を動せず、便ち與麽に荷擔し將ち去つて、庶はくは今日遠く毛手を伸ぶるに辜かざらんことを。

重陽上堂、重陽九日菊華新なり、高く青㋜帘を揭げて遠賓を接す。又覺ゆ晩來風色の好きことを、知らず落帽是れ何人ぞ。

上堂、「意能く句を剗り、句能く意を剗る。意句交馳するも萬里に㋑横屍す。昨日風黄河に起り、今日馬青塞に嘶く。盡く道ふ㋺拔山力盡くと。灼然として功、三分を蓋ふ、大衆還つて老僧敗闕の處を知るや。」拂子を擊つて云く、「咄、亂世英雄少く、太平奸賊多し。」

㋪快人一言。快人は一言にして人を感ぜしめ、快馬は一鞭にして能く走るの意。

㋲光明藏。自己の本心。

㋝懡㦬。「はぢ」なり。

㋜帘。幕・はたのるゐなり。

㋑横屍。死人ばかり。

㋺拔山力盡。兵糧ぎれがしたと。

上堂、「再び釣竿を整へて水月明かなり、再び探る波底有無の情。」良久して云く、「六鰲一擧す三山の曉、潮千江に落ちて四海鳴る。」

上堂、馬祖陞堂、百丈捲席。藕絲竅裏、大鵬に騎る、九萬里の風一息と作す。南兮北兮、荒草天に連る、古兮今兮、誰か荊棘を剪る。

開爐上堂、僧問ふ、「記得す、大潙、百丈に侍立する次で、夜深けぬ。丈云く、『看よ爐中火在ること有りや也た無や、』此の意如何。」師云く、「夜深けて火を撥ふ、也た是れ尋常。」進んで云く、「潙、撥つて云く、『無し』と。又作麼生。」師云く、「他に許す半隻眼を具することを。」進んで云く、「丈躬ら爐に至り、深く撥つて火を得ること少し許。夾起して之を示し、『儞無しと道ふ、這箇、㋬聻』と。」師云く、「㊁螢火の光拈出するに勞せず。」進んで云く、「潙、豁然大悟、聻。」師云く、「㋭失脚して黃泉に陷る。」進んで云く、「後又百丈に侍して行く次で、丈云く、『火を帶得し來るや、』意何にか在る。」師云く、「見を憐んで醜きことを覺えず。」進んで云く、「潙云く、『帶得し來る。』丈云く、『火什麼の處にか在る。』潙、一莖柴を拈起し、三吹して百丈に度與す、又作麼生。」師云く、「虛の多からんより、如かじ實の少からんには。」進んで云く、「百丈道く、『蟲の木を禦むが如し。』且く道へ、他を肯ずるや、他を肯ぜざるや。」師云く、「轉た醜拙を見す。」進んで云く、「和尚今日開爐、還つて這箇有りや、也た無や。」師

㋬聻。「それ見よ」「それだ」のゐなり。
㊁螢火。貧なる讀書は。
㋭失脚。汝命得せば地獄に入ること箭の如し。

云く、「也た只だ常の如し。」進んで云く、「試に學人が撥ひ看ることを聽さんや。」師云く、「松炭嗶嗶、面孔を照顧す。」進んで云く、「寒爐初めて焔を發し、煖氣人に逼つて多し。」師云く、「儞我れを嚇すこと莫れ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「簇出玲瓏面面紅なり、滿堂の衲子(ヘ)春風に坐す。東山山下人の到る無し、火冷しく雲深うして祖翁を憶ふ。」

達磨忌上堂。僧問ふ、「達磨、梁の武帝に見ゆ。帝云く、『如何なるか是れ聖諦第一義。』祖云く、『廓然無聖。』此の意如何。」師云く、「黄金糞土の如し。」進んで云く、「帝云く、『朕に對する者は誰そ。』祖云く、『不識。』又作麼生。」師云く、「賊は貧家を打せず。」進んで云く、「帝契はず。祖直に少林に往いて、終日冷坐す、又且つ如何。」師云く、「(ト)梁生つて節を招く。」進んで云く、「既に是れ不生不滅、甚に因つてか熊耳峯に葬る。」師云く、「儞(チ)亂統すること莫れ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「記得す、吾が祖、將に示寂せんとする時、門人をして各所解を呈せしむ。道副云く、『我が所見の如きは、文字を執せず、文字を離れざるを道用と爲す。』祖云く、『汝吾が皮を得たり。』尼總持云く、『我が所解、(り)慶喜の阿閦佛國を見て、一見して更に再見せざるが如し。』祖云く、『汝吾が肉を得たり。』道育云く、『四大本空、五陰有に非ず、而も我が見處、實に一法の情に當る無し。』祖云く、『汝吾が骨を得たり。』……」師良久して云く、「祖翁已に去つて千年、鸞膠(ヌ)斷絃を接ぎ難し。」手を擧して云く。

(ヘ)坐春風。暖かなる樣子じや。
(ト)梁生。的が出來たら、箭、射る、これは老胡の性命。
(チ)莫亂統。此の事は樗蒲に似たり。
(り)慶喜。阿難尊者をいふ。
(ヌ)難接斷絃。知音がない。

「和する者は㋸一臂斷却す、汝等諸人什麽を將つてか飯を喫せん。」

達磨忌拈香、「咄、者の老胡、當門齒缺く、蕭梁の武帝投機せず。可師空しく立つ庭前の雪、一華五葉兮鳥焉馬と成る。㋾二十七傳兮龜を證して鱉と作す。絲毫も間つること無きも、天地懸絶す。」大衆を召して、手を以て斫額して云く、「翩翩たる隻影擬へども何にか從はん、㋻一回水を飲み一回噎ぶ。」

上堂、「葉落ち根に歸し、萬物皆蟄す。我が衲僧家、蒲團頭上、㋕正定に入れば、須彌頂上、定より起たん。須彌頂上、正定に入れば、百草頭邊、定より起たん。百草頭邊、正定に入れば、拄杖頭上、定より起つ。」拄杖を拈起して、喝一喝して云く、「㋵揑怪することを得ざれ。」

上堂、山僧夜來、些の麤禪を捘んで大衆を供養せんことを擬欲し、百般思量し、千樣計較攪得して、大地震動し、海水波を飜すとも、一句も也た思量し來らず。禪床角上に撥到して、直に得たり言の對すべきなく、理の伸ぶべきなきことを。只だ一場の懡㦬を成して、㋟大衆の鶴望に辜くこと有り、諸人且く相怪むこと莫れ。

㋹長樂一翁を證據する上堂、如來の正法眼、今に非ず亦古に非ず、父子親しく不傳、千歲密に相

㋸一臂斷却。諸老の門庭を敲破して語言三昧が能く手に入らねば此の調は出來ぬ。

㋾二十七傳。佛光に至りて。

㋻一回飲水。獨り建長、ここで水か呑むことは許すが、小便はならぬ。

㋕正定。止定なり。

㋵揑怪。奇怪を提弄するの義。

㋟大衆鶴望。へんてつもない響應じや。

㋹長樂一翁。名は院豪、寛元中、宋に入り、徑山に登り、無準に參じ、歸朝して上野の長樂に住す、弘安四年八月寂す、佛光に嗣ぐ。

付す。香嚴撃竹の偈、幾人か錯つて指注す。昨朝長樂に問ふ、直答賸語無し、人の白晝に行くが如く、火炬を將ふることを用ひず。又香象王の如く、鐵鎖を擺壞し去る。摩醯正眼開き、大いに㋨塗毒鼓を撾ち、普く大衆に告げて知らしめ、偈を說いて證據を作す。公驗甚だ分明、鵝王自ら乳を擇ぶ。

冬至小參、「一冬二冬、歲盡き年窮り、㋡化工密に運り、消息潛に通ず。諸人還つて會すや。若し也た會せずんば、山僧解注すること一遍せん。這箇之を㋧隨波逐浪の句と謂ふ。又之を㋤函蓋乾坤の句と謂ふ。又之を百味具足の句と謂ふ。又之を㋶截斷衆流の句と謂ふ。諸人若し也た會得せば、暖幽谷に生ず。若し也た會せずんば、凍寒潭を鎖す。」復た擧す、「僧、睦州に問ふ、『一重を以て一重を去ることは則ち問はず、一重を以て一重を去らざる時如何。』州云く、『昨日茄子を栽ゑ、今日冬瓜を種う』と。」師拈じて云く、「或は人有り、建長に一重を以て一重を去ることは則ち問はず、一重を以て一重を去らざる時如何と問はば、劈脊に便ち打たん。錮鏴上豈に鐵を添ふべけんや。」

冬節上堂、「獨り沙頭に立つて故人を望む、故人元是れ去年の春。」拄杖を拈じて云く、「吾れに隨つて拄杖三島に歸り、胡馬空しく嘶ゆ塞北の雲。」

㋨塗毒鼓。如來眞實の說法に喩ふ。

㋡化工。斗轉じ天旋つて、未だ眨眼を容さず。

㋧隨波。師家の隨機の手段をいふ、以下雲門の三句。

㋤函蓋。函は「はこ」、蓋は「ふた」、函と蓋とは相契合して、少しも間隙なき意を取る、師弟の機々相合するをいふ。

㋶截斷。衆流は煩惱、一切の煩惱を截斷すること。

書記藏主を謝する上堂。擧す、古へ僧有り、經堂の中に在つて坐す。藏主云く、「如何ぞ看經せざる。」僧云く、「字を識らず。」主云く、「何ぞ人に問はざる。」僧叉手して云く、「是れ什麼の字ぞ。」主無語。師云く、「我れ當初若し藏主と作らば、只だ他に向つて道はん、去つて書記に問へと。這の僧眼子若し活せば、便ち知らん此の中人有ることを。」

事に因つて上堂。老夫用ひ盡す腕頭の力、諸公に㋰輸與す者の一籌。六窻を打碎して虛豁豁、夜深けて驚起す睡獼猴。

中秋上堂、仙桂叢叢露を帶びて開く、廣寒宮闕幾樓臺ぞ。東西南北門相對す、自ら是れ遊人到來せず。

上堂、㋒針頭に鐵を削り、水裏に波を尋ね、㋖應眞不借、也た多きことを較べず。黃葉飄飄兮靑山漸く瘦せ、簷頭滴滴兮還つて舊窠に落つ。阿呵呵。趙州嘗て勘す臺山の婆。

上堂、八月二十五、直截君が爲に擧す、水行一里一文、陸行七里一鋪、脚瘦せて草鞋寬く、雲收つて山岳露る。飯袋子、江西湖南便ち恁麼に去れ。

上堂、高拋、天に至らず、下擲、地に到らず。諸佛と祖師と、忒殺だ巴鼻無し。巴鼻有り、巴鼻無し。㋨唵囌嚕囌嚕㗭唎㗭唎。

㋰輸與。まけること、籌は物を量る具の名より來る。
㋒針頭。すりきつた身代にや。
㋖應眞。羅漢のこと。
㋨囌嚕囌嚕㗭唎㗭唎。大悲呪の中にあり、譯して「驀進せしめよ、驀進せしめよ」といふ、唵は譯して「おお」といふ秘密語なり。

上堂、「㋭丁一卓二、千里萬里、古を說き今を談ず、海底に針を摸る。釋迦老子、甚に因つてか燃燈の記を受けざる。」良久して拂子を擊つて云く、「麤飡は飽き易く、㋠細嚼は飢ゑ難し。」

重陽上堂、「今朝九月九、葉落ちて山容瘦す、古に效ひ戲に高に登れば、萬象朋友と爲り、滿泛大海の波、且つ重陽の酒と作る。一吸すれば大海乾き、虛空笑口を開く。阿呵呵。㋳茱萸日本無し、黃菊東籬有り。」拂子を擊つて、「誰か道ふ、相逢ふて手を出さずと。」

上堂、「清淨本然、山河大地、一塵を撥動すれば、天回り地轉ず。諸人還つて會すや。」良久して拂子を擊つて云く、「舍に在つて只だ言ふ、客と爲ること易しと。淵に臨んで方に覺ゆ魚を取ることの難きことを。」

上堂、一去ること莫く、二留まること莫し。深處淺處、明頭暗頭。阿呵呵。因に思ふ ㋮五祖師翁道ふ、我れ四十年行脚、今日方に始めて羞を識ると。

開爐上堂、「今日開爐了に說くべき無し。香匙は太だ短く、火筯は太だ長し。千林葉落ち萬壑雲收る。少林の面目、㋭刀斫れども入らず。」喝一喝して下座。

初祖忌上堂、「中天に任せず、大乘の器を求む。一錫飄然として十萬里に走る。」左右を顧視す、良久して云く、「扶桑日出づ海門の東、㋡熨斗茶を煎ずれば銚同じからず。」

㋭丁一卓二。丁は一、卓は二と、一二と算ふ。
㋠細嚼。淵に臨んで魚を得難し。
㋳茱萸。「ぐみ」なり。
㋮五祖。法演なり。
㋭刀斫不入。中中きれぬ。
㋡熨斗。「ひのし」のことなり。

同じく拈香。大衆を召して云く、「故に吾が初祖隻履西に邁く、㋙霜露幾か降り、木葉幾か脱す。首を回せば㋓音容、言猶ほ耳に在り。何に因つてか打落す當門の齒。」

上堂、行不到の處、只だ此の如く行じ、說不到の處、只だ此の如く說く。德山の棒、臨濟の喝、白日青天、眼中に屑を著く。

上堂、「山僧法の說くべき無く、道の譚ずべき無し。通身三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、只だ一句と作して、諸人に說與す。」良久して拂子を擊つて云く、「黃連未だ是れ苦からず。」

上堂、「至道言端語も亦端。刹竿頭上風幡颺る。幾回か望斷す千山の碧、㋢人を見ずして歸り又關を掩ふ。」卓拄杖。

上堂、西來の祖意揀擇を用ひず、一馬二羊三線四白。趙州の普、雲門の隔。笑ふに堪へたり李將軍、南山に白額を射ることを。

上堂、二は一に由つて有り、一も亦守ること莫し。㋐七郎八當、半前落後、三分の妍、四分の醜、臨濟德山、我が家の猫狗。

冬夜小參、僧問ふ、「記得す、洞山、泰首座に問うて云く、『一物有り、黑きこと漆に似たり、常に動用の中に在つて、動用の中收不得、過什麼の處にか在る』と、意何にか在る。」師云く、「白雲影の中怪

㋙霜露幾降。物換り星移りて。
㋓音容。かほつきも音聲も。
㋢不見人。行人更に青山外に在りじや。
㋐七郎八當。之れには人の前ではづかしうて云へぬ。

石露る。」僧云く、「泰首座云く、『過、動用の中に在り、灊』と。」師云く、「添へ得たり一場の愁。」僧云く、「洞山喝す、侍者、果卓を撥退す、又作麼生。」師云く、「鄭州の梨、青州の棗。」僧云く、「泰首座、果子を喫することを得ざれ。灊。」師云く、「富んでは千口も少きと嫌ふ。」僧云く、「今夜和尚、盤に和して撥出す。」師云く、「傍觀を笑殺す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「三九二十七、羅頭(サ)觱栗を吹く、衲衣下の事可憐生、無心にして箇の波羅密を念ず。與麼與麼、不與麼不與麼、古木流水に隨はず、(キ)春風暗に南枝に著く。(コ)東山の舊話又重新、少室從敎あれ霜雪の冷じきことを。然も是の如くなりと雖も、建長與麼の告報、還つて救ひ得んや也た無や。」良久して拂子を擊つて云く、「鬼は持す千里の鈔、林下道人孤なり。」擧す、僧、洞山に問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるか是れ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は寒殺闍梨、熱の時は熱殺闍梨。」師頌して云く、「何人か透得す建長が關、獨座寥寥として洞山を憶ふ。的的身を藏す寒暑の裏、灼然として寒暑相干らず。」

(ヌ)書雲上堂、新に頌つ鳳曆(テ)天墀より下る、何物か福壽の基を培するに堪へん。富士山高きこと三萬丈、一年一度靈芝を長ず。

上堂、一人眞を發して源に歸せば、十方の虚空悉く皆銷殞す。若し一法の涅槃に過ぐる有るも、吾

(サ)觱栗。「ひちりき」なり。上來の一曲が行けば、墻壁も露柱もつけて歌ふ。
(キ)春風暗。智惠のあるものは、此の咄の中に春が來ろ。
(コ)東山。東山の左邊底。
(ヌ)書雲。冬至のこと。
(テ)天墀。朝廷なり。

れは說かん卽ち夢幻の如しと。這の兩轉語、諸人分得すや。那箇か是れ主、那箇か是れ賓、若し也た分得せば、汝に許す是れ半箇の衲僧なることを。其れ或は未だ然らずんば、且く心麤なること莫れ。

上堂、箇の事は急流水の如く、㋛眨眼することを得ざれ。雪峰は一向に輥毬、㋓紫胡は一向に看狗、秘魔は一向に擎叉、禾山は一向に打鼓、建長曾て勢に倚つて人を欺かず。有る時は行くに因つて臂を掌ふ、諸人若し也た會得せば、同じく鉢盂を展べて喫飯せん。其れ或は未だ然らずんば、㋪三段同じからず、收めて ㋲上科に歸す。

㋝東福開山和尚の訃音至る上堂、昨夜虛空忽ち鎖殞す、東福山頭法幢折る、盡大地の人倶に哽咽、唯だ建長のみ有りて心銕に似たり。何が故ぞ、東山左畔の老松樹、臘月華開いて深雪に在り。

臘八上堂、六年冷坐棲泊し難し、伎倆窮る邊急計生ず。今古一條來往の路、門を出づれば ㋜時節正に三更。

上堂、止止不須說、我法妙難思、釋迦老子力を盡して道へども、建長が ㋑圈繢を透ること不出、建長力を盡して跳れども、釋迦老子の影子を透ること不過。三步は較べ易く、兩步は較べ難し。難難。離亭 ㋺柳を折る是れ陽關にあらず、㋩靑山礙へず行人の路。且く放す溪

㋛眨眼。倫鼠、油盞を掩く。
㋓紫胡。利縱なり。
㋪三段。一は影を移し、二は身を移し、三は身影共に移す。
㋲上科。官試の一等。
㋝東福開山。聖一國師の寂するは弘安三年十月十七日、壽七十九。
㋜時節。隻手を開くと日午に三更を打す。
㋑圈繢。わな、則ち盂「まげもの」、繢は「ひも」なり。
㋺折柳。知音なればなり。
㋩靑山不礙。春山亂靑を疊んで中に書信を通ずる。

聲別灘を過ぐることを。

四頭首秉掤を謝する上堂。星斗滿空一月に如かず、(ニ)衆角滿野一麟に如かず。主中に主を辨じ、賓中に賓を定む。規を絶し矩を絶して分眼金塵を透る、百歩に穿楊して分逸群を見んことを要す。

上堂、爐に當つて火の迸ることを避けず、言に當つて舌を截ることを避けず。是れ汝等諸人(ホ)接手の句を道ひ得ば、儞に許す天下に横行することを。苟し或は未だ然らずんば、且く林下に歸り去つて、更に月明の時を待て。

除夜小參、拄丈を拈じて、大衆を顧視して云く、「諸人還つて這箇の時節を知るや。乾坤の內、宇宙の間、(ヘ)一氣無作にして作、萬化然らずして然る。驢鳴犬吠、古佛の家風、一場の漏逗。年窮り歳盡く。衲僧の鼻孔轉た見るに瞞頇することを。茅屋清溪三曲四曲、古松流水千株萬株。建長薄處先づ穿つことを道はず、諸人自ら各時節を知るべし。(ト)休休(チ)看看、白盡す少年の頭、(リ)明朝又是れ新年頭。」復た丹霞、木佛を燒く公案を擧す、拈じて云く、「黄面の老漢、百千萬劫捨身布施す、今日方に作家に遇ふ、院主甚に因つてか眉鬚墮落す。」良久して云く、「道ふこと莫れ院主と、建長も也た些子有り。」

(ニ)衆角滿野。奇言妙句なり。
(ホ)接手。手形を手から手に。
(ヘ)一氣。二十四氣でも、萬化は七十二候でもなり。
(ト)休休「やれ、だまれ」なり。
(チ)看看。見よと、あまり唇皮を皷するので頭が白くなつた。
(リ)明朝。此の白い頭で、明日は歳德を迎へる。

元日上堂。「道、一を生じ、一、二を生じ、二、三を生じ、三、萬物を生ず。（ヌ）不是心、不是佛、不是物。」良久して、「南岳峰頭（ル）八字の碑、千古萬古長く巍巍たり。」

上堂。長袖善く舞ひ、多財善く賈ふ。（ヲ）李廣山頭石虎を射る、祕魔（ワ）杈下老鼠を捉ふ。彼兮此兮、無端無端、高兮低兮、（カ）大難大難。去年の殘雪春寒に到り、壓倒す門前の（ヨ）華藥欄。

上堂。方に見る正月初一、匆々として十日を過し了る。雪銷して春園林に入る。建長が關鎖密ならず、諸人に問ふ、委すや委せずや。之を毫釐に差へば之を千里に失す、也た是れ波斯鬧市に入る。

上元上堂。（タ）今朝上元の夕、的的來由有り。天地（レ）青眼無し、乾坤自ら白頭。滄溟一油甕、日月兩燈毬。明白分明に在り、何ぞ須ひん趙州を見んことを。

上堂。荊棘叢林、荊棘圍繞し、栴檀叢林、栴檀圍繞す。（ソ）可憐生建長老、爲に愛す巖前碧草の青、興來つて覺えず衣に和して倒る。諸人に問ふ、好不好、東土逢ふこと罕に、西天尤も少し。

上堂。（ツ）福山本據無し、一味脫空を說く。有る時は暗中拋號、有る時は換手點胸、朝に南北を看

（ヌ）不是心。そんな拄杖が。
（ル）八字碑。碧落碑無二贋本一。
（ヲ）李廣云云。昔しは老僧とむだ骨を折つたと。
（ワ）杈。「やす、」魚を捕ふる具なり。
（カ）大難。ああ、たいぎたいぎだと。
（ヨ）華藥欄。花畑の意、藥欄は圍の意にて「かき」なり。
（タ）今朝。絕妙の好辭。
（レ）無青眼。青眼で見るやうな知音はない。
（ソ）可憐生。贔屓に思ふてくれい。
（ツ）福山。建長の山號、巨福山のことなり。

暮に西東を看る。風に乗ずるは月に歩むに如かず、竹を種うるは松を栽うるに如かず。

上堂、菩薩龍王行雨潤ふ、身を遮る向上萬重の雲。一聲の霹靂天下を驚す、散じて千邦萬國の春を作す。大衆還つて見るや。所以に道ふ諸仁に顯はれ、諸用に藏る。萬物を鼓して而も聖人と憂を同じうせず、盛德大業至れる哉。

上堂、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。一二三四五、五四三二一、手を伸べて掌を見ず、(ネ)大地黒うして漆の如し。(ホ)屈述ぶるに堪へたり、大鵬一展九萬里、老鼠從教あれ鬧啾唧することを。

上堂、三句前兩句後、無は同じく無と說き、有は同じく有と說く。一著不到の時、南に面つて北斗を看る、甚に因つてか此の如くなる。德山牌を卓げ、(ラ)定光手を招く。

佛涅槃上堂、今朝二月半、瞿曇寂滅を示す、人天悲み徹せず、波旬喜び徹せず。同不同、別不別、(ム)船漏つて水滿つ、桶漏つて水竭く。

上堂、道は知にも屬せず、不知にも屬せず、(ウ)鐵蒺藜鎚轉た弄すれば轉た危し。笑ふに堪へたり臨濟小厮兒、電光影の中紅旗を卓つることを。

上堂、「鳧頸は太だ長く、鶴頸は太だ短し。四七二三、(キ)贓に和して款を納る。老夫が罪犯、諸人還

(ネ)大地。八月十五夜でも。
(ホ)屈堪述。須らく知るべし、是れ好手と。
(ラ)定光。佛は燃燈佛のこと。
(ム)船漏水滿。雪隱の踏板をふみ落したやうな上堂じや。
(ウ)鐵蒺藜。「いばら、」戦争の時に敵を防ぐためにつくる具、今の鉄條網。
(キ)和贓。盗み物を出して白狀する。

つて救ひ得んや也た無や。」良久して云く、「三生六十劫。」

上堂。㋨與麼も也た得たり、不與麼も也た得たり、與麼不與麼總に得たり。與麼も也た得ず、不與麼も也た得ず。與麼不與麼總に得ず。畢竟如何してか卽ち得ん。我れも也た理會し得ず。

上堂、牛頭は北に向ひ、馬頭は南に向ふ。釋迦・彌勒是れ同參にあらず、甚に因つてか此の如くなる。前三三後三三。

上堂。「山に上つて虎豹を避けざるは樵夫の勇なり、水に入つて蛟龍を避けざるは漁人の勇なり。建長大いに門戶を開き、只だ要す諸人㋔單刀直入せんことを。」良久して云く、「㋗玄沙道ふ底。」

除夜小參、僧問ふ、「家家歲を守つて長筵に接す、人人早に起きて新年を賀せん。學人上來願はくは提唱を聞かん。」師云く、「露柱笑ひ吟哈。」進んで云く、「如何なるか是れ人中の境。」師云く、「門を出でて唯だ恐る先づ到らざることを。」進んで云く、「如何なるか是れ境中の人。」師云く、「儞は是れ草賊。」進んで云く、「如何なるか是れ扶桑國。」師云く、「日出でて山に連り、月圓にして戶に當る。」進んで云く、「如何なるか是れ關東の境。」師云く、「貔貅三十萬、宿將重圍に坐す。」進んで云く、「如何なるか是れ巨福山。」師云く、「天高うして蓋不盡。」復た僧有り問ふ、「記得す、北禪除夜小參、衆に示して云く、『年窮り歲盡き、諸人と分歲す可き無し、箇の露地の白牛を烹る、』此の意如何。」師云

㋨與麼。さうじやさうじや。
㋔單刀直入。背水の陣じや。
㋗玄沙道底。或時は去死十分、或時は未徹在。

く、「村裏の獅子（ヤ）村裏に弄す。」進んで云く、「深夜維那上來して報じて云く、『縣裏、公人の到る有り。』和尚を勾す』と、意作麼生。」師云く、「家富んで兒嬌る。」進んで云く、「禪云く、『什麼をか作す。』維那云く、『和尚私に耕牛を宰して皮角を納めず』と、又作麼生。」師云く、「但だ東土のみに非ず、西天令嚴なり。」進んで云く、「北禪便ち帽子を將つて地上に擲向す。」師云く、「賊に和して款を納る。」進んで云く、「維那地に就いて帽を捨てて便ち行く。意作麼生。」師云く、「一字公門に入る。」進んで云く、「北禪禪床を跳下して攔胸に扭住して、叫んで云く、『賊賊』と、意旨如何。」師云く、「對面（マ）翻款。」進んで云く、「維那便ち帽子を將つて、師の頂上に覆ふて云く、『天寒和尚に帽子を還す、』此の意又作麼生。」師云く、「趯得轉じ來つて一牛を打失す。」進んで云く、「今日巨福年窮り歲盡く。未審し和尚什麼を將つてか大衆と分歲す。」師云く、「殿前の雪獅子。」進んで云く、「還つて學人箇の消息を通ずることを許さんや也た無や。」師云く、「好。」進んで云く、「嫌ふこと莫れ冷淡滋味無きことを。一飽能く消す萬劫の飢。」師云く、「偶然として（ケ）撈著す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「聲前の一句、踏著不嗔、波波浪浪、剎剎塵塵、鉢裏飯、桶裏水、主中の主、賓中の賓、一對の眼睛雪白く、悠然たり萬里の孤身、大白峰頭足を疊んで打坐し、扶桑國裏雪を踏んで春を迎ふ。今歲の梅、明歲の柳、新者は自ら新、舊者は自ら舊、南來北來、東走西走、一條の拄杖㰗刺梨。但だ山に登ると狗を打するとに

（ヤ）弄村裏。他國では繁昌する。
（マ）翻款。反覆なり、款は誠なり、罪人の事實を白狀することなり。
（ケ）撈。投と同じ。撈著は諸方より澤山あつめて來たなり。

あらず。」復た擧す。馬大師、（フ）藏和尚をして徑山の（コ）欽和尚に傳語せしむ。「十二時中何を以てか境と爲す。」山云く、「汝回る時を待つて、我れ却つて信有らん。」藏云く、「即今便ち回る。」山云く、「傳語す、馬大師、曹溪に問取せよ。」師拈じて云く、「馬大師一隻の破草鞋、東擎西擎、也た是れ其の便を得るに慣ふ。徑山、胡蘆馬杓を將ちて、一時に翻轉す、也た是れ事（エ）急家より出づ。福山恁麼の批判、還つて過有りや無や。」喝一喝して下座。

上堂。鳴鼓了也、祝香了也、問訊了也、敍謝了也、諸人若し病僧、佛を說き法を說くことを聽かんと要せば、且く別時を待て。

上堂、參禪妙訣無し。只だ打して（テ）徹せしめんことを要す。疑情若し斷せん時、生死の路自ら絕ゆ。諸人に問ふ、瞥不瞥、富士山頭、六月雪を下す。

上堂。印の泥に印するが如く、印の水に印するが如し。四七二三（ア）是れ甚の面觜ぞ。咄。

上堂。結夏已に半月、水牯牛作麼生。觜、觜に對し、蹄、蹄を踏む。大衆見るや。昨夜清風八極に生じ、今朝流水前溪に漲る。

上堂。「佛法人の說くなし、慧と雖も了ずること能はず。」又云く、「當に無師智、自然智を求むべし。

（フ）藏。西堂智藏、馬祖に嗣ぐ。
（コ）欽。國一法欽、牛頭派なり。
（エ）急家。貧急家なり。
（テ）徹。但だ捨命し得ず。
（ア）六月。道理で今朝は冷えた。
（サ）是甚而觜。猫に似たか杓子に似たか、似たならば頭腦から打破せん。

釋迦老子㋖三道寶街に布く、諸人那一門中に向つて、建長と相見せん。」良久して喝一喝して下座。

上堂「一去ること莫れ、二留むること莫れ。子湖狗を看、雪峰毬を輥じ、雲巖獅子を弄ず、潙山水牛を牧す。」良久して膝を拊つて「一片の月海に生ずれば、幾家か人㋙樓に上る。」

上堂、吾れに一句有り、千門萬戸、遠くして西天に在らず、近うして東土に在らず。㋦曲底は曲兮直底は直、甜き者は甜く兮苦き者は苦し、甚に因つてか此の如くなる。㋸鷓鴣鶴に語る。

㋾大覺忌辰拈香を請ふ。昔年今日恁麽に去り、今日昔年恁麽に來る。來來去去今昔に非ず、太虚處として安排すべきなし。㋓鉤を四海に垂れ、塔戸長く開く。一爐香散じて千山碧に、千古萬古雲雷を生ず。

上堂、參禪は須らく是れ悟るべし、悟り了つて須らく是れ人を見るべし。人を見るは須らく是れ今時を盡却すべし。若し今時を盡却せずんば、十箇五雙有り、髑髏前に鬼を見る。甚に因つてか此の如くなる。雪峰道ふ底。

太守、諸經を血書し、國土を保扶す、陞座を請ふ。若し此の事を論ぜば、只だ㋣當頭を貴ぶ。若し戰を論ぜば、妙は轉處に在り。金剛寶劍の如く、之を擬するときは則ち萬里に横屍せん。帝釋幢の如く、一切の邪風傾動すること能はず。輪王の珠の如く、一切の惡毒悉皆遠離す。獅子王の如く、一

㋖三道。聲聞、緣覺、菩薩なり。
㋙上樓。登樓とも是れ吾が土にあらず。
㋦曲底曲。誰か道ふ、物理齊しと、曲中却つて直あり。
㋸鷓鴣。方語に「只缺ニ一點。」
㋾大覺忌。建長開山の忌日なり、弘安元年七月二十四日寂す。
㋓垂鉤四海。曲鉤には蝦蟹を釣り、直鉤には鯤鯨を釣る。
㋣貴當頭。短兵急に、大死一番底。

吼するときは即ち百獸腦裂す。大日輪の如く、一照するときは則ち陰魔跡を絶す。高うして上無く、大にして雙無し、横に十方に亘り、竪に三際を窮む。護法護民、全鋒敵勝を見んと要し、(モ)摧邪顯正、虎穴魔宮を掃開す。佛力と天力と共に運し、聖力と凡力と齊新なり。正恁麼の時、奏凱の一句作麼生か道はん。萬人齊しく仰ぐ處、(セ)一箭(ス)天山を定む。

結座、菩薩大心を發す、不可思議の力、剝皮と析骨と、書寫佛功德、(イ)苦衆生を拔濟して、皆勝妙樂を獲せしむ。我が此の日本國主帥、平朝臣、深心般若を學ぶ、爲に億兆の民を保んず。外魔四に來り侵す、國を擧げて怖畏を生ず。朝臣勇猛を發し、血を出して大經を書す。金剛と圓覺と及於び諸の般若、精誠所感の處、滴血滄海と化す。滄海渺として無際、(ロ)皆是れ佛功德、重重の香水海、照見す浮幢刹、諸佛寶蓮に坐す。常に如是經を說き、一句と一偈と、一字と一畫と、悉く化して神兵と爲る。猶ほし天帝釋と彼の修羅と戰ふが如し。此の般若力を念じて、皆勝捷を獲たり。今此の日本國亦佛の加被を願ふ、諸聖神武の威、彼の魔悉く降伏し、生靈皆安を得る。皆佛の神力の故に、世々般若を學ぶ、(ハ)佛の威猛力に報ず。

上堂「八月の秋何れの處か熱し、雨顚ぜず、風蹶せず、狼烟已に掃除、五穀皆成結す。好箇太平底

(モ)摧邪顯正。或は正を顯し、或は邪を示す。
(セ)一箭。兩手を放開して中るを知らず。
(ス)天山。邊境にあり。
(イ)苦衆生。五塵六慾なり。
(ロ)皆是佛。捨身放命の地。
(ハ)報佛。佛恩を報すること。

の時節、石人笑ひ徹せず、木人喜び徹せず、燈籠歌徹せず、(ニ)露柱舞徹せず。大地山河掌よりも平なり。十方世界一團の鐵、諸人に報ず打して徹せしめよ。頂門(ホ)獄瞎是れ何人ぞ、的的(ヘ)天、第二の月無し。」良久して云く、「達磨西來、口有り舌無し」と。

上堂、「現成公案思算を用ひず、鶴頸は自ら長く、鳧頸は自ら短し。離中虛、坎中滿。」大衆を召して云く、「會すや、人心(ト)水の長流よりも難し、世事但だ(チ)公道を將つて斷る。」

上堂、尋常一句を說き一步を行ず、未だ嘗て(リ)諸人の與に方便門を開かずんばあらず。若し也た有所得の心を將つて湊泊せば、大空を將つて螻蟻穴中に入るが如し。却つて山僧を怪むこと得ざれ。

東山、(ヌ)日長老相訪ふ上堂、「東山下の事、雞犬斜陽、淸谿七里五里、松竹千莖萬莖、(ル)祖翁の活業更に隱藏すること沒し。」良久して云く、「(ヲ)家肥えて孝子を生じ、馬瘦せて毛の長きを見る。」

長樂一翁の訃音至る上堂、火裏淸泉を汲む、已に七十二年、蟭螟飜身し去つて大千を觸破す。(ワ)黃梅渡口、雞足山前、甜きこと木蜜の如く、苦き

(ニ)露柱。めでたい御代じや。
(ホ)獄。音は「ちやく」、刺なり、いたむなり。
(ヘ)天無第二月。國に二王なし。
(ト)水長流。河水は下に流るるやうで、素直には行かぬものなり。
(チ)公道。亂世の太平。
(リ)與諸人。諸なしとは言はず、只だ是れ如來に二種の語なし。
(ヌ)日長老。高峯顯日、師の法嗣なり、佛國國師。東山は建仁なり。
(ル)祖翁。破庵なり。
(ヲ)家肥云云。富貴なる家では犬ころまでが肥え、貧之なる家の子供は正月でも鼻汁が長いものじや。
(ワ)黃梅。六祖、雞足は迦葉なり。

こと黃連に似たり。贓物現在、父子不傳、過鋒疾燄、一步先に在り、正宗滅却す瞎驢邊。然も五逆と雖も寃を成さず。

上堂、「尺壁寸陰、車鐵寸金。」大衆を召して、「會すや、閑學解を將つて(カ)祖師の心を埋沒すること莫れ。」

重陽上堂、「堂前鳴鼓了也、大衆問訊了也。」良久して、「若し是れ(ヨ)陶淵明ならば、眉を攢めて便ち歸り去らん。」

上堂、一を識得すれば萬事畢る、金剛杵打して鐵山摧く、大地漫々黑うして漆の如し。彌勒呵呵大笑すれば、文殊額上汗出づ。(タ)陝府の鐵牛踍跳すれば、(レ)嘉州の大象拇指を咬斷す。甚に因つてか此の如くなる。家肥えて孝子を生じ、國覇にして謀臣有り。

上堂、歷歷歷、寂寂寂、益益益、昔昔昔。方者は自ら方、圓者は自ら圓、曲者は自ら曲、直者は自ら直。扶桑の人、陝西の田を種ゑ、文殊殿裏に彌勒を見る。

上堂、「老胡西來、茅を擔つて火を引く、白日堂堂、漆桶話墮。」良久して、「俊鶻空を掠め、瞎驢磨を推す。」

(カ)祖師心。佛光は始め無準及び北簡・石溪諸老の室に出入し、末後に鷲峰庵に於てす。
(ヨ)陶淵明。晉の隱人。性恬淡、菊を植ゑて酒を嗜む。攢は「しかめる」なり。
(タ)陝府。今の河南省に屬す、黃河を守護する神として鐵牛を造る、頭は河南に、尾は河北にあり、不動著の意。
(レ)嘉州大象。唐の玄宗帝の時、沙門海通、嘉州の大江に高さ三十六丈の彌勒佛の石像を作る。これを云ふ。

開爐上堂、「山寒く水冷かにして衰形を見、獨坐時に聞く落葉の頻なることを。又地爐を撥つて㋛宿火を開く、嶺南猶ほ未歸の人有り。」卓拄杖して下座。

上堂。吾が家向上の機を透らんと要せば、急に須らく我れに惡鉗鎚を薦むべし。風雷迸出す那吒の面、賣與す飜身の獅子兒、一轉語を下し得ば、明窻下に安排せん。其れ或は未だ然らずんば、南北に一任す。

上堂、火燄三世の諸佛の爲に說法す、三世の諸佛立地に聽く。門前の大案山を推倒すれば、九州四海鏡の如く平なり。君に饒す兩眼流星に似たるも、未だ免れず白日深井に落つることを。

上堂、「作麽生休得すや、沒處去、之乎者。釋迦老漢、六年雪山、達磨老胡、九載少林。驀に大衆を召す、卓拄杖して云く、「漆桶㋡喫茶去。」

解夏小參、「山僧別に長處無し、四十餘年行脚、㋭一丈を見得して一丈を行じ、一尺を見得して一尺を行ず、曾て古人陳年の破草鞋を將つて、拄杖頭上に掛在して、東拋西擲、以て宗乘に當てず。而今長期已に滿つ、聖制已に圓なり。兄弟東去西去、南來北來、兩件の事有り、諸人に說與せん。第一舊路再行すべからず、第二新路蹈破すべからず。甚に因つてか此の如くなる。枯木龍吟有り。」復た擧す、乾峰示衆、「法身に三種の病、二種の光有り、一一透得せば、僩に許す歸家穩坐することを。」雲門云

㋛宿火。昨日の燒きのこりの火に探り逢ふて見ればとなり。
㋡喫茶去。此處は寒い、暖所に歸つて茶でも呑め。
㋭一丈一尺。長と短となり。

く。「庵內の人、甚に因つてか庵外の事を知らざる。」峰呵呵大笑す。門云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峰云く、「子是れ何の心行ぞ。」門云く、「也た和尚の委悉せんことを要す。」峰云く、「若し與麼ならば始めて穩坐を解せん。」師頌して云く、「曲曲たる蘆汀蓼灣に對す、山水を藏し了つて水山を藏す。誰か云ふ寂寞たる煙磯の外、更に漁翁釣竿を把る有り。」

解夏上堂。一夏諸人と東語西語、只だ諸人、各生涯有らんことを要す。今日聖制已に滿つ、還つて悟證（オ）諦當を得る者有らば、出で來れ、老僧儞が爲に證據せん。其れ或は未だ然らずんば、丈頭且く自ら挑げ去らん。

太守、（ラ）興國山の額を掛くる事を請ふ。「正に邪を格すべし、（ム）小能く大に敵す、皇天私無く、功有德に歸す。日本千年の社稷、遠邦萬里の孤征、風雷一掃して空となり、佛天震怒遏め難し。一箭を發せずして煙塵息み、一刄に血ぬらずして天地淸し。偉なるかな雄猛の尊、乾坤の運を再造す。鳥獸魚鱉咸く若ひ、漁樵耕牧新なるが如し。此の興國の名を揭げ、昭に太平の業を示す。」良久して云く、「（ウ）萬古千秋雲雨を出し、（ヰ）十洲三島淸風を起す。」

太守、夢に（ク）虛堂和尚に見ゆ、翌日師を請じて拈香。虛堂背面無く、在無く不在無し。夜來扶桑に過りて、夢裏妖怪を興す、夢中の形、像中の眞、夢中像中、（オ）兩彩一賽。老和尚一香、聊か是れ慇懃

（オ）諦當。諦は明實、當は眞正の意。
（ラ）興國山。建長興國禪寺といふことか。
（ム）小能敵大。泰山高く恒河深し。
（ウ）萬古。此の額の字。
（ヰ）十洲三島。旱魃を救ふて社稷を安んず。
（ク）虛堂。智愚なり。
（オ）兩彩一賽。二つの骰子を投げて、目の齊しきをいふ。

に當つ、師の遠來を謝す誠に易からず。

冬夜小參、僧問ふ、「堂前鳴鼓已に三通、蹴蹈す人天と家龍と、時節因縁今夜に在り。願はくは師一句家風を振はんことを。正與麼の時、願はくは法要を聞かん。」師云く、「露柱證明、燈籠失笑す。」進んで云く、「記得す洞山和尚、冬夜、泰首座に問うて云く、『一物有り、黑きこと漆に似たり、常に動用の中に在つて、動用の中收不得、過甚麼の處にか在る、』意作麼生。」師云く、「貧にして富の裝裹を作す。」進んで云く、「泰首座云く、『過動用の中に在り』と、還つて洞山の意に契ふや也た無や。」師云く、「若し涙を下さしめば、滄海も也た乾かん。」進んで云く、「洞山行者をして菓卓を撥退せしむ、又且つ如何。」師云く、「手を飜せば雲、手を覆へば雨。」進んで云く、「只だ和尚の這裏の如き也た菓子無きや也た首座無きや。且く道へ、洞山と相去ること多少ぞ。」師云く、「牙を咬んで雍歯を封じ、血に泣いて丁公を斬る。」進んで云く、「望むらくは和尚更に古人說不到の處に向つて大衆に指示せよ。」師云く、「猶ほ少きを嫌ふこと在り。」進んで云く、「便ち這箇眞の消息を將つて、且く去つて㋗三條椽下に參ぜん。」師云く、「天寒日短く、飯滿つることを要せず。」師乃ち云く、「㋭冬至寒食一百五、甜き者は甜く兮、苦き者は苦し。寒潭を凍鎖して蹤を見ず、達磨會せず轉身の句。」大衆を召して云く、會すや、一句は寒暑の外にあり、一句は寒暑の內に在り、若し寒暑の外に在つて薦得せば、他に許す寒暑を受用せんことを。若し寒暑の內に在つて薦

㋗三條椽下。六尺單前をいふ。
㋭冬至。冬至より百五日目を社日といひ、一日火食せず。

得せば、儞に許す寒暑を㊀擺脫することを。便ち見る仰山の叉手、香嚴の進前、昨日と今日と同じからず、溪山と雲月と異なる有り。」良久して云く、「精陽剪らず霜前の竹、水墨徒に誇る海上の龍。」復た擧す、馬祖、一圓相を寄せて㊁徑山に與ふ。山、封を開き圓相の㊂下に就いて一點して封回す。㊃忠國師云く、「欽師却つて馬師に惑はさる。」拈じて云く、「忠國師其の便を得るに慣ふ、爭奈せん、馬祖甘はさることを。我が此の一衆、還つて馬祖の爲に屈を雪ぐ底有りや。」喝一喝。

記夢上堂、空中に字を書く、水底に文を成す、金光晃耀、星月平分、無情說法不思議、汝諸人眼を著けて看んことを要す。

除夜小參、僧問ふ、「南泉僧有り問ふ、『如何なるか是れ本身盧舍那。』泉云く、『我が爲に淨瓶を過し來れ。』『意旨如何。』師云く、「儞牢く話頭を記せよ。」進んで云く、「僧、淨瓶を過す。泉云く、『舊處に安著せよ。』『意又作麽生。』師云く、「儞若し打倒せば一場の好笑。」進んで云く、「僧舊處に安じ了つて、復た來つて是の如く問ふ。泉云く、『古佛過ぎ去つて久し矣。』又且つ如何。」師云く、「儞背後底是れ甚麽ぞ。」進んで云く、「南泉恁麽の答話、還つて和尚の意に契ふや也た無や。」師云く、「猶ほ老僧が三歩に較ぶること在り。」進んで云く、「學人、和尚に問ふ、如何なるか是れ本身盧舍那と。」師云く、「觸著すれば儞が腦を打破せん。」僧禮拜。師云く、「我れ儞が與に兩年を捻つて汗す。」師乃ち云く、「一年窮り歲盡く、諸人と分歲すべき無し、未だ免れず破囊を抖擻せんこと

㊀擺脫。擺は開なり、撥なり、排なりとあれば、自由を得ること。
㊁徑山。國一法欽なり。
㊂下。異本に「中」に作る。
㊃忠。南陽をいふ。

を。㋓陳年の暦日を把つて、諸人に念興して、箇の閙熱を作さん。正月雨水、二月穀雨、三月清明、四月夏至、五月小滿、六月大暑、七月秋分、八月白露、九月霜降、十月小寒、十一月小雪、十二月大雪。」大衆を召して云く、「還つて會すや、若し也た會得せば、㋢日日是れ好日、時時是れ好時。其れ或は未だ然らずんば、舊歳今宵去り、明年明日來る。」

復た擧す、僧、㋐歸宗に問ふ、「此の事久遠、如何が用心せん。」宗云く、「牛皮露柱を鞔る、露柱啾啾として叫ぶ。凡耳聽不問、諸聖呵呵笑ふ。」拈じて云く、「歸宗大いに貧子の㋚樗蒲に似たり、㋖動著すれば臂膊便ち露る。然も此の如くなりと雖も、阿誰か免れ得ん。」

上元上堂、「氷霜自ら寒からず、日月自ら照さず。一句㋙千門を透る、萬象齊しく踍跳す。」卓拄杖して下座。

㋱雲巖の吉長老を謝する上堂、「本是れ射鵰の手、曾て百戰の功を收む。再び鐵旗鐵鼓を整へて、同じく日本の宗風を扶く。奔流度刃、疾燄過鋒、旋風岳を偃し、㋯鶻眼も蹤に迷ひ、何ぞ似かん東山の大脫空。」拂子を擊つて下座。

㋛允賢の二上人、松を栽うるを謝する上堂、黃梁會裏、巨福山前、松を栽ゑ、㋓栝を種う。公案宛然、已に見る龍蛇影動き、重重翠蓋參天、和風四合、禽鳥聲喧しし、㋪釅茶三五盌、意钁頭邊に在り。

㋓陳年。ふるごよみのこと。
㋢日日是好日。鹽を看て渴を止め、飯を看て飢を止む。
㋐歸宗。智常なり。
㋚樗蒲。彩走ニ靦家。
㋖動著。人の金著を足の拇指であける。
㋙千門。萬祖の關鎖。
㋱雲巖。那須の雲巖寺、吉は未詳なり。
㋯鶻眼。すばやきはたらき。
㋛允賢。未詳なり。
㋓栝。ひのき、びやくしんのこととなり。
㋪釅茶。酢、又はこきさけのこと。

參。

上堂、「道不及の處萬機齊しく赴く。落華流水太忙生、嶺上の白雲闌不住。」良久して拂子を擊つて云く、「甜瓜は蔕に徹して甜く、苦瓠は根に連つて苦し。」

上堂、「偏中正、正中偏、千華影裏、一色明邊。」良久して云く、「幾度か醉歸す明月の夜。笙歌擁し入る畫堂の前。」

佛槃涅上堂、最初の句、末後の句、枯木裏の龍吟、鐵蛇古路に横ふ。若し也た悟り去らば、親しく如來を見ん。其れ或は未だ然らずんば、(モ)黄連未だ是れ苦からず。

上堂、擧す、僧、古德に問ふ、「泗州の大聖甚に因つてか楊州に出現す。」德云く、「君子財を愛す、之を取るに道を以てす。」若し(セ)福山に問はば、只だ他に對して道はん、事、三に過ぎずと。更に意旨如何と問はば、向つて道はん、無孔の鐵鎚、甚の共に語る處か有らんと

上堂、「昨日山僧、拄杖を將つて一揮す、諸人呼ぶに隨つて至る。今日鼓を打つこと三通、諸人簇簇として上來す。是れ汝が脚頭到る處、諸佛の法藏盡く空し。山僧身を隱すに地無し。且く道へ、箇の甚麼をか嫌ふ。」卓拄杖して下座。

上堂、(ス)是れ目前の法にあらず、耳目の到る所にあらず。直鉤鯤鯨を釣り、曲鉤は魚鱉を釣る。諸

(モ)黄連。あとくちが苦い。
(セ)福山。巨福山、卽ち佛光自らをいふ。
(ス)不是目前法。夾山、船子に對ふる語なり。

人に問ふ、瞥不瞥、無孔の鐵鎚、楔を下すことを休めよと。

上堂、靈雲、客路に㋑玄沙に遇ふ、直に今に至つて未だ家に到らず。迷却す武陵深き處の路、一溪の流水天涯を隔つ。

上堂「夜來山僧一夢を得たり、一機の中、四輪倶に轉ずることを夢見す。或は竪轉の者あり、或は横轉の者、或は左轉の者、或は右轉の者あり。此の夢此の輪、此の輪此の夢、是れ汝諸人那裏に向つてか㋺山僧と相見せん。」喝一喝、卓拄杖して下座。

上堂「密說顯說、直說曲說、横說竪說、事說理說、一切智智清淨、無二無二分、無別無斷故。」良久して云く、「㋩西河獅子を弄じ、南泉猫兒を斬る。」

上堂「無も也た將來すること莫し、有も也た將去すること莫し、㋥懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。」卓拄杖して云く、「㋭蝴蝶夢回る家萬里、子規啼き斷ず月三更。」

㋬佛鑑禪師忌日拈香、六十の拄杖、一瓣の兜樓、恩寃を將つて報じ、甜苦を將つて酬ゆ。山悠悠、水悠悠、大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。

㋣最明寺殿忌日上堂、「一靈の眞性、通徹虛玄、㋠三際朕跡を留めず、十方更に中邊に沒す。處處全

㋑玄沙。「敢保す老兄の未徹在」といつた。
㋺與山僧相見。竪か横か左か右か。
㋩西河。この解、前に出づ。
㋥懷州牛。懷州と益州とは地遠くはなる。
㋭蝴蝶。花に舞ふ蝴蝶を夢に見る故。未だ家に歸らず。
㋬佛鑑。無準師範、南宋の淳祐九年三月十八日寂す。
㋣最明寺。時頼公のこと。
㋠三際。過、現、未なり。

彰、頭頭顯露。所以に道ふ、極大は小に同じ、邊表を見ず、極小は大に同じ、境界を忘絕すと。便ち見る大海は㋷風無きに金波自ら湧き、古鏡磨せざるに萬象齊しく照すことを。空に能照の影無く、境に觀るべきの形無し。這裏一跳に跳出し、面皮を㋦翻轉して、金剛の正眼は乾坤に輝き、剎剎塵塵、異類を行ず。諸人還つて見るや。白雲㋸迸斷す青山の外、七佛の靈蹤㋾上方に在り。」復た云ふ、「人間拋卻す舊榮華、㋻慈氏宮中是れ故家。菩提果熟す菩提樹、子子孫孫自ら華を著く。」大衆を召して云く、「什麼を喚んで㋕菩提樹と作す。阿那箇か是れ菩提の果。」拄杖を卓して云く、「恩を知る者は少く、恩に負く者は多し。」

上堂、「參禪は當に悟を以て期と爲すべし、悟らずんば重ねて添ふ滿肚の癡。借問す五湖雲水の容、南泉甚に因つてか猫兒を斬る。」喝一喝、卓拄杖して下座。

上堂、「正中來、兼中至、鐵壁銀山、通身泥水、是れ汝等還つて㋵護惜すや也た無や。」卓拄杖して云く、「有智無智、較ぶること三十里。」

上堂、拄杖を拈じて云く、「拄杖子長きこと七尺、也た汝に累され、也た汝が力を得たり。我れ且く儞に問ふ、只だ黃檗、臨濟を打つこと六十下するが如きんば儞還つて記得すや。云く、記得す、儞我

㋷無風金波。無處には水有つて月澄み、有處には風無くして波起る。
㋦翻轉。飜躍の略、自由自在のこと。
㋸迸。異本には「迸」に作る。
㋾上方。界分、維摩の香積なり。
㋻慈氏。彌勒をいふ。
㋕作菩提樹。今日什麼の色なか作す。
㋵護惜。大切にすること。

が與に擧すること一遍せよ看ん。」卓拄杖一下して云く、「我が見處と略相似たり、中間也た些子の㋟誵訛有り。」

浴佛上堂、黄面老漢才に母胎を出でて、便ち萬千㋹不唧嚁の事有り、千古の下累兒孫に及ぶ。建長が香水一杓、也た恩有り、也た怨有り、也た褒有り、也た貶有り。諸人若し也た緇素得出せば、儞に許す親しく如來を見たてまつることを。其れ或は未だ然らずんば、坐具頭邊に摸索せよ。

結夏小參、僧問ふ、「句裏に機を呈し、言前に旨を定む、請ふ師親切の一句。」師云く、「半句も也た無し。」進んで云く、「記得す、㋞龍牙、㋡翠微に問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』微云く、『我が與に㋧禪版を過し來れ。』微、接得して便ち打つ、意旨如何。」師云く、「猶ほ建長が三歩に較ぶること在り。」進んで云く、「牙復た臨濟に問ふ、濟云く、『我が與に蒲團を過し來れ。』濟、接得して亦打つ、此の意如何。」師云く、「喚び來れ、我が與に洗脚せしめん。」進んで云く、「後來㋤雪竇が頌に云く、『龍牙山裏龍に眼無し、死水何ぞ會て古風を振はん、』此の意如何。」師云く、「死虎人の看るに足れり。」進んで云く、「又云く、『㋶盧公付し了るも亦何ぞ憑まん、坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよ、』此の意又如何。」師云く、「私酒人の喫すること多し。」進んで云く、「學人和尙に問ふ、如何

㋟誵訛。錯雜して分ち難きを云ふ。
㋹不唧嚁。馬鹿野郎。
㋞龍牙。居遁なり。
㋡翠微。無學なり。
㋧禪版。この解、前にあり。
㋤雪竇頌。この頌は碧岩に出づ。
㋶盧公。これも碧岩に出づ。

なるか是れ祖師再來意と。」師云く、「㋰汝が證明を謝す。」僧便ち禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、「拄杖頭邊戸牖を豁開す、沙界に廓周して遮闌を沒す。圓覺伽藍空しく蕩蕩、便ち見る釋迦彌勒文殊普賢。大海江河、昆蟲草木、同じく此に安居し、同じく此に禁足することを。智を以て知るべからず、識を以て識るべからず。所以に道ふ、一塵、正受に入れば、諸塵三昧起る、諸塵、正受に入れば、一塵三昧起ると。幽巖華笑ひ杜鵑啼く、㋒牛頭出でて兮馬頭沒す。然りと雖も只だ拄杖、拄杖に關卻するが如き、還つて這箇の消息有りや也た無や。」拄杖を以て畫一畫して云く、「泥團を弄ずる漢。」擧す、僧、投子に問ふ、「大死底の人却つて活する時如何。」子云く、「㋼夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」拈じて云く、「㋨擔枷過狀は者の僧無きにあらず、㋔款に據つて案に結することは、他の投子老人に還す。中間些子の誵訛有り、今夜四頭首を請じて、再び與に評定せしめん。」

結夏上堂、僧問ふ、「趙州、南泉に問ふ、『如何なるか是れ道。』泉云く、『平常心是れ道。』意旨如何。」師云く、「月弓を彎るに似たれば、雨少く風多し。」進んで云く、「州云く、『還つて趣向を假すや也た無や。』泉云く、『向はんと擬すれば即ち乖く。』又作麼生。」師云く、「地を蹈めば塵飛

㋰謝汝證明。老僧多少の威光を減ずと。
㋒牛頭出。神出鬼沒の義。
㋼不許夜行。夜間は暗くして事物の分明ならず、故に天明に來るべしとの意。
㋨擔枷過狀。枷は首かせにて、罪人の首にかけて自由に動くことの出來ぬやうにする機械なり、過狀は自ら白狀することと、この手かせ足かせをになひながらとなり。
㋔據レ款。案は公府の案略にて、款は情實の意にて、民情をいふ、罪人の白狀によつてその罪科を決するなり。

ぷ。」進んで云く、「州云く、『擬せざれば爭か是れ道ふことを知る。』泉云く、『道は知にも屬せず、不知にも屬せず』と。」師云く、「(り)八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「州大悟す。聻。」師云く、「畜生の行を行ふと雖も、畜生の報を得ず。」僧便ち禮拜す。　師乃ち大衆を召して云く、「文殊門より入る者は、牆壁瓦礫、汝が爲に機を發し、觀音門より入る者は、蝦蟆蚯蚓、(や)汝が爲に機を發し、普賢門より入る者は、歩を動さずして到る。九旬一夏、一線雙勾、(ま)月冷かに風高し、山青く水綠なり。是れ汝等諸人作麼生。」良久して云く、「向に道ふ山下の路を行くこと莫れと。果然として猿叫ぶ斷腸の聲。」

頭首の秉拂を謝する上堂。「王庫の寶刀、千鈞の弩、是れ陳年の器具なりと雖も、妙處之を用ふること人に在り。四人の頭首、法戰場中、(か)韜略雙び全く、全鋒敵勝、萬人悚觀す。大家喝采して賞を樹てず、功を立てず、四海狼煙靜に、(つ)鵰鶚秋空に在り。」拂子を擊つて下座。

上堂。「二乘の人、身を三界に藏して、身を菩提に藏すこと能はず、祖師身を藏す處沒蹤跡、沒蹤跡の處(こ)身を藏さず。」良久して云く、「事を知ること少き時煩惱少く、人を識ること多き處是非多し。」

上堂。擧す。黄檗、衆に示して云く、「達磨、中國に來つて、佛を以て佛を傳へて、餘佛を說かず。

(り)八角。前に出づ。すりばちのこと。
(や)爲汝。圓通門扇じや。
(ま)月冷。未だ必ずしも人に渡與せず。
(か)韜略。六韜三略。
(つ)鵰鶚。はしくまだかが托鉢米をくはへて空を飛ぶ。
(こ)不隱身。丹の隱す處、漆の隱す處、覆藏せず。

法を以て法を傳へて、餘法を說かず、㋓法は即ち不可說の法、佛は即ち不可取の佛。」拄杖を拈じて大衆を召して云く、「燕雀は巖竇に棲まず、虎豹は城市に行かず、鳳凰は枳棘に宿せず、蛟龍は死水に臥せず。」喝一喝、拄杖を靠けて下座。

上堂、「法に定相無し。㋢緣に遇ふて即ち宗。拂子在らざれば、拄杖子自ら神通を展ぶ。」拄杖を擲下して云く、「㋐風は虎に從ひ兮雲は龍に從ふ。」

端午上堂、拂子を竪起し、大衆を召して云く、「見るや、山僧が拂子頭上寬廣にして、四十二恒沙の佛國、三十三天、二鐵圍山、總に裏許に在り。吾れ今收攝すれば、行病鬼王、五蘊鬼王、盡く這裏に向つて、安居禁足す。一切の災疫、老僧身自ら代つて受く。汝等鬼王再び國內の人民を惱害すること有ることを得ざれ、吾が令を聽く者は、三十三天、其の往來に任す、吾が令を聽かざる者は永く二鐵圍山に鎖さん。吾が呪を聽け、云く、『揭諦、揭諦、波羅僧揭諦、波羅僧揭諦、諦揭僧羅波諦、揭羅波諦、揭諦揭。』㋚急急如律令の敕を違犯することを得ざれ。」

上堂、「㋖大圓鏡智性淸淨、平等性智心無病、妙觀察智見功に非ず、成所作智圓鏡に同じ、三八六七果因轉ず。但だ名言有つて實性無し、若し轉處に於て情を留めず、繁興永く那伽定に處せん。」大衆を召して云く、「會すや、能く者裏に向つて透得して玲瓏、斬得して淨潔ならば、㋴便ち告香底の消息

㋓法即。止だ止だ說くを須ひず。
㋢遇緣。始より衆數に墮せず。
㋐風從虎。猶ほ是れ衲僧の窠窟、何の處にか救ひ得ん。
㋚急急如律令。必ず守るとの誓言。
㋖大圓鏡智。以下、那伽定に處せんまでは六祖の語なり。
㋴便知告香。隻手に衆香國の飯を取つて、十方國土に布施す。

を知らん。」

上堂、現成底㋱造作すること勿れ、也た凡を憎み聖を慕ふこと莫れ、亦た鳧を續いで鶴を截ること莫れ。雲岫を出で、水壑に歸す。達磨西來、千錯萬錯。

上堂、「一切諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提、皆此の經より出づ。」良久して云く、「僧は寺裏に投じて宿し、賊は不防の家を打す。」

上堂、靑絹の扇子風涼足れり、二八の佳人畫堂を出づ。雙陸暗に拋つ紅瑪瑙、紫微華下㋯潘郎を打す。

上堂、熱熱熱熱、農夫田を耘つて㋛背皮裂く、㋽滿鉢盛り來り取つて飽いて喰ふ。粒粒農の汗血に非ざる無し、諸人に報ず打して徹せしめよ。杷を挽き車を牽いて飯錢に酬いんことを。道ふこと莫れ老夫曾て說かずと。

上堂、「一句は江南、兩句は江北、淸風月下株を守る人、涼兎漸く遙にして春草綠なり。」建長老漢㋪發癡發狂、白日靑天、牛に騎つて屋に上る。」喝一喝して下座。

上堂、「一夏將に滿ちんとす、汝等諸人還つて自己の契劵分曉することを得るや也た未だしや。若し分曉することを得ば、出で來つて說き看ん。老僧が與に合同文印を搀起せよ。」拄杖を靠けて下座。

解夏小參、僧問ふ、「南泉兩堂首座、猫兒を爭ふ、南泉提起して云く、『道ひ得ば即ち斬らず。』衆無

㋱勿造作。向はんと擬すれば觸忤す。
㋯潘郎。三國一の風流男。
㋛背皮裂。誠に農夫の血汗じや。
㋽滿鉢盛來。法身却つて飯を喫するや也た否や。
㋪發癡。大いに醉漢に似たり。

語、泉、猫兒を斬却す。意作麽生。」師云く、「好し與に猫兒を奪却するに。」進んで云く、「泉、趙州に擧似す、州草鞋を戴いて出で去る、又作麽生。」師云く、「卻つて鶴唳を將つて鶯啼と作す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「萬里寸草無し、門を出でては便ち是れ草。洞山は則ち固に是、石霜還つて免れ得んや。若し這裏に向つて見得せば、便ち洞山を見ん。洞山を見得せば、便ち石霜を見る、石霜を見得せば、便ち無學老漢、過犯彌天なることを見得せん。所以に道ふ、九烏射盡して（ト）一翳猶ほ存し、一箭地に墮ちて天下黑暗。」驀に拄杖を拈じ、畫一畫して云く、「（チ）阿剌剌。」復た擧す、僧、曹山に問ふ、「塵を撥つて佛を見る時如何。」山云く、「直に須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まん。」拈じて云く、「（リ）趙孟の貴ぶ所、趙孟能く賤んず、五日前觀光すべきに足れり、十日の後敢て相許さず。何ぞや、建長從來（ヌ）柳下惠。」

上堂、「毗盧の師、法身の主、白骨積んで山を成し、寒（ル）螿秋露に泣く。是れ法爾如然にあらず、是れ（ヲ）眞常の流注にあらず、是れ背覺合塵にあらず、是れ迷を抛つて悟に就くにあらず。」拂子を擊つて云く、「（ワ）機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」

中秋上堂、「若し此の事を論ぜば、午夜の月の如し、空に任せず、空を離れず、或は東或は西、

（ト）一翳。一法を見ざれば大過患か。
（チ）阿剌剌。おやおやと云ふ驚きの詞。
（リ）趙孟。孟子の句。
（ヌ）柳下惠。その迹を師とせずといふ人が多い。
（ル）螿。きりぎりす。
（ヲ）眞常。眞空常寂の義にて、人人具足の本性をいふ、不增不減、不變不動。
（ワ）發機。洒脫なものや。

乍ち缺け乍ち圓なり、高低倶に到るも、十萬八千、謝家の人は、漁船に在らず。

上堂、釋迦の慳、彌勒の富、八十の老人分夜燈、烏龜鑽破す須彌の柱、象骨阿師空しく輥毬、何ぞ似かん禾山の解打鼓。咄、寐語することを得ざれ。

觀音長老至る上堂、人は京師より來り、去つて仕山翁と作る。說き盡す山雲海月、聲前の一語通ぜず、事函蓋を存し、理箭鋒を拄ふ。儞は啞の如く、我れは聾の若し。虎南山に在つて大蟲を咬む。

上堂、(ホ)竺土大仙の心、東西密に相付す。芳草(ヘ)萋萋たり鸚鵡洲、秦川(ト)歷歷たり漢陽の路。天水に似、月勾の如し、少年客と爲る處、今日君が遊ぶを送る。

上堂、「一夜上堂せんことを思量して、黃昏より坐して三更に到る、抖擻すれども更に一句無し。今朝口裏膠生ず。」良久して云く、「一人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、「多得は少得に如かず、少得は現得に如かず、現得は不得に如かず。」拂子を擊つて云く、「(チ)我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂、「獅子吼無畏の說、河沙の諸佛同一舌、針頭用ひず重ねて鐵を添ふることを。」良久して云く、「大小の建長、巧を弄じて拙となす。」

(ホ)竺土。この句、石頭の參同契の語なり。
(ヘ)萋萋。はえしげること。
(ト)歷歷。分明なること。
(チ)我見。法華の句、佛が因地に燈明佛の時、記莂されたが、今は事實となつたと。

開爐、太守至る上堂、「火爐頭邊一轉語有り、胸中に蘊在して、未だ曾て容易に拈出せず。檀那到來、拈出して㋨箇の暖熱を作さん。」拄杖を拈じ、移つて東邊に向つて云く、「山悠悠水悠悠、幽州江口、采石渡頭、華山に馬を歸し、桃林に牛を放つ。與麼の告報、拄杖子還つて甘ふや也た無や。」卓拄杖一下して云く、「曾て霜雪の苦を經て、楊華の落つるにも也た愁ふ。」

達磨忌拈香、㋦嗚咿嗚咿、對面是れ誰ぞ。眼圓に齒闕く。我れ伊を識らず、㋸德の報ずべき無く、恩の酬ゆ可き無し。㋾茫茫たる滄海浪石頭を打す。

上堂、祖師未だ來らざる已前、諸人醋を喫して未だ曾て醎と道はず、既來の後、諸人山に上つて脚濕ふと道はず。大都そ法爾如然、何ぞ必ずしも此の荊棘を添へん。建長數へて吾が祖に到る、已に二十七代を得たり。阿師數へて迦文に到つて、已に是れ二十八枝。東西兩段同じからず、知らず甚の傳授か有らん。諸人若し也た會得せば、祖師㋻猶ほ在り、若し也た會せずんば、蒼天寃苦。

上堂、千種の言、萬般の語、三尺の竹篦頭、黄金糞土の如し。諸人若し也た盡く掀翻せば　也た是れ㋕泗州の人、大聖を見る。

上堂、「光陰箭に似、日月梭の如し、㋵雲少室を埋め、凍黄河を鎖す。」良久して云く、「衣穿つて肘露

㋨箇暖熱。あまり愛想がない。
㋦嗚咿。あゝあゝとなげくこと。
㋸無德可報。水一滴、粟一粒。
㋾茫茫滄海。缺齒の老僧、未だ澄潭と激浪とに在らず。
㋻猶在。肉尙ほ温なり。
㋕泗州人。方語に云く、「可可地」、「又慣れ見る。」
㋵雲。或は雪の字の誤か。

る㋟也、㋹靜處薩婆訶。」

上堂、㋞入理深談全く照對無し、迦葉鈴を聞いて舞を作し、老盧半夜㋡碓を踏む。白雲斷ずる處是れ青山、行人更に青山の外に在り。

冬至小參、「㋥枯桑天風を知り、海水天寒を知る。祖師門下の客、只だ髑髏乾くことを貴ぶ。與麼與麼、威音那畔全く來由を沒す、不與麼不與麼、濟北の㋤家風㋶却つて些子に較れり。衲僧家自ら是れ彼無く此無し。飽參の人、何ぞ須ひん短を按べ長を論ずることを。青山往來を礙へず、夜深けて狗露柱を吠ゆ。張公却つて李公に報ず、說いて道ふ石牛子を生ずと。」拄杖を以て畫一畫して云く、「勞して功無し。」復た擧す、僧、投子に問ふ、「大死底の人却つて活する時如何。」子云く、「㋰夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」拈じて云く、「金針眼を刺す、之を擬すれば還つて差ふ、烈士成功㋒狂矢を發つ。是れ汝等諸人甚れの處にか古人と相見せん。」連喝兩喝。

上堂、拄杖を拈じて云く、「這裏に透得せば、儞に許す㋼地獄を出づることを。那邊に透得せば、儞に許す地獄に入ることを。其れ或は未だ然らずんば、驢居先生の道ふ底。」拄杖を卓く。

上堂、月冷かにして霜天道者孤なり、五台山上文殊有り、諸人若し也た悟り去らば、一生參學の事

㋟也。おき字なり。
㋹靜處。無心眞の境界。
㋞入理。唇齒中の緒餘じや。
㋡蹈碓。出生入死八十生。
㋥枯桑。この語は會元にある句なれども未詳。
㋤家風。四料簡、三句、四喝。
㋶却較。すこしはなせると。
㋰不許夜行。狗、露柱を吠ゆ。
㋒發乎狂矢。箭の的に在るが如し、當つて自ら知らず。
㋼出地獄。調達を救ひ得ん。

舉んぬ。其れ或は未だ然らずんば、三條椽下（ス）嗺盧都。且く看よ、趙州狗子無佛性、忽然として手を伸べて掌を見ず、烈焰光中（ホ）鯉魚を釣る。

除夜小參。僧問ふ、「圓悟禪師、佛燈珣禪師を推して、水潭の中に入つて問うて云く、『牛頭未だ四祖に見えざる時如何。』燈云く、『潭深うして魚聚ると。』還つて諦當なりや也た無や」と。師云く、「焦甎打著す連底の凍。」進んで云く、「見て後如何。燈云く、『樹高うして風を招く。』又作麼生。」師云く、「賊空屋に入る。」進んで云く、「見と未見との時如何。燈云く、『脚を伸ぶることは只だ脚を縮むる裏に在り。』此の意又作麼生。」師云く、「紅爐に入らずんば、爭か眞僞を辨ぜん。」進んで云く、「和尚每に室中、百丈捲席の話、香嚴擊竹の頌を擧して、道聲未だ絕えざるに、竹篦隨つて至る。意作麼生。」師云く、「猛火龜を灼いて吉凶を見んと要す。」進んで云く、「還つて衲僧の痛癢を知る有りや也た無や。」師云く、「（ツ）點。」僧便ち禮拜す。師乃ち云く、「化工才に動じて凍痕開く、露柱燈籠笑ひ滿腮。（ヤ）消息盡くる時重ねて會面す、赤（マ）洪崖、白洪崖を打す。大衆會すや、一句は新年頭に在り、一句は舊年尾に在り。新年頭に薦得せば、便ち知らん舊年去らざることを。舊年尾に薦得せば、便ち知らん新年來らざることを。舊既に去らず、新既に來らず、南に泰華有り、東に天台有り、西に峨眉有り、北に五

（ス）嗺盧都。默然として言はず。
（ホ）鯉魚。淵に臨んで多くは見る魚を得ることの難きことを。
（ツ）點。點破のことなり。
（ヤ）消息盡時。三百六十の借錢のきれた時分。
（マ）洪崖。頭の赤いせきぞろが頭の黑いせきぞろの鼻なれちつた。せきぞろは「節季にて候ふ」の略、歲末の乞食のいふことば。

台有り。阿呵呵。富んでは㋕千口も少きを嫌ひ、貧にしては一身も多きを恨む。」復た云く、「流泉は是れ命、湛寂は是れ身、子湖狗を看、㋫夫子麟を獲たり。」

歳旦上堂、僧問ふ、「記得す、大慧禪師、毎に竹箆を擧して云く、『喚んで竹箆と作すときは則ち觸る、喚んで竹箆と作さざるときは則ち背く』と、如何。」師云く、「坑に墮ち塹に落つ。」進んで云く、「只だ背觸外の如きんば如何が相見せん。」師喝して云く、「㋙儞が頭、什麼の處にか在る。」僧禮拜す。師乃ち云く、「元正、喜色を添へ、瑞雪、長空に滿つ。爲に祝す邦君の壽、華は開く萬歲松。」

上堂、「一二三四五、從頭君が爲に擧す、謹んで參玄の人に白す、光陰虛しく度ること莫れ。」卓拄杖して下座。

上堂、「道不及の處㋓一句を說く、說き了つて還つて不說の時の如し。冰泮け雪銷して春色動く、老梅紅拆く去年の枝。」拂子を擊つて下座。

元宵上堂、天上月圓に、人間㋢月半なり。燈明如來、贓に和して款を納る。

上堂、山萬朶水萬支、明月乍ち圓に乍ち缺け、白雲乍ち合し乍ち離る。老胡九年面壁、無孔の鐵鎚を賣弄す。

上堂、山僧方丈の內より出づれば、諸人僧堂の中より來る。坐底は自ら坐、立底は自ら立、㋐甚の

㋕嫌千口。鉢飯で十方法界を供養する。
㋫夫子獲麟。春秋を書き止めた。
㋙儞頭。者裡頭上に頭を安んず。
㋓說一句。目出度い一句を行得す。
㋢月半。半明半暗。
㋐甚斷缺。きぬ針ほども朕迹はない。

虧缺の處か有る。若し也た好肉に瘡を剜るは、過諸人に在り、山僧が事に干らず。

上堂、「二は一に由つて有り、一も亦守ること莫れ。十里の牌、五里の㋚堠、張婆が店、李公が酒、水北雲南、驢前㋖馬後。是れ汝等諸人、還つて護惜すや也た無や。」良久して云く、「㋙正狗油を偸まず、雞燈盞を銜んで走る。」

上堂、内より放出せず、外より放入せず、全火祇候、且つ堦級無し。然も此の如くなりと雖も、枯木巖前差路多し。

上堂、「山僧別に長處無し、衆に對して倡て脫空せず。所以に道ふ、文殊普賢・觀音・彌勒・狐狼・野干・貁貍・鼷鼠・守宮・百足・蜥蜓・蜈蚣。」卓拄杖して云く、「㋔依俙として曲に似て才に聽くに堪へたり、又風に別調の中に吹かる。」

佛涅槃上堂、「瞿曇、今朝寂滅を示す、波旬は舞を作し、人天は悲しむ。」拄杖を拈じて云く、「南去北來、㋯人自ら老い、夕陽は長く釣船の歸るを送る。」卓拄杖して下座。

東福の㋛無關至る上堂、慈明、神鼎を訪ひ、東福、福山に見ゆ。西河の獅子を弄せず、哮吼更に兩般無し。盤珠を走らしめ珠盤を走る、古兮今兮諸人自ら看よ。

㋚堠。一里塚(里程標)なり。
㋖馬後。舊時の路た踏むこと莫
㋙正狗不偸油。之れらが佛光の悟後の刻苦より出た些子。
㋔依俙。古曲の調に似て居るが、時時別の調べが交つてならぬ、眞箇の物でないからじやと。
㋯人自老。天人は天に歸し、地神は地に歸す。
㋛無關。普門、後に南禪開山となる。
㋓虛庵。祐圓、闘溪隆に嗣ぐ。

建仁の(ヱ)虚庵至る上堂。賓、主を看、主、賓を看る。儞底我れ會せず、我れ底儞聞かず。一對の鐵鎚無孔打成す。一合の乾坤、同じく闌干に倚つて一語無し、同じく看る海山暮雲を生ずることを。

上堂。東山下の事、節度使の信旗の如くに相似たり。南來北來、只だ觀瞻すべし、(ヒ)犯著すべからず。犯著するときは則ち千里横屍。」拄杖を靠けて下座。

上堂。「(モ)仰面天を見ず。低頭地を見ず。」大衆を召して云く、「會すや、達磨將ち來らず、迦葉門前底。」卓拄杖。

上堂。明月雙溪八詠樓、少年客と爲つて君が遊を送る。青山礙へず行人の路、自ら是れ行人(セ)白頭を嘆ず。

浴佛上堂。「老胡呱地一聲の時、大言牌を開いて語甚だ癡なり。是れ年々(ス)惡水を澆ぐにあらず、他の老に到るまで非を知らざることを洗ふ。」卓拄杖して下座。

結夏小參、僧問ふ、「九旬禁足英靈を埋沒す、三月護生株を守つて兎を待つ。如何なるか是れ衲僧本分の事。」師云く、「鐘聲儞が髑髏を穿破す。」進んで云く、「記得す、龐居士云く、『十方同聚會、箇箇學無爲、此れは是れ選佛場、(イ)心空及第して歸る』、此の意如何。」師云く、「太虚掛針の路無し。」進んで云く、「德山小參答話せず、還つて爲人の處有りや也た無

(ヒ)不可犯著。動著すると、やけ火箸が出る。
(モ)仰面。眼睛、筋なし。
(セ)嘆白頭。但だ頭の白く人の老いたるを看て、人の老いて頭の白きことを知らず。
(ス)澆惡水。元來人の是非を說くはきらひじや。
(イ)心空及第。白衣の拜相じや。

や。」師云く、「龍、鳳巣に宿す。」進んで云く、「趙州小參答話せず、又且つ如何。」師云く、「貧にして富の裝裹を作す。」進んで云く、「三句已に師の指示を蒙る、向上宗乘の事如何。」師云く、「一老一不老。」僧禮拜す。師乃ち云く、「十五日以前、十五日以後、一線路を撥開し布袋口を結却して、諸人と九十日の內、水牯牛子を安頓す。貴ぶらくは百不知百不解にして、月に臥し雲に眠り、東倒西擂せんことを要す。所以に道ふ、(ロ)太陽門下日々三秋、明月堂前時々九夏。寶劍を荒草堆頭に擲ち、紅旗を千聖頂上に卓つ。便ち以て大方に獨歩し、天外に出頭すべし。然も是の如くなりと雖も、切に忌む頭角の生ずることを。」復た擧す、僧、洛浦に問ふ、「魔佛不到の處如何が體會せん。」浦云く、「燈明かなり千里の象、暗室に老僧迷ふ。」拈じて云く、「洛浦の好語只だ是れ這の僧の話に答へ了らず、我れは諸人に點向せんと欲す、恐らくは負累を成さんことを。來日四頭首を請じて、各所解を呈せしめん。」

頭首の秉拂を謝する上堂。「(ハ)落賴の家風折脚鐺、大家扶竪し大家撑ふ。老來怕れず家醜を揚ぐることを、(ニ)甚の眉毛落ちてか又生ずることを管せん。」

上堂、諸佛說下到の處、正に是れ(ホ)藥忌の譚。老僧曾て諸人を屈抑せず、諸人各各水洒げども著けず。

上堂、思量不到の處、構赴不及の時、(ヘ)鳥は棲む無影の樹、華は發く不萠の枝。

(ロ)太陽門下。三伏暑中にも仲秋のやうに涼しい。
(ハ)落賴家風。破れ屋に缺け鍋。
(ニ)甚眉毛。眉の落つるも璧に穴のあくもかまはぬ。
(ホ)藥忌。くすりの食ひ合ひは害になる。
(ヘ)鳥棲。心の鳥、心の華。

上堂、拄杖を拈じて大衆を召して云く、「人を殺す寃賊、已に老僧に收下し了らる。」也た諸人を普請して、各各安心。」卓拄杖して下座。

上堂、一夏只だ三箇月有り、眨眼過し了る兩箇月、曠大劫來生死の根、(ト)七尺單前打して徹せしめよ。

太守、金光明經を書し陞座を請ふ。師拂子を拈起して云く、「信相菩薩夢る所の金鼓を見んと要すや。」拂子を以て左邊擊一下して云く、「只だ是れ這れ、建長老漢が拂子を見んと要すや。」右邊擊一下して云く。「只だ者れ是れ、只だ金鼓聲の中、一切の言詞を具し、一切の妙義を具して甘露門を開き、甘露城に入る。甘露室に處し、諸の衆生をして甘露味を食はしめ、一切の罪愆を懺し、一切の過患を滅せしむるが如し。瘂者能く言ひ、盲者能く視る、聾者能く聽く、跛者能く行く。此れを別別解脱と名く。老僧が拂子も也た(チ)些少の變化有り、能縱能奪、能殺能活、體有り用有り、照有り權有り、凡聖の窟穴を破り、佛祖の性命を斷ず。其の竪や、天魔呵手するに分有り、其の橫や、外道窺覷するに門無し。若し(リ)喚んで一と作さば、(ヌ)夢時と覺時と同じからず、若し喚んで二と作さば、覺時と夢時と(ル)別無し。若し夢時に向つて薦得せば、便ち見ん、釋迦如來、本曾て生ぜず、亦曾て滅せず、等正覺を成じ、亦曾て說法度生せず、亦曾て法眼藏

(ト)七尺單前。色力壯健なるとき。
(チ)些少變化。がてんがゆかぬ。
(リ)喚。金鼓と拂子と。
(ヌ)夢時。一切の言詞を具す。
(ル)無別。金鼓に寤寐の二相なし。

を付せざることを。若し覺中に向つて薦得せば、便ち見ん、釋迦如來壽命無量、福德無量、說法無量、化度無量なることを。恁麼に見得せば、夢時卽ち是れ覺時の道理、覺時卽ち是れ夢時の消息なり。元長老が拂子、信相菩薩の鼻孔を穿過し、信相菩薩の金鼓、元長老が面門を擣破す。」良久して云く、「青蓮水に映じて華の開くこと久し、自ら是れ行人未だ家に到らず。」復た偈を說いて曰く、「諸佛本是れ虛空の體、修證成佛亦如幻、(ヲ)諸幻の中に於て實義を說く、實義了了亦實に非ず。如來の金光衆相を示す、略して緣起を示す方便の說、身を捨てて虎を飼ひ王宮を出でず、水を負ひ魚を救ひて空澤に入る。如來の捨身不思議、此れは是れ恆河の一沙のみ。檀那經を書して亡者に報じ、一念普通す諸佛刹、香煙處處佛事を作す。幽冥の路盡く豁開す。老僧此の空空の法を說く、爲に薦む亡靈空覺の體、一靈不昧湛然として存し、卽ち證す無生の空法忍。」

(ヲ)於諸幻中。如幻中に於て如幻中の佛事を打す。
(ワ)可知禮也。日本のいろは、初學をいふ。
(カ)漿水錢。おも湯も。

上堂、骨打骨打、聾の如く啞の如し。上下三指、彼此七馬、甚に因つてか此の如くなる。(ワ)可知禮也。

解夏小參、「法身に三種の病二種の光有り、九十日の內、山僧時時諸人に說與す、諸人還つて透得すや也た未だしや。若し也た透得せば、儞に許す拄杖を橫肩し草鞋を緊悄して、南瞻部州に鉢を展べ、西瞿耶尼に飯を喫し、大洋海底に馬を走らしめ、鐵輪頂上毬を輥ずることを妨げず。是れ箇の洒洒

落落の衲僧也た道へ曾て福山老漢に見え來ると。若し此の如くならずんば、(カ)漿水錢は且く置く(ヨ)草鞋錢阿誰をして還さしめん。」復た擧す、仰山、巖頭に參ず。頭、拂子を竪起す。仰山坐具を展ぶ。頭拂子を拈起して背後に置く。仰山坐具を將つて肩上に搭けて出づ。頭云く、「我れ(タ)汝が放を肯はず、只だ爾が收を肯ふ。」師拈じて云く、「大小の巖頭、分毫上に向つて(レ)利を取る。」

解夏上堂。「來らんと要せば便ち來る、去らんと要せば便ち去る。脚は是れ自家の脚、(ソ)路は是れ官中の路。驀に大衆を召して云く、「會すや、絲毫を掛著せば、西秦東魯。」卓拄杖して下座。

新舊知事を謝する上堂、秋風、涼しく秋氣清し、烏飛び兎走り、斗轉じ參横ふ。老僧落得脚を展べて睡る、自ら人の折脚鐺を扶くる有り。

上堂。「露冷に天高くして秋毫を著けず、山遙に海濶うして一塵到らず。正與麼の時、諸人作麼生。」良久して云く、「也た是れ鬼漆桶を爭ふ。」

武州太守の忌、「法華・楞嚴を讚して陞座を請ふ。妙性圓明、諸の名相を離る、妙音普應して十方に遍滿す。塵塵朕迹を留めず、法法更に遮攔を沒す。天に在つては天に同じく、人に在つては人に同じ。偏圓往來を礙へず、迷悟更に差別無し。法華に在つては則ち(ツ)純圓獨妙、楞嚴に在つては則ち妄を拔き眞を析つ。法華は深固幽遠、楞嚴は明白洞達。法華は眞實相を示し、楞嚴は方便門を開く。一道清淨、無壞無雜。果滿眞常、功無得に歸す。

(ヨ)草鞋錢。おれが財布の錢を借りて、皆濟はいつじや。
(タ)汝放。これは滴油箭じや。
(レ)取利。盗人のうはまへ。
(ソ)路是官中。舊路莫レ踏、新路不ニ踏破一、舊路不ニ重踏一、新路非ニ踏破一。
(ツ)純圓。暫時の安名。

盡すれば(ホ)沙界に廓周し、一塵中邊に寄らず。此れは是れ祕密(ヘ)總持、亦一乘圓頓と名く。佛佛異口同音、這箇の時節を出でず、只だ今日の如き、武州太守一周の霜露、忌日斯に臨めり。覺性湛然として、(ト)如來光中出沒自在、這裏に向つて轉歩せんことを要す。」拂子を以て指して云く、「阿那靑靑黯黯の處に去れ。」復た云く、「僧祇大劫前頭の路、無依無欲今古無し。蕩蕩圓成す百萬門、此れは是れ老僧行履の處、汝吾が向上の關を透らんと要せば、須らく者裏に向つて急に歩を進むべし。思量すること莫れ、回顧すること莫れ、手を撒して堂堂、臂を掉つて行け。吾れ那裏に在つて汝を(チ)相接せん。黃金の城郭妙高臺、夜半子の時日卓午。」

太守、釋迦如來一鋪を繪き、法華・金剛・圓覺を寫して、最明寺殿の爲に陞座せんことを請ふ。「如來の法性、所說の法を離れず、所說の法、卽ち是れ如來の體。逈逈廓然として無寄、頭頭運用無方。一卽三、三卽一、法華・金剛・圓覺、不同不別、此れ卽ち彼れ、彼れ卽ち此れ。醍醐乳酪更に異味無し、佛佛異口同音、句句全く報化を超ゆ、一氣春を回して萬彙自然に發秀し、一月海を出づ、萬邦昭明ならずといふこと無し。此れを金剛の正體と名く、亦諸佛頂句と名く。塵毛刹海、動地放光、塵點劫前、菩提具足す。且く道へ、最明寺殿何の報地に生ず、塵塵刹刹是れ家鄕、千佛光中同じく授記す。」復た云く、「年年霜露慈容を念ふ、罔極恩深うして報ゆるに窮り莫し。首を回せば廓然(リ)三際斷ゆ、靈山の一會香風を起す。」

(ホ)沙界。恒河沙の世界。
(ヘ)總持。陀羅尼。
(ト)如來光中。佛智裏をいふ。
(チ)相接。同道唱和。
(リ)三際。過去、現在、未來をいふ。

冬至小參、僧問ふ、「夾山と定山と同じく行く。定山云く、『生死の中に物有り、卽ち生死に迷はず。』意旨如何。」師云く、「(キ)鷄、燈盞を銜んで走る。」進んで云く、「夾山云く、『生死の中に物無く、卽ち生死無し。』又作麽生。」師云く、「(ク)土宿黃牛に騎る。」進んで云く、「二人互に相許さず、同じく往いて大梅の常禪師に問ふ、『那箇か親、那箇か疎。』梅云く、『一親一疎』と。」師云く、「不疑の地に鉤在す。」進んで云く、「次の日再び往いて問ふ、『那箇か親、那箇か疎。』梅云く、『親者は問はず、問者は親しからず。』此の意又且つ如何。」師云く、「劍は餓人の手に握る。」僧禮拜す。師乃ち云く、「(ケ)屈述ぶるに堪へたり、(コ)一字公門に入らば、九牛車けども出でず。巖頭橈を呈し棹を舞し、祕魔一向に叉を擎げ、臨濟胡喝亂喝、德山雨を打し風を打す。這の一隊の漢、總に未だ(サ)轉身の處有らず。福山(シ)屋下に屋を架することを解せず、脫胎(ス)換骨の手を施さんことを要す、諸人還つて會すや。所以に道ふ、華岳參天の勢有り、一塵其の高さを滅せず。紅日天に麗くの明有り、一草も其の影を遺さず。正當今日、一陽來復す、今夜分冬、甚に因つてか(セ)與麽に說話す。」卓主丈一下して云く、「玉節虎口を撑ふ。」復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「世界濶きこと一丈なれば、(ソ)古鏡濶きこと一丈。世界濶きこと一尺なれば、古鏡濶きこと一尺。」玄沙云く、「火爐濶きこと多少ぞ。」峰云く、「古鏡の濶さか如し。」師拈じて云

(キ)鷄銜。よそ見をするなと。
(ク)土宿。土地神なり。
(ケ)屈堪述。脚を伸ぶることは縮脚の中に有り。
(コ)一字公門。政府へ出した訴狀は、再び一字も變ずることは出來ぬと。
(サ)轉身處。牛を宰して筋骨を收めず。
(シ)屋下架屋。明頭に明頭を打せず、暗頭に暗頭を打せず。

く、「大衆看よ看よ、山門、佛殿に騎却して、汝等諸人の鼻孔裏より去れり。」

冬至上堂、冬至寒食一百五、㋓二十四番華信の風。盡く者裏從り流出す。錯錯。拄杖夜來八角を生ず、何ぞ似かん、龍牙の㋢破木杓に。

月旦新舊頭首を謝する上堂、一を擧して二を擧することを得ず、一著を放過すれば第二に落在す。」良久して云く、「㋐語助と謂ふ者、焉哉乎也。」

開山忌日拈香を請ふ。涅槃を證せず生死に任せず、茫茫たる大地行蹤を絶す。蟭螟眼中夜市に遊ぶ。父は子の爲に隱す、㋚手を借つて香を拈ず。恩を知つて恩に報ゆるの句、㋖日午三更を打す。

上堂、「菩薩子喫飯來。」卓拄杖して云く、「㋴今年田又熟す、更に肚皮を放開す。」

上堂、拄杖を拈じて大衆を召して云く、「白日空しく過すこと莫れ、青春再び來らず。堂前の露明柱、㋱歲々蒼苔を長ず。」左右を顧視して、拄杖を靠けて下座。

㋯淨智寺、曇華堂の額を掛くるを請ふ。「武州玉を埋んで玆の山に在く、縹緲たる金仙楚宇寛し。鐘鼓一新龍象集る、優曇華放いて正に高寒。大衆

㋘換骨。天下の人の爲に生膽を拔く。

㋫興麼。建長が舌頭の落處を知るや。

㋙古鏡。雲峰が鏡は强弱に随ふ。

㋓二十四番。二十四種の花あり、一番は梅花。

㋢破木杓。そこぬけびしやく。

㋐謂語助者。これは千字文の末尾の語なり、語言の助輔と稱する焉は反說なり、哉は歎なり、乎は嗟なり、也は辭を絕するなり、焉と也とは決辭なり、哉乎は疑辭なり、巳上同書の注に見ゆ。「やいそれは佛光和尙、どこから買ふてきたと云ふ下語なり」と或抄にあり。

㋚借手拈香。良藥も良藥で功能が出る。

㋖日午打三更。日中を夜中にする。

優曇華、瑞現の處を見んと要すや。」手を以て額を指して云く、「優曇華は清淨無垢、色塵に住せず。是れ諸佛の妙容、乃ち人天の景仰すること猶ほ寶洲の能く一切の妙寶を生ずるが如く、猶ほ朗月の能く一切の幽冥を照すが如く、猶ほ良藥の能く一切の煩惱を療するが如く、猶ほ甘露の能く一切の焦熱を滅するが如し。一切の諸善功德を莊嚴し、一切の菩提行願を成就す。若し者裏に向つて薦得せば、便ち清淨解脱の門に入るべし。其れ或は未だ然らずんば、(シ)暮雲の歸つて(エ)未だ合せざるに對するに堪へたり。遠山限り無き碧層層。」

中秋上堂、「千般(ヒ)惺惺、萬般歷歷なるも、如かじ百不知百不解ならんには。此れを彌勒内院と名く。若し此の三昧を證せば、百劫千生流浪の苦を免れん。」卓拄杖。

上堂、「(モ)水に入り泥に入るの句、(セ)萬仞崖頭に歩す。猢猻鐵砧に坐し、孩兒華皷を弄す。古兮今兮奈何ともすること沒し。機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。」卓拄杖。

上堂、「山僧幾日か箇の上堂を做し得たる。直に是れ玄妙、直に是れ奇特。夜來三更三點、箇の(ス)噴嚏を打して、覺えず打失し了れり。知らず何れの處にか落在す。是れ汝等諸人、各各老僧が爲に尋ね

(キ)今年田叉熟。法身還つて飯を喫するや、よく見よ。
(メ)歲歲。佛光は露柱の蒼苔を目の蓋にする。
(ミ)淨智寺。鎌倉五山の内。
(シ)暮雲。これは碧岩第二十則の頌（雪竇）、同條參照すべし、宇宙の自然美を詠す。
(エ)未合。まだ日がくれずんばと。
(ヒ)惺惺。清淨無垢の大菩薩の出世も。
(モ)入水。嬰兒の足下を禮す。
(セ)萬仞。毘盧の頂上を坐斷して。
(ス)噴嚏。くさみすること。

て看よ。東廊下、西廊下、眠單前、蒲團上、忽然として摸著せば、却つて將把し來つて山僧に呈似せよ。」良久して下座。

太守、㋑十六應身を送る拈香、應供四天下、處々狼藉を成す、神通妙用は尊者に如かず。若し是れ佛法ならば、老僧に還して始めて得ん。儞が空を觀じ定に入ることを要せず、儞が東を指し西を說くことを要せず、儞が龍を降し虎を伏すことを要せず、儞が須彌に騰踔することを要せず。建長寺裏に掛搭して、且く老漢が竹篦を喫せよ。

上堂、「正に知見と說く時、知見即ち是れ心、心、知見と說くに當つて、知見即ち如。今大衆、老僧は大唐の人、今年五十八歲、㋺戌生の人命狗に屬す。」良久して云く、「豈に道ふことを見ずや、佛殿堦前狗天に尿す。」卓拄杖。

開爐上堂、「些子の火種を挑撥するに、㋩自古自今、其の人を得難し、千萬人の中、一箇半箇有り大衆歲晚天寒く、山空しうして葉落つ。諸人喚んで行脚の士と作すも、少室九年面壁底の時節を說著することを得ざれ。」卓拄杖。

初祖忌上堂、「老和尙何の所有ぞ、金陵一番打脫し、少林尤も更に㊁醜を出す。吾れ今與に遮掩せんとを要す、阿誰か同じく共に手を出さん。」卓拄杖して云く、「正狗油を偸まず、雞燈盞を銜んで走る。」

㋑十六應眞。十六羅漢のこと。
㋺戌生。佛光は戌の年の生れなり。
㋩自古自今。火を道ふて何ぞ必ずしも口を燒却せん。
㊁出醜。衣が破れて肘が出た。

同じく拈香、「金は火を將つて驗み、人は財を將つて驗む。法孫此の㋭兜樓一炷を將つて、這の碧眼の老胡を驗みんことを要す。是れ鼻孔有るか、是れ鼻孔無きか。」香を挿んで良久して、大衆を顧視して云く、「㋬山蒼蒼水茫茫、人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、大衆を召して云く、「㋣赤肉團上に㋠一無位の眞人有り、常に面門に在つて出入す、未だ證據せずんば出で來れ。㋷朝打三千、暮打八百、甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「韓信鐵鷂を放つ。」

佛成道上堂、拄杖を竪起して云く、「看よ看よ、釋迦老子昨夜三更三點、將に大地衆生の性命を將つて、針鋒頭上に㋦劄在し、㋸三眼國土に入つて、自恣の佛事を作す。是れ汝等諸人還つて知るや也た無や。若し也た知得せば、各々箇の轉身の句を道へ。」良久して云く、「㋾穿耳の客に逢ふこと罕に、多くは刻舟の人に遇ふ。」

長樂・長興・光福の三長老を謝する上堂、短者は自ら短、長者は長、㋻森森密密可憐生、㋕學翁門下凡木無し、葉葉枝枝總に是れ香し。」卓拄杖して下座。

上堂、「小隱は山に居し、大隱は市に居す。福山老漢倒泥擂水、是れ汝諸

㋭兜樓。風什麼の色をか作す。
㋬山蒼蒼。山の高きも水の流も祖師の恩乳じや。
㋣赤肉團上。この身體の上に。
㋠一無位。白衣の拜相。
㋷朝打三千。打つて打つて打ちまくる。
㋦劄。鍼、「さす」なり。
㋸三眼國土。淨妙、解脱、無差別の三。
㋾罕逢穿耳。穿耳の客は耳に環たつけたる人、達磨又は作家なり、刀を川に落して舟を刻む馬鹿者をいふ。
㋻森森。栴檀林中無雜樹。
㋕學翁。佛光自らをいふ。

人還つて救ひ得んや也た無や。」良久して拂子を擊つて云く、「㋵三生六十劫。」

除夜小參、僧問ふ、「僧、瑞巖に問うて云く、『如何なるか是れ佛。』巖云く、『石牛』と、此の意如何。」師云く、「㋟白月には則ち現ず。」進んで云く、「如何なるか是れ法。巖云く、『石牛兒』と、此の意又且つ如何。」師云く、「黑月には則ち隱る。」進んで云く、「恁麽ならば則ち不同にし去るや。巖云く、『㋹合不得、』又作麽生。」師云く、「朱に近づく者は赤し。」進んで云く、「甚麽に因つてか合不得なる。巖云く、『同の同なるべき無し、』又且つ如何。」師云く、「墨に近づく者は黑し。」進んで云く、「何れの階級にか落つ。巖云く、『㋞排不出、』又且つ如何。」師云く、「東西南北。」進んで云く、「甚に因つてか排不出なる。巖云く、『從前階級無し、』又作麽生。」師云く、「一二三。」進んで云く、「未審し、何の位次にか居す。巖云く、『普光殿に坐せず。』此の意又且つ如何。」師云く、「晝夜一百八。」師乃ち云く、「老僧物義を傷めざるの句有り、曾て擧著せず。此の時分歲、諸人の爲に擧すること㋡一遍著せん、諸人子細に聽取せよ。今冬三箇月、二月總に是れ大、此の夕是れ歲除、圍爐團欒として坐す。坐して漏殘の時に到る、一滴新舊を分つ。金烏海門を出で、雞は拍す欄干の曉、燈籠一歲を添得し、露柱一年を滅却す。嘉州の大象呵呵大笑、黃梅の石女大いに蒼天と叫ぶ。甚に因つてか此の如くなる、朱顏明鏡の裏、古劍髑髏の前。」復た擧す、長生因に

㋵三生六十劫。三生ばかり食ふてすまぬ。
㋟白月。月夜、黑月、月の入り。
㋹合。閉合の義。
㋞排不出。中人以下には上を說くべからず。
㋡一遍著。著は得の義。
㋧雪峰。義存なり。

(ネ)雪峰に問ふ、「光境倶に忘ずる時如何。」生云く、「(ナ)皎然が過を放さば、箇の道ふ處有らん」峯云く、「汝が過を放さば、作麼生か道はん。」生云く、「皎然も亦和尚の過を放さん。」峯云く「(ラ)汝に二十棒を放す。」師乃ち拈じて云く、「雪峯は獅子、兒に敎へて踞地翻空せしむるが如く、蹉眼することを得ず。皎然は生生獰獰、哮吼一聲、便ち母を噬むの作有り。」

上元上堂、拄杖を拈じて云く、「(ム)柳色黄金嫩く、梨華白雪香し」大衆を召して云く、「會すや、此れは是れ然燈如來の說、(ウ)熾盛光明神呪なり。諸人若し會せば、玉樓に翡翠巢ひ、若し也た會せずんば、金殿に鴛鴦を鎖す。」卓拄杖して下座。

上堂、「百千の諸佛に參ぜんより、如かじ一無事の道人に參ぜんには。百千無事の道人に參ぜんより、如かじ一箇の枯椿に參ぜんには。」大衆を召して云く、「且く道へ、枯椿甚の長處か有る。」卓拄杖して云く、「深夜一爐の火、(ヰ)渾家身上の衣。」

佛涅槃上堂、「如是如是、不是不是、鼈魚竿を咬む、虎雞(ノ)觜を生ず。」卓拄杖して大衆を召して云く、「會すや、佛滅二千年、比丘慚愧少し。」

上堂、粒米分明に粒珠に抵る・千般の痛苦是れ田夫、盛り來つて滿鉢都べて拋擲、當に念ずべし賣身し來つて租を納むることを

(ナ)皎然。唐の詩僧。
(ラ)放汝二十棒。此の鐵券を免るものがない。
(ム)柳色。みごとなる上元なり。
(ウ)熾盛。常評熾然として間斷なし。
(ヰ)渾家。衣を著けて風呂に入るものは多い。
(ノ)生觜。之れが虛空の骨の痛むに妙藥じや。

結夏小參、僧問ふ、「僧、古德に問ふ、『如何なるか是れ清淨法身。』德云く、『㋔山華開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。』此の意如何。」師云く、「髑髏を磕破す。」進んで云く、「又一古德有り、云く、『膿滴滴地』と、又且つ如何。」師云く、「九九八十一」進んで云く、「今夜和尚に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。」師云く、「小より僧と爲り今六十、曾て手を擡げて公卿を揖せず」僧禮拜す。師乃ち云く、「大圓覺を以て、我が伽藍と爲す、身心安居、平等性智。山僧福山從り瑞鹿に過ぎ、瑞鹿自り復た福山に過ぐ。其の他を見ず、但だ見る風黃塵を卷いて面を撲つ、車平地を行いて溝を成す。馬蹄畢栗撥剌、南よりし北よりす、牛角崢崢嶸嶸、或は短或は長、山僧㋗覺えず舌を吐く。何ぞや、精陽剪らず霜前の竹、水墨徒に誇る海上の龍。」復た擧す、「法の本㋳法は無法なり、無法の法も亦法なり。今無法を付する時、法法何ぞ曾て法ならん。」拈じて云く、「世尊此の偈、黑石蜜の中邊、皆甜きが如し、黃連木の根莖、皆苦きが如し。是れ汝諸人、作麼生か呑まん、作麼生か吐かん。」喝一喝。

上堂、古人道く、「擧ぐるに顧みざれば卽ち差互す、思量せんと擬せば、何の劫にか悟らん。」師云く、「古德恁麼の說話、一を去つて一を取る、皮を黏じ骨を綴る、獼猴の㋮黐膠を弄ぶが如く、甚の撇脫か有らん。福山が這裏　眼眉毛を見ず、方に是れ眞得なり。」卓拄杖して下座。

㋔山華開。澗水は谷の水、山の景色の美しきをいふ。
㋗不覺吐舌。何故ぞ、是の如し、飯に逢ふて飢を忘す。
㋳法無法。說者聽者、元來幻なり。
㋮黐。「とりもち」なり。穴に落ち塹に墮す。

上堂。「㋘說にして默、默にして說、直鉤鯤鯨を釣り、曲鉤魚鼈を釣る。寛たり兮廓たり兮、古を錯ぎ今を礙く。彌たり兮渺たり兮、巧に非ず拙に非ず。」驀に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「何ぞ似かん㋫銀盌裏に雪を盛るに。」

端午上堂。「法は見聞覺知を離る、見聞覺知是れ法なり。山僧大地の人を普請して、一塵を動ぜず、大安樂の地に入り去らん。」卓拄杖して云く、「㋙唵唵唵、急急急、敕敕敕、㨶㨶㨶。」

上堂。「一夏已に一半を過ぐ、水牯牛㋓作麼生。是れ儞諸人、各各牽いて法堂上に到らば、頭角全備甚生だ次第せん。奈何ぞ甘つて自ら埋沒し、肯て承當せざる。」卓拄杖して下座。

上堂。「月出でて桂林輝く、天香舊枝に發す。東山水上に立つ、㋢姹女鬟絲を垂る。」拂子を擊つて下座。

解夏小參。「道は物外に非ず、物外道に非ず。豈に道ふことを見ずや、㋐空を捫つて響を追ひ、汝が心神を勞す。夢覺覺非 覺も亦覺に非ず。這裏身を轉得し來り、那邊騰身一擲せば、大洋海底火星飛び、泥牛哮吼して霜雹を飛す。赤條條空索索、頭を回さんと擬せば、㋚重ねて撲に遭ふ。赤脚にして舟梯に上ること能はず、南北東西㋖名邈に任

㋘說而默。說默は離微に涉る。
㋫銀盌裏。白色の銀盌に雪を盛れば、銀盌か雪か、二物一體、平等即差別、差別即平等の意を顯はす。
㋙唵唵唵。助字をいふ、焉哉乎也の如し。
㋓作麼生。頭角は生じたか隱れたか。
㋢姹女。姹は吒か、少女ならん。
㋐捫空追響。眼中に山川を種ゑ、耳中に鐘聲を貯ふ。
㋚重遭撲。天下の衲僧徒に名邈す。
㋖名邈。脚下の紅絲、錯るぞ。

す。」復た擧す、僧、㋴大同に問ふ、「如何なるか是れ本來の人。」同云く、「共に坐して名を知らず。」僧云く、「恁麼ならば則ち禮拜し去らん。」同云く、「㋔暗に愁腸を寫して誰にか寄與せん。」師拈じて云く、「大同門を開いて客を待つ、此の僧國に入つて觀光す。殊に知らず三代の禮樂は、乃ち五霸諸侯の兵器なることを。」拂子を擊つて下座。

上堂、「天崖に走徧して脚を下す處無し、大藏を閲盡して口を開く處無し。行不及說不到、今年は去年に勝れり、㋯一老一不老、阿呵呵。」膝を拍して云く、「㋛投子の道ふ底。」

開山忌日拈香を請ふ。生か死か、道はず道はず、蒼天悠悠、紅日杲杲、阿師の靈骨兮東邊西邊、洪波浩渺兮白浪滔天。沈水一炷兮㋓恩怨歷然。儉は不孝を生じ兮義は豐年より出づ。

頭首を謝する上堂、一二三三二一、㋪題目甚だ分明、上下等匹無し。栴檀叢林兮栴檀香を吹く、獅子窟穴兮獅子返擲す。

上堂、涅槃後㋲大人の相、月寒潭に落ち雲碧嶂に收まる。是れ汝等諸人動著することを得ざれ、動著せば儞が髑髏を打破せん。

上堂、乾坤の內、宇宙の間、中に一寶有り、形山に祕在す。咄。猛虎伏肉を飡せず、㋝獅子豈に鵰

㋴大同。投子、青原下丹霞然三世なり、翠微學に嗣ぐ。
㋔暗寫愁腸。之れが大目の骨髓じや、東西南北、徒に名邈す。
㋯一老一不老。十六の美女と白頭の老翁とが くび引きをした。
㋛投子道底。漆桶不會。
㋓恩怨歷然。笑ふに堪へたり、悲むに堪へたり。
㋪題目。正法輪を謗すること莫れ。
㋲大人相。大丈夫人と同じ、修行果滿の人、則ち佛菩薩地の人。
㋝獅子。南山白額の大蟲を活剝し、東樓夕陽の鵰を擊摧す。

殘を食はんや。

上堂、「淺聞深悟、深聞深悟、波斯の鼻孔三尺長し、無角の鐵牛蟲に蝕まる。」卓拄杖して云く、「飯袋子、江西・湖南、便ち恁麼に去るや。」

初祖忌上堂、「阿師未だ來らざる時、眉毛眼上に安ず、阿師既に來つて後、鼻孔大頭垂る。山遙に海濶く、木落ち霜飛び、嗚咿嗚咿。」手を以て搖曳して云く、「㋜老胡の會を許さず、只だ老胡の知を許す。」

㋑無象西堂至る上堂、「白雲庵裏、太白峯前、一句子有り、儞が邊に落在す。無學老漢、也た是れ窮曹司、舊案を檢す、十萬里の水面、此の句を尋ねんと要して、上碧落を窮め、下黃泉に入る。六七年の內方に面を見ることを得、見るときは則ち見了る。㋺不可得にして說き、不可得にして言ふ。只だ低頭して地を覷ひ、仰面して天を看ることを得たり。寃憎會苦、㋩黑蜜黃蓮。」卓拄杖して云く、「無象無象、尙ほ骨面を餘して、掌を承くるに堪へたり。用ひず重ねて肋下の拳を施すことを。」

冬至小參、橫に拄杖を按じ、大衆を顧視して云く、「北風面を吹いて、石を走らしめ砂を飛す、等しく是れ恁麼の時節、諸人且つ作麼生。若し是れ家裏の人ならば、便ち道はん、雪楊華に似たりと。若し是れ門外の漢ならば、却つて道はん、楊華雪に似たりと。火爐頭の話幾千般ぞ、是れ江南にあらず

㋜老胡。達磨なり。
㋑無象。靜照、入宋して徑山の石溪月に嗣ぐ、在宋十四年、淨智寺に住す。
㋺不可得。平漫が屛龍の如し。
㋩蜜。半は笑ひ半は恨む。

んば便ち江北、山僧恁麼の品量、諸人還つて甘ふや也た無や。」卓拄杖して云く、「㋥草繩、謾に接す黃金の索、獅子尋ね難し老鼠の梯。」復た舉す、僧、長沙に問ふ、「如何なるか山河大地を轉得して、自己に歸し去らん」。沙云く、「如何が自己を轉得して、山河大地に歸し去らん。」僧云く、「不會。」沙云く、「湖南城裏好し民を養ふに、米賤く柴多くして四隣に足れり。」師拈じて云く、「山河自己、自己山河。」良久して云く、「龍王宮殿の裏、行客經過ぐること少なり。」

書雲上堂「書雲の佳節、晉鑑臺に當る、㋭春は回る空劫已前、華は綻ぶ不萠枝上。」良久して云く、「漆桶不會、鼓を打つて普請して看よ。」

上堂、閻浮世界の衆生、㋬六種の障礙有り、八種の自在有り、只だ是れ諸人頭出頭沒して、總に覺知せず。若し也た悟り去らば、汝に許す㋣不動智㋠地を證することを。」卓拄杖して下座。

佛成道上堂、「老瞿曇何ぞ不㋷撒なる、空を指して空を說き、㋦半生半滅、福山是れ兒孫なりと雖も、活計他と各別、鐵船打就して滄溟に泛べ、麥浪堆中㋸龜鱉を釣る。」卓拄杖して下座。

歲節小參。僧問ふ、「記得す、㋾長髭、石頭に到る、頭云く、『大庾嶺頭、一鋪の功德成就すや也た未だ

㋥草繩。之れに雲門宗ぞよ。
㋭春回。初爻象なし。
㋬六種障礙。本色の衲僧は是れ醍醐を吞むが如し。
㋣不動智。寂靜、諸の威儀を現す。
㋠地。天涯に走遍して足を移す處なし。
㋷撒。撒、不藏なり。
㋦半生半滅。誕生の如く寂滅の如し。
㋸釣龜鱉。釣るは釣つたが、且く道へ、是れ曲鈎か直鈎か。
㋾長髭。髭は石頭遷に嗣ぐ。

しや、『此の意如何。』師云く、「事生ぜり。」進んで云く、「髭云く、『成就すること久し矣、只だ點眼を缺く。』此の意作麼生。」師云く、「擔枷過狀。」進んで云く、「頭云く、『點眼を欲すや。』髭云く、『便ち請ふ。』頭乃ち一足を垂下す。聻。」師云く、「地を掘つて深く埋めん」進んで云く、「髭禮拜す、還つて諦當なりや也た無や。」師云く、「㋻一死更に再活せず。」進んで云く、「頭云く、『汝何の道理を見てか便ち禮拜す。』髭云く、『紅爐上一點の雪の如し。』此の意又且つ如何。」師云く、「猶ほ㋕這箇の消息有る在り。」進んで云く、「學人也た一鋪の功德有り、和尚如何が點眼せん。」師云く、「不點。」進んで云く、「甚に因つてか點ぜざる。」師云く、「眼不盲に點ぜず。」僧禮拜す。師乃ち拄杖を拈じて云く、「今夜㋵露地の白牛を烹て、諸人と分歲す。諸人若し也た悟り去らば、已に十分飽足、若し悟り去らずんば、免れず薄批細切し去ることを。」良久して云く、「上は是れ天、下は是れ地、雲碧嶂に生じ、水滄溟に赴く、寒星三點五點、老松十株五株、阿呵呵、會すや也た無や。趙錢孫李、周吳鄭王、取飽に一任す、後悔せしむること無れ。然も是の如くなりと雖も、我が蹄角を動著せしむることを得ざれ。」拄杖を靠く。復た擧す。「古德頌に云く、『五蘊山頭一段の空、同門出入して相逢はず、無量劫來㋟屋を賃つて住す、到頭識らず主人翁。』建長は則ち然らず、五蘊山頭一段の空、同門出入して相逢はず、無量劫來屋を賃つて住す、頭を回して摑倒す破燈籠。豈に道ふことを見ずや、龍樓鳳曲を吹き、刈茅童に示さず。」卓拄杖して

㋻一死。ここで死ぬるに多い。
㋕這箇。糞を荷ふて、菊籬を栽う。
㋵露地。前に出づ。
㋟賃屋。借屋所帶。

下座。

正旦上堂。「獅子吼無畏說、衆魔異說を壞すること能はず。凍黄河に拆けて九地裂く。優曇華放く千林の雪。」卓拄杖して下座。

上堂。「贈るに中を以てす上下三指、李白元來是れ秀才、閻羅大王、是れ鬼にあらず。鉢裏飯桶裏の水、多口の阿師觜を下し難し。道吾打動す關南の鼓、德山牌を鬧市に卓つ。丈林山下の竹筋鞭、趙州庭前の柏樹子、阿剌剌。」卓拄杖して下座。

佛涅槃上堂、拄杖を拈じて云く、「三百餘會九年の弓、胸を摩して衆に告げて飯籮一空す。面前背後、㋹儞儂我儂。」大衆を召して云く、「會すや、猫に歃血の德有り、虎に起屍の功有り。」拄杖を靠けて下座。

上堂、獨り春風に對して㋞立つこと片時、闌干覺えず㋡晝陰移る。東山下の事惆悵するに堪へたり、㋥點々の楊華雪と作つて飛ぶ。

上堂。「祖師門下迥に階梯を絕す。」卓拄杖して云く、「最も愛す江南春雨の後、青山綠樹黃鸝囀ず。」

檀那㋤法光寺殿周忌、寶藏を慶懺して陞座せしむ。圓滿妙覺大毘盧藏、廓然として沙界に遍周し、混然として量太虛に等し。之を窮むるに其の蹤を見ず、之を體するに其の形を見ず。萬同化源、三際

㋹儞儂我儂。汝吾れを知らず、吾れ何ぞ汝を知らん。
㋞立片時。狗、赦書を含む。
㋡晝陰。雞、燈盞を偸む。
㋥點點楊華。適來の花は、ここでつめたい土になつた。
㋤法光寺殿。周忌は弘安八年四月四日ならん、時宗は前年に薨ず。
㋶半滿横實。是れ顯說にあらず、是れ密說にあらず。

不住、一音普遍す河沙の佛國、河沙の佛土、微塵に攝在す。(ラ)半滿權實の名くべきに非ず、迷悟聖凡の狀るべきに非ず。含靈全體作用して自知せず、菩薩證悟の及ばざる所、此れは是れ如來の秘密三昧、亦是れ衆生の本覺妙明。只だ今日一塵を撥開し、寶藏を豁開して、諸佛菩薩、龍天八部、燦然として出現するが如し。且く道へ、甚れの處よりか得來る。」卓拄杖し、喝一喝して云く、「毘婆尸佛早く心を留む、直に如今に至るまで妙を得ず。」復た偈を說いて云く、「一周の霜露尙ほ哀を銜む。天上人間去つて又來る。脚に信せて踢飜す華藏海、十方佛土寶蓮開く。」

(ム)圓覺興聖禪寺の額を掛く。大解脫門在不在無し、十虛無際闔闢自由。故に我が大檀那、圓覺道場を建立して、廣大の佛事を成就す。梵宇霄漢に挿んで、覩史夜摩を橫吞す、鐘鼓坤維に振ひ、浮幢刹海を攪動す。願力の持する所、福一切に被らしむ、六凡四聖何ぞ斯に由ること莫けん。便ち見る海晏河淸、雨順風調、野老謳歌し、漁人鼓掉することを。只だ今日高く寺額を揚ぐるが如きは何の祥瑞か有る。金色照開す三界の外、玉毫長く繞る五須彌。

釋迦の圖繪像を慶懺する陞座「淨法界身、出沒有ること無し、衆生を愍むが故に、去來の相を示す。太虛無際、我が佛の法身も亦無邊際、衆生無盡、我が佛の誓願も亦窮盡無し。十方に蕩々として普應し、歷劫に恢恢として常に存ず。故に我が釋迦世尊、無住相從り無住法を成ず。(ウ)眞實の理を廓にし、實地に住す。一音普演、萬化源を同じうす、一極悲心、含識を拯救す。衆生禱ること有れば、月の

(ム)圓覺。弘安五年十二月建つ。
(ウ)眞實地。虛妄界に游戲す。

水に臨むが如し、如來世を救ふこと、谷の響に答ふるが如し。只だ今日藤氏妙圓、聖像を圖寫するが如き、功何れの處にか歸す。此の深心を將つて塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩に報ずと爲す。」復た云く、「我が佛世尊、無量劫來從り難行苦行を行じ、頭目髓腦を布施す。盡く三千大千世界を將つて、抹して微塵と爲す。是の如き塵數の菩薩捨身、其の數復た此れに過ぎたり。所以に如來衆生田中に栽種し、慈悲の根芽、三千大千世界に徧滿して、恩惠深廣なり。衆生界中佛の一字を聞いて、善心を生ぜざる者有ること無し。人間若しくは綵畫し、若しくは金銀銅鐵の聖像を鑄造せんに、獲る所の功德、世世人天の道を失はず、世世長命富足る、世世諸の惡事無く、世世夫婦子女團圝し、世世見佛聞法せん。此れは是れ決定底の事、今日檀那、此の如來の尊像を寫し、所願必ず圓滿することを得ん。」復た偈を說いて曰く、「繪寫す如來妙色身、十方の諸佛咸く懽悅す、龍華の一會今朝に在り、必定當來記莂を成さん。」

浴佛上堂、「毘藍園裏、尼連河畔、然も毛艸を洗得すと雖も、要且つ痒處㊥曾て抓著せず。不肖の孫只だ背を拊つこと一下、它の腦を轉じ頭を回すことを待つて、却つて連腮雨掌を與へん。更に若し如何若何せば、便ち與に水を戽んで便ち潑がん。」卓拄杖して云く、「狗は家の貧を擇ばず、子は母の醜きを嫌はず。」

㊥不曾抓著。これで金軀沐浴はできぬ。

結夏小參、「圓覺伽藍、前三後三、平等性智、口を開いて氣を取る。今日は晴れ明日は雨、華は自ら

笑ひ鳥は自ら啼く。村南村北、野水横流、谿東谿西、雲煙出沒。無知の老翁也た煩惱の斷ずべき無く、也た實相の證すべき無し。只だ是れ飽まで飯を喫了す、脚を伸べて一覺睡を打す。起き來つて兩眼を摩挲して、却つて道ふ太虛と古鏡と交參す、法身と草木と齊長す、適も無く莫も無し、樓頭浪宕、苦、地獄に在らず、樂、天上に在らず、有る時は背を捫つて錢を乞ひ、有る時は手を伸べて痒を搔く。阿呵呵。」膝を拍つて云く、「誌公は是れ閑和尚にあらず。」復た擧す、趙州、投子に問ふ、「大死底の人、却つて活する時如何。」子云く、「㋷夜行を許さず、明に投じて須らく到るべし。」州云く、「㋭我れ早く侯白、渠更に侯黑。」師拈じて云く、「投子老人、外面は觀光すべきに足れり、其の中猶ほ一著を缺く。趙州老漢、所得、所失を償はす。福山恁麽の批判、還つて㋾救處有りや也た無や。」良久して云く、「波斯胡椒を喫す。」

上堂、優曇華世に比無し、見を絶し聞を絶す、色に非ず相に非ず。諸人若し也た悟り去らば、九十日の內甘露門に入つて、甘露味を食す、若し也た然らずんば、㋳寒暑有りて兮君が壽を促し、鬼神有りて兮君が福を妬まん。

上堂、擧す、「臨濟有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境兩俱奪、有る時は人境俱不奪。」大衆を召して云く、「若し四句の下語を作さば 又人境の中に墮せん。山僧は人境の內に在ら

㋷不許夜行。舊時の路を行くこと莫れ。
㋭我早侯白。作家の暗號、合じや。
㋾有救處。投子の失利、趙州の話墮た。
㋳有寒暑。進むに堅固の願輪無く、退くに生死の怖れ有り。

ず。若し一句の下語を作さば、又人境を離却せん。山僧は人境の外に在らず、是れ汝諸人作麼か吾れと相見せん。」拄杖を擲下して云く、「漆桶喫茶去。」

上堂。「等しく是れ恁麼の時節、是れ汝諸人甚に因つてか富有り貧有り、飽有り飢有り。只だ汝勤惰同じからず、功力齊しからざるに縁つて、所以に此の如し。如今長夏將に滿ちんとす、㋐更更夢を做さば、方に是れ好手。」卓拄杖して云く、「石を爍し金を流すことは㋑力を著ず、露冷に秋深くして恨み極り無し。」

弘安八年六月二十四日、太守、龍を讃し雨を祈ることを請ふ。讃して後雷鳴り雨至つて、三日連注す、此れに因つて上堂す。僧問ふ、「嵩山の破竈墮和尚、一日山行の次で、一古廟血祭無數なるを見る、師乃ち拄杖を以て竈を敲いて云く、『此れは是れ泥瓦合成、靈何れ從り來り、聖何れ從り起つて、恁麼に物命を烹宰す。』復に拄杖を以て敲くこと三下、其の竈自ら墮す。乃ち云く、『破也墮也。』此の意如何。」師云く、「墮と不墮と總に是れ堆塵。」進んで云く、「少頃あつて靑衣の人有り、拜を前に設けて云く、『師の無生法を說くを蒙りて、已に生天を得。』又且つ如何。」師云く、「魚臭水に投ず。」進んで云く、「侍者云く、『某甲久しく和尚に侍すれども、法要を蒙らず、竈神却つて和尚の指示を蒙り、却つて生天を得。』師云く、『我れ什麼をか說かざる、只だ道ふ破也墮也と。』侍者も亦乃ち悟道す、又作麼生。」師云く、「蕉甜頭を咬む。」

㋐更更。時刻のかはりがはり。
㋑不著力。此に長生の腕力もない。

進んで曰く、「只だ某甲が如き、和尚に侍して檀那の府中に入る、檀那天久しく晴るゝを以て、和尚を請じて水墨の畫龍を讃せしむ。師讃して云く、『偉なるかな、戴角擎頭、觸處崩崖裂石、蒼生久しく矣焦枯、快に一聲の霹靂を奮へ。』讃し罷んで、即時に雷聲地に震ひ、大雨隨ひ至る。一連三日、天下普く潤ふ。和尚の法力古人に過ぎたりと謂ふべき耶。」師云く、「（フ）癡人の面前、夢を説くべからず。」進んで云く、「竈は是れ泥瓦合成、龍は是れ水墨畫底。且く道へ、靈何れ從り來り、聖何れ從り起る。」師云く、「三祇大劫より修す、此の閑消息無し。」進んで云く、「某甲亦和尚に隨侍す、大地恩を蒙る。某甲未だ法雨に沾はず、願はくは師慈悲、乞ふ方便を垂れよ。」師云く、「（コ）莫妄想。」僧禮拜す。師乃ち云く、「上天久しく雨らず、大地塵埃を生ず。苗稼將に槁に就かんとす、將軍吾れを請じて齋す。就いて水墨の龍を讃す、卷を展ぶれば雲堆を作す、手に信せて聊か一揮す。（エ）劃然として風雷を起す。連日甘雨を注ぐ、霑ひ足り九垓に遍し、早禾已に子を結ぶ、晩禾皆胎を出づ。萬民悉く鼓舞す、將軍笑腮に盈つ。且く（テ）滿鉢の飯を喫して、處處（ア）羅齋すべし。諸天我が願に副ひ、甚だ慰す憂民の懷。」拄杖を拈じて云く、「拄杖子、爾且く來つて、豐年太平の曲を唱起せよ。」卓拄杖して曰く、「三臺は須らく是れ大家催すべし。」

解夏小參、僧問ふ、「瑯琊和尚示衆に云く、『有る時の一棒は、漫天の網と作して、俊鷹快鷂を打し、

（フ）癡人面前。前輯に出づ。
（コ）莫妄想。屋下に屋を架せず。
（エ）劃然。物の破るるおと。
（テ）滿鉢飯。三輪空寂の食なくらふて。
（ア）可羅齋。殘りを一切衆生に施せ。

有る時の一棒は、布絲網と作して、蜆を摝し鰕を撈す。有る時の一棒は、金毛の獅子と作す。有る時の一棒は、蝦蟆蚯蚓と作す。「此の意如何。」師云く、「赤膊綉毬を輥ず。」進んで云く、「敢て和尚に問ふ、如何なるか是れ一棒、漫天の網と作す。」師云く、「我れ㊇者の話に答へ得ずんばあるべからず。」進んで云く、「如何なるか是れ一棒、布絲網と作す。」師云く、「且く道へ、爾が與に說かんか爾が話に答へんか。」進んで云く、「如何なるか是れ一棒、金毛の獅子と作す。」師云く、「爾老僧を謗ることを得ざれ。」進んで云く、「如何なるか是れ一棒、蝦蟆蚯蚓と作す。」師云く、「添へ得たり一場の愁。」進んで云く、「此の四棒の中、那一棒か最も親しき。」師云く、「高聲に問へ。」進んで云く、「和尚尋常竹篦頭下、是れ俊鷹快鷂を打つか、是れ蜆を摝し蝦を撈するか。」師云く、「老僧敢て闍梨に辜負せず。」進んで云く、「今日長期已に滿つ、鷹鷂蝦蜆如何が緇素せん。」師云く、「燈籠壁に沿うて天台に上る。」僧禮拜す。師乃ち云く、「西天には㊈蠟人を以て驗と爲す。建長も亦蠟人を以て驗と爲す。等しく是れ與麼の時節、中間些子の誵訛有り。汝等諸人をして各所解を呈せしむるに、諸人の所見、衆盲、象を摸するが如し。足を摸見する者は曰く、象は杵の如しと、耳を摸見する者は曰く、象は箕の如しと、腹を摸見する者は曰く、象は甕の如しと、尾を摸見する者は曰く、象は箒の如しと。有る底は曾て摸見せず、千里萬里の外に在つて、却つて茅聚影子を指して、說いて道ふ我れ亦象を見ると。虛しく神用を勞して只だ妄想を添ふ。苦なる哉苦なる哉、是の

㊇答者話。切に忌む耳前に掛牌することを。
㊈蠟人。前輯、委はしく解す。

如きの參禪、何の所益か有らん。或は箇の漢有りて出で來つて道はん、和尚如何なるか是れ全象と。㋷蠨蛸、儞甚の㋦七十三八十四を曉らん。我れ二十年出世、曾て人の與に過話せず。」拄杖を拈じて㋸一時に捍し散ず。復た擧す、㋾大寧の寬和尚、僧有り、問ふ、「如何なるか是れ露地の白牛。」寧、火筯を以て火を爐中に插んで曰く、「會すや。」僧云く、「不會。」寧曰く、「頭欠けず尾剩らず。」師拈じて云く、「富と貴きとは是れ人の欲する所、貧と賤とは是れ人の惡む所。其の道を以て之れを得ざれば處らず、其の道を以て之れを得ざれば去らざるなり。」

上堂、「朝礫礫、暮礫礫、㋻破塊空谷に落ち、㋕飛蛾明燭に赴く。或時は東南、或時は西北、寂たり寥たり、鵠は白く烏は玄し、寬たり廓たり、㋵松は直く棘は曲れり。」卓拄杖して下座。

中秋上堂、馬祖翫月の公案を擧して云く、「馬師父子琵琶を弄す、西江の月色を奈何ともすること無し。更に聽く江南玉笛を吹くことを。水流隈り無く、月光も多し。」復た大衆を召して云く、「瞎禿子、參。」

上堂、「西天の胡子髭鬚を沒す、楚鷄は是れ丹山の鳳にあらず。會するときは則ち塵毛刹海、會せざるときは則ち當處芽を生ず。㋟摘楊華、摘楊華。」卓拄杖して云く、「釣絲水を絞り、熨斗茶を煎す。」

㋷蠨蛸。蜜蜘たり。
㋦七十三八十四。三八九を明めずんば。
㋸一時捍散。ここで長を考へ短を數ふ。
㋾大寧。五祖下たり。
㋻破塊。愚痴邪見の者。空谷は八識無記の暗窟。
㋕飛蛾。虛論不實の輩。
㋵松直。そのままが眞理じや。
㋟摘楊花。昔は花見、今は送葬。

開爐上堂。「孤迥迥、峭巍巍、堂下草深きこと一丈、灼然として到る者は方に知る、霜空しく月冷に、露白く星稀なることを。釣魚船上の客、手を携へて同じく歸らす。」

達磨忌上堂。「霜大野に飛び、㋦黄葉窮邊す。大法所傳、天に私蓋無し。二千年の事、㋑病今朝に在り。」大衆を顧視して、良久して云く、「師恩に報いんと欲せば、悟を以て則と爲よ。」

上堂。「法身に三種の病二種の光有り、一一透得せば爾に許す歸家穩坐。」大衆を召して云く、「黄葉と赤葉と齊しく飛び、㋺萬木と崖石と倶に露る。無學老漢一斑の㋩出醜、爾等諸人作麼生か我が與に相見せん。」良久して、卓拄杖して云く、「仁義は盡く貧處從り斷ゆ、世情は多く有錢の家に向ふ。」

事に因つて上堂。「今日は笑ひ昨日は哭す、悲喜相凌ぎ自ら黐し自ら覆ふ、傾け出す摩尼十萬斛、何ぞ似かん卞和三獻の玉。」良久して、卓拄杖して云く、「一枝鷦鷯に付し、萬里鴻鵠に付す。」

越州太守の夫人、釋迦の像、楞嚴經を慶讃せんことを請ふ陞座。「我が佛釋迦世尊、無住法の中從り、無量劫來從り、無功用の行を修し、無邊の刹土に遍し、無量の衆生を度す。三身借にあらず、十號彰に非ず。大千沙界一毫端、衆生を度し盡して度する所無し。三祇遠きに非ず萬德功に非ず。兜率陀天より降し、雪山の苦行を示す。玉毫宛轉して彼の幽冥を破す。金輪を擲弃して三界を統御す。五

㋦黄葉。有利無利。
㋑病在今朝。藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇か是れ無病の人。
㋺萬木。精金と瓦礫と價を交へて。
㋩出醜。見ぐるしい蟲干。

天竺國室羅筏城、大經卷を示して量太虛に等し。纔に口を開く時。」拂子を拈起して云く、「便ち這の一著子を露出す、其の他の諸經百匝千重、線索を露さず脚跡を露さず、大陣を越ゆるが如く、只だ是れ點過す。會する者は點點として自知す、不會なる者は任地あれ不會なるを。唯だ是れ楞嚴一會、毫を分ち釐を剖く。㋥八還辨見、㋭七處徵心、貴ぶらくは阿難便ち門に入ることを得と。兜羅綿の手、百寶光を放つて阿難の肩を射る、阿難左右顧視して、淸淨大海を將つて攪いて一鼎の沸湯と作すが如し。急索に頭を回せども、早く已に十方路無し。諸の㋬玄辨を窮むとも、一絲機前に掛けず、塵毛刹海了に踪無し。四聖六凡倶に踪を絕す、他の絃管を借りて我れを詔華に醉はしむ。萬劫空しく傳ふ般若の名、一句留めず㋣元字脚。文殊護に圓通を揀ぶ、觀音舌頭地に拖く。楞嚴の一會即ち今に在り、草木叢林更に異說無し。㋠機智盡き、路頭絕す、面皮飜轉來由沒し。十方世界一團の鐵、泥牛昨夜西風に吼ゆ、火裏の烏龜頭に雪を戴く。」卓拄杖して云く、「華は放く優曇劫外の春、珊瑚枝枝月を撐著す。」復た云く、「我が大唐の儒家、佛を信ぜざる者有り。十二部經を以て㋷漫頇にして統緒有ること無しと爲す。秀才家乍ち諸經を看ること、樵夫の乍ち大海に入るが如く、心目倶に眩し

㋥八還。楞嚴經にあり、還は元に還へすことなり、乃ち一には明は日輪に還し、二には暗は黑月に還し、三には通は戶牖に還し、四には牆壁に還し、五には緣は分別に還し、六には頑虛は空に還し、七には鬱埲は塵に還し、八には淸明は霽に還すこと。

㋭七處。同上にあり、徵詰心理なり。乃ち一には內に在り、二には外に在り、三には根に潛む、四には見內、五には隨合、六には中間、七には無著。

㋬玄辨。無礙。

㋣元字脚。一の字の義、元の字の脚は乙の字にして、乙の字

て東西南北方向を知らず、千箇に九百九箇有り、謗を興す。唯だ此の經を看る者皆門に入ることを得、皆本法を悟り皆信向することを知る、方に如來的徹の處を知る。此の經を見るの晩きことを恨む者有り。蓋し此の經は、破相顯理、指意尅的、一句兩句、白石蜜の中邊皆甜きが如く、雪山の草寸寸是れ藥なるが如し。奇なる哉不可思議也。方秋崖は宋の名儒なり。因に儒家佛を謗るを見て、書を作つて云く「楞伽圓覺の兩書は、佛の兵將也、佛の（ヌ）士馬也、佛の城郭也。若し彼を破らんと欲せんに、吾が儒中此の如き士馬城郭有りや。若し彼を破らんと欲せば、須らく當に堅甲利兵なるべし、亦當に彼の圓覺楞嚴二書の如くなるべし、方に之れと立敵すべし。若し此れ無くんば輕しく釋教を議すべからず。吁此の經は、帝釋髻中の珠の如く、能く一切の衆毒を消し、能く一切の魔事を降す。」（ル）禪和家做工夫、（ヲ）未だ自在を得ず、未だ受用を得ざれば、十二時中（ワ）山を鑿ち路を討ぬ。正に世尊の門を開き門を閉ぢて阿難を趕ふが如く、狂猿意馬、（カ）萬仭崖頭に到つて、手脚を著くる處無し。一蹎し起き來つて賊に和して款を納れて、却つて道ふ我れ今覓むる者は即ち是れ我が心と。釋迦老子、阿難が這裏に死在することを恐れて、喝して云く「此れ汝が心に非ず。」阿難矍然として席を避けて云く「此れ若し我が心に非ざれば、心口即ち議

は一と同一義なるが故に、一の意なり、碧岩二十八則の頌にもあり。

（ヨ）機智遮。舊路再び行かず、新路重ねて踏まず。

（リ）漫汗。渺茫として際限のなきこと、漫漫汗汗などなり。

（ヌ）士馬。謀士猛臣、汗血の名馬。

（ル）禪和家。今時の禪和家。

（ヲ）未得自在。六種の障礙、八種の自在。

（ワ）鑿山。多年地を掘つて青天を覓む。

（カ）到萬仭。伎盡き窮まるに到る。

毛兎角に同じ』」と。阿呵呵。釋迦老漢、蓋く三千大千世界を將つて捏つて一塵と作して、(ヨ)阿難に付與す。阿難(タ)背て承當せず。咄。謗法すること莫れ。」卓拄杖。復た偈を說いて云く、「一念情消す曠劫の前、塵網を豁開して塵緣を透る。十方佛土(レ)遮礙無し、百寶光中寶蓮に坐す。」

首座を謝する上堂。「二十四路(ソ)三十七著、壇を築き將を拜して、妙(ツ)機先に在り、恁麼に悟り去らば便ち見ん、諸侯の玉帛奔走して(ネ)雷の如きことを。」良久して云く、「海晏河淸、也た誰か(ナ)東封書を上らん。」卓拄杖して云く、「(ラ)普。」

冬至小參。「萬仭崖頭の一步子、自古自今踏得著する者、千中一人無し。但だ千中一人無きのみに非ず、亦乃ち萬中一箇無し。老僧尋常諸人と火爐邊の說話、曾て取次に相瞞せず。蓋し江北と江南とに緣る。今日知らず明日の事、(ム)高高低低、冷冷落落。寒梅一點孤芳を破る、無影枝頭香馥郁。斷橋の流水人の扶くる沒し、孤客暖(ウ)回る十里の足。阿呵呵。儞に向つて道はん、拄杖曾て諸人に孤負せずと。」拄杖を擲下す。復た舉す、陸亘大夫、南泉に問ふ、「肇法師也た奇怪なり、道ふことを解す天地と我れと同根、萬物と我れと一體。」泉、大夫を召して云く、「時の人此の一株華を見て夢の如くに相似たり。」師云く、「陸

(ヨ)付與阿難。二龍の珠を爭ふが如し、爪牙あるものは得ず。
(タ)不肯承當。千尋の末を窮むるものは其の眼を覷す。
(レ)無遮礙。圓通無礙門。
(ソ)三十七著。三十七助道品。
(ツ)機先。背水の陣の如し。
(ネ)如雷。凱歌を奏す。
(ナ)東封書。勝軍の書なり。
(ラ)普。普く十方に現ず。
(ム)高。高は山、低は海、冷は雪、落は松。
(ウ)回十里足。臨濟は行くこと數里にして此の事を疑ふて却回した。

亘大夫、天地を舒卷するの手有りとも、爭奈せん牡丹華下に活葬せらるることを。南泉聲色の外に透出すれども、奈ともすること無し、人に劍を按ぜらるることを。」

臘八上堂、拄杖を拈じて云く、「老瞿曇爾來るや、三日相見せざれば、舊時の看を作すこと莫れ。我れ爾に問ふ、正覺山前悟道の後、却つて道ふ我れ大地の衆生を觀るに、如來の智慧德相を具有す。但だ妄想を以て證入すること能はず、衆生の妄想豈に是れ如來の智慧德相にあらずや。若し此の妄想を去つて、別に智慧を求め別に證入を求めば、宛然として生滅斷見す。試に一轉語を下せ見ん。速に道へ速に道へ。」良久して云く、「將に謂へり茅の長短と、元來地の不平。」

臘八拈香、〔ヰ〕三祇路遠く〔ノ〕萬德功沈み、六年冷坐〔オ〕海底に針を摸る。我が手、臂を借つて香を拈じ、爾が鼻孔を借りて氣を出す。瞎驢滅却す正法眼、灼然として受けず當來の記。

上堂、明明たり百草頭、明明たり祖師意。九曲の〔ク〕黃河徹底清し、雲劍閣を遮る三千里。若し也た悟り去らば、且く林下に歸つて看よ。若し悟り去らずんば、更に月明の時を待て。」卓拄杖して下座。

除夜小參。僧問ふ、「記得す、金牛因に臨濟來る、乃ち拄杖を方丈前に橫ふ。濟見て遂に掌を拊つこと三下して歸堂す。」師云く、「賊捎家を打す。」進んで云く、「牛却つて下り去り、人事して便ち問ふ、『賓

〔ヰ〕三祇。三生なり。
〔ノ〕萬德。三千の威儀。
〔オ〕海底。暗中に雙陸を投す。
〔ク〕黃河。黃河三千年に一度清むといふ。

生相見は否軌儀有り。上座何ぞ無禮なることを得たる。』意何にか在る。」師云く、「若し價を酬いざれば爭か眞價を辨ぜん。」進んで云く、「濟云く、『甚麼と道ふぞ、牛口を開かんと擬す。』濟便ち打つこと一坐具。牛倒るる勢を作す。此の意又作麼生。」師云く、「(ホ)囊砂背水に如かず。」進んで云く、「濟又打つこと一坐具。牛云く、『今日便を著けず。』乃ち方丈に歸る。灑。」師云く、「將に謂へり蘡蛇を吞むと、却つて是れ蛇蘡を吞む。」進んで云く、「只だ和尙拈じて云ふが如きんば、金牛只だ舞を作すを解す、也た陷虎の機有り。節文何れの處にか落在す。」師云く、「(マ)老來牙齒風を開せず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「有る時一句を道へば、也た權有り也た實有り、有る時一句を道へば、也た權無く也た實無し。是れ汝等諸人作麼生か與に相見せん。所以に道ふ、歲盡き年窮る。幞籠を賣却す。年窮り歲盡きて、飯甑を換却す。五步に一び眉を皺め、十步に一彈指す。小室(ケ)千年の人未だ歸らず、晚伯臺前流水を看る。止不止、擬不擬、老龐の活計湘江に付し、摩詰計窮つて(フ)妙喜を搏つ。且く道へ、甚に因つてか此の如くなる。貧賤に素しては貧賤に行ひ、富貴に素しては富貴に行ふ。」復た即心即佛の公案を擧し、拈じて云く、「綠樹鶯啼春遲し、去等時節正に芳菲。山雲海月新色を添ふ、嬌郎に付與して濶く眉を打つ。」拄杖を靠けて下座。

(ホ)囊砂。韓信傳にあり、「信、龍且と淮水を夾んで陣す、夜、人をして萬餘の囊を爲らしむ、沙を盛りて水の上流を壅ぐ、軍を引いて半ば渡つて且を擊つ云云。」

(マ)老來。少よりして出家し、今六十。

(ケ)千年人未歸。眞風を挽回する人がない。

(マ)妙喜。妙喜世界なり。

上堂、僧問ふ、「記得す、僧、長沙に問うて云く、『如何が山河大地を轉得して自己と爲し去らん。』沙云く、『如何が自己を轉得して山河大地と爲し去らん。』此の意如何。」師云く、「隔。」進んで云く、「僧不會。沙云く、『湖南城裏好し民を養ふに。』此の意又作麼生。」師云く、「汝禮拜せずんば更に何れの時をか得たん。」僧乃ち禮謝して退く。復た僧有り、問ふ、「記得す、僧、慈明に問ふ、『大衆已に座側に臨む、西來の祖意事如何。』明云く、『月上つて松影を移し、雲行いて山自ら迎ふ。』此の意如何。」師云く、「頭大尾小。」進んで云く、「學人今朝和尚に請益す、如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「我れは是れ慈明九世の孫。」僧禮拜す。師乃ち拄杖を拈して云く、「但だ一を得ば萬事畢る、㈠牛千頭を進め、馬百疋を進む。忽ち箇の漢有りて出で來つて道はん、既に是れ長老甚に因つてか許多の畜生を愛すと。他に向つて道はん、急行馬に騎り、緩行牛に騎ると。」卓拄杖。

上堂、普天匝地凍雲交る、九九陽生ず ㈡第一爻。十二の曲闌屛半ば掩ふ、且く看る ㈢金鳳龍巣に宿することを。

上元上堂、「祖師の巴鼻、衲僧の巴鼻、須彌山大海水、地獄天堂、畜生餓鬼、馬載驢駝、魚腮鳥觜。」驀に拄杖を拈じて、卓一下して云く、「㈣摘楊華、摘楊華、我見燈明佛、本光瑞如此。」

二月朔上堂、一月去り了つて又一月、杏華開いて後梨華開く。只だ事の眼前を逐つて過ぐることを

㈠牛。朝なり、馬は暮なり。
㈡第一爻。一陽來復。
㈢金鳳、適材を適處におく。
㈣摘楊花。ここで天神は天に歸り、地神は地に歸る。

知つて、覺えず㋚老の頭上より來ることを。四句を離れ百非を絶し、誰か餘り有り誰か足らざる。閑錢を把つて笊籬を補ふこと莫れ、風光只だ闌干の曲に在り。

上堂、㋖聖福寺裏西海岸邊、吾れに一句有り、汝か邊に落在す。昨朝汝に問ふ、擧すること㋴未だ完全ならず、若し渾崙萬象を包むことを要せば、直に須らく一度眼皮穿つべし。

佛涅槃上堂、雲は綻ぶ家家の月、春は行く處處の華。瞿曇失錢遭罪、禍山死蛇を賣弄す。大衆見るや、動著することを得ざれ、動著せば儞が㋱骨檛を打たん。

法光寺殿第三年忌、「㋯覺山大師自ら華嚴大經を書して、陞座を請ふ。毘盧藏海性覺寶王、無起無滅、無終無始。一塵を立せず、法界に周遍す、一物に倚せず、十方を含攝す。湛湛として虚明獨耀、澄澄として海印光を發す。東西南北遮攔を沒す。明暗色空倶に不著、千靈跡を絶す、萬化根を同じうす。之を迎ふるに其の形を見ず、之に背いて其の跡に迷はず。千日も其の明に比すべからず、衆寶も其の色を奪ふべからず。全く象外に超え、獨り無雙に拔す。此れは是れ衆生の覺地、亦如來の法身と名く。天地も此れに依つて建立し、日月も此れに依つて照臨し、星宿も此れに依つて轉運し、雷霆も此れに依つて發聲し、十地の菩薩も此れに依つて種智を圓滿し、四果の聲聞

㋚老從頭上來。争か建長をして重れて少壯ならしめん。
㋖聖福寺。筑前博多にあり、開山は千光榮西、日本最初の禪窟。
㋴未完全。全く露すことを要せす。
㋱骨檛。檛は箠なり、骨の箠なり、或は人を罵るの語。
㋯覺山大師。時宗公の夫人なり。

も此れに依つて大乘を策發し、山川も此れに依つて負載し、草木も此れに依つて敷榮し、江海も此れに依つて流注し、六道も此れに依つて往來し、鬼神も此れに依つて變化し、鳥獸も此れに依つて飛騰す。大なる哉性覺斯の如く廣大、斯の如く雄猛にして、重重無盡、無盡重重、十方の諸佛之を㈣宣べ盡さず、四果四向、啞の如く聾の若し。此れは是れ毘盧遮那の體、十方國土に普遍し、一切衆生を調伏し、諸塵勞に入つて方便善巧して、法性本來空寂なり。只だ覺山上人一年周からず、華嚴妙典八十一卷を書寫して、法光寺殿に報薦するが如きんば、功何れの處にか歸す。㈤轉身の一歩方便を超ゆ、果園林に滿つ劫外の春。復た云く、「人生百歳、七十の者稀なり。法光寺殿齒四十に滿たず、功業を成就すること、却つて七十歳の人の上に在り、看よ他、國を治め天下を平定することを。喜怒の色有ることを見ず、矜誇衒耀の氣象有ることを見ず。此れ天下の人傑なること也た自如たり。㈥弘安四年虜兵百萬、博多に在れども、略經意せず、但だ毎月老僧を請じて、諸僧と與に下語し、法喜禪悅を以て自ら樂む。後果して佛天響のごとく應じて家國㈦貼然たり。奇なる哉此の力量有ること、此れ亦佛法中再來の人なり。佛說きたまふ、菩薩人、梵行を進修すれば、復た菩薩有つて、或は妻子眷屬と爲り、種々菩薩の諸の梵行を修するを成就して、其れをして圓滿ならしむ。今日覺山上人、法光寺殿

㈣宣。說なり。
㈤轉身。竿頭の一步に始めて穩坐地を得る。
㈥弘安四年。元寇の役、この條史料として大いに注目すべし毎月老僧を請じて云云の語あり。
㈦貼然。貼は黏と通ず、「ねばりつく」「ねばし」など、安全の意か。

と曠劫以前、毘盧遮那會中、誓願深重にして、生を人間に示し、王臣と作ることを示し、夫婦と作ることを示し、權貴と作ることを示し、生死の爲にすることを示し、虚幻の爲にすることを示し、悲悼を爲すことを示し、大勇猛を發して此の大經を書す。人の行じ難き所を行じて、天下の人をして感動し、菩提心を發して、阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。奇なる哉、讃すれども能く盡すこと莫し。伏して願はくは、法光寺殿一靈不昧、十地頓に超え、子孫を庇祐して、永く吉慶を隆んにせんことを。」復た偈を説いて云く、「毘盧大經、太虚に等し。只だ衆生心識の裏に在り、衆生迷背して自ら覺えず、一微塵を破つて齊しく顯現す。四大海水渺として無邊、上人一滴の墨に抵らず、盡大地の土量るべからず、上人の點墨勝ること千倍。十地の菩薩大心を發す、河沙の聲聞比すべきに非ず。速に菩提行願海を證すること、盡く上人筆端上に在り。一洗す恩愛浮幻の塵、回つて洗者を看ば亦是れ幻。水月光中此の身を了せば、金剛三昧悉く圓滿。」

佛鑑禪師忌日拈香、「師の禪我れ參ずること得ず、師の道我れ學ぶこと得ず、師の峻機我れ湊泊すること得ず。」良久して胸を擘つて云く、「一棒一條の痕、一摑㊆一掌の血。一度思量して一度愁ひ、一回水を飲んで一回噎ぶ。今朝遠忌斯に臨む、畢竟何を將つてか爲に報ぜん。」香を拈起して云く、「此の一瓣の兜樓を爇いて、也た甜きこと有り、也た苦きこと有り。也た恩有り、也た怨有り。㊇屈屈。先師の靈骨只だ是れ須ひ

㊆一掌血。泥牛一點の血。
㊇屈屈。不自由をいふ「かがまる」の意。

す、重ねて蒼龍窟に入ることを。」

四月朔上堂。「休し去り歇し去り、一條の白練にし去り、古廟香爐にし去り、冷湫湫地にし去る。彩鳳丹山に出づ、鐵蛇古渡に横ふ。昨日は風、今日は雨。」卓拄杖して云く、「百尺の竿頭(イ)更に一歩を進めよ。」

佛生日上堂、天宮を離る、錯、閻浮に下る、錯、才に母胎を出でて、却つて道ふ天上天下唯我獨尊と。錯錯錯。禹九州を別つに此の一錯無し、二鐵圍山、此の錯を鑄難し、錯錯眞箇の錯、常の錯に非す。錯錯錯。惡水驀頭に澆ぐこと一杓、知らず誰か楊州の鶴に跨る。

結夏小參、僧問ふ、「記得す、良遂初め麻谷に參す、谷、來るを見て便ち鋤を荷つて園に入る。此の意如何。」師云く、「坐久成勞。」師云く、「良、園に至る、谷、驟歩して方丈に歸りて門を閉却す。又作麼生。」師云く、「家貧にして客を接し難し。」僧云く、「明日良、門を敲く。谷云く、『誰そ、』遂、名を稱して忽然として大悟す。且く道へ、箇の甚麼の消息をか得たる。」師云く、「幷州は是れ故郷にあらず。」僧云く、「今日學人入處無しと雖も、也た和尚と相見せんことを要す。」師云く、「子が遠來を謝す。」僧云く、「柳毅が信に因らずんば、爭か洞庭湖に到らん。」師云く、「月　五を破らず。」復た僧有り、問ふ、「宗乘の一唱三藏、詮を絶す、祖令當行十方坐斷、如何なるか是れ福山の巴鼻。」師云く、「也た(ロ)

(イ)更進一歩。好手還つて火裏の蓮に同じ。

(ロ)好一問。引き得て禪床を下る。

好一問。」僧云く、「記得す、僧、白雲和尚に問うて云く、「人天交接、兩得相見、如何なるか是れ相見底の事。』端云く、『爭か敢て相瞞せん。』此の意如何。」師云く、「師翁語拙なり。」僧云く、「久しく沙塞の苦を經て、今日良知に遇ふ。端云く、『爾が脚跟下の事作麼生。』又且つ如何。」師云く、「又是れ從頭起る。」僧云く、「衆水孤月を含む、群星北辰に拱す。端云く、『李白依前として是れ秀才。』意何くにか在る。」師云く、「鐘を喚んで甕と作す。」僧云く、「九江千里の內、草木恩に霑ふ。端云く、『衲僧を笑殺す』と、是れ什麼の道理ぞ。」師云く、「知らば即ち得ん。」僧云く、「坐具を將つて一拂して便ち行く。端云く、『越國に依係として、楊州に髣髴たり、節文何れの處にか在る』と。」師云く、「㊇彼此便宜を失す。」僧云く、「學人今夜、和尚に請益す、如何なるか是れ相見底の事。」師云く、「孟夏漸く熱す、汝時を知る可し。」僧禮拜す。師乃ち云く、「佛滅二千年、比丘慚愧少し。箇箇圓覺伽藍と說き、人人平等性智と道ふ。大いに㊁梅林を望んで渴を止むるに似たり。福山長處無しと雖も、諸人をして古人の脚跡を踏ましめず、只だ要す汝一寸を得て一寸を破り、一尺を得て一尺を破らんことを。鄭旗、張旗を推倒し、東壁、西壁を打飜す。驀に拄丈を拈じて云く、「有功無功、腹空ならしむること莫し、蛇鱉魚を呑む、虎大蟲を咬む、會すや。」卓拄丈一下して云く、「髮は今日從り白く、華は去年の紅に似たり。」復た擧す、雪峰、衆に示して云く、「望州亭爾と相見了也、烏石嶺爾と相見了也、僧堂前

㊇彼此。越國や楊州の船だより。

㊁梅林止渴。魏の曹操の故事。或時魏軍大いに渴す、曹操曰く「先方に梅子あり」と、士卒皆渴を忘れたりと。

喃喃と炤見了也。保福、鵝湖に擧似す、鵝湖縱歩して方丈に歸る、保福低頭して僧堂に入る。」師頌して云く、「望州烏石と僧堂と、父子枷を擔つて鐵床に上る。若し福山門下を打ち過さば、更に須らく足を刖つて了に贓を追ふべし。福山與麼の檢點、古人還つて過有りや也た無や。」

結制上堂。僧問ふ、「記得す、僧、芙蓉楷和尚に問うて云く、『(ホ)夜半正明、天曉不露の時如何。』楷云く、『滿船空しく月を載せ、漁父蘆華に宿す、』此の意如何。」師云く、「身を隱すに地無し。」僧云く、「今時に落ちざるの句、妙、未聞の前に在り。楷云く、『再犯容さず。』復た僧有り、問うて云く、『月未だ圓ならざる時如何。』師云く、『鐵狗吠開す巖上の月、泥牛觸散す嶺頭の雲、』又且つ如何。」師云く、「箚。」僧云く、「月圓なるの後又作麼生。」師云く、「收。」僧云く、「投子道く、『三箇四箇を吞却し、七箇八箇を吐却す、』意何くにか有る。」師云く、「關。」僧云く、「吞却を除却する外、還つて學人が箇の消息を通ずることを許さんや也た無や。」師云く、「月、韲。」師乃ち云く、「一夏九十日、諸人意馬狂象、東觸西觸、如何が調伏せん。老僧一方便有り、鐵關五重を設く。汝等關を逐ふて透過せんことを要せば、方に是れ行脚の士。」拂子を擊つて下座。

(ホ)夜半正明。正偏回互の當體、夜半不露は正位なり、天曉は偏位なり。

頭首秉拂を謝する上堂、「四句を離れ兮百非を絕す、珊瑚紅照す碧琉璃。樓臺日暖にして楊華舞ひ、簾幕風淸うして燕子飛ぶ。」卓主丈して下座。

上堂、窮も五貫に過ぎず、富も五貫に過ぎず。山僧方丈從り法堂前に下り、法堂より木棚頂に上る。一歩歩敢て汝等を(ヘ)愱賺せず。然も老邁(ト)龍鍾として欹有り反有り、緩有り慢有りと雖も、諸人且く怪笑すること莫れ。」卓主丈して下座。

端午上堂、「吾れに一顆の大(チ)還丹有り、無量劫來覓むること卽ち難し、便ち能く此の如く呑得下せば、萬重生死の關を透出せん。」卓主丈。

上堂、「是れ過現未來、過現未來に非ず、大海を攪いて酥酪と作す、須彌を吹いて塵埃と作す。」大衆を召して云く、「會すや、東行謾に說く西行の利、德雲下らず妙高臺。」拂子を擊つて下座。

中夏上堂、無量劫來の頑惡牛、一般の頭角實に收め難し。諸人等しく是れ功力を施す、收取すとも收め難し這の一頭。此の牛獲得すれば始めて奇なる哉、鐵壁銀山盡く豁開す。更に無學が玄玄路に參ぜば、別に(リ)薌藪有りて汝が來るを待つ。

上堂、僧問ふ、「一夏將に盡きんとす、此の事猶ほ未だ明めず。」師云く、「是れ誰が咎ぞ。」進んで云く、「忽然として明めて後如何。」師云く、「著衣喫飯。」進んで云く、「如何なるか是れ函蓋乾坤の句。」師云く、「截斷衆流。」進んで云く、「如何なるか是れ截斷衆流の句。」師云く、「函蓋乾坤。」進んで云く、「如何なるか是れ隨波逐浪の句。」師云く、「自ら去つて參ぜよ。」進んで云く、「此の三句の外請ふ師道へ。」師云く、

(ヘ)愱賺。あやまりだまさるるなり。
(ト)龍鍾。老病のこと、又涙を垂るることにも用ふ。
(チ)還丹。神仙秘密の妙藥。
(リ)薌藪。薌は香に同じ。

「曾て汝に辜負せず。」師乃ち云く、「萬仭崖頭の句、水に入り泥に入るの句、恁麼に一蹈に蹈透せば、便ち見ん三世の諸佛、六代の祖師、異口同音、廣長舌を出すことを。福山、聻。」良久して云く、「只だ一橛を得たり。」

雷雨に因つて上堂、法雷を震ひ法鼓を擊つ。慈雲を布き兮甘露を洒ぐ。諸人に報ず打して徹せしめよ。雲は是れ龍王身上の衣、雨は是れ龍王身上の血。

解夏小參、僧問ふ「記得す、阿育王、賓頭盧尊者に問うて云く、『承り聞く、尊者親しく佛に見え來ると、是なりや否や。』尊者、眉毛を策起す、意作麼生。」師云く、「面皮厚きこと三寸。」進んで云く、「王措くこと罔し、聻。」師云く、「爭か他を怪み得ん。」進んで云く、「尊者云く、『阿耨達池の龍王、佛を請じて齋す、老僧も亦其の數に預る。』此の意又且つ如何。」師云く、「何ぞ早く與麼に道はざる。」進んで云く、「只だ和尙の如き、正法を傳持すること已に是れ五十五傳なり、傳持底の事甚麼の處にか在る。」師云く、「一點。」進んで云く、「與麼ならば則ち正宗滅在す瞎驢邊、盡大地の人扶け起さず。」師云く、「三十の烏藤、汝が大膽を賞す。」僧禮拜す。復た僧有り、問ふ「一把の香芻拈ずるに未だ暇あらず、六鐶の金錫遙空に響く。學人上來願はくは提唱を聞かん。」師云く、「脚下を看よ。」進んで云く、「大火西に流れ、涼風野に入る時如何。」師云く、「切に忌む、他に隨ひ去ることを。」進んで云く、「與麼ならば則ち珊瑚枝枝月を撐著す。」師云く、「月、聻。」進んで云く、「記得す、仰山、東寺に參ず、寺云く、『已に相見了也、上來

を用ひず。』此の意如何。」師云く「相見の事作麼生。」進んで云く「仰云く『恁麼の相見當らざること莫しや。』寺便ち方丈に歸りて門を閉却す。又且つ作麼生。」師云く「彼此便宜を失す。」進んで云く、「仰山、潙山に擧似す。潙云く『寂子是れ甚人の心行ぞ。』仰云く『若し恁麼ならずんば、爭か伊を識得せん。』還つて端的なりや也た無や。」師云く「外面失利、屋裏拔本。」進んで云く、「和尚拈じて云く、『東寺の險は何ぞ潙山の險に似かん。』意那裏にか在る。」師云く「老僧が罪過。」進んで云く、「一夏已に過ぎ蠟人眼開く、親切の一句請ふ師指示せよ。」師云く「嗚咿嗚咿。」進んで云く、「夜來の雁に因らずんば、爭か海門の秋を見ん。」師云く「未だ敢て相許さず。」師乃ち云く「太虚に劍を掛く、水洩れども通せず、鞭影纔に分つて青天撲落す。恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、九十日の中、只だ要す諸人一箇半箇有り、獨脚棄子を透過し、五重の鐵關を打開して、萬仭崖頭に向つて哮吼一聲せんことを。這箇便ち是れ生獅子兒、喚んで銅頭鐵額の漢と作す。我れ甘つて人無き處に向つて斫額して汝を望まん、甚に因つてか此の如くなる。採石渡頭山錦に似たり、(ヌ)藤王閣上水天の如し。」復た擧す。雪峯上堂に云く「此の事を會せんと要せば、古鏡臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずるが如し。」玄沙云く「明鏡來る時如何。」峯云く「胡漢倶に隠る。」沙云く、「這の老漢脚跟未だ地に點せざること在り。」師拈じて云く「曾郎は古鏡裏に向つて身を藏す、謝郎は明鏡外に向つて手を出す。父に迷子の訣有り、子に打爺の拳有り、然りと雖も、福山を見んと要せば、

(ヌ)藤王。滕王の誤か。

猶ほ關を隔つること在り。」

解夏上堂、僧問ふ、「秋風纔に動じ、布袋頭開く。去る者は自ら去り、來る者は自ら來る。正與麼の時願はくは提唱を聞かん。」師云く、「夜行踏白すること莫れ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち門を出でて唯だ恐る先づ到らざることを。㋸路に當つて誰有つてか長く來るを待たん。只だ心空及第して歸る底の人の如きんば、如何が他を接せん。」師云く、「汝不才に非ず、老僧年邁。」進んで云く、「先聖云く、『一言纔に擧ぐれば千車同轍、微塵を該括するも猶ほ是れ化門の說。』是れ甚麼の道理ぞ。」師云く、「㋾石上蓮を栽ゑず。」進んで云く、「記得す、翠巖夏末、衆に示して云く、『一夏以來兄弟の爲に說話す、看よ翠巖が眉毛在りや。』此の意如何。」師云く、「僞を作せば心勞して日に拙し。」進んで云く、「保福云く、『賊と作る人心虛る、』長慶云く、『生也、』雲門云く、『關、』又且つ如何。」師云く、「關東紙貴し、㋻一狀に領過せん。」進んで云く、「這の四尊宿恁麼に道ふ、畢竟誵訛甚麼の處にか在る。」師云く、「長者は自ら長、短者は自ら短。」進んで云く、「和尚今夏、兄弟の爲に說話す、幾莖の眉毛を添へ得たる。」師云く、「向に道ふ、山下の道を行くこと莫れ、果然として猿叫ぶ斷腸の聲。」進んで云く、「還つて學人の擊展を許さんや也た無や。」師云く、「牛無ければ馬を使ふ。」進んで云く、「千山萬水雲を穿ち去る、撥草瞻風㋕帽を裹んで歸る。」師云く、「三十年後、此の話大いに行れん。」次で僧有り、問ふ、「懸泉千尺龍湫に

㋸當路。碑文、白字を鐫る。
㋾石上。水を借つて花を獻ぜず。
㋻一狀。一卷に綴ぢてなり。
㋕裹帽歸。帽子を落した所で頭を拾ふて行く。

瀉ぐ、一葉蕭蕭たり萬水の秋。坐して孤雲を看行月を看る、更に佛法の心頭に掛くる無し。」師云く、「汝が境界に非ず。」進んで云く、「四月十五日結、上下四位一團の鐵、七月十五日解、百川到流閙聒聒。正恁麼の時、請ふ師祝聖。」師云く、「萬年松は祝融峯に在り。」進んで云く、「記得す、趙州、臨濟を訪ふ、州纔に脚を洗ふ、濟便ち下來して問ふ、『如何なるか是れ祖師西來意。』州云く、『正に老僧が洗脚に値ふ。』此の意如何。」師云く、「須らく是れ趙州にして始めて得べし。」進んで云く、「濟則ち近前して側ち聽く、州云く、『會せば則便ち會せよ、啗啄して作麼かせん。』又作麼生。」師曰く、「㊂猶ほ一著を缺く。」進んで云く、「濟拂袖して便ち行く、州云く、『三十年行脚、今日人の爲に錯つて注脚を下す。』意何くにか在る。」師云く、「瓜州に瓜を買ふ漢。」進んで云く、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云く、「祖師は汝が脚底に在り。」進んで云く、「如何なるか是れ三十年行脚の事。」師云く、「東風西水。」進んで云く、「與麼ならば則ち蘆華兩岸の雪、江水一天の秋。」師云く、「物を弄して名を知らず。」次に僧有り、問ふ、「記得す、龐居士、馬大師に問うて云く、『萬法と侶たらざるもの是れ甚麼人ぞ。』大師云く、『汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、即ち儞に向つて道はん、』此の意如何。」師云く、「脚跟下好し三十棒を與ふるに。」進んで云く、「龐居士當下に大悟す、還つて諦當なりや也た無や。」師云く、「泥牛觸折す蒼龍角。」進んで云く、「士偈有り、云く、『十方同聚會、箇箇學無爲、此れは是れ選佛場、心空及第して歸る。』師還つて他を肯ふや也た無や。」師云く、「他を肯はず。」進んで

㊂猶缺一著。吾れに三十棒ありと。

云く、「一口に吸盡す西江水、豈に是れ馬大師の殺人刀にあらずや。」師云く、「爾（タ）胡說を要せざれ。」進んで云く、「十方同聚會、箇箇學無爲、豈に是れ龐居士の活人劍にあらずや。」師云く、「却つて些子に較れり。」進んで云く、「今日和尚、他の古人を出でて某甲に指示せよ看ん。」師云く、「殺人刀活人劍。」復た僧有り、問ふ、「昨夜西風八極に生ず、今朝檀越山に入り來る。大衆筵に臨む、請ふ師提唱せよ。」師云く、「老僧幾ど喫顛。」進んで云く、「只だ風穴が云ふが如きんば、祖師の心印狀鐵牛の機に似たり、如何なるか是れ印。」師云く、「天象定形無し。」進んで云く、「恁麼ならば即ち八面の清風藏すこと得ず、一輪皎潔として今朝に在り。」師云く、「是れ這箇の道理にあらず。」進んで云く、「如何なるか是れ鐵牛の機。」師云く、「（レ）動著すれば即ち失す。」進んで云く、「風穴又云く、『去は即ち印住し、住は即ち印破す。』意作麼生。」師云く、「湘南潭北。」進んで云く、「今日福山門下、（ソ）法歲已に周し、功行已に圓なり。未審し和尚、如何が此の印を分付せん。」師云く、「五五二十五。」僧禮拜す。
師乃ち云く、「向上の一著、清涼大池の如し、菩薩之を見るときは即ち寶明空海と爲す、諸天之を見るときは則ち琉璃宮殿と爲す、世人之を見るときは則ち（ソ）水漿と爲す、餓鬼之を見るときは則ち膿血と爲す、魚龍之を見るときは則ち（ネ）窟宅と爲す。箇の衲僧有つて出でて道はん、無漏の法、有漏の談を作すべからず。只だ他に向つて道はん、若し此の話頭を明めんと要せば、更に參ずること三生六十劫。」

（タ）胡說。亂道、二枚の舌。
（レ）動著。國王の苗稼を犯す。
（ソ）法歲。制解のことなり。
（ソ）水漿。しろみづ。
（ネ）窟宅。瑠璃の窟宅。

卓主丈して下座。

開山忌日拈香を請ふ。「寬たり曠たり、(ナ)寂たり寥たり。是れ恩怨何れの處にか蹤を求めん。一甌香散ず秋天の碧、(ラ)滄海依然として浪空を拍つ。」香を挿む。

上堂、金井梧桐一葉飛ぶ、十方の諸佛眼眉の如し。些の巴鼻沒巴鼻有り、古道從來(ム)遺を拾はず。

中秋上堂、「靈山には月を指し、曹溪には月を畫く。月を見て須らく指を忘るべし。(ウ)口を開くことは舌に干るに非ず。別別、淸冥の(キ)風露桂華を颺す、玉兎三更深雪に臥す。絕瀟洒、瀟洒絕、學翁出醜人の知る沒し、只だ謝郎のみ有つて驚いて舌を吐く。」卓主丈して下座。

(ナ)寂兮。烏黑く鷺白し、人の到るなし。
(ラ)滄海。昔日の舟は此處より繇す。
(ム)不拾遺。行く時は徑に依らず路に遺ちたるを拾はず。
(ウ)開口。餅を話したばかりでは腹に滿たず。
(キ)風露。天香桂子落ちて紛紛。

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷三 終

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷四

相州瑞鹿山（イ）圓覺興聖禪寺開山語錄

侍者　眞慧　等編

弘安五年十二月八日開堂。（ロ）大光明殿（ハ）慶讖陞座。

拈香して云く「此の一瓣の香、根、忠孝の地に萠し、枝、般若の林に生ず。爐中に爇向して、恭し
今上皇帝聖壽無疆を祝延爲んとす。洎び文武（ニ）宗寮咸く祿位を臻さんことを。」

次に拈香して云く「此の一瓣の香、（ホ）根塵を脫落して更に枝葉無し、淸淨彌滿、一切に墮せず。爐中に爇向して、見坐道場、毘盧遮那佛、十方の諸佛、洎び圓覺會上十二菩薩。觀世音菩薩、一切菩薩、護法天龍、一切聖衆に供養したてまつる。」遂に趺座、主丈を拈じ、大衆を召して云く「（ヘ）會す麼、（ト）無上法王に大陀羅

（イ）圓覺。鎌倉五山の第二。
（ロ）大光明殿。佛殿なり、本尊は寶冠釋迦十二大士。
（ハ）慶讖。祝慶讖除。
（ニ）宗。寀の古字なり。
（ホ）根塵。六根六塵。
（ヘ）會麼。勸レ君更盡一杯酒。
（ト）無上法王。衲僧破蒲團上に。

一門有り、名けて圓覺と爲す、一切清淨眞如菩提涅槃を流出す。過去の諸如來、斯の門已に成就し、現在の諸菩薩今各圓明に入る。未來修學の人、當に依つて此の如く住すべし。」徑歴に見得せば、便ち見ん（チ）無方清淨、無邊虛空、一身清淨。一身清淨なるが故に、多身清淨、多身清淨なるが故に、乃至十方の衆生清淨ならずといふこと無し。虛空を盡して一切平等清淨。」大衆を顧視して云く、「青山は左轉し、滄海は右盤す。日は東より出でて、斗は南に向つて移る。（リ）爍迦羅眼、停機せず、萬象森羅（ヌ）轉轆轆。是れ汝諸人若し這裏に向つて、意、玄を停めず、眼、戸に掛けずんば、便ち清淨法殿に登つて大圓覺を證し、菩提を滿足すべし。」主丈を卓して云く「猿は啼く碧嶂千峯の外、更に靈蹤の上方に在る有り。」復た云く「太守、眞空三昧の中に入り、性空眞海に遊泳して、空寂の中に住せず、而も如幻の佛事を顯現し、圓覺精藍を現造す。不日の間、普光明殿を造出し、遮那の妙體、補陀大士、十二菩薩、天龍八部、僧堂廚庫、皆已に畢く備る。又一日、五大部經及び圓覺修多羅經を書寫し、今日開堂、諸佛菩薩天龍八部を延請して、此の道場に（ル）入る。廣く禪席を開き、廣く禪侶を納る。仍つて山僧を請じて、正法眼藏、涅槃妙心を擧揚せしめ、仰いで慈尊及び諸菩薩を讃す。種種の功德、種種の佛事、眞實にして虛ならず、功德量り難し、虛空と雖も包裹し及ぼさず、千佛之を讃すとも盡きず。所以に參禪の人、此の理を明め

（チ）無方清淨。上、寸土なく、下、片瓦無し。

（リ）爍迦羅眼。此に金剛眼、又は堅固と云ふ、停機は機位を離れず、滄海に露在す。

（ヌ）轉轆轆。轆は車の運轉する形容なり、轉變自在をいふ。

（ル）入。五佛同道。

んと要せば、㋾空寂の門に住せず、有爲の相に住せず、如幻三昧を幻出し、無功用行を顯出す。頭頭妙體、刹刹全く彰ること、這箇の時節を出です。釋迦老漢二千年前、恒沙劫の事を將つて、促めて四十九年に在つて說き盡す、後來四十九年の說を將つて促めて一日に在つて寫し畢るも、亦這箇の時節を出でず。我が衲僧家、一日寫す所の經を將つて、一棒一喝上に向つて、掃蕩して更に餘蘊無し。這裏に到つて千百萬劫を控ふるも、亦其の長を見ず、石火電光も其の短を見ず、玄妙聖量の境界を證し盡すも、亦一絲毫を增さず、愚癡暗閉に居るも、亦一絲毫を減せず。來無く去無く、暗無く明無し。大に非ず小に非ず、愚に非ず智に非ず。濶に非ず狹に非ず、短に非ず長に非ず。有爲に非ず無爲に非ず。自然に非ず不自然に非ず。造作に非ず不造作に非ず。莊嚴に非ず不莊嚴に非ず。一塵の內を指出して、圓覺伽藍を擘開す。遮那の妙體、塵沙に遍滿し、十萬の菩薩、㋻面面相對し、光明照徹し、十方の華雨、沙界に遍周し、水鳥樹林齊しく寶光を放つ。山色溪聲同じく妙法を演ず。所以に道ふ、極大は㋕小に同じく、邊表を見ず、㋵極小は大に同じく、境界を忘絕す。恒沙の諸佛儼然として存し、廣長舌相聲浩浩。且く道へ、又是れ箇の什麼の時節ぞ。」喝一喝す。復た偈を說いて曰く、「偉なる哉菩薩、宰官を現じ、能く深廣の大願力を具して、深く法喜禪悅の味を樂み、此の㋟摩尼大寶王を悟る。只だ此の寶王、衆相を具し、五百億の寶冠を變幻す。只だ此

㋾空寂。隻手の聲の中。
㋻面面。和光。
㋕小。蟭螟眼睫の上。
㋵極小。微塵裡に無量の經卷を備ふ。
㋟摩尼。廣大の施。

の摩尼寶冠の裏、五百億の瓔珞を變現す。一一の瓔珞寶冠の內、五百億の宮殿を豁開す。一一五百億の宮殿、五百億の寶光を湧出す。一一光中、衆色を具して五百億の寶蓮を開敷す。一一の寶蓮微妙の相、五百億の佛土を顯現す。一一の佛土各差別あり、各五百億の如來を坐せしむ。一一の如來實相を示し、廣く五百億の三昧を說く。三昧の中㋹彼我無く、一切諸の寃親有ること無し。㋞覺空空覺、㋡太虛に等しく、㋧空覺覺空、所有無し。名を離れ相を離れ對待を絶す。諸佛の方便も亦復た然り、等しく一切諸有情を度して、煩惱を斷せず實相を談ず。一切の菩薩此の法を證して、㋤湛寂回旋す生死海、回途法界廓として無邊、一切衆生悉く成佛、㋶此の深心を將つて塵刹に奉ず、護法護民只だ者れ是れ。」主丈を卓す。

佛殿の額を掛く、「解脫門開く正覺場、㋰十虛無際露堂堂、毘盧藏海乾坤濶し、樓閣門前白晝長し。故に我が大檀那㋒相模元師、㋼性天廓徹、功行雙べ全し。大信力を具して佛知見に入り、一彈指の間華嚴法界を湧出し、無住相從り遮那の妙身を捧出し、塵塵刹刹、寶印光寒し、物物頭頭、妙莊嚴域、㋨回機轉位、全主全賓、一會の靈山。」乃ち手を擧して云く、「只だ這れ便ち是、只だ今日高く牌扁を揭ぐが如きんば、何の祥瑞か有る。蕩蕩たる㋔金光霄漢を動じ、萬年千載坤維を鎭す。」

㋹無彼我。無說法、無聽法。
㋞覺空。寂而常照。
㋡太虛。無邊の虛空、海の一漚なり。
㋧空覺。照而常寂、
㋤湛寂。娑婆即寂光土。
㋶將此深心。楞嚴の文。
㋰十虛、縱橫廣濶。
㋒相模元帥。北條時宗公。
㋼性天。慧日高照。
㋨回機。足を展ぶることは足を縮むるの裏に在り。
㋔金光。日月と雙べ掛く。

檀那泊び兩序を謝する上堂、「賢に任じ能を使ふは住山の職なり、長を裁し短を補ふは梓匠の職なり。今則ち檀那新に圓覺伽藍を建つ、一木の支ふべきに非ず。圓なる者は柱と成し、方なる者は梁と作し、大なる者は桷と爲し、小なる者は㋷桀と爲す。一長一短、方有り圓有り、各其の責に任せ、各其の能を呈す。便ち見る㋳樓觀空に翔り、叢林雍肅、一新の壯麗、和氣靄然たることを。然も是の如くなりと雖も、老僧手の舞ひ足の蹈む場を作して、㋮燕管相待し去らん。㋕いろはにほへと、囉囉哩哩囉囉囉。君に勸む樽中の酒を飲み盡せ、老僧陪笑し又陪歌せん。且く道へ、是れ何の㋡曲調ぞ。」卓主丈して云く、「㋙萬年歡。」

臘八上堂、「老瞿曇見地親しからず、却つて道ふ、明星を視て㋓悟道すと。正に是れ人貧にして智短く、馬痩せて毛長し。兎頭に角を截り、龜背に毛を刮る。累後代の兒孫に及んで、出頭することを得ず。山悠悠水悠悠、冤深うして報じ難く、恩大にして酬い難し。末上他に這の一籌を輸く」と云つて、主丈を擲下す。

上堂、歲律茲に暮る、萬象崢嶸、老胡不會、㋢眼睛を徹瞎す。

上堂、大衆を召して云く、「一念欺くときは則ち㋭漂ふて大海と爲り、一念㋚疑ふときは則ち結んで

㋷桀。恐らくは粒（くひ）か。
㋳樓觀。大きなる伽藍。
㋮燕管。もてなしのこと。
㋕いろは。これが國師の手腕なり。
㋡曲調。陽春か巴人か。
㋙萬年歡。一飽能く消す。
㋓悟道。深聞淺悟、三更路を問ふ。
㋢徹瞎眼睛。達磨の眼中に兩莖の筋を欠く。
㋭漂。愛。
㋚疑。恩。

高山と爲る。如かじ一齊に放下して、百不會百不知ならんには。㋖騰騰任運、任運騰騰、行には其の之く所を知らず、坐して其の爲す所を知らず、三文に箇の油糍を買つて喫し、糍油を喫し了つて肚飢ゑず。」拂子を擊つて下座。

歲夜小參。「㋙日日日は東に上り、日日日は西に下る、㋤循環終始沒し、今古空しく悠なる哉。衲僧家、㋯造化に逆して參じ、造化に順じて領ず。恁麼に見得せば、便ち見ん青山と白雲と同じからず、明月と滄海と約するに非ざることを。三世の諸佛、眞を弄して假と成し、六代の祖師、贓を變じて賊を考つ。賊賊。天上に彌勒無く、地下に彌勒無し。」卓主丈す。復た擧す、洞山と密師伯と路に白兎に逢ふ、密云く、「大いに白衣の拜相に似たり。」洞云く、「積代の簪纓暫時落魄。」師拈じて云く、「密師伯、貧從り富に入る、老洞山富從り貧に入る、總に是れ依草附木。若し是れ山僧ならば則ち然らず。豈に道ふことを見ずや、蓮華の水に著かざるが如く、清淨なること彼に過ぎたり。咄。説き得て道理好し、㋛歸依佛法僧。」

上堂、㋓了了知了了見、綠樹嬌鶯囀じ、畫梁乳燕鳴く。五陵の公子踏青して行く、却つて㋪青羅扇を把つて面を遮る。

㋖騰騰。安に居して危を諳んず。
㋙日日。照して山に連る。
㋤循環。往復無間じや。
㋯逆造化。苦に逢ふて甘を知る。
㋛歸依佛法僧。我れ汝を輕んぜず、汝久しからずして成佛せん。
㋓了了知了了見。知は是れ妄覺、見を見する時。
㋪青羅扇。青ききぬ扇。

佛涅槃上堂、「㋲常無常の義、動不動の法、潘閬倒に驢に騎り、梵志襪を翻著す。」卓主丈して下座。

上堂、「色空空色、空色色空、柳は淺綠を搖し、華は深紅を發す。」良久して云く、「未だ三八九を明めず、且く㋝馬蹄の風を逐ふ。」

上堂、「鐘中鼓響無し、鼓中鐘聲無し、鐘鼓相參らず、句句前後無し。觀音菩薩、三眼國土に入つて、自恣の佛事を作し了れり。」卓主丈して云く、「事を知ること少き時煩惱少く、㋜人を識ること多き處是非多し。」

上堂、王子寶刀の喩、衆盲摸象の喩、灼然として是れ有、灼然として是れ無。大衆會すや、門前の案山子を拈却して、須ひず劫を論じて長途に走ることを。

上堂、「㋑一は是れ一、二は是れ二、公案甚だ分明、衲子慚愧無し。」良久して云く、「猢猻毛蟲を食ふ、波斯鬧市に入る。」

浴佛上堂、「兜率を離れ閻浮に降す、是れ凡是れ聖、一網に俱に收む。雲門の棒頭短しと雖も、一棒也た㋺來由有り。豈に道ふことを見ずや、我れを知る者は春秋か、我れを罪する者は春秋か。」良久して、卓主丈して云く、「如今四海鏡如りも平なり、行人路を與へて讐を爲すこと莫れ。」

結夏小參、僧問ふ、「記得す、僧、馬祖に問ふ、『如何なるか是れ佛。』祖云く、『卽心是佛、』『意旨如何。』」

㋲常無常。　藏通別圓共に四諦あり。
㋝馬蹄。　人間の頭を買ひに行く。
㋜識人。　住持の後は。
㋑一是一。　一不レ做、二不レ休。
㋺有來由。　國に憲章あり。

師云く、「彩鳳丹霄に舞ふ。」進んで云く、「(ハ)南堂の靜和尚拈じて云く、『即心即佛、鐵牛骨無し。』此の意作麼生。」師云く、「我れは道はん、鐵鎚無孔と。」進んで云く、「兩人恁麼の提唱、且く道へ、何の眼目をか具す。」師拂子を擧して云く、「者裏に向つて會することを得ざれ。」進んで云く、「只だ和尚、恁麼の如き、古人と相去ること多少ぞ。」師云く、「知らず。」進んで云く、「此の曲只だ應に天上に有るなるべし、人間能く幾回か聞くことを得ん。」師云く、「老僧が罪過。」僧禮拜す。師乃ち云く、「黄面老漢、二千年前、箇の影子を畫いて、喚んで圓覺伽藍と作す、(ニ)可煞だ相謾ず。二千年後、日本國內、大開士有り、一微塵を破して一莖草を揷む。便ち見る黄金仄布し鐘梵(ホ)鏗鍧たることを。亦圓覺伽藍と名け、凡聖同じく此に禁足す。法孫小比丘、此に就いて箇の鋪子を開き、山を山に藏し、天下を天下に藏す。然も今古同じからずと雖も、面目更に(ヘ)兩樣無し。諸人還つて見るや。若し也た見得せば、鯤鯨の變化頃刻に在り、若し也た見ずんば、九十日の內長連牀上、粥有り飯有り。」擧す。僧、婺州の寶資和尚に問ふ、「如何なるか是れ金剛の一隻箭。」資云く、「什麼と道ふぞ。」僧再び前話を擧す。資云く、「新羅國を過ぎ去れり。」頌に云く、「金剛の寶箭新羅を過ぐ、百戰場中の馬伏波。古往今來未歸の客、且く看よ(ト)新月の松蘿に掛ることを。」

上堂、選佛場開く、題目見在、透得過する者は、(チ)金榜狀元。

(ハ)南堂。靜は五祖演に嗣ぐ。
(ニ)可煞。巧を弄して拙と作す。
(ホ)鏗鍧。かねのなるこゑ。
(ヘ)兩樣。千古の標榜。
(ト)新月。龍陀謀略、未だ見ること能はず。
(チ)金榜狀元。榜はふだ、狀元は及第の首席。

上堂。「今朝五月一、半雨還た半晴。楊柳影邊風動く。何人か臂を掉つて經行す。」良久して云く、「一字公門に入れば、九牛車けども出でず。」

端午上堂。主丈を拈じて云く、「一には作病を除き、二には止病を去り、三には任病を空じ、四には滅病を了ず。㋷是れ病是れ藥、是れ藥是れ病。」卓主丈して云く、「九天の甘露㋦醍醐を灑ぐ、大地の㋸蒼生熱惱除く。」

上堂。結夏已に一月、即心即佛の話作麼生。吉凶爻象、角徵宮商、總に這箇の時節を出でず。

上堂。老牛車を挽いて行き、小牛㋾母の後に隨ふ。棒喝忽ち交馳、各各頭を競ふて走る。拈華微笑、鉢水投針、總に剩法と成す。

上堂。薫風涼しく夏日長し、園林陰翳し、草木香を吹く。笑ふに堪へたり老胡此土に來つて、端無く肉を剜つて㋻却つて瘡を成すことを。

上堂。聲色堆頭業風浩浩、兜率宮中日月長し、雪山歩歩㋕閑草無し。

鳴鐘。「偉いなる哉正覺王、大いに談空の口を開き、一音演說法、震動す大千界、無情有情の體を顯し。空覺妙覺の元を極む。熾然說にして而も寂然不動、不思議にして而も運化窮り無し。諸佛此に於て阿耨多羅を證し、諸佛此に於て妙法輪を轉す。此土彼土、乃至河沙の佛土幽として濟はずといふこ

㋷是病。能く病源を諳んず。
㋦洒醍醐。佛病、祖病、人病、法病。
㋸蒼生。功驗は一念相應湯にあり。
㋾隨母後。人人尋常と作す。
㋻却成瘡。人の蓄覆するありや。
㋕閑草。皆肥膩草ばかり。

と無く、一天二天及び三十三天、門として閉かずといふこと無し。此れは是れ外脫の空宗、亦諸佛の㋵實相と名く。」鐘を鳴すこと一下して云く、「皇帝萬歲、重臣千秋。」又鳴すこと一下して云く、「大檀那、福壽嵩海高深、衆檀信、祿算椿松齊しく茂せん。」又鳴すこと一下して云く、「圓覺道場永く魔事無く、大心の衲子早く上乘を悟らん。」復た連鳴三下して云く、「劫石は消する日有りとも、㋟洪音は盡くる時無けん。」

解夏小參、僧問ふ、「翠嵓示衆、『兄弟と東語西話す、看よ翠嵓が眉毛在りや、』意旨如何。」師云く、「㋹人其の便を得るに非ず。」進んで云く、「保福云く、『賊と作る人心虛る、』意作麼生。」師云く、「老僧曾て爾諸人に背かず。」進んで云く、「長慶云く、『生也、』又作麼生。」師云く、「引出して豐年を樂む。」進んで云く、「雲門云く、『關、』又且く如何。」師云く、「臭肉蠅を來す。」復た僧有り、問ふ、「趙州、南泉に問ふ、『如何なるか是れ道。』泉云く、『平常心是れ道。』意旨如何。」師云く、「平常心意旨無し。」進んで云く、「州云く、『還つて趣向を假るや也た無や。』泉云く、『向はんと擬すれば即ち乖く、』と。」師云く、「背も亦失せず。」進んで云く、「州云く、『擬せずんば爭か是れ道なることを知らん。』泉云く、『道は知にも屬せず、不知にも屬せず。若し不擬の道に達せば、廓然として太虛空の如し。豈に強ひて是非すべけんや』と。」師云く、「一塵飛んで天を翳す。」進んで云く、「趙州悟り去る、還つて諦當なりや也た無

㋵實用。法華にけ。
㋟洪音。洪音は鐘の聲なり、鐘の音のたゆることなきをいふ。
㋹人得。眉の黑白ばかり。

や。」師云く、「葫蘆棚上に(ソ)猪頭を掛く。」師乃ち云く、「我れ今夏一夏、儞諸人箇の悟處有つて、儞が與に證據せんことを待つ。四月より待つて五月に到り、五月より待つて六月に到る、六月より待つて如今に到る。晝戸を閉さず、夜戸を扁さず、風前月下雙眼青寒、儞が吾が堂に陞り、吾が室に入ることを望まず、能く簷前砌下に向つて行得一遭せば、也た儞を喚んで家裏の人と作さん。明日看よ看よ解夏なり。諸人作麼生。」良久して膝を拍して云く、「離亭折らず(ツ)依依たる柳、灞岸空しく添ふ(ネ)遠客の愁。」擧す、僧、香嚴に問ふ、「如何なるか是れ道。」嚴云く、「枯木裏の龍吟。」師拈じて云く、「香嚴好語、爭奈せん空劫前に坐在して、路轉じ峯回る底の時節を知らざることを。」

上堂、主丈を拈じて云く、「山僧が鉤線初より(ナ)影跡無し、汝諸人、情識を去却して見聞を離却して、三寸の外吞吐せんことを要す。」良久して、主丈を擧けて下座。

上堂、一句現成是れ何の題目ぞ。天地日月東西南北、參禪の人、(ラ)誓速すること莫れ、萬重の關を打破して、遼空の鏃を看取せよ。

上堂、祖師妙訣無し、諸人瞥不瞥、(ム)白狢樹頭魚子を散じ、急水灘頭鳥窠を作る。阿呵呵。(ウ)我が王

(ソ)掛猪頭。阿爺の面に。
(ツ)依依。一塵も其の高きを減ぜす。
(ネ)遠客愁。昨年花看の處、今日葬禮。
(ナ)無影跡。羚羊の角を掛くる時の如し。
(ラ)誓速。ため息ついてなり。
(ム)白狢。腋下の毛、こゝでは木の眞中をいふ。
(ウ)我王庫。王の寶藏中にもこれほどの名器はない。

庫の內、是の如きの刀無し。

中秋上堂、靈山には月を指し、曹溪には月を畫く。㋼老兎輪を推し、桂香雪を飄す。青冥の風露太だ高寒、誰と同じく共に欄干に倚らん。

上堂、「得に所得無く、得ずといふ所無し。既に無所得、云何が得を得ん。金剛手、八楞棒を揮ふ、㋜須彌白浪、空に飜つて立つ。陝府の鐵牛大いに哮吼し、東海の烏龜眼睛赤し。且く道へ是れ何の道理ぞ。」良久して云く、「㋔不知。」

開爐上堂、「佛法淡泊、叢林凋零、古來老禿丁、有る底は柴を拈じて㋨火を吹き、或は丈を將つて火を撥ふ。皆是れ窻を隔てて馬騎を弄ずることを看ると一般なり。後昆を悞賺して、人をして齒を切らしむ。無學老比丘、這般の去就を作さず、諸人各自に歸堂せよ。」主丈を靠けて下座。

達磨忌上堂、「霜露既に降つて木落ち天寒し、嗟嗟此の時景、㋳吾が祖西天に返る、相憶ふて更に相憶ふ。今年又明年、㋡蒼海幾時か乾く。生鐵心肝を打す。」同じく拈香、「應化は眞佛に非ず、非眞は應化にあらず。」大衆を顧視して云く、「若し也た絲毫も之に及ぼし盡さずして、祖師を見んと要せば、天地懸隔す。」

上堂、「千句萬句、百千萬億句、恆河沙の句、百千萬億恆河沙の句、只だ一句と作して諸人に說與

㋼老兎。描すれども成らず、畫すれども成らず。
㋜須彌白浪。高山白浪起り 井底紅塵飛ぶ。
㋔不知。空劫前に坐在して、路轉じ峰回る底の時節を知らず。
㋨吹火。火の熱を添へ、金の黄を增す働きなり。
㋳吾祖。缺齒の吾が祖、今に到つて沒蹤跡。
㋡蒼海。青天易レ見。

す。卓主丈して云く、「(ホ)我れ敢て汝等を輕んぜず、汝等皆當に作佛すべし。」

(ヘ)東山日長老相訪ふを謝する上堂。「雪峯門下の(ト)備頭陀、人に逢ふて偏に唱ふ脱空の歌、行脚して飛鸞嶺を出でず。火を把つて山を燒いて田螺を捉ふ。阿呵呵。會すや也た麼や。瞎驢滅却す正法眼、此の一天の明月を奈何せん。」卓主丈して下座。

新に(チ)正法眼堂を開く上堂。「檀那深く深法忍を證して、諸の如幻三昧の事を作して、工に命じて未だ一百日に及ばず、此の堂を幻出して飛動せんと欲す。今朝綵畫已に畢く備る。如幻種種諸莊嚴、(リ)衆寶妙妙戸牖を開く、刹刹塵塵罣礙無し。老僧深く此の堂中に坐して、拋擲す金圈と栗棘と。三千世界龍象奔り、須彌舞を作して日月走る。(ヌ)只だ此の句を將つて群生を利す。大地の衆生皆く成佛す。」

冬至小參、僧問ふ、「僧、慈明和尚に問ふ、『古鏡未だ磨せざる時如何。』明云く、『新羅に鼓を打つ。』『意作麼生。』師云く、『近づくこと得ず。』僧云く、『磨して後如何。』明云く、『西天に舞を作す。』『又且つ如何。』師云く、『遠きことを得ず。』僧云く、『今日學人、和尚に問ふ、古鏡未だ磨せざる時如何と。』師云く、『今日知らず明日の事。』僧云く、『磨して後如何。』師云く、『少年偏に惡む白頭の人。』僧禮拜す。師乃ち云く、「白髮蕭蕭として又一年、且く看る雲物の山川に遍きことを。自ら斷づ行

(ホ)我敢。法華の常不輕品の文。
(ヘ)東山日。高峯顯日、建仁に住す。
(ト)備頭陀。玄沙師備禪師は雪峯存に嗣ぐ。
(チ)正法眼堂。圓覺の名所。
(リ)衆寶。百寶無量の異光。
(ヌ)只將此句。吾れ常に此に於て切なり。

脚㋚聊頼無きことを。滴滴たる泉聲枕邊に落つ。所以を道ふ、去年の貧は未だ是れ貧ならず、今年の貧は正に是れ貧。去年の貧は卓錐の地無し、今年の貧は錐も也た卓つこと無し。窮するときは則ち變じ、變ずるときは則ち通ず。一線長じ一線を長ず。畫屏を撥轉し、門扇を推開す。珊瑚樹林白玉樓、栴檀塔黄金殿、甚に因つてか此の如くなる。」卓主丈して云く「貴に遇ふときは則ち賤」といつて、主丈を靠く。擧す、雲門示衆に云く「大用現前、軌則を存せず。」僧有り、便ち問ふ「如何なるか是れ大用現前。」門主丈を拈じて高聲に云く「釋迦老子來也。」師拈じて云く「雲門老子些の好處有り、然りと雖も吾れは其の長を愛して其の短を愛せず、是れ汝等諸人作麼生。」

至節上堂、「㋖鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る。一氣無作にして作、萬化然らずして然り。」拳を竪起して云く「者箇甚に因つてか喚んで拳と作す。」

雨序を謝する上堂、佛法の至要、國家の兵を治むると一般なり。六韜三略は諸人に付與す。若し是れ㋴將を將とせば、老夫却つて寸の長き有り。見ずや、旌旗日暖にして龍蛇動き、宮殿風微にして燕雀高し。

佛成道上堂、「王宮背じ居らず、六年空しく妄想す。深雪㋱凍不死、一場の沒伎倆。賊空屋に入り、犬荒村に吠ゆ、一天星月白し。」主丈を以て畫一畫して云く「爾が與に兩つながら平分。」大衆を顧視し

㋚聊頼。ほしいままなるをいふ、本據なきなり。
㋖鳶飛。詩經の句。
㋴將將。三尺の劍を持たずして謀臣猛將を弄すること一着。
㋱凍不死。息も絶えぬ。

て云く、「汝諸人、眼熱することを得ざれ。」卓主丈して下座。

上堂。「勞生擾擾として㋯勞生に對す、夢想重重結んで城と作す。」良久して云く、「㋛曉鐘を撞斷して殊に未だ醒めず、空しく餘す殘月の疏欞を照すことを。」卓主丈して下座。

除夜小參、僧問ふ、「僧、徑山に問ふ、『掩息灰の如くなる時如何。』山云く、『猶は是れ時の人の㋹功幹。』意作麼生。」師云く、「阿誰か免れ得ん。」進んで云く、「幹して後如何。山云く、『耕人田を植ゑず』と、又且つ如何。」師云く、「眞本客作の漢。」進んで云く、「僧云く、『畢竟如何。』山云く、『禾熟して場に臨まず。』又作麼生。」師云く、「二年同一春。」僧禮拜して退く。復た僧有り、問ふ、「記得す、僧、㋪法昌遇和尚に問うて云く、『今夜分歲、何の施設か有る。』昌云く、『㋲臘雪天に連つて白く、春風戸に逼つて寒し。』意旨如何。」師云く、「東家西家を知らず。」進んで云く、「僧云く、『大衆、箇の什麼をか喫せん。』昌云く、『嫌ふこと莫れ冷淡滋味沒きことを。一飽能く消す萬劫の飢。』此の意如何。」師云く、「天寒く日短し、㋝兩人一椀を共にす。」進んで云く、「今夜、和尚の分歲、聻。」師云く、「猶ほ少きを嫌ふこと在り。」師乃ち云く、「冬至未だ四十日に及ばず、看よ看よ又是れ歲除の夜、時光過ぎ易く、日月梭の如し。息を轉すれば來生只だ眨眼に在り。唯だ年の變ずるのみに非ず、又月兼化す。唯だ月の化のみに非ず、又日兼遷る。髮

㋯勞生。六種障礙、八種自在。
㋛曉鐘。金殿の鎖を鄲開して、玉樓の鐘を擊碎す。
㋹功幹。幹は能事なり、はたらきをいふ。
㋪法遇。倚遇。
㋲臘雪。十二の月雪が、白く降り、青風が寒く吹く。
㋝兩人一椀。儉約なること。

白く面皺み、火の灰と成るが如し。刹那刹那、密に移り暗に換る。此の時に擅到して、人自ら覺せす。」大衆を顧視す。良久して云く、「老僧與麼の告報、且く道へ意何くにか在る。」㋥華は須らく連夜に發くべし、曉風の催すを待つこと莫れ。」復た擧す、長慶示衆して云く、「淨潔打疊し了れり、近前來、我れ劈脊に汝に一棒を與へん。一棒の汝に與ふる有らば、須らく慚愧を生ずべし。一棒の汝に與ふる無くんば、作麼生か會せん。」師拈じて云く、「長慶、者裏に向つて屙す、老僧も無しとは道はず、也た他の三步五步に較れり。人の長慶の爲に主と作る底有らば、出で來つて老僧と相見せよ。」喝一喝。

歲旦上堂、昨夜思量す今日の禪、一半は是れ新、一半は舊。今朝衆に對して抖擻して看れば、㋑零零落落、風を趁ふて走る。髣髴たり去年の梅、依俙たり今歲の柳。雨過ぎて雲山片段青し、學翁が面目倶に出醜。是れ汝諸人、吾が爲に蓋覆する者有りや。咄。㋺我れは荒草裏に行き、汝は又深村に入る。

上堂、主丈を拈じて云く、「萬年一念癡獃を尊ぶ、偸心を死盡すれば㋩活眼開く。百億毛頭の獅子吼、塵塵刹刹風雷を起す。」卓主丈して下座。

上堂、「山僧尋常說法、只だ是れ一句、一半は汝に留與して看せしめ、一半は汝に付與して參ぜしむ。

㋥華須。每夜花は開く、人の口をあてにするなと。
㋑零零。鏡中の像の如く、空中の雪の如し。
㋺我行。御互に似た見識で、勝れて居らぬ。
㋩活眼。其の智にまさる子細がある。

參得透せば儞に許す主中の主を會することを。看得破せば儞に許す賓中の主を會することを。諸人且く作麼生か會す。」良久して云く、「麪を打つことは他の秋士の麥に還す、唱歌は須らく㋥是れ帝鄕の人なるべし。」卓主丈して下座。

雪に因つて上堂、「夜來一番の雪、大地光皎潔、高兮低兮、處として到らずといふこと無く、遠兮近兮。空無く缺無し。色前路有り蹤を留めず、聲外門を出でて眼眉を添ふ。絕瀟洒、瀟洒絕、諸人此に於て誵訛を定めば、烏龜を喚んで白鱉と作すこと莫れ。」

佛涅槃上堂、「今朝二月半、瞿曇㋭死款を供ず、雙林倶に白と變ず。百華紅爛熳、㋬一箇の臭死屍、命根猶ほ未だ斷ぜず、我れに七尺の紅釘有り、衆に信せて一針を下して看よ。」卓主丈して、良久して大衆を召して云く、「且く道へ、是れ耆婆か是れ盧扁か。」

上堂、「烏石嶺相見了也、望州亭相見了也。望州亭は即ち問はず、烏石嶺頭の事作麼生。」卓主丈して云く、「泥團を弄ずる漢、又恁麼に去れ。」

上堂、「㋣銅沙鑼裏の滿盛油、大家會すや。東州西州南州北州、桃華錦に似たり、新月鈎の如し。」卓主丈して云く、「如今馬上山色を看る、似かじ牛に騎つて自由を得るに。」

㋥是帝鄕。おまへは帝鄕の人ではあるまい。
㋭死款。棺材を買ふ。
㋬一箇臭死屍。平地上死人無數あることを免れず。
㋣銅沙。佛光、此の些子で飢人の食を奪ふ。

上堂。「妙中妙、玄中玄、曉色雲に連つて白く、松聲雨を帶びて寒じ。」卓主丈して云く、「(チ)靈龜卦兆無く、空殼鑽るに勞せず。」

佛生日上堂、今朝四月八、中天悉達を生ず。(リ)雲門棒頭短し、惜むべし打不殺なることを、瑞鹿今日(ヌ)又作麼生、一爐の沈水一盆の湯、毒藥醍醐一道に行ず。

結夏小參、僧問ふ、「記得す、臨濟、德山を訪ふ、瞌睡の勢を作す、意何くにか在る。」師云く、「賊を作すに關を謹む。」進んで云く、「濟、繩床を敲くこと一下、又作麼生。」師云く、「客は是れ主人の相師。」進んで云く、「甚麼をか作すと、意作麼生。」師云く、「一釣に便ち上る。」進んで云く、「濟云く、『和尚且つ瞌睡す、』又且つ如何。」師云く、「一場の榮を得と雖も、一雙の足を刖却す。」僧禮拜す。師乃ち云く、「(ル)一切の障礙即ち究竟覺。」大衆を顧視す。良久して云く、「豈に見ずや、阿耨達池より四大河を出す、一を恒伽河と名け、二を辛頭河と名け、三を博叉河と名け、四を私陀河と名く。或は金象の口從り、或は銀牛の口從り、或は琉璃馬の口從り、或は頗梨獅子の口從り、清淨香水を流出し、一一皆阿耨達池を遶くこと一匝して大海に趣く。」大衆を召して云く、「會すや。若し也た悟り去らば、妨げず、這裏に安居禁足することを。其れ或は未だ然らずんば、虛しく光陰を度ることを得ざれ。」擧す。僧伽難提尊者、因に風、殿角の鈴を吹き鳴す。伽

(チ)靈龜。昔河上の桑になり、空殼云々は、變盡して五さ卟すの境界がみえれば。

(リ)雲門棒。我れ若しそのかみの意。

(ヌ)又作麼生。打着か打不着か。

(ル)一切障礙。閻浮提の衆生・六種の障礙あり。

耶舍多尊者に問うて曰く、「風鳴るか鈴鳴るか。」多曰く、「風鈴の鳴るに非ず、我が心鳴るのみ。」提曰く、「心復た誰ぞや。」多曰く、「俱に寂靜なる故に」と。拈じて云く、「圓覺は即ち然らず、心復た誰ぞや、寂靜の相を離ると答へん。若し此の語を下し得ば、後代の兒孫、死水裏に坐在せず。」

結夏上堂、「淸淨彌滿中他を容れず。」良久して云く、「(ヲ)老來伎倆無し、石上蓮華を種う。」卓主丈して下座。

(ワ)三聖の東山至る上堂、主丈を拈じて云く、「三聖師姪老叔、佛鑑先師の折脚鐺子を得て、眞に是れ可憐生。日本に來つて堅擲横抛せんと擬す。此に到るに及んで、分文直らず。吾が姪、臂端力有り、頼に其れ提上挈下せば、便ち見ん死灰復た燄し、枯木重ねて榮ゆることを。未だ見ざる者をして見、未だ聞かざる者をして聞かしむ。」良久して顧視す。卓主丈して云く、「(カ)疾風勁草を知り、(ヨ)版蕩貞臣を識る。」

上堂、「證を語つて也た人に示すべからず、理を說かば也た證に非ず、了にあらず。南山華映ず北山の紅、東邊日出づ西邊の曉。」良久して云く、「(タ)寒巖異草の靑を守ること莫れ、白雲を坐斷するも宗妙ならず。」

端午上堂、主丈を拈じて云く、「諸人還つて會すや、若し也た會し去らば、烈漢の服藥の如く、黃連

(ヲ)老來。少より出家して今既に老ゆ。
(ワ)三聖東山。湛照は聖一に嗣ぐ、三聖寺に住す、虎關鍊の師なり、師姪とあるは佛光と聖一とは、同じく無準佛鑑禪師の法嗣なればかくいふ。
(カ)疾風。本色の衲僧は人我是非の中で知れる。
(ヨ)版蕩。土地人民か。
(タ)寒巖。機、位を離れず。

附子甘草細辛を問ふこと莫れ。直下に之を服して疑はずんば、自然に百病銷滅せん。何ぞや。設ひ一法の涅槃に過ぎたる有るも、(レ)吾れは說かん亦夢幻の如しと。」卓主丈して下座。

上堂。「(ツ)江月照し松風吹く、永夜の淸霄何の所爲ぞ。」拂子を以て禪床を敲いて云く、「怪むこと莫れ坐來頻に酒を勸むることを、別れてより後君を見ること稀ならん。」

上堂。主丈を拈じて云く、「心目の間に照照として、色塵の内に恍恍たり。咄哉無位の眞人、一向に東倒西擂。是れ汝諸人、還つて救ひ得るや也た無や。」主丈を將つて劃一劃して云く、「一。」

上堂。「鳳凰(ツ)鸑鷟を生ず、獅子麒麟を咬む。千聞一見に如かず、路の富は家の貧に若かず。學翁恁麼の告報、是れ汝等諸人、還つて甘ふや也た無や。」卓主丈して云く、「己が欲せざる所、人に施すこと勿れ。」

解夏小參。「卽心卽佛、非心非佛、不是心、不是佛、不是物、諸人作麼生か會す。這箇の話頭、山僧五六年寫すこと數百幅を寫し了れり、擧すること也た數千遍を擧し了る。只だ要す諸人、佛見法見を去却し、無依無欲の中に向つて、一條の路を撥開して自ら行かんことを。一寸の丁を見ば、便ち一寸の鐵を見よ、千里の波を覩ば、便ち千里の海を見ん。諸人相酧ゆることを解せずと道はず、只だ是れ老僧が痒處を抓き著ず。何が故ぞ、門を出でて(ネ)戸に入らず、東魯西秦を望

(レ)吾說。一法を見ずんば、大過患、之れを見よ。
(ツ)江月。永嘉の證道歌の句。
(ツ)鸑鷟。「しめどり」、靈鳥なり、名匠作家の爐鞴は能く偉器を打出するをいふ。
(ネ)不入戸。全篇の一句が見えぬ。

む。」擧す、僧、㋭水潦に參ず、㋶一圓相を畫いて、潦の肩上に放く。潦三び撥つて復た一圓相を作して僧を指す、僧禮拜す。潦便ち打して云く、「這の虛頭を弄する漢。」師拈じて云く、「㋵己が欲せざる所人に施すこと勿れ、水潦知つて故に犯す。然りと雖も牛を得て馬を還し、玉を抛つて磚を引く。中間奢儉同じからず、彼此劍手を知らんことを要す。」

解制上堂、鴉鳴鵲噪、人馬諠闐、一切智智清淨、是れ汝諸人、若し能く眼中丈二の木楔を拔却せば、儞に許す自在神通遊戲することを。

上堂、主丈を拈じて云く、「㋒胡盧胡盧、㋖五支九魚。」主丈を卓して云く、「觀音在らざれば文殊に分付せん。」

上堂、主丈を拈じて云く、「鼓角動せり、贈るに㋨之中を以てす、昨日患瘂、今日患聾、諸人還つて會すや。」主丈を卓して云く、「犀牛明月を翫ぶ、蚊子狂風を弄ず。」

上堂、「夜來好風吹き折る、門前一枝の松、些の奇特の處有り。露出す㋔最高峯。」卓主丈して下座。

達磨忌拈香、香を拈起して云く、「諸人祖師を見んと要すや、祖師は只だ這裏に在り、祖師既に在す、諸人徒然なるべからず、請ふ各各一轉語を下せ。」大衆を顧視して、便ち坐具を展ぶ。

㋭水潦。馬祖に嗣ぐ。
㋶圓相。富と貴とは人の欲する處。
㋵己所不欲。飢渇は人の厭ふ處、滿腹は人の欲する處。
㋒胡盧。口をおほて笑ふこゑ。
㋖五支九魚。龍字の。
㋨之中。中をうたずばあらずとなり。
㋔最高峰。不レ知ニ廬山眞面目一、只以ニ此身一在ニ山中一。

上堂、鐵蒺蔾錐轉た弄ずれば轉た危し、一を擧して二を擧することを得ざれ、一著を放過すれば第二に落在す、諸人作麼生。若し擧鼎拔山の力無くんば、千里の烏騅も騎り易からず。

冬至小參、僧問ふ、「記得す、南泉兩堂首座、猫兒を爭ふ。南泉猫兒を提起して衆に示して云く、『道ひ得ば即ち斬らず』、『此の意如何。』師云く、「千聖も一刀を少くを得ず。」進んで云く、「衆無語、泉猫兒を斬却す、意作麼生。」師云く、「死猫隊を成して走る。斬らざるも亦何ぞ妨げん。」進んで云く、「趙州外より回る、泉前語を擧す、趙州草鞋を戴いて出で去る。又且つ如何。」師云く、「鼠子(ゆ)油甕を飜す。」進んで云く、「泉云く、『子若し在りしかば猫兒を救ひ得ん。』此の意又作麼生。」師云く、「飜身して倒に樹に上る。」進んで云く、「學人今夜、師の室中に到つて、方に活底の猫兒を見る。」師云く、「老僧が罪過。」僧禮拜して退く。復た僧有り、問ふ、「記得す、藥山、石頭に問うて云く、『如何なるか是れ直指人心・見性成佛。』頭云く、『恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず』と、意旨如何。」師云く、「石礫盤を油煎す。」進んで云く、「山復た馬大師に問ふ、大師云く、『我れ有る時は伊をして揚眉瞬目せしめ、有る時は伊をして揚眉瞬目せしめず』、此の意如何。」師云く、「牛皮露柱を鞔る。」進んで云く、「山云く、『我れ石頭の處に在つて蚊子の鐵牛に上るが如し』と、此の意又且つ如何。」師云く、「先行及ばず、末後太だ過ぐ。」進んで云く、「今夜學人、和尚に問ふ、如何なるか是れ西來意。」師云く、「(や)供養空疎なり、汝相怪むこと莫れ。」僧禮拜す。師乃ち云く、「冬至前冬至後、

(ゆ)油甕。油德利。
(や)供養。殘飯の供養。

㋮初六初八全く木據無し、霜華枯木夜寒と號び、客有り流水に隨つて去らず。草鞋帶斷して㋕又跟無し、主丈皮穿つて骨と兼に露る。一年撞到す㋘結交頭、歲月忽忽攔不住。攔不住何れの處にか歸す。一半は燈籠に上り、一半は露柱に入る。豈に道ふことを見ずや、是柱、柱を見ず、非柱、柱を見ず。是非已に去り了つて、㋙是非の裏に薦取せよ。」連噓兩聲。擧す、裴相國一日、尊佛を托して膝を黃檗の前に跪いて云く、「請ふ師安名。」檗、相公と召す。公云く、「師の安名を謝す。」師拈じて云く、「世界に住むこと蓮華の如く、清淨なること彼に過ぎたり。」良久して云く、「會すや、檀那這裏に向つて直下に擔荷し去らば、便ち見ん三十二相圓滿具足することを。」

至節上堂、「㋓天悠悠地悠悠。」驀に主丈を拈じて云く、「前人の腰帶後人收む。」主丈を擲下して云く、「更に收人後頭に在る有り。」

秉拂を謝する上堂、「山僧四賓主の句有り、昨日一句と作して、四頭首に分付し、日本の鄉談を打し、日本の條貫を說いて、汝諸人に示し了れり。諸人若し也た見得分明ならば、室中に却來して、一一㋢吐露せよ。是なるときは則ち汝が與に證據し、不是なるときは則ち再び㋐竹篦を贈らん。」卓主丈して下座。

上堂、「天寒うして日短し、兩人一盌、明月清風河滿ち海滿つ。」卓主丈して云く、「西天の人、

㋮初六初八。六種障八種自在。
㋕又無跟。門外の石橋。
㋘結交頭。頭は新年、交は交替、結は結尾、年の終りのこと、大晦日、除夜のことなり。
㋙是非裏。ここで盲人眼を開く。
㋓天悠々。暑運推し移る。
㋢吐露。夢中の西來意。
㋐贈竹篦。朝打三千暮打八百。

會せず。世事但だ(サ)公道を將つて斷る。」

兩班を謝する上堂、「一切の賢聖、皆無爲の法を以て而も差別有り、車行直に馬行を擋く。一曲一尖、黄河九曲、崑崙自り出づ、大海、須彌山脚を遶る。大衆會すや。」卓主丈して云く、「參。」

佛成道上堂、「紫禁煙銷して春正に濃なり、(キ)日高けて金殿影重重。一聲の天樂香風轉す、萬柳絲絲盡く東に向ふ。」卓主丈して下座。

上堂、「有句無句、月五を過ぎず。」卓主丈して云く、「喫粥了也、鉢盂を洗ひ去れ。」

退院上堂、前年臘月此の山に住し、今年臘月此の山を離る。一去一來定度無し、碧天雲外(コ)相關せず。

(サ)公道。切に忌む、鳬を截り鶴を續ぐことを。

(キ)日高。佛光、杲日天に麗くの明あり、一草も其の影を遺さず。

(コ)不相關。相憶はば、雁字、瀟湘に問へ。

國譯佛光圓滿常照國師語錄卷四　終

佛光圓滿常照國師語錄卷一

住大宋台州眞如禪寺語錄一

侍者一眞編

師於咸淳五年十月初二日、臨安府靈隱道座寮、被尚書省箚差請、住持眞如禪寺、受衆勸請、對衆拈箚、呈起箚云、在朝廷爲之宣布號令、在山僧爲之提持鉗斧、印文已在聲前、諸人自分緇素。

此月二十日入院、

指山門云、大衆我只要諸人掉臂直入、掉臂直出、切不得向平地上、自立門限、喝一喝。

指佛殿云、天上天下、唯吾獨尊、儞既有餞留客醉、我寧騎馬傍人門、以香扣爐三下云、瞿曇莫怪空疎。

據室、橫按拄杖云、擊石火啐啄機、二九十八、鳳林吒枝。

拈江湖疏云、貶我太妍、褒我太醜、魚在謝郎船、劍握甑人手。

指法座云、機奪機、毒攻毒、珍重燈王如來、猛虎不飡伏肉。

此一瓣香、恭爲祝延、
今上皇帝聖壽無疆、伏願、長爲九五之尊、正傳文武之統。
此一瓣香、爇向爐中、仰祝 太傅平章國公、伏願、闢開邦國雄基、康濟太平事業、此一瓣香、仰
祝 判府待制侍郎閤郡尊官、伏願、高躋祿位、永佐明時、就座、僧問、一佛出世地涌金蓮、和尚
出世有何祥瑞、師云、天上天下、進云、祝 聖一句作麼生道、師云、華山靑岌岌、進云、如何是和
尙親切爲人處、師云、我無鉢水、汝勿投針、進云、莫便是和尙爲人處麼、師云、拂却古巖雪、僧禮
拜。乃云、化育之本、無黨無偏、佛祖之源、無彼無此、歷歷淸標象外、堂堂樞運寰中、纖洪長短、
各得其宜、春夏秋冬、無適不可、用在狸奴白牯、功歸露柱燈籠、儱儱侗侗、顢顢頇頇、便見淸塞
却帶劍之客、度關無鷄鳴之人、雖然、衲僧家能有幾箇、知慚識愧、千車難合轍、萬派自朝宗。(叙
謝不錄。)
復、擧寶壽開堂、三聖推出一僧、公案、拈云、三聖向佛面剝金、添他寶壽多少光彩、眞如拄杖、也
不較多只是無人解喫。
當晩小參、僧問、麟龍不爲瑞、草木生光輝時如何、師云、渭川無釣客、進云、抱璞投師、請師一鑑、
師云、南北東西有何限。 乃云、提唱宗門、須向滴水生氷處、轉得身方是衲僧巴鼻、有底一向
說照說用、有底一向說妙說玄、有底一向懸崖峭壁、有底一向石火電光、如斯擧唱、有甚交涉、
山僧三十年行脚、東風西水、南去北來、固是長鞭不搆馬腹也、曾向天津橋上、畫打官吏、雖然、
玉解連環易、珠穿九曲難。

舉、平田訪茂源和尚、源纔起身、田把住云、開則失、閉則喪、去此二途、請師別道、源以手掩鼻、田云、一步較易、兩步較難、源云、著甚死急、田云、若不是師、洎被諸方檢責、拈云、平田礪兵秣馬、將謂萬里決勝而還、茂源一鏃未施、因甚牽羊納璧、喝一喝。

謝華書記上堂、大方無外、大圓無內、海月山雲、面面相對、昨夜東風轉北風、遼空一鏃三關外。

冬節小參、僧問、一陽來復時如何、師云、六六依然三十六、進云、和尚解順水張帆、缺逆風把柂、師云、若到諸方、但與麼舉。　乃云、冬至月頭賣被買牛、冬至月尾賣牛買被、今年節令稍遲、要與諸人相見、故不敢出手露脚、謾說洞山果子、牙齒先寒、更說皓老布裩、毛髮俱豎、不是不善隨機、只爲曾經霜雪、雖然、有千金之資、有千金之病、無萬里之智、無萬里之憂、休休莫言、李廣不封侯、曾向藍田射石頭。

上堂、大功不宰、掩息如灰、懸崖絕壁、枯木華開、良久、雨餘人不到、日影落蒼苔。

臘八上堂、今朝臘月八、瞿曇不丈夫、無端說黃道黑、謗鬼瞞神、不知當初見甚冬瓜・茄子・瓠子・落蘇、卓拄杖、早知今日事、悔不慎當初。

謝古田屋西堂上堂、乍住深山破院、見客事事乖疎、祥符尊屬到來、轉覺臂長袖短、略展東山暗號、如何仰面看天、話到中峰沙盆、又卻低頭覷地、眞如直是歡喜不徹、就手與他一捻西河獅子、彼此且弄一班。

上堂、有句無句、如藤倚樹、赤脚上刀山、披毛行火聚、喝一喝下座。

歲除小參、僧問、年窮歲盡事作麼生、師云、八角磨盤空裏走、進云、和尚漏逗不少、師云、明朝又

是大年朝、僧禮拜。　乃云、舊年佛法新年將不去、新年佛法舊年挽不來、挽不來將不去、絕朕兆處、切忌承當、勿棲泊、時不得亂走、如是如是、無端無端、不是不是、大難大難、卓拄杖一下、火官頭上風車轉、迦葉門前倒刹竿。

舉、北禪和尚烹露地白牛公案、拈云、北禪好語、只是飽病難醫。

新正上堂、元正啓旦、和氣藹然、燈籠笑得口濶、露柱拜得膝穿、因甚如此、義出豐年。

謝新舊兩班上堂、開正方十日、氣象一齊新、東邊知事也新、西邊頭首也新、忽有人出來道、新則新矣、爭奈猶是舊時面目、唱來不唱去、一舉一回新。

元宵上堂、燈火燒空、時當三五、處處連街接巷、舞底舞、吹底吹、唱底唱、拍底拍、雖然如是、顧視左右、且道、眞如面皮厚多少。

謝毒果・空海二首座上堂、佛祖巴鼻、人天眼目、如空中印、如毒樹果、一印一切印、一殺一切殺、卓拄杖。

上堂、我有一句、四角六張、穿靴水上立、日午打三更。

銷蓓會燒駱駝、秉炬偈、吉祥災疫性本空、有如虛谷答衆響、衆響高低靡不聞、詰其蹤由了無跡、汝身本自空中有、能具性空廣大力、廣大無邊利有情、還運性空災殄去、亦復放出三昧光、照見一切毛畜類、不動衆生本際情、游戲種種如幻事、我今說偈作證明、天龍八部皆歡悅、稽首如來大願王、成就一切諸善法。

上堂、法無定相、遇緣卽宗、者裏鹽賤米貴、那邊水澀柴豐、李華白桃華紅、牛頭自南自北、馬頭

自西自東、何似東山大脫空。

上堂、不是目前法、非耳目之所到、寒山子行太早、十年歸不得、忘却來時道。

佛涅槃上堂、舉、世尊告衆云、若謂吾滅度、非吾弟子、若謂吾不滅度、亦非吾弟子、黃面瞿曇雜劇打了、要把戲衫脫與呆底、吾當時若見、與他一蹈蹈倒、待他轉身、更與一蹈、一不做二不休、寸釘入木熱熬添油、休休休、卓拄杖、大海若知足、百川應倒流。

啓建　壽崇節上堂、母儀天下育重華、千歲蟠桃著一華、縹緲玉樓天漢直、袞衣長捧七香車。

乾會節上堂、法身蕩蕩復巍巍、培作吾皇福壽基、按指光中塵不到、四河香水遶須彌。

上堂、應庵詠桃華、靈雲悟桃華、等是與麼時節、一家不知一家、且道眞如意在於何、不圖打草、只要驚蛇。

尼懺風恙請陞座、拈拄杖、一念普觀無量劫、無去無來亦無住、如是了知三世法、超諸方便成十力、拈起拄杖、看看山河大地、日月星辰、情與無情、一印印定、諸人還信得及麼、若信得及、如是受用將去、如是荷擔將去、若信不及、說老婆禪去也、三世諸佛出世度生也只如是、降魔軍轉法輪也只如是、破一切業障山也只如是、成就一切功德海也只如是、因如是果也如是、迷也如是、悟也如是、山僧說法也只如是、諸人聽法也只如是、以如是法陞如是座、卽如是座說如是法、添一絲頭不得、減一絲頭不得、便見三祖問二祖、弟子身纏風恙、乞師懺罪、二祖云、將罪來、與汝懺、三祖云、覓罪性了不可得、二祖云、已與汝懺罪竟、當此之際、世醫拱手、萬病脫然、

如風行空、如水赴壑、如渡得船、如暗得燈、如睡夢覺、如蓮華開、造作不得、裝點不得、便是證具足三昧時節也、有何罪可懺、何福可求、千佛出世以如是印、印如是心、印印相承到于今日、要將此印印破、普超業障疑團、卓拄杖、鐵圍山岳都崩盡、歷劫無明一掃空。

結座、罪性本來空、四大亦復然、普超纏風恙、設供懺罪根、罪根無所住、只在一念中、仗此金剛王、裂破大疑網、稽首三界尊、賜以大安樂、證此無上道、永超諸有苦。

州附滿散　壽崇節陞座、大哉法性號曰心王、仰之莫覩其表、窮之莫見其邊、超然出於六合之上、混然融於萬化之中、壽不可以數計、福不可以數量、蕩蕩廓周三際、恢恢通徹十方、作天地之母、爲萬象之宗、譬若太虛俱含衆象、不與一切和會、亦不拒彼衆象發揮、此是諸佛妙門、正合聖人化體、擧拂子、只有天堪並、更無山可齊。

結座、后土儲休幾千載、夢月昌期在今日、臣僧仰祝福壽基、不是世間聞見法、浮幢王刹廣無邊、劫火三災不能壞、此是諸佛三昧境、願聖人福亦如是、天上盤石四十里、仙衣三千年一拂、拂石銷時爲一劫、願聖人壽亦如是、稽首十力三界尊、成就聖人如是法、永輔　皇圖億萬年、金輪統御大千界。

結制小參、僧問、如何是圓覺伽藍、師云、出門不入戶、進云、如何是平等性智、師云、東行不見西行利。　乃云、蜀魄連宵叫、鵑鴉終夜啼、圓通門大啓、何事隔雲泥、說甚麼隔雲泥、我者裏直得、聖凡俱泯、水乳和同、菩提涅槃、眞如解脫、業識無明、顚倒妄想、無一絲毫同相、無一絲毫別相、九十日中、只要諸人如是禁足、如是護生、水洗面皮光、啜茶濕卻觜、南山華映北山紅、東澗水

流西澗水、雖然如是、因甚觀世音菩薩、將錢買胡餅、放下手、卻是饅頭、卓拄杖、人無遠慮、必有近憂。

舉、僧問雲門和尚、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、頌云、東山水上行、面南看北斗、眼上更安眉、烏藤劈脊摟。

上堂、絲來線去、斬丁截鐵、百丈耳聾、黃檗吐舌。

上堂、參禪貴要眼皮穿、百尺竿頭勿正偏、霹靂一聲龍蛻骨、禹門依舊浪滔天。

上堂、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、者裏趁鼠入角、那邊與賊過梯、禹力不到處、河聲流向西。

上堂、我東山下說禪、如上將軍用兵一般也、不明宣號令、也不羅列金鼓、顏良之頭、不知不覺已在袖裏、盡大地人只貶得眼、卓拄杖下座。

上堂、東東西西、絡絡索索、一時抖擻說與諸人了也、未審在那一句中見吾、若道句在言外意在聲前、山僧入拔舌地獄。

上堂、眞如說禪、且不積草聚糧、移東頭向西頭、移南頭向北頭、諸人若將封皮作信傳、卻怪山僧不得。

上堂、大火西流、長江東去、風動塵起、雲騰鳥飛、顧視良久、驀拈拄杖、卓一下、依舊是儞始得。

解制小參、山前一片閑田地、叉手叮嚀問祖翁、幾度賣來還自買、爲憐松竹引清風、眞如生二百年後、只作一句分付諸人、我此一衆有徹證分曉底、出來對衆點當四至界畔眉表、九十日功成行滿工夫、良久顧視、拍膝、兒孫不識犁鉏面、牛馬空懷舊主恩。

擧、僧問、曹山、佛未出時如何、山云、曹山不如、僧云、出世後如何、山云、不如曹山、拈云、聽事不眞、累他釋迦老漢出頭不得。

解制上堂、四月十五結、上下四圍一團鐵、七月十五解、百川倒流鬧聒聒、寒來暑往、燕去鴻歸、長因送客處、憶得別家時。

上堂、一葉落天下秋、一塵起大地收、動身連影動、舌連喉、是吾家裏客、笑我不知羞。

謝非臺首座上堂、菩提無樹、明鏡非臺、烏飛兎走、玉轉珠回、大衆見麼、蹋倒階前下馬臺。

菊節上堂、九日今朝是、黃花笑轉新、與君歌一曲、聊爾當慇懃、天高兮地逈、秋水兮無垠、鴈過兮歷歷、落葉兮聲頻、要識眞如主賓句、但看沽酒挈瓶人。

上堂、山僧二十年後、自己管帶自己、三十年後自己忘卻自己、四十年後自己只是自己、驀拈拄杖、卓一下、拄杖穿過髑髏、露柱突出眼睛、喝一喝。

開爐上堂、三世諸佛、只解截火、六代祖師、只解撥火、山僧者裏、只是種火、待儞通身紅爛、大笑一聲、方知眞如開爐底時節。

上堂、初一不說禪、併在今朝說、一莖草上現瓊樓、不知弄巧翻成拙。

至節小參、若論此事、直是難說、說著遭人怪笑、有底便道、眞如向紫羅帳裏金馬堂前、大開東閣延接高賓、殊不知黃葉堆頭、昨夜霜威較重、青灰滿面、鉢囊破綻難縫、驀拈拄杖、卓一下、一冬二東、叉手當胸、大衆會麼、又卓拄杖、蛇呑鼈鼻、虎咬大蟲、連喝兩喝。

擧、潙山問仰山、仲冬嚴寒年年事公案、拈云、潙仰父子、久貧乍富、便見手滿腳滿、中間更有些

子諸訛、留與首座點出。

冬節上堂、自古自今、觀一日風雲、驗一年氣候、眞如者裏、靑黃黑白雲競起、東南西北風交作、是汝諸人、作麼生著眼、良久、果然。

謝舊兩序監收上堂、一進一退、一東一西、妙在轉處、用要力齊、大家相聚喫莖虀、誰道黃金賤似泥、卓拄杖下座。

臘八上堂、仰觀星斗逼人寒、那箇瞿曇有兩般、堪笑老胡無合殺、今朝拋出是非團。

謝八疊和尙上堂、行在說處、說在行處、行時終日在途不離家舍、說時偈似河沙初無一語、全殺全活全賓全主、何似金牛托鉢舞。

除夜小參、尋常一年只有三百六十日、今年山僧從正月初一、屈指數到臘月三十夜、恰恰有三百九十八日、循環不住、晷刻不停、春聲未轉、銅壺更籌斯過半矣、未透關底、往往喚鐘作甕、已透關底、何妨指馬作驢、因甚如此、以拂子擊禪床一下、西天胡子沒髭鬚。

擧、金牛因臨濟來、乃橫按拄杖方丈前坐、濟遂拊掌三下歸堂、牛卻下去、人事了便問、賓主相見、各有軌儀、上座何得無禮、濟曰、道甚麼、牛擬開口、濟便打一坐具、牛作倒勢、濟又打一坐具、牛曰、今日不著便、乃歸方丈、拈曰、金牛只解作舞、也有陷虎之機。

正月旦上堂、歲朝把筆、萬事皆吉、一願天下太平、二願萬民樂業、三願潙山水牯牛、水草長甘毋致背長角瘦、卓拄杖下座。

燈籠上堂、村村燈火喧神社、處處笙歌咽畫樓、堪笑眞如無定力、人前輥出百華毬、擲下拄杖、

連喝兩喝、下座。

遊山歸上堂、山僧一出二十五日、往還五百餘里、渡章安、穿秀嶺、游鴈蕩、看江心、或萬仞之頂、或九重之淵、或淺草平田、或魔宮虎穴、處處都到、最是谿山雲月、陰晴明晦、非但咳嗽變動、又且舉步換形、與吾檢點眉毛看、端的知他剩幾莖。

上堂、簷頭滴滴、分明歷歷、釋迦老子、脚下泥深三尺、達磨大師、脚下泥深三尺、且道眞如拄杖子、還免得此過也無、良久、靠杖也得也得。

結夏小參、少室峯前、曹溪路上、突出鑊湯爐炭、豁開劍樹刀山、文殊三處度夏、彌勒一向放憨、盡道拔劍相助、誰知五逆聞雷、各各救得眉毛、彼彼通身紅爛、息黥補劓未有其方、禁足安居、豈容漏逗、卓拄杖、匹上不足、匹下有餘。

舉、古德拈起拄杖曰、識得拄杖子、一生參學事畢、拈曰、玉堂金馬、茅舍踈籬、卓拄杖、有錢有酒同歡笑、無米無柴各皺眉、參。

結制上堂、護生須是殺、殺盡始安居、與麼與麼、妖狐變作師子、不與麼不與麼、師子變作妖狐、良久、擊拂子、下座。

上堂、謝藏主秉拂都寺齋、拈拄杖、都寺以乳酪醍醐爲佛事、藏主以無示無說爲佛事、東廊也叫慚愧、西廊也叫慚愧、又有出來道、等是一聲慚愧、中間有得不得、山僧聞得以手合掌、將謂此衆無人、慚愧慚愧。

重午上堂、今日重午節、無可供養大衆、也效俗禮、鬪飣些少、與諸人作箇暖熱、金剛圈、栗棘蓬、

錢酸餡、趙州茶、衆中莫有吞吐得下底出來、我急要一箇半箇作酬酢主伴、復良久、眞如禮數無多子、君不謂懷、怎奈何拊膝下座。

瞿藏主至上堂、颯颯涼風景、同人訪寂寥、秋蟲鳴古砌、落日照荒郊、壁上燈籠破、床頭木枕凹、東山左邊底、漁父夜棲巢。

解夏小參、今夏與諸人同此安居、不敢將佛法二字、汙染諸人耳朶也、要諸人各各知道、前年官訟去年不收、常住柴米油鹽、事事缺典、麥飯黃虀、委是冷落、如今秋初夏末、禪和家大罵出門而去、向道惜竹要棲鸞鳳、開池專待明月、待倆罵得話行、山僧別有箇道理。

舉、此庵和尚住此山、或庵和尚在此山、見藏神笑悟道、有頌曰、商量極處見題目、途路窮邊入試場、拈起毫端風雨快、者回不作探華郎、拈云、我當初若見只將兩指夾鼻示之、擬議不來劈脊便摟、臥床之內、豈容鼾睡之人。

解夏上堂、道非物外、物外非道、禮義生於富足、盜賊起於貧窮、大衆會則杖頭挑去、不會且莫蠡心。

中秋上堂、素魄今宵已十分、廣寒宮闕啓重門、青冥風露飄丹桂、誰是心空及第人。

九日謝竹房首座・孟知客・淵侍者上堂、秋風吹客衣、問君知不知、孟嘉猶缺落帽、淵明望斷白衣、眞如臂長袖短、一杯聊應佳期、良久、且喜竹房人解醉、免致黃菊笑東籬。

謝軒藏主・淵侍者上堂、大藏小藏、三喚三應、針頭不添鐵、秤尾不立蠅、今朝聞此舉、必定罵山僧、因甚如此、卓拄杖下座。

爲無等和尙入祖堂、目送秋雲過雪溪、千山木落鳳行低、叢林宿將歸何處、劫外唯聞木馬嘶、故我前住當山虎巖堂上無等和尙、七十九年五處爐鞴、握妙峯鉗鎚、作衲僧窠對、有時放兩抛二、有時貴買賤賣、有時一莖草上、現玉殿瓊樓、有時蟭螟眼中、恢張世界、水晶宮裏夜半抽身、雙桂堂前白日捉敗、不假丹靑、面目見在、祖堂風冷夜光寒、千古萬古與人看。

開爐上堂、噫嘻吁會也無、少室山空葉落、濟北風高浪麤、會者便知火色、不會且守寒爐、卓拄杖下座。

上堂、終日茫茫那事無妨、東湧西沒、七圓八方、珠走盤兮不撥自轉、鳥飛空兮任意翺翔、龍門無宿客、官路有私商、擊拂子下座。

上堂、入荒田不揀、信手拈來無有差錯、麻三斤、乾屎橛、庭前柏樹子、丈林山下竹筋鞭、喝一喝只知事逐眼前過、不覺老從頭上來。

冬夜小參、主丈頭邊、破蒲團上、正與麼時、也有一線半線誵訛、我此一衆、盡是參玄上客、各各眉下帶眼、不道無人緇素得出、只恐無人包裹得去、若一一爆綻出來、非但洞山果子分文不直、累他皓老布裩、醜拙尤多、事無一向、罪不重科、靠拄杖、抛向江南與江北、從教馬載及驢馱。

擧、南泉和尙示衆云、心不是佛、智不是道、師曰、心不是佛、智不是道、碧眼黃頭、果然失照。

至節上堂、書雲佳節、無法可說、點向諸人、各自甄別、東是東弗于岱、西是西瞿耶尼、南是南瞻部州、北是北鬱單越、莫把綠雲爲彩鳳、休將飛雪作楊華。

上堂、直下是、直下是、不得動着、靠拄杖下座。

上堂、謝新舊兩序監收弘維那、參禪無伎倆、謾作住山人、且喜東序也得人、西序也得人、監收也得人、修造也得人、灼然無可相謝、主丈只得效顰、卓拄杖兩下、茶無再請、酒要添巡、復卓一下、何似與化打克賓。

臘八上堂、明星一見轉添疑、畢竟蒸沙不療飢、爭似儂家伸脚睡、從教華發向南枝。

歲除小參、若論佛祖頂門一著、與造化推移一般、新舊往來盡在今夜、鬼神亦不知其蹤跡、良久云、山僧事不獲已、只得點向諸人、看看二十四氣、七十二候、只在三鼓已前二鼓已後、華發向南枝、枯楊生左肘、阿呵呵、釣魚船上謝三郎、拄得鼻孔失却口。

擧趙州蘿蔔公案、頌云、蘿蔔三斤重、誰云出鎭州、有時乘好月、不覺過滄洲。

歲旦上堂、一雨潤元正、萬物舒光彩、春水漾虛碧、春山濃潑黛、添我鋪席新、直是令人愛、堪笑長汀老禿丁、手裏拕箇破布袋。

奉聖慈安和尚至、幷謝石林藏主上堂、瑞雲出山來、青天撒白雨、蓮堂墊老龍、別有通霄路、全放全收、全賓全主、石林迸出珊瑚樹。

上堂、飜身師子、掛角羺羊、面目見在、各各帶眼。

佛涅槃上堂、當年不合手摩胸、累及兒孫赤骨窮、只箇死屍無著處、至今紅爛百華叢。

蓮藏主・意藏主至上堂、故人踏雨到香山、何事燈籠也破顏、門外溪山千萬疊、灼然相見一番難。

上堂、有時行不在說處、有時說不在行處、有時行在說處、有時說在行處、堪笑西來碧眼、至今

不會轉身。

浴佛。兼諸山及道舊至上堂、雙手指天、雙手指地、有儞無我、有我無儞、眞如五逆不成冤、又得諸公下痛拳。

結夏小參、今夏與諸人同此結制、有四件事、奉告諸人、第一不得進前參、第二不得退後領、第三不得者邊來、第四不得那邊去、坐但坐、行但行、飢則同飯、臥則同床、一任金鷄啣粟、且無鼠糞汙羹、因甚如此、卓拄杖、薰風自南來、殿閣生微涼。

擧文殊三處度夏公案、頌云、法筵箭令不虛傳、百億文殊一串穿、要與老胡重拔本、一聲砧杵落誰邊。

結制上堂、以大圓覺爲我伽藍、今日明日、前三後三、潘閬騫驢看華岳、善財煙水百城南。

謝都寺齋·首座秉拂上堂、都寺辨齋如勝中如勝、首座秉拂奇特中奇特、敎中道、於食等者於法亦等、於法等者於食亦然、食輪與法輪齊轉、金烏與玉兎交馳、眼睫眉毛都落盡、住山贏得放憨癡。

端午上堂、擧文殊令善財採藥公案、我當初若見、只向他道、大士刀瘡易沒、惡語難消、若向者裏下得一轉語、卻許他毘耶城裏問疾。

上堂、結夏已一月、眞如無法說、眼上各安眉、口中各含舌、西天人不會唐言、剛把烏龜證作鼈。

上堂、擧。僧問古德、寒暑到來如何回避、德云、鑊湯爐炭裏回避、僧云、鑊湯爐炭裏如何回避、德云、衆苦不能到、頌云、老去他鄕見故知、迢迢攜手卻同歸、夜深且盡樽前酒、莫說天涯脚痛時。

上堂、不是風動、不是幡動、劈腹剜心、說與君、恰値眞如舌痛、大衆還會麼、卽非賣弄果是生瘡。

上堂、卽心卽佛、赤脚上刀山、非心非佛、耕地種蒺藜、不是心、不是佛、不是物、黃檗樹頭生木蜜、第一句下薦得、許儞升眞如堂、第二句下薦得、許儞入眞如門、第三句下薦得、驀拈拄杖、休休好語不可說盡、道人不可道著、卓拄杖、趙州親見老南泉、睦州拶折雲門脚。

解夏小參、僧問、僧問風穴、九夏賞勞、請師言薦、穴云、一把香藉拈未暇、六鐶金錫響遙空、意旨如何、師云、若到諸方、不得錯擧。　拈拄杖、一夏已滿、聖制告圓、數日來鬪湊得些少佛法、要在今夜打開、供養我見前大衆、以表九旬汗馬之勞、粗分知羞識恥、不欲效古人向拄杖頭上藞草影邊、胡亂拈出、取笑識者、所以道、藜羹藿飯決非尊貴所珍、鳳髓龍肝不是樵夫之食、我要恰恰相當、誰與代一轉語、顧視大衆、靠拄杖、在舍只言爲客易、臨淵方覺取魚難。

擧、僧問雪竇、達磨西來、單傳心印、諸方爲甚麼各說異端、竇云、誰、僧云、爭奈郎今何、竇云、西天令嚴、僧云、與麼則入水見長人、竇云、韓信臨朝底、師曰、雪竇一向擧令、虧了自身一半、者僧麤心大膽、也要縛屋蓋天。

解夏上堂、十五日已前、坐殺闍梨、十五日已後、走殺闍梨、正當十五日、秋雲依依、秋草離離、蛩吟古寺、華放疎籬、高安灘上客、臨濟小厮兒、腦後猶缺一椎。

中秋上堂、甚奇絕中秋月、光皎潔無欠缺、叵耐謝三郎、也把絲綸掣。

上堂、至道無難、言端語端、高亭橫趨而去、雪峯九到洞山、鰲咬釣魚竿、蛇啣老鼠尾。

開爐、寶藏主至上堂、浙浙霜林起晚風、同人撥草訪巖叢、灰寒火冷休相笑、且向階前掃落紅。

巾峰奚翁和尚・喜書記・鑑藏主・通侍者至上堂、兄弟添十字、夫子不識書、左轉右轉、三應三呼、一等冤惜會苦、最嫌一箇眉鬚、卓拄杖、刹竿寒影轉、明月上平蕪。

上堂、大衆諸方道一句、眞如也道一句、諸方道兩句、眞如也道兩句、等是與麼時節、中間用處不同、忽有箇漢出來、道用驢睛法須是眞如始得、以拂子擊禪床、三千年黃河一度清。

冬夜小參、僧問、寒暑不到處、衲僧如何進步、師云、有馬騎馬、無馬步行。　乃云、枯木巖前、冷灰堆裏、住山活計苦無多、三篾束腰隨分過、說甚砂飛石走、且看凍落茅簷、衣穿肘露可憐生、不免貧兒思舊債、且道思甚麼債、二祖見少林、無端禮三拜。

擧、趙州一日示衆云、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是揀擇、是明白、老僧不在明白裏、是爾諸人還護惜麼、時有僧出問云、既不在明白裏、又護惜箇甚麼、州云、我亦不知、僧云、和尚既不知、爲甚麼道、不在明白裏、州曰、問事即得、禮拜了退、師云、趙州倚勢欺人、不料藥用鬼兵。

冬節上堂、一陽生萬物亨、短者自短、長底自長、老胡如會此、應不見蕭梁。

臘八上堂、六載雪山坐、弄巧成拙謀、攤贓與星月、星月常悠悠、攤贓與含識、含識不點頭、卓拄杖、是非空落釣魚舟。

謝新舊兩序上堂、大衆此事如滄溟泛舟、篷帆艫棹矴柁釣竿、皆少不得、有時逆風張帆、有時順風把柁、只要船上之人、同聲相應、同氣相求、同行同到、同放同收、卓拄杖、一掣六鼇連十洲。

除夜小參、僧問、一言道盡時如何、師云、老僧性命在儞手裏。　乃云、一言道盡、萬法皆如、一句截流、千差合轍、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境兩俱奪、有時人境俱不奪、袖蝨

傍薄長、貧作富裝裹、六隻骰子滿盤紅、撒向君前活鱍鱍、良久、謾說北禪烹露地、風流出格讓眞如。

擧、趙州訪茱萸、萸云、看箭、州云、看箭、萸云、過、州云、中、師云、一看箭二看箭、茱萸與趙州髑髏成兩片、山悠悠、水悠悠、闔閭聽小子、談笑覓封侯。

歲旦上堂、元正啓祚、庶物發生、鳥獸魚鼈咸若、森羅萬象崢嶸、且道承誰恩力、卓拄杖下座。

上堂、垂絲千尺、三寸鈎頭、地轉天回、風高月冷、卓拄杖、會則親見船子、不會去問夾山。

結制小參、僧問、大力量人、因甚擡脚不起、師云、到江吳地盡、隔岸越山多。　乃云、有佛處不得住、荒草連天、無佛處急走過、髑髏遍野、一條路千人萬人共行、千人萬人不到、我今只要諸人脫却籠頭、卸下腰帶、向無交涉處、盡力擔得板三十棒、一棒也較不得。

擧、僧問趙州、學人乍入叢林、乞師指示、州云、喫粥了未、僧云、喫粥了、州云、洗鉢盂去、師云、趙州只解順水推船、致令後代兒孫、箇箇死在句下。

結制上堂、四月十五結、盡十方空無欠闕、豁開店而又重新、只得陪金賣生鐵。

上堂、結夏已一月、寒山子作麼生、乞無再而、語要隨鄉。

上堂、山僧受用、與諸人初無兩樣、諸人終日在舍、不離途中、山僧終日在途、不離家舍、大衆喚作入理深談也得、喚作向上提持也得、各自參取、

上堂、叙謝副寺、至道無難日應萬端、量柴數米、接官送官、是牛牽犂拽耙、是馬銜鑣負鞍、一句擧似大衆、入水也要古乾。

上堂、九夏豁開天地爐、若凡若聖沒親疎、通紅百煉重添炭、只要男兒是丈夫。

上堂、擧、風穴和尙示衆云、若立一塵、家國興盛、野老顰蹙、不立一塵、家國喪亡、野老安貼、於此明得、闍梨無分、全是老僧、於此不明、老僧無分、即是闍梨、闍梨與老僧、亦能迷卻天下人、亦能悟卻天下人、要識老僧麼、右邊以手拍一拍、者裏即是、要識闍梨麼、左邊拍一拍、者裏即是、頌云、一鏃破三關、乾坤盡開闢、南北東西十萬程、馬鞭不過長三尺、眞如風穴殺活不同、端的誰收汗馬功、卓拄杖。

上堂、涅槃煩惱何形段、逆順知他較幾多、頂上豁開千聖眼、何妨臘月看蓮華。

除夜小參、僧問、明眼人因甚落井、師云、高處高平、低處低平。　乃云、朝匆匆暮匆匆、自南自北、或西或東、黃鶴樓前百戰、回頭歲盡年窮、窮則變、變則通、掣開金殿鎖、撞動玉樓鐘、便見東隣西舍交相慶賀、燈籠露柱滿面春風、因甚如此、睡足不知山月上、蹈華方見馬蹄紅。

擧、僧問馬大師、如何是佛、馬云、即心即佛、後來又道、非心非佛、不是心、不是佛、不是物、師云、天地玄黃、宇宙洪荒、日月盈昃、以拄杖劃一劃、若不截住念得、口滑幾乎念到新年、靠拄杖下座。

正旦上堂、新頒鳳曆下堯庭、山嶽齊呼萬歲聲、拄杖不知見甚麼、也來趁隊賀新正、卻道我雖栗栗枳枳、稜稜層層、要與儞東拄西拄、橫撐竪撐、撐撐拄拄、跳出窠坑、五湖煙浪裏、別有好商量。

結夏小參、僧問、如何是道、師云、種穀不生荳苗。　乃云、食輪轉法輪轉、食輪不轉法輪不轉、眞如今夏、既是缺糧、佛法禪道盡情束之高閣、有底道是則是、換水養魚、未見尖新頭角、行者認

取者僧。

擧、世尊外道論議、外道云、我以一切不受爲義、世尊云、儞見受否、外道拂袖便去、至途中乃悟云、當回斬首以謝世尊、頌云、杳杳華源路不通、回頭方見藥鑪空、雪晴海濶千峰曉、同上天山十二重。

解夏小參、僧問、大火西流、涼風入野、正恁麼時如何、師云、天台・南岳・峨嵋・五臺、僧云、便恁麼去時如何、師云、枯木巖前差路多、僧禮拜。　乃云、提持箇事、如蒼龍翫珠、不墮於地、不住於空、收放自在、吞吐自由、四方但見光閃閃地、只如洞山示衆、兄弟秋初夏末、直須向萬里無寸草處去、石霜云、出門便是草、者裏豈容儞貶眼、蚯蚓蝦蟇空自咄咄。

擧、僧問風穴、九夏賞勞、請師言薦、穴云、一把香蒭拈未暇、六鐶金錫響遙空、師拈云、風穴好語、惜乎者僧不解、更進一步。

解制上堂、一結一切結、一解一切解、佛病也解、祖病也解、衆生病也解、病既解了、無不混融、水入水空藏空、諸人但看絲綸上、莫看蘆華對蓼紅。

大行皇帝升遐上堂、十載華夷樂晏然、旌幢忽返夜摩天、斷絃又得鸞膠續、玉葉騰芳億萬年。

謝衡叟監寺及新舊上堂、凍合千林萬木僵、飢荒老鼠謁生薑、祖翁活計無多子、相與扶持折脚鐺。

臘八上堂、棄王宮雪山坐、見什麼便恁麼、既恁麼是什麼、黃金城郭草離離、天上人間付與誰。

璋了居三侍者至上堂、昨日同參來、拄杖子不敢攙匙亂筯、今日衣鉢道舊相訪、拄杖子只得

敎」聻、橫按」拄杖、分」一作」二、破」二作」三、滄海渺渺、泰山巖巖、顧視良久、彭八刺札、莫」怪」空踈。

冬至小參、僧問、一物不將來時如何、師云、羅公照」鏡、僧云、莫」便是和尚爲人處麼、師云、狗銜」赦書。　乃云、寥落叢林、拄杖子全無」巴鼻、空踈活計、法堂前草滿」空堦、逗」到年盡歲窮、轉覺寸長尺短、古人誰道有」今朝、我亦不」知當日事、有底聞」與麼道、只道山僧刀刮水洗、三十年前也曾被」老鼠咬」破七條。

擧、僧問」馬大師、離」四句」絕」百非、請師直」指西來意、祖云、我不」與」汝說得、問」取智藏、藏云、何不」問」取和尚、僧云、敎來問」藏、藏云、我今日頭痛、問」取海兄、海云、我到」者裏」卻不會、僧回擧」似馬祖、祖云、藏頭白、海頭黑、師云、者僧雖」是獃漢、馬祖父子、非」但和」贓納」款、便是隱寄、亦被」他勘將出來、山僧不」會瓜田納」履、大衆各自歸堂。

上堂、一氣自循環、萬化無」終始、拄杖夜抽」條、華開世界起、卓拄杖、老胡打失當門齒。

除夜小參、去去實不去、來來實不來、去來無」朕跡、今古兩悠哉、所以道、過去心不可得、未來心不可得、道聲未」絕、忽然一隊驅儺、突」在面前、朱衣畫袴、鬼面神頭、千般萬樣、一齊送將出來、直是活鱍鱍地、山僧咬」定牙關、看來看去、也不」覺呵呵大笑、因」甚如」此、將謂黃連甜」似」蜜、誰知蜜苦」似」黃連。

擧、張拙秀才問」長沙和尚、百千諸佛但聞」其名、未審居」何國土、沙云、黃鶴樓崔顥題後、秀才曾題麼、拙云、不」曾題、沙云、無事題」取一篇」頌云、萬里中原暗」板圖、中興事業隱」樵漁、金鷄一拍扶桑曉、喚」得英雄」出」草廬。

二月旦上堂、寧與狐謀裘、難與羊謀羞、暗裏抽橫骨、明中坐舌頭、卓拄杖、魯人不重東家丘。

元宵上堂、謝簡・聞・直三侍者至、國師三喚復三應、燈火燒空月滿城、千簇畫樓歌管裏、與君攜手御街行。

佛涅槃、引手捫胸云、眞如手摩胸、卻與瞿曇別、當初只道得黃金、今日看來是生鐵、戶破家殘、百醜千拙、一回飲水一回咽。

謝護國象外和尚至上堂、眞如平昔要打鼓、三峯一味隨嘍搜、些子心肝五臟、被其抖擻都盡、我也明明自知、只是不能管得、今日既蒙尊訪、趙鼓陞堂、又是一番話墮、且無兩箇舌頭、良久擊拂子、巖頭撑渡、雪峯輥毬。

浴佛上堂、湔拂泥豬疥狗身、洋銅百灌恨方伸、眞如不惜湯添沸、要輟餘薪待後人。

結制小參、欲去不去被去礙、欲住不住被住礙、元上座、一條拄杖、尋常硬如生鐵、今日四稜踏地、和身放倒、也要諸人知道、藏身處沒蹤迹、沒蹤迹處不藏身、江山晝永、殿閣凉高、綠陰未轉庭槐、淸風先起蘋末、擊拂子、猛虎起屍、猫兒歃血。

擧、僧問古德、如何是道、德云、墻外底、僧云、不問者箇道、德云、問甚麼道、僧云、大道、德云、大道透長安、師云、惺惺賣與靈利、懵懂賣與瞌睡、等是恁麼時節、諸人且作麼生。

滿散　壽崇節上堂、妙德相莊嚴河沙福、所聚示現種種形、誕此摩耶體、譬如天樹王、高廣世無比、一華坐一佛、三世一時攝、佛母陀羅尼功德不思議、福我大寶曆、永作世依怙。

乾會節上堂、九天閶闔貫流虹、歷應咸淳馭六龍、寶運更開三萬劫、須彌頂上一聲鐘。

消災會焚駱駝、佛以一音演說法、人天隨類各得解、汝既身行異類中、要拔衆生處處著、點破五濁如幻事、不斷煩惱證實相、以火打一圓相、劫火海底常熾然、風鼓須彌自相撃。

佛光圓滿常照國師語錄卷一　終

佛光圓滿常照國師語錄卷二

住大宋台州眞如禪寺語錄二

拈古

南泉示衆、昨夜文殊・普賢、起佛見法見、各與二十拄杖、貶向二鐵圍山、趙州出衆云、和尚棒教誰喫、泉云、王老師有甚過、州禮拜、泉歸方丈。

　南泉抱贓叫屈、不能塞斷人口、趙州以訐爲直、爭奈也會呷汁、如今還有蓋覆底麼、良久、若教頻下淚、滄海也須枯。

潙山問仰山、妙淨明心汝作麼生會、仰云、山河大地、日月星辰、潙云、汝只得其事、仰云、和尚適來問甚麼、潙云、妙淨明心、仰云、喚作事得麼、潙云、如是如是。

　投子道底。

石樓因僧問、未識本來性、乞師方便指、樓云、石樓無耳朶、僧云、某甲自知非、樓云、老僧還有過、僧云、和尚過在甚麼處、樓云、過在汝非處、僧禮拜、樓便打。

　有棒不打者漢、也孤負平生。

本生一日拈拄杖示衆、我若拈起、儞便向未拈時作道理、我若不拈起、儞便向拈起時作主宰、且道山僧爲人在甚麼處、時有僧出云、不敢妄生節目、生云、也知闍梨不分外、僧云、低低處平之有餘、高高處觀之不足、生云、節目上更加節目、僧無語、生云、掩鼻偸香、空招罪犯。

以指喩指之非指、不若以非指喩指之非指也、以馬喩馬之非馬、不若以非馬喩馬之非馬也、喝一喝。

潙山見仰山從方丈外過、以兩手握拳、相交示之、仰山便作女人拜。

仰山拜處、若更放深、潙山兩箇拳頭、向甚處安著。

天仙因僧來參、才展坐具、仙云、不用通時喧、還我文彩未彰時道理來、僧云、有口啞却、卽閑苦死覓箇臘月扇子作甚麼、仙拈棒作打勢、僧把住云、還我未拈時道理來、仙云、隨我者隨之南北、不隨我者死住東西、僧云、隨與不隨卽且從、請師拈出東西南北來、仙便打。

天仙要得飽盡這僧肚腸、者僧要得空盡天仙倉庫、當初只道喜相逢、到底翻成怨離別、喝、喝。

潙山一日看雨、僧云、好雨、潙云、甚處是好處、僧無語、潙却云、大好雨、僧云、什麼處是好處、潙指雨示之、僧又無語、潙云、何得大智而默。

等是看雨、有一人身上不濕、且道是那一人身上不濕、或云、者僧身上不濕、衲子難謾。

天仙因僧參、擬作禮、仙云、者野狐見箇什麼、便禮拜、僧云、者老和尙、見箇甚麼便恁麼道、仙云、苦哉苦哉、天仙失前忘後、僧云、要且得時終不補失、仙云、爭不如此、僧云、誰甘、仙大笑云、遠之

遠矣、僧以目回顧便出。

天仙有照物手、這僧有透淸眼、若人辨得、也是赤土塗牛嬭。

玄沙云、不見一法、是大過患、且道不見什麼法、鏡淸指露柱云、莫是不見者箇法麼、沙云、浙中淸水、白米從汝喫、佛法未夢見在。

是則是、樂則同懽、不知罄盡家活。

潙山坐次、仰山與香嚴侍立、潙云、如今總與麼者少、不與麼者多、嚴從東過西、仰從西過東、潙云、這則因緣三十年後擲地金聲、仰云、須是和尙提唱始得、嚴云、卽今亦不少、潙云、合取狗口。

潙山養子、恩威並行、只是二子向背有異、且道誵訛在甚麼處、喝一喝。

張拙秀才、因禪月大師指參石霜、霜問、秀才何姓、張云、名拙、霜云、覓巧尙不可得、拙自何來、公忽有省、乃呈偈曰、光明寂照徧河沙、凡聖含靈共我家、一念不生全體現、六根纔動被雲遮、斷除煩惱重增病、趣向眞如亦是邪、隨順世緣無罣礙、涅槃生死等空花。

須彌繫藕絲。

巖上座到德山、山見便下禪牀、作抽坐具勢、巖云、者箇且置、忽遇心境一如底人來、向伊道什麼、卽不被諸方檢責、山云、猶較昔日三步在、別作箇主人翁來、巖便喝、山不語、巖云、塞却這老野狐咽喉、後有僧擧似潙山、山云、巖公雖得便宜、爭奈掩耳偸鈴。

潙山恁麼道地在、殊不知、德山被巖公靠倒、還有與巖公雪屈底麼、喝一喝。

米胡因僧問、自古上賢還達眞理也無、胡云、達、僧云、只如眞理作麼生達、胡云、霍光賣假銀城

與單于、契書是什麼人做、僧云、某甲直得杜口無言、胡云、平地教人作保。

　會麼、誰知歌舞地、元是戰爭基。

棗樹因僧辭、乃云、若到諸方有人問、爾老僧此間法道、作麼生祇對、僧云、待他問卽道、樹云、何處有無口底佛、僧云、祇者也還難、竪起拂子云、還見麼、僧云、何處有無眼底佛、樹云、只者也還難、僧遶禪牀一匝而出、樹云、善能祇對、僧便喝、樹云、老僧不識子、僧云、要識作麼、樹敲牀三下。

　棗樹與者僧也行得七五步、中間一兩步、出於乾坤之外、見麼、葉零零兮秋暮半凋、草青青兮春暖齊發。

潙山坐次、仰山侍立、潙云、寂子近日宗門中令嗣作麼生、仰云、大有人疑著此事、潙云、寂子又作麼生、仰云、某只管困來合眼、健卽坐禪、所以未曾說著、潙山云、到者田地也難得、仰云、據某見處、著此一語也不得、潙云、爲一人也不得、仰云、自古聖賢盡皆如是、潙山云、大有人笑汝與麼祇對、仰云、解笑某者、是某同參、潙云、出頭作麼、仰遶禪牀一匝、潙云、裂破古今。

　仰山前頭較些子、後頭又却深深、埋在荒草堆頭、潙山盡力牽得出來、已是去死十分、還知今口被仰山連累處麼、摘楊花摘楊花。

藥山有僧到、山問、甚處來、僧云、南泉、山云、三十年後、作一頭水牯牛去、僧云、雖在彼中、不曾上他食堂、山云、爾口吸西北風、僧云、和尙莫錯、自有把筯人在。

　者僧向者裏借路經過、藥山在那邊視物收稅、雖是千載一遇、只是土曠人稀。

仰山問東寺、借一路過那邊得麼、寺云、大凡沙門不可只一路也、別更有麼、仰山良久、東寺却

問仰山、借一路過那邊得麼、山云、大凡沙門不可只一路也、別更有麼、東寺云、只有此、山云、大唐天子決定姓金。

一人歸了去不得、一人去了歸不得、何故、牧羊河畔女貞花、倚馬橋邊望夫石。

仰山問中邑、如何得見性去、邑云、譬如一室其有六窻、內有一獮猴、外有一獮猴、從東邊喚猩猩、獮猴即應、六窻但喚俱應、仰山禮拜起云、適蒙譬喩無不了知、只如內獮猴睡、外獮猴欲見時如何、邑下禪牀、執山手作舞云、猩猩與汝相見了也。

中邑將謂、仰山可謾、被他一靠、便見尾巴俱露。

本生因僧從太原來、生云、近離那邊風景如何、僧云、與此間不別、生云、且道此間風景如何、僧云、和尚與某甲不同、生云、踏破草鞋當爲何事、僧無語、生云、卽古卽今出箇問處也難、乃至老僧亦出不得。

本生被這僧一坐、天地黯黑。

溈山僧問、如何是道、溈云、無心是道、僧云、不會、溈云、會取不會底、僧云、如何是不會底、溈云、只是儞不是別人。

擔糞栽茄子、須是溈山始得。

性空因丁行者來才見、便打一棒云、瞎却汝本來眼也、丁云、非但今日、古人亦行此令、空云、誰向汝道古今、丁拂袖而出、空云、靑天白日有迷路人、丁云、莫要指示麼、空便打、丁云、莫瞎却人眼好、空云、瞎却俗人眼有甚過。

丁行者只要坐斷性空舌頭、要見性空長處、直是天地懸殊。

白水示衆、眼裏著沙不得、耳裏著水不得、僧問、如何是眼裏著沙不得、仁云、應眞無比、僧云、如何是耳裏著水不得、仁云、白淨無垢。

綿綿密密、頭正尾正、只是坐在闤闠裏、雖然易分雪裏粉、難辯墨中煤。

浮石上堂、山僧開箇卜舖、能斷人貧富生死、僧便問、離却生死貧富、不落五行、請師直指、石云、金木水火土。

浮石命著懸絲。

三平一日問侍者、姓甚麼、者云、與和尚同姓、平云、我姓甚麼、侍者云、問頭何在、平云、幾時曾問儞、者云、姓者者誰、平云、念汝初機、放汝三十棒。

若是今日、寧可關却僧堂、何故石牛攔古路、一馬沒雙駒。

丹霞見龐居士、門前見居士女靈照洗菜、霞云、居士在麼、女放下籃子、斂手而立、霞又問、居士在不、女提籃便行、霞便回、居士從外歸、女子擧前話、士云、丹霞在麼、女云、去也、士云、赤土塗牛嬭。

只知以毒攻毒、不知骨肉分離。

天仙因披雲到、才入方丈、仙便問、未見東越老人時、作麼生爲物、雲云、只見雲生碧嶂、焉知月落寒潭、仙云、只恁麼也難得、雲云、莫是未見時麼、仙便喝、雲展兩手、仙云、錯怪人者有甚麼限、雲掩耳便出、仙云、死却這漢平生也。

天仙非中有是、披雲是中有非、各與二十棒、何故、中人以下、不可以語上也。

米胡問僧、近離甚處、僧云、藥山、米云、藥山老子、近日如何、僧云、大似一片頑石相似、米云、得恁麼擲重、僧云、無儞提掇處、米云、非但藥山、米胡亦恁麼、僧近前顧視而立、米云、看看頑石動也。

這僧恁麼特達、不是米胡、減他藥山多少光彩。

潙山一日見野火、乃問道吾、還見火麼、吾云、見、潙云、從何處起、吾云、除却經行坐臥、請師別道、潙便休去。

可惜潙山無末後句、欲為他代一語、又恐潙山不甘、放過又恐孤負道吾、必竟如何赤脚下桐城。

石樓因元康來、樓才見便收足坐、康云、得恁麼威儀周足、樓云、汝適來見箇甚麼、康云、無端被人領過、樓云、是恁麼始為真見、康云、苦哉賺却幾人來、樓便起身、康云、見即見矣、動即不動、樓云、盡力道不出定也、康拊掌三下、僧舉似南泉、泉云、天下人斷者公案不得、若斷得與他同參。

石樓末後、道箇盡力道不出定也、可惜前功俱費、元康拊掌三下、乞兒見小利、各與三十棒、却是南泉代喫、何故為他結款不了、累及山僧、有屈也無叫處。

金峰示衆、我若舉來、又恐遭人唇吻、若不舉又恐遭人怪笑、於其中間如何即是、時有僧出、金峰便歸方丈、別有僧請益云、和尚因甚麼不答者僧話、峰云、大似失錢遭罪。

著衫裹帽、還他三代相門。

丹霞問龐居士、昨日相見何似今日、士云、如法舉昨日事來、與儞著箇宗眼、霞云、只如宗眼、還

著得龐公麼、士云、我在儞眼裏、霞云、某甲眼窄、何處安身、士云、是眼何窄、是身何安、霞無語、士云、更道取一句、便得此語圓也、霞亦無語、士休去。

不是丹霞兩默、龐公爭得露出葛藤椿子。

天仙因僧來參、才展坐具、仙云、者裏會得、早是孤負平生也、僧云、不向者裏會得、又作麼生、仙云、不向者裏會、又向甚處會、便打。

膠柱調絃則故是、若要塞斷者僧口、驢年。

潙山因僧問、從上諸聖直至如今、和尚意旨如何、潙云、目前是甚麼、僧云、莫只者便是麼、潙云、阿那箇、僧云、適來祇對底、潙云、儞擬那箇去莫生事。

鈎錐不及處、甚處見潙山、喝一喝。

潙山僧問、如何是百丈眞、潙下禪牀叉手、又問、如何是和尚眞、潙上禪牀坐。

懷州牛喫禾、益州馬腹脹。

大川因江陵僧到、川云、幾時發足、僧提起坐具、川云、特謝遠來、僧遶禪牀一匝便出、川云、若不恁麼焉知眼目端的、僧拊掌云、苦殺人洎合錯斷諸方、川云、甚得禪宗道理、後有僧舉似丹霞、霞云、大川法道即得、我這裏即不然、僧云、和尚此間作麼生、霞云、猶較大川三步在、僧禮拜、霞云、錯斷諸方者多。

丹霞徒有此語、要且不識大川、喝。

潙山在方丈內臥、仰山入來、潙乃轉回向裏臥、仰云、某是和尚弟子、不用形跡、潙作起勢、仰便

出去、潙召云、寂子、仰乃回來、云、聽老僧說箇夢、仰低頭作聽勢、潙云、爲我原看、仰取一盆水、一條手巾來、潙洗面了才坐、香嚴入來、潙云、我適來與寂子作一上神通、不同小小、嚴云、某在下面了了得知、潙云、子試道看、嚴乃點一椀茶來、潙嘆云、二子神通過於鶖子。

洗了面喫了茶、將謂者老漢醒了、不知寐語轉多、仰山香嚴到底惺惺、到底被他牽在迷魂寨裏、雖然今日有茶、也著得一碗。

仰山參東寺、寺云、已相見了也、不用上來、仰云、恁相見莫不當麼、寺便歸方丈閉却門、仰山舉似潙山、潙云寂子是甚心行、仰云、若不恁麼爭識得伊。

東寺險、何似潙山險。

丹霞見龐居士、士在面前立少時便出、霞不顧、士卻入來與霞相對坐、霞却向士前立少時、便歸方丈、士云、儞入我出、未有事在、霞云、老老大大、出出入入、有甚了期、士云、略無些子慈悲、霞云、引得者老翁到者田地、士云、把什麼引、霞乃把住、拈却幞頭云、恰似箇師僧、士卻將幞頭在霞頭上云、一似箇俗人、霞應諾諾、士云、猶有昔日氣息在、霞拋下幞頭云、一似箇烏紗巾、士應諾諾、霞云、昔日氣息爭得忘、士彈指云、動天動地。

丹霞是一代龍門、向分毫上取利、不是龐公、幾乎失卻幞頭。

貞溪有僧來參、溪竪起拂子云、貞溪老漢還具眼麼、僧云、某甲不敢見人過、溪云、老僧死在闍梨手裏、僧以手指胸便出、溪云、闍梨見先師來、至晚溪請喫茶、僧拈起盞云、者箇是諸佛出世邊事、作麼生是未出世邊事、溪以手撥卻盞云、到闍梨死在老僧手裏、僧云、五里牌在郭門外、

溪云、無故惑亂師僧、僧便起謝茶、溪云、特謝相訪。

　貞溪與者僧、皆是曾經霜雪之人猩猩飲酒、無奈忍俊不禁、未免一時喪身失命、咄、幽州猶自可、最苦是新羅。

天童首座秉拂

除夜秉拂、僧問云、孟嘗門下雞鳴出關時如何、師云、汝非過關客、進云、法堂新創、還有新底佛法也無、師云、梁方柱圓、進云、記得、昔日僧問嵩山和尚、如何是大修行底人、擔枷帶鎖、此意如何、師云、青天無電影、進云、如何是作業底人、修禪入定、此意又作麼生、師云、不居空室、進云、山復云、儞問我善、善不從惡、問我惡、惡不從善、意旨如何、師云、牛皮鞔露柱、進云、耆僧悟去、又作麼生、師云、錯、進云、今日問和尚、如何是大修行底人、師云、獼猴入漆甕、進云、如何是大作業底人、師云、非汝境界、進云、兩頭俱坐斷、一劍倚天寒、師云、隔靴抓痒、進云、幾年抱負荊山玉、今日方才逢賞音、師云、果是錯承當。

師乃云、一冬與兄弟火爐頭邊眉毛厮結、鼻孔厮拄、大都家法森嚴、一語不敢亂發、新正改旦、滿頭青灰似覺抖擻不落、只得引諸人、宿鷺亭外東行西行、也要知東家籬落、西家雞犬、風光高下接平田、暖日發生春草綠、顧視左右、大衆還會麼、太白峰頭大有雪在、復頌雲門乾屎橛公案、乃云、劈腹剜心、千古無對、師子咬人、韓獹逐塊。

結夏秉拂、師索話云、古佛場開、斬新號令、當軒布鼓、阿誰解擊、僧出問云、山前麥熟多時了、一一當機爲舉揚、正恁麼時請師提唱、師云、月子彎彎照幾州、進云、護生須是殺、殺盡始安居、會

得箇中意、鐵船水上浮、如何是護生須是殺、師云、五彩畫牛頭、進云、如何是殺盡始安居、師云、牛頭向北、馬頭向南、進云、如何是箇中意、師云、大地載不起、進云、如何是鐵船水上浮、師云、大石波斯看不破、進云、九旬禁足、魚游網、物外安身、鳥入籠、生殺盡時蠶作繭、如何透得這三種、應庵意作麼生、師云、三十三天覷氣毬、僧禮拜。

師乃云、機奪機、智遺智、雙放復雙收、雙登復雙破、大衆還會麼、萬松關到翠鎖亭前、妙高臺到太白峰頂、坦坦蕩蕩、岩岩嶢嶢、頭頭是生殺之機、處處斷佛祖之路、圓覺伽藍、十風五雨、平等性智、水流花開、所以道、峯巒峭峙、鶴不停機、靈木岩然、鳳無依倚、止不止、擬不擬、籬邊燕雀空呢喃、大鵬一展九萬里、撒笑西來碧眼胡、被人打落當門齒。

復擧佛是西天老比丘公案、乃頌云、佛是西天老比丘、畢竟眞金不博鍮、莫放是非輕入耳、從前知己反爲讎。

冬至秉拂、師云、天童門下、古佛堂前、有銅壺箭令、誰敢正眼覷著、迦葉三昧、固非阿難所知、既曰平分半座、不可外此別立條章、只得就其中間點出子午卯酉、還會麼、若也不會、重新點出、大衆一年有十二月、一日有十二時、一明一暗、一敲一唱、從朝至暮、從暮至朝、盡情攤向諸人、別無佛法道理、只要諸人知道、今年冬至定是十一月二十九申末未初、夜減三刻、晝添九釐、隆極陽生、循環不住、便見無今無古、無去無來、無斷無續、無缺無餘、所以道、一切過去劫、安置未來今、未來見在劫、安置過去世、玄機迅速、箭影同旋、斗轉星移、不容眨眼、忽有箇久參之士、出來道儞是東山下兒孫、豈不知瓜田不納履、李下不整冠、良久云、若教頻下淚、滄海也須乾。

鎖口訣

諸佛妙門、列祖的旨、繼繼繩繩、貴在密契、尺圜鑰合、綱紐沈細、
綿密無縫、隱括幽祕、遠兮非遙、近兮非邇、措無所遺、舉無不備、
橫亘十方、竪窮三際、理外無事、事外無理、具一切相、含一切義、
啓無所開、闔無所閉、出無所從、入無所詣、二兮非一、一兮非二、
用則雙用、置則雙置、隨處卽宗、如身影爾、世尊拈花、達磨分髓、
曹溪南嶽、百丈臨濟、楊岐白雲、圓悟妙喜、洎至應庵、五十一世、
或開或遮、或權或體、或逆或順、或淨或穢、或明或暗、或行異類、
激揚鏗鏘、波流嶽逝、如師子筋、如象王鼻、如天鼓聲、如鴆鳥尾、
百千機緣、河沙妙偈、出沒卷舒、三昧遊戲、深慈痛悲、布無緣施、
絕見絕聞、絕情絕謂、曰放曰收、控惡馬轡、曰錯曰綜、奪魔王幟、
箭擲空鳴、風行塵起、龍蛇天淵、迷悟金屎、不入此宗、徒勞擬議。

禮祖塔

禮心鏡禪師塔

呪聲一出鬼神愁、甘露縵山百毒收、小白嶺分南北路、至今蛇咬石饅頭。

禮宏智禪師塔

浮圖三遶月明中、五葉重芳憶遠公、古殿百年今又冷、鳳栖無復到梧桐。

禮應庵師祖塔

悞入桃源深處路、杓然流水隔天涯、一聲鷄唱千年後、老卻劉郎幾度花。

禮密庵師祖塔

謾說沙盆重似山、不施三拜也應難、黃金不鑄黃金像、松竹相爭夜夜寒。

禮石門進禪師塔

一十九人齊悟道、不將名字上傳燈、我來聊爾伸三拜、要救乾溪喫顛僧。

禮石橋

陣陣炊煙晝作團、似聞鐘鼓出雲闌、眞如不展羅齋鉢、尊者家貧見客難。

往來偈頌

壽物初師兄

空山無人月入樓、耿然東望鄮嶺頭、不知此夕是何夕、白玉菡萏吹高秋、九龍蜿蜒不敢傍、釋梵天邊花雨響、年年此日苦炎熱、長與塵寰作清冷。

寄象潭和尚

絲毫落地盡情翻、要得脩渾直是難、水遠山長太孤絕、幾回同往不同還。

君方背負須彌至、我入針鋒影裏藏、消息盡時重會面、一條古路沒人行。

寄石林和尚

歳晩天寒信不通、上方應念白雲窟、柴頭米粒重敲點、細雨斜風滿浙東。

寄龍石

方木從來不逗圓、幾回相拶下黃泉、回頭拽斷來時路、塞北安南正悄然。

寄在庵

開口明明是禍門、相逢彼此避無因、三千條令從頭舉、今古希逢不犯人。

海中夜泊懷仲舉師兄

破頭船子打頭風、咫尺仙凡信不通、偷眼幾回著五兩、夜潮誰在海門東。

送横川主鳳山靈巖

百戰金吾出鳳城、不論滅竈與添兵、天高蕩月涼如水、誰聽虛弓落鴈聲。

天巖法師寄示大禮禱晴疏

柴門剝啄送嘉音、驚失山中補襪針、半幅御爐煙上禮、三冬黃葉地爐心。

送恩絶崖

雖然吐得蔗頭甜、畢竟難收醬裏鹽、話到靑燈滄海角、不堪回首百城南。

送章竺卿

機先一探便抽兵、彼彼難措古劍腥、吳楚盡頭回首望、滹沱風急正流氷。
一語當頭略不分、便將拄杖靠松根、山深自是多狼虎、未到黃昏著閉門。

曲江夜話

大家相聚喫莖虀、不敢堂堂路拾遺、針脚放開毫髮許、水天空濶鴈聲微。

湖上諸庵闔辭、勸晦巖法師再主南湖。

敎眼通身會者難、雲生華頂萬尋寒、渾崙不用重華擘、擲入鄞江普請看。
塵塵刹刹布全威、華雨堂前宿將旗、刁斗只聞空劫外、灼然誰敢犯重圍。

悼淨慈斷橋和尚

去年一語不相當、幾度思量再絕江、忽報藕絲牽玉象、烏藤摩捋又深藏。
祖父田園實可憐、不知契券落誰邊、斷橋流水無人到、松竹凄凉又一年。

寄東皐友山

莫去朝來送復迎、齋魚粥鼓一般鳴、三千里外垂鉤意、端的何人別重輕。

題虛谷庵居

門外波濤正渺茫、斷橋無路與人行、趙州曾到不曾到、一笛斜陽釣艇橫。

與一關葛藤

逆順門頭撥不開、忽然平地起風雷、德雲不下妙高頂、慈氏宮中沒善財。
牙關咬定沒來由、打到南州與北州、一錯證龜成鼈去、衲僧無處雪冤讎。

寄象外

衲僧門下論知己、熱血相噴不露齒、好花不肯當面貼、各抱不平憤憤地、幾回欲道道不及、片

板各自擔到底、浙東山浙西水、與君借路略經過、也是波斯入鬧市。

寄少野主等慈席

棒頭翻覆雨傾盆、雙放雙收用不停、報化佛頭重按斷、寒潮不敢下滄溟。

與雲溪夜話有作

揣剝家私徹骨貧、一絲一線不相存、通玄峰頂無人到、雨滴巖花襯冷雲。

送東溟

祖師門下絕名模、無蟻難穿九曲珠、一蹴瞎驢玄路絕、鷓鴣啼在百花圖。

慈雲諸公作頌、美玉几物初和尚作塗之功、亦隨喜二偈。

大海滔滔沒反回、濤山浪屋雪崔嵬、一鍬翻轉魚龍窟、香積不從天外來。

鐵鞭高舉趁耕牛、棠棣花開佛也愁、別甑炊香只者是、鉢盂無底更風流。

送仁練溪國清後板

天台南石橋北、三脚驢子弄蹄行、未舉已是舌頭頹、差之毫釐失千里、薦不薦兮落第二、大野霜飈天宇空、孤鴻縹渺從何起、不用那邊重斫額、勾頭有路滄溟窄、坐斷當頭付飽參、南泉座上有黃檗。

寄南山維那平田

興化打克賓、克賓嗣興化、不知蜜苦似黃連、盡道一牛還一馬、平田豈甘同受屈、倒卻紅旗入他社、纔見他家令欲行、一錘兩當便擒下、直要堂頭老古錐、眼瞎耳聾並口啞、更在再三針箚

看、只恐瘂聾元是詐、阿呵呵、阿魏無眞、水銀無假、浩浩叢林如海寬、作麽爲君提此話。

竹寄古田軒扁

南陽一擊憩窮途、客思難將上畫圖、莫怪不除當路筍、要君來此立須臾。

與象岑夜話天平兩錯

尺短終難比寸長、年深法出轉姦生、饒君收得當時款、我要重還赦後贓。

謝玉几本末翁諸友相訪

放君不合到巖栖、蕩盡生涯只噬臍、有箇𥐓溪長柄杓、也隨明月落前溪。

送瑞侍者

自笑塵懸折脚牀、又憐黃髮映斜陽、山頭老漢如相問、莫說蒲鞋有短長。

送昌兄行脚

因君別我下松庵、不覺回頭滿面慚、去去卻煩輕蓋覆、免令江海罵同參。

酬月維那

遠臨寒谷媿深知、紅葉聲中蹈落暉、莫怪家風苦岑寂、十年松下掩重扉。

次足翁見招韻

青山斷處露雲凹、幾把家私入細敲、一夜北風雪沒屋、主人太殺不相饒。

寄無文和尙

西天路滑人稀到、最苦難禁劈面風、不敢機先謾擧展、白雲可是手頭窮。

歲晩天寒黄葉飛、飯籮無糝已多時、臨風幾度空惆悵、只憶江西馬簸箕。

裔姪行脚

出門荊棘已參天、不解騰身擧歩前、放汝別參知識路、快須灑落打行纏。

送小師一鏡行脚

老矣叢林沒所成、聲前斷應本師名、行行牢記吾深囑、三百年前有古靈。

天童琛五戒求頌

嶺南消息又萠芽、米爲經篩飯沒沙、別有暗香遮不得、團團明月轉菱花。

送履姪見思溪石林和尚

拋出燈前佛即心、十虛無地可容針、草鞋若也欺行色、未失青若見石林。

龜蛇石

一石坡陀兩種紋、確然同隊不同羣、通身是汝通身我、含毒那知左顧恩。

天庵

日月兩輪爲戸牖、衲僧活計未蕭條、不知三十三重外、爛却春風幾許茅。

佛成道

三更犬吠月沈時、酒冷茶寒彼此知、一笑面皮黄似我、令人特地又相疑。

象潭見寄

湖山碧湖水碧、山靈水靈人共識、高禪著屋居其中、精金不待增黄色、思彼妙喜洋嶼庵、從來

的的家法嚴、一夏打發十三箇、往往諸方爲美談、古之視今今視昔、羅庵眼睛如漆黑、大都當理不黨親、一路生機近不得、妙中妙玄中玄、攬之不及鑽愈堅、般勤欲語東風前、意輪未動牙頰寒。

觀競渡

迅雷轟破水晶宮、縹緲寒蛟上碧空、一一眼睛方定動、錦標已在畫橋東。

雪佛

一華擎出一如來、六出團圞笑臉開、識得髑髏元是水、摩耶宮裏不投胎。

食蒲萄

一夜滂澎雨未乾、珠回玉轉影團圞、若知開口非干舌、不在秋風架下看。

桂花數珠

金粟全提向上機、秋風影裏走摩尼、就中一線無人見、老兎推輪又過西。

送廣南因上座

祖師門下實堪悲、千古雲埋少室衣、此去風幡堂上去、可憐無語寄闍黎。

筆工

三寸圓齊藏甲兵、光芒直與日爭明、折衝只在毫端許、何必防胡萬里城。

送正姪行脚

荷擔此一著、須還筋力漢、直向空劫前、一刀成兩段、椎殺老瞿曇、翻轉魔王面、拋下當頭熱鐵

輪、塵塵刹刹風雷轉、既明如是復如是、白雲更有無絲線、葬倒諸方歸去來、莫致觸發流星箭。

送友人還廣

相逢眼上各安眉、水遠山長彼此知、閑憶趙州曾落節、臺山路上勘婆歸。

瓦塔

要了耽源未了緣、不曾引玉亂拋磚、湘南潭北無人到、落在清溪淺水邊。

亭山廟接待

堂前作舞呵呵笑、餿飯知他欲餧誰、窮鬼又來爭漆桶、看看鐘鼓送殘暉。

送秋澗歸西州

五載相從伴寂寥、相携無奈路迢迢、月明後夜重回首、又隔錢塘幾信潮。

送友歸建寧

通身挺得示條條、背負乾薪被火燒、更借一機看豹變、秋風又上洛陽橋。

送僧承天見退耕

入戶將何辨主賓、先看握土定千鈞、絲毫有路休登陟、須信雙峩不立塵。

天童侍者

堪笑耽源著賊時、南陽忒殺棒頭危、爭知碧沼青松外、別放寒鷗下釣磯。

送隱監寺

楊岐門外滑如苔、奪食驅耕與麼來、四七二三無路入、海山煙雨漲蓬萊。

大士開光明

撞牆磕壁證圓通、五蘊山頭鼓黑風、翻轉面皮開笑眼、不知眉底髑髏空。

悼穎侍者

茅生舌上蕨生唇、呼喚聲中懶出門、拋下髑髏師子吼、南陽一路少行人。

海碧

蕩蕩天開水鏡空、三千里外見魚龍、竿頭絲線不相到、夜夜波心月似弓。

夢窻莊知客

層簷關隔鎖深幽、透出虛明六不收、風暖化爲蝴蝶去、雙雙戲撲睡獼猴。

庵中與老母守歲

燈前殘臘苦無多、相對無言意若何、一錯路頭嵷峽遠、三生煙冷舊盤陀。
風攪長林雪滿牀、寒藤無葉倚空桑、誰知戶破家殘處、添得黃粱客夢長。

送古田住吉州祥府

東山消息久茫茫、累汝懷耽又一場、樹樹老松寒照雪、钁頭無口孰添鋼。
廬陵米價又翻新、令肅冰霜斷要津、犬吠青原白家路、月明也有醉婦人。

送伏虎巖住石霜

出門便是草萋萋、雨洗千年折鏃泥、眨眼只論功蓋代、何人猶聽五更鷄。

鑷人小徐生求

嘉汝從師藝亦精、牽羅伐我雪鬅鬙、他年若遇青雲客、莫道曾逢垢面僧。

兵後徐待詔求

世事興亡海上漚、馬嘶荒草夕陽秋、一聲彈落空三際、留得青山對白頭。

分水嶺接待

建了精藍捺海塗、寫成一幅似真如、要施摩詰搏香手、不爲看山展畫圖。

戒犬

汝自耽耽擁砌莎、任從客賊自經過、門前不用頻頻吠、將謂山僧有幾多。

漁樵耕牧

波濤險處見鰲身、三寸鉤頭百萬鈞、霹靂一聲天外去、盲龜猶自隔重津。
末上還他腕力麁、一肩擔荷更無餘、黃梅七百閑枝葉、依舊清風屬老盧。
祖師心印鐵牛機、覆雨翻雲正此時、喜得衆生已成佛、黃金殿上脫簑衣。
黃犢村村唾暖煙、風光高下接平原、桑麻晝永孤桐噎、誰在白雲青嶂邊。

水簾谷

洞門晝夜不曾關、千尺琉璃到地寒、中有谷神呼得應、不將面目與人看。

天衣舊居

茅屋三間一釣船、是師當日舊生緣、烹金爐鞴無今古、莫看秋風雁字邊。

栽松

一寸青青一屈伸、只圖钁下起龍鱗、白頭入草渾相似、不是周家借宿人。

題巾峰

雨後閑登塔院秋、下看危磴白雲浮、海門月出舒長嘯、十萬人家盡擧頭。

日者求月斧號

不待寸鐵快知風、迥出陰陽造化功、信手一揮天地濶、廣寒宮殿百千重。

梅莊

一回爛熟便登場、錯落黃金透核香、彈破老龐牙頰後、至今行旅不齎粮。

鑄鐘

百鍊不相干、騰身烈焔前、騎聲蓋色漢、喪却髑髏邊。

傀儡

拍拍歌兮拍拍吹、鑼聲鼓韻不停拋、寸絲牽著和棚動、一笑千金付與誰。

讀松源語

一句無前後、千差水逆流、機先打獨脫、處處錯安頭。

月居

通身都是廣寒宮、寂寞樓臺閉幾重、兎子夜挨門扇動、可憐漏泄我家風。

煉丹道人

煉得靈丹妙入神、紅爐傾出紫霞新、爲君點作眞空劑、賣與諸方不病人。

月篷

午夜撐船憶謝郎、最難遮掩是清光、一推推出乾坤外、兩岸蘆花白似霜。

休復

黃閣簾開殺氣收、盡驅汗馬作耕牛、刈禾鎌子如風快、也有將軍打劍頭。

獨照

只這孤明何歷歷、窮幽極暗發光輝、更無一法堪遮障、白日青天十二時。

空極

一抹斜陽萬里秋、天光長與水同流、欲標那裏爲疆界、鴈影回邊是盡頭。

冷泉聽猿

萬里吳江萬里天、盡將客恨送歸船、一聲分作三聲了、誰在巴山暮雨前。

夢中作

百丈當年捲起時、今朝欻地自騰輝、火星迸出新羅外、不在東風著意吹。

送彝姪行脚

千峯雪後望江湖、脚底龜紋轉較麤、破襪正愁無線補、又還聞子上京都。

題虎

獨坐枯木巖、一嘯風悄悄、衆生界未空、我心終不飽。

臨濟再參黃檗

重賞功前見勇夫、鐵鞭高擧碎珊瑚、如今欲問當年事、鬼哭神號八神圖。

主賓依位

蟬鳴木葉動、日色弄微明、草舍路欲沒、山田稻半傾、迎風當嶽立、倚杖看雲行、寂寞朱涇口、何人釣艇橫。

寒夜

誰復問行藏、塵懸破鉢囊、深灰一點暖、寒谷萬株霜。

寄象外淨頭

壁根笤箒重千鈞、妙用縱橫不動塵、屈指威音到彌勒、阿誰堪上糞箕脣。

無象

太平不用斬癡頑、鷄犬聲中白晝閑、四海只知天子貴、不知天子作何顏。

梅堂

氷霜直與死爲隣、雪裏何人認得親、壁倒籬坍君自看、灼然花綻不干春。

存耕

深深耕犂在今朝、貴在他年長異苗、後代不知前代力、却言南壠自肥饒。

白雲庵居喵喵歌

描不成兮畫不成、白雲影裏又新正、寒巖殘雪消將盡、靈草無人滿地青。

參禪不識主人翁、癡拙無人在下風、一曲村歌爲誰發、海天空闊有孤鴻。

拶得文殊下五臺、滿身風雪幾千回、灼然不負平生眼、古廟香爐上綠苔。

刮盡毛兮折盡皮、骨頭迥迥任風吹、蕭牆禍起漫誰救、撒手傍邊獨自歸。

破屋修然萬境忘、十年松下一蒸牀、不知佛法今何似、露柱從他自放光。

蘿蔔拈來憶趙州、不知將底可深酬、偶將丈子敲松樹、浩浩濤風起樹頭。

禁足安居誰似我、長松雨過綠陰重、莫言圓覺伽藍小、掛角羚羊不露蹤。

不勞更彫琢、本體自天然、懸崖機路絕、枯木夜啼猿、揭地風雷日月奔、塵沙海口一齊吞、快哉

臨際辭黃檗、三頓烏藤贈出門。

千山風雪偃孤蹤、回首西天路不通、憶着普通年遠事、老猿啼上最高峰。

浩浩叢林擊法雷、白雲燒葉擁寒灰、三更滴盡茅簷雨、引得燈籠笑口開。

守盡今宵是一陽、俶羅無底可憐生、風流出格誰相肯、月下撐船有謝郎。

一衲蒙頭息萬機、家風淒冷客蹤稀、當門撞破蜘蛛網、獨有春深燕子歸。

烏藤突兀冷粘雲、貴爾無慚道用親、只合橫肩入深去、莫留彰跡礙行人。

破瓶頸短嘴何長、松火微鳴野菜香、畢竟不堪爲世獻、幾回提掇可憐生。

衆毒交橫日夜煎、法身病在色身前、藥翻沙銚成狼藉、火亂灰飛落枕邊。

黃皮裹骨露深坳、木落山空病轉聱、醫不得時誰下手、從他突兀拄青霄。

三喚何曾拔一毛、三應無地著秋毫、就中曲直誰分辨、雨過秋山露石凹。

未言爺諱膽先寒、擬欲遮藏沒處安、不用西風苦爭戰、白蘋紅蓼自分攤。

還佛高科貴識空、誰云無電不乘龍、道吾不負雲巖問、拼得身行異類中。
門掩長林雪攪空、生柴燒火泣寒蟲、因思達磨當門齒、打落神州赤縣東。
黃泥黏鑁雨初晴、石上閒敲一兩聲、澗底沙禽忽飛出、對人如喜又如驚。
蕒魁種得大如拳、不怕深冬百衲穿、火冷雲深消息絕、從敎黃葉滿堦前。
住山活計苦無多、試問時人會也麼、白日豺狼趂麋鹿、靑霄鬼魅出煙蘿、秋來老竹添新筍、雨後長松墮爛柯、每自興來歌一曲、不知濟北起寒波。
閑思鍋竈幾千般、燈盞無油紙燃乾、坐到三更至生白、壁邊主丈照人寒。
今歲强於去歲多、冷灰隨分展陽和、壓頭老瓦雖無幾、更剪長條引薜蘿。
呼童芟草小窻前、雨歇黃泥軟似綿、不覺觸他蚯蚓怒、迅機顚蹶欲翻天。
不依本分要參禪、錯把封皮作信傳、不識東山左邊底、也能著屐上旛竿。

竹屋

葉葉氷霜動四維、交參那貴著鞭遲、目前不解推門入、萬里淸風付與誰。

梅巖

千歲孤根石一拳、預將消息報春前、工夫不到氷霜外、莫說吾家主丈邊。

佛光圓滿常照國師語錄卷二 終

佛光圓滿常照國師語錄卷三

住日本國相州巨福山建長興國禪寺語錄

侍者德溫等編

日本國副元師平時宗請帖(見存圓覺。)

時宗留意宗乘、積有年序、建營梵苑、安止緇流、但時宗每憶、樹有其根、水有其源、是以欲請宋朝名勝、助行此道、煩詮・英二兄、莫憚鯨波險阻、誘引俊傑、歸來本國、爲望而已、不宣。

弘安元年戊寅十二月二十三日　時宗和南

詮藏主禪師

英典座禪師

師在大宋國天童山景德禪寺受請、辭衆上堂、天童環谿和尚付衣罷、師拈起衣云、世尊傳金襴外、別傳箇甚麼、以手指云、師兄過在儞、殃及我、遂就座、時有僧出問云、動若行雲、止猶谷神、旣無心於彼此、豈有象於去來、今日和尚、遠赴[illegible]桑、且道、有心耶無心耶、師云、一片月生海、幾家人上樓、進云、和尚大唐將東山宗旨示徒、今往扶桑作何方便、師云、儞隔海聽取、進云、非但

扶桑承雨露、大唐國裏亦霑恩、師云、將謂無人。

師乃云、祖師逾海越漠而至中華、有大法可傳、今日日本平將軍遠招山僧、山僧不知有甚巴鼻、良久、顧視大衆云、所以道、羽嘉生應龍、應龍生鳳凰、鳳凰生衆羽、但看雲駛月運、莫說舟行岸移、諸人若也會得、朝朝相見、其或未然、遠引孤帆、不勝依戀。

結座、世路難免別、故人相看握手不知頻、今朝宿鷺亭前客、明月扶桑國裏雲。

山門疏

日本國建長禪寺本寺住持見闕、奉大將軍元帥鈞命、恭請　太白首座前眞如和尙、開堂演法者。

右伏以、此土有大乘器、老胡廼自西來、我國無闡提人、聖敎漸流東去、白叟黃童咸歸淘汰、重臣

世主力爲咨參、端請導師、遠將勤命、共惟　新命堂頭和尙大禪師、氣吞佛祖、眼蓋乾坤、透圓照向上關、芝溪水千尋浪激、分環谿第一座、曇華室數仞墻高、爲日本作司南車、盡大地有成佛分、向建長弘濟北道、阿那箇不斷命根、蘭槳近江皐、卽傾誠於開士、金風生杖屨、徑尉望於將軍、正令全提、輿情胥悅。

年月　日　山門疏

知事比丘　禪

江湖疏

江湖恭審　住前眞如無學和尙、榮赴日本巨福名山建長禪寺虔請之命、大振家風、益隆正續、合詞勸勉者。

右伏以、日本國、尊事佛法、足以馳聲、平將軍嚴肅家風、特爲請主、大以四明之開士、偉哉巨福之叢林、明社增輝、宗門多慶、龔惟　新命巨福名山建長禪寺無學和尙、道冠人天、行欺冰雪、據靈隱・長庚之半座、起圓照・北磵之全機、拂袖台山、未許考槃陸、忘機宿鷺、豈容坦腹園林、看半天帆展薰風、喚萬里波搖夜月、懽聲載道、衣冠人物競奔迎、瑞氣凝空、海岳神靈俱擁衞、時時授道、處處度生、揭慧日於中天、扇慈風於大地、故園松菊無恙、應寄佳音、晩學衣盂未承、當觀回馭。　謹疏。

今月　日　江湖比丘　等

普明　克明　定燦　修義　大章　淸曉　師蘷　慧鏡　淨因　了坤　法通

梵志　如濟　悟慈　覺心　正心　惟一　聞思　可信　了樞　正玖　宗建

智祥　處恭

弘安二年八月二十一日入院。

指山門云、兎走烏飛、山高水急、一步不相到、把手拽不入。

指佛殿云、釋迦地藏拗曲作直、今朝狹路相逢、從頭勘過始得、良久云、將謂侯白、元是侯黑。

據室云、大冶紅爐不容蚊蚋、一鎚之下飜身、方見金毛獅子。

拈笏、呈起笏云、山僧平日將木槵子、換卻天下人眼睛、今日因甚卻被這箇穿卻鼻孔、大衆會麼、負鞍銜鐵、方遇對頭。

拈山門疏云、擊木無聲、敲空作響、海濶山遙、風高月冷。

拈江湖疏云、毀也毀盡、讚也讚盡、佛殿掘東司、茅屋安鴟吻。

指法座云、身等虛空、座等虛空、良久云、鶴有九臯、難翥翼、馬無千里、謾追風、驟步登座、祝

聖拈香云、此一瓣香、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願如日之明、如天之普、九州共貫、幷包有截之區、三

景同光、申錫無疆之祚。

次拈香云、此一瓣香、仰祝

大將軍都元帥國公、伏願福如大地之春、壽同劫石之固、資倍祿算、永祚邦家。

次拈香云、此一瓣香、仰祝

相模太守都總管、伏願福同滄海、壽等須彌、長爲佛法金湯、永作皇家柱石。

次拈香云、此一瓣香、懷來三十餘年、未嘗容易拈出、爇向爐中、供養前住大宋國徑山佛鑑禪師無準大和尚、用酬法乳之恩。

遂斂衣就座索話、垂絲千尺、意在深潭、離鈎三寸、莫有道得底麼、僧問、平生自笑不能閑、迢遞來登巨福山、只把少林無孔笛、聲聲吹出萬年歡、學人上來請師祝　聖、師云、南嶽峯頭八字

碑、僧云、未離宋朝、已到扶桑、如何是不動尊、師云、五月離太白、八月到建長、僧云、既到扶桑、顧問提唱、師云、銅沙羅裏滿盛油、僧云、記得寶壽開堂、三聖推出一僧、此意如何、師云、據書請客、僧云、寶壽便打、又作麼生、師云、家貧難辨素食、僧云、只如三聖道、與麼爲人、非但瞎卻這僧眼、瞎卻鎭州一城人眼去在、意作麼生、師云、莫怪坐來頻勸酒、自從別後見君稀、僧云、只如寶壽擲下拄杖、便歸方丈、又作麼生、師云、一場狼藉、僧云、且道、今日堂頭和尚、開堂演法、還有爲人處也無、師云、有、僧云、如何是和尚爲人處、師云、射虎不眞、徒勞沒羽、僧云、只如　相模太守請和尚坐鎭名山、畢竟有何祥瑞、師云、九包呈瑞彩、獨角出滄溟、僧云、還許學人讚嘆也無、師云、有、何不可、僧云、近水樓臺先得月、向陽華木易逢春、師云、道得一半、僧禮拜。

師乃云、我此法印、爲欲利益世間故說、在所遊方、勿妄宣傳、釋迦老子將此印付囑摩訶大迦葉、摩訶大迦葉二十餘傳而至菩提達磨、菩提達磨二十餘傳而至于此、顧視大衆、良久云、山僧未離大唐已前、將謂日本衲僧、白日點燈、將鹽止渴、及乎到來、箇箇眼橫鼻直、人人立地頂天、山僧當初也要如何若何、到此一場懡㦬、只得便將此印與諸人一一印定、更不敢移易一絲毫許、爲甚如此、卓拄杖一下云、秋高天影直、海濶浪無聲。

復舉、白侍郎問鳥窠和尚、如何是佛法大意、窠云、諸惡莫作、衆善奉行、白云、三歲孩兒也道得、窠云、八十老翁行不得、白有省、師拈云、鳥窠用處、如龍王宮殿在千波萬浪之外、若非白侍郎航海梯山、鎭海明珠爭得到國、雖然如是、笑我者多、哂我者少。

當晚小參、僧問、鐘已鳴鼓已絕、人天普集龍象交參、正與麼時、請師提唱、師云、八角磨盤空裏

走、僧云、記得、德山小參不答話、意旨如何、師云、舌頭拕地、僧云、趙州小參却答話、又作麼生、師云、參天荊棘、僧云、如二大老、一人答話、一人不答話、意在於何、師云、針箚不入、僧云、且道、答者是、不答者是、師云、黃河連底凍、僧云、和尚今夜小參、是答話不答話、師云、已是龜毛長三尺、僧云、不因樵子徑、爭到葛洪家、僧禮拜、師云、未敢相許。　師乃橫按主丈、顧視大衆云、與麼來者鐵壁鐵壁、不與麼來者、鐵壁鐵壁、透得兩重關、鐵壁復鐵壁、饒儞須彌頂上擊金鐘、娑竭宮中看日出、諸方明窻下按排、老僧一棒也恕不得、所以道、直得盡乾坤大地無纖毫過患、猶是轉句、不見一色、始是半提、要見全提時節麼、卓拄杖云、鐵壁鐵壁。　復舉、僧問曹山、抱璞投師、請師雕琢、山云、不雕琢、僧云、爲甚不雕琢、山云、須信曹山好手、師拈云、曹山好手不合重下註脚、有問山僧抱璞投師、乞師雕琢、喫棒了連夜趕出、三十年後、免興刖足之歎。

上堂、快人一言、快馬一鞭、便恁麼去、此土西天、豈不見、華嚴會上、善財童子、參五十餘員善知識、末後到毗盧樓閣前、方斂念閒、彌勒彈指、樓閣門開、善財得入、入已還閉、移一步、過不可說不可說微塵佛刹、見無量無邊智慧海、無量無邊解脫門、無量無邊光明藏、無量無邊福德聚、又見塵塵彌勒刹刹善財、彌勒復云、善男子起、法性如是、善財豁開兩眼、如睡夢覺、從前所證、所悟底一場懡㦬、能證能悟底亦無消息、便見黃金與泥土同價、古佛與白牯同參、山僧只要諸人不撥一塵、不動一念、便與麼荷擔將去、庶不辜今日遠伸毛手。

重陽上堂、重陽九日菊華新、高揭靑帘接遠賓、又覺晚來風色好、不知落帽是何人。

上堂、意能劃句、句能劃意、意句交馳橫屍萬里、昨日風起黃河、今日馬嘶靑塞、盡道拔山力盡、

灼然功蓋三分、大衆還知老僧敗闕處麼、擊拂子云、咄、亂世英雄少、太平奸賊多。

上堂、再整釣竿水月明、再探波底有無情、良久云、六鰲一掣三山曉、潮落千江四海鳴。

上堂、馬祖陞堂、百丈捲席、藕絲竅裏騎大鵬、九萬里風作一息、南兮北兮、荒草連天、古兮今兮、誰剪荊棘。

開爐上堂、僧問、記得、大潙侍百丈立次、夜深、丈云、看爐中火有在也無、此意如何、師云、夜深撥火也是尋常、進云、潙撥云、無、又作麼生、師云、許他具半隻眼、進云、丈躬至爐深撥得火少許、夾起示之、爾道無這箇聻、師云、螢火之光不勞拈出、進云、潙豁然大悟、聻、師云、失脚陷黃泉、進云、後又侍百丈行次、丈云、帶得火來麼、意在於何、師云、憐兒不覺醜、進云、潙云、帶得來、丈云、火在什麼處、潙拈起一莖柴、三吹度與百丈、又作麼生、師云、多虛不如少實、進云、百丈道、如蟲禦木、且道、肯他不肯他、師云、轉見醜拙、進云、和尙今日開爐、還有這箇也無、師云、也只如常、進云、試聽學人撥看、師云、松炭嗶嚗、照顧面孔、進云、寒爐初發、熖煖氣逼人多、師云、爾莫嚇我、僧禮拜。

師乃云、簇出玲瓏面面紅、滿堂衲子坐春風、東山山下無人到、火冷雲深憶祖翁。

達磨忌上堂、僧問、達磨見梁武帝、帝云、如何是聖諦第一義、祖云、廓然無聖、此意如何、師云、黃金如糞土、進云、帝云、對朕者誰、祖云、不識、又作麼生、師云、賊不打貧家、進云、帝不契、祖直往少林、終日冷坐、又且如何、師云、梁生招禍、進云、既是不生不滅、因甚葬熊耳峯、師云、爾莫亂統、僧禮拜。　師乃云、記得吾祖將示寂時、令門人各呈所解、道副云、如我所見、不執文字、不離文字、而爲道用、祖云、汝得吾皮、尼總持云、我所解如慶喜見阿閦佛國、一見更不再見、祖云、汝得吾

肉、道育云、四大本空、五陰非有、而我見處實無一法當情、祖云、汝得吾骨、師良久云、祖翁已去千年、戀膠難接斷絃、擧手云、和者一臂斷却、汝諸人將什麼喫飯。

達磨忌拈香、咄者老胡當門齒缺、蕭梁武帝不投機、可師空立庭前雪、一華五葉兮烏焉成馬、二十七傳兮證龜作鼈、絲毫無間天地懸絕、召大衆以手斫額云、翩翩隻影擬何從、一回飲水一回噎。

上堂、葉落歸根萬物皆蟄、我衲僧家蒲團頭上入正定、須彌頂上從定起、須彌頂上入正定、百草頭邊從定起、百草頭邊入正定、拄杖頭上從定起、拈起拄杖、喝一喝云、不得揑怪。

上堂、山僧夜來、擬欲揍些麤禪供養大衆、百般思量、千樣計較、攪得大地震動、海水飜波、一句也思量不來、拶到禪床角上、直得無言可對、無理可伸、只成一場懡㦬、有辜大衆鵠望、諸人且莫相怪。

證據長樂一翁上堂、如來正法眼、非今亦無古、父子親不傳、千歲密相付、香嚴擊竹偈、幾人錯指注、昨朝問長樂、直答無賸語、如人白晝行、不用將火炬、又如香象王、擺壞鐵鎖去、摩醯正眼開、大撾塗毒鼓、普告大衆、知說偈作證據、公驗甚分明、鵝王自擇乳。

冬至小參、一冬二冬、歲盡年窮、化工密運、消息潛通、諸人還會麼、若也不會、山僧解注一遍、這箇謂之隨波逐浪句、又謂之函蓋乾坤句、又謂之百味具足句、又謂之截斷衆流句、諸人若也會得、暖生幽谷、若也不會、凍鎖寒潭。　復擧、僧問睦州、以一重去一重則不問、不以一重去一重時如何、州云、昨日栽茄子、今日種冬瓜、師拈云、或有人問徒長以一重去一重則不問、不以

一重去、一重、時如何、劈脊便打、錮鏴上豈可添鐵。

冬節上堂、獨立沙頭望故人、故人元是去年春、拈拄杖云、隨吾拄杖歸三島、胡馬空嘶塞北雲。

謝書記藏主上堂、擧、古有僧、在經堂中坐、藏主云、如何不看經、僧云、不識字、主云、何不問人、僧叉手云、是什麼字、主無語、師云、我當初若作藏主、只向他道、去問書記、這僧眼子若活、便知此中有人。

因事上堂、老夫用盡腕頭力、輸與諸公者一籌、打碎六窻虛豁豁、夜深驚起睡獼猴。

中秋上堂、仙桂叢叢帶露開、廣寒宮闕幾樓臺、東西南北門相對、自是遊人不到來。

上堂、針頭削鐵、水裏尋波、應眞不借、也不較多、黃葉飄飄兮青山漸瘦、簷頭滴滴兮還落舊窠、阿呵呵、趙州曾勘臺山婆。

上堂、八月二十五、直截爲君擧、水行一里一文、陸行七里一鋪、脚瘦草鞋寬、雲收山岳露、飯袋子、江西湖南便恁麼去。

上堂、高拋不至天、下擲不到地、諸佛與祖師、忒殺無巴鼻、有巴鼻、無巴鼻、唵嘛嚕嘛嚕嘫唎嘫唎。

上堂、丁一卓二、千里萬里、說古談今、海底摸針、釋迦老子、因甚不受燃燈記、良久擊拂子云、飢飡易飽、細嚼難飢。

重陽上堂、今朝九月九、葉落山容瘦、效古戲登高、萬象爲朋友、滿泛大海波、且作重陽酒、一吸大海乾、虛空開笑口、阿呵呵、茱萸日本無、黃菊東籬有、擊拂子、誰道相逢不出手。

上堂、清淨本然、山河大地、撥動一塵、天回地轉、諸人還會麼、良久擊拂子云、在舍只言爲客易、臨淵方覺取魚難。

上堂、一莫去二莫留、深處淺處、明頭暗頭、阿呵呵、因思五祖師翁道、我四十年行脚、今日方始識羞。

開爐上堂、今日開爐了無可說、香匙太短、火筯太長、千林葉落、萬壑雲收、少林面目刀斫不入、喝一喝下座。

初祖忌上堂、不住中天、求大乘器、一錫飄然、走十萬里、顧視左右、良久云、扶桑日出海門東、熨斗煎茶銚不同。

祠拈香、召大衆云、故我初祖隻履西邁、霜露幾降、木葉幾脫、回首音容言猶在耳、因何打落當門齒。

上堂、行不到處只如此行、說不到處只如此說、德山棒臨濟喝、白日青天眼中著屑。

上堂、山僧無法可說、無道可譚、通身三百六十骨節、八萬四千毛竅、只作一句說與諸人、良久擊拂子云、黃連未是苦。

上堂、至道言端語亦端、刹竿頭上颭風幡、幾回望斷千山碧、不見人歸又掩關、卓拄杖。

上堂、西來祖意不用揀擇、一馬二羊三線四白、趙州普、雲門隔、堪笑李將軍、南山射白額。

上堂、二由一有、一亦莫守、七郎八當、半前落後、三分姸四分醜、臨濟德山我家猫狗。

冬夜小參、僧問、記得洞山問泰首座云、有一物黑似漆、常在動用中、動用中收不得、過在什麼

處、意在於何、師云、白雲影中怪石露、僧云、泰首座云、過在動用中、聻、師云、添得一場愁、僧云、洞山喝、侍者掇退果卓、又作麼生、師云、鄭州梨青州棗、僧云、泰首座不得果子喫、聻、師云、富嫌千口少、僧云、今夜和尚、和盤掇出、師云、笑殺傍觀、僧禮拜。　師乃云、三九二十七、籬頭吹觱栗、衲衣下事可憐生、無心念箇波羅蜜、與麼與麼、不與麼不與麼、枯木不隨流水、春風暗著南枝、東山舊話又重新、少室從教霜雪冷、雖然如是、建長與麼告報、還救得也無、良久擊拂子云、鬼持千里鈔、林下道人孤。　舉、僧問洞山、寒暑到來如何回避、山云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、山云、寒時寒殺闍梨、熱時熱殺闍梨、師頌云、何人透得建長關、獨坐寥寥憶洞山、的的藏身寒暑裏、灼然寒暑不相干。

書雲上堂、新頒鳳曆下天墀、何物堪培福壽基、富士山高三萬丈、一年一度長靈芝。

上堂、一人發眞歸源、十方虛空悉皆銷殞、若有一法過於涅槃、吾說卽如夢幻、這兩轉語諸人分得麼、那箇是主、那箇是賓、若也分得、許汝是半箇衲僧、其或未然、且莫心麤。

上堂、箇事如急流水、眨眼不得、雪峰一向輥毬、紫胡一向看狗、祕魔一向擎叉、禾山一向打鼓、建長不會倚勢欺人、有時因行掉臂、諸人若也會得、同展鉢盂喫飯、其或未然、三段不同收歸上科。

東福開山和尚訃音至上堂、昨夜虛空忽銷殞、東福山頭法幢折、盡大地人俱哽咽、唯有建長心似鐵、何故、東山左畔老松樹、臘月華開在深雪。

臘八上堂、六年冷坐難棲泊、伎倆窮邊急計生、今古一條來往路、出門時節正三更。

上堂、止止不須說、我法妙難思、釋迦老師盡力道、透建長圈繢不出、建長盡力跳、透釋迦老子影子不過、三步較易、兩步較難、難難、離亭折柳不是陽關、青山不礙行人路、且放溪聲過別灘。

謝四頭首秉拂上堂、星斗滿空不如一月、衆角滿野不如一麟、主中辨主、賓中定賓、絕規絕矩兮眼透金毘、百步穿楊兮要見逸群。

上堂、當爐不避火迸、當言不避截舌、是汝諸人道得接手句、許儞天下橫行、苟或未然、且歸林下去、更待月明時。

除夜小參、拈主丈、顧視大衆云、諸人還知這箇時節麼、乾坤之內、宇宙之間、一氣無作而作、萬化不然而然、驢鳴犬吠、古佛家風、一場漏逗、年窮歲盡、衲僧鼻孔轉見瞞頇、茅屋清溪三曲四曲、古松流水千株萬株、不道建長薄處先穿、諸人自合各知時節、休休看看、白盡少年頭、明朝又是新年頭。　復舉丹霞燒木佛公案、拈云、黃面老漢、百千萬劫、捨身布施、今日方遇作家、院主因甚眉鬚墮落、良久云、莫道院主、建長也有些子。

元日上堂、道生一、一生二、二生三、三生萬物、不是心、不是佛、不是物、良久、南岳峰頭八字碑、千古萬古長巍巍。

上堂、長袖善舞、多財善賈、李廣山頭射石虎、祕魔杈下捉老鼠、彼兮此兮、無端無端、高兮低兮、大難大難、去年殘雪到春寒、壓倒門前華藥欄。

上堂、方見正月初一、匆匆過了十日、雪銷春入園林、建長關鎖不密、問諸人委不委、差之毫釐、失之千里、也是波斯入鬧市。

上元上堂、今朝上元夕、的的有來由、天地無青眼、乾坤自白頭、滄溟一油甕、日月兩燈毬、明白分明在、何須見趙州。

上堂、荊棘叢林荊棘圍繞、栴檀叢林栴檀圍繞、可憐生建長老、爲愛巖前碧草青、興來不覺和衣倒、問諸人好不好、東土罕逢、西天尤少。

上堂、福山無本據、一味說脫空、有時暗中拋號、有時換手點胸、朝看南北、暮看西東、乘風不如步月、種竹不如栽松。

上堂、菩薩龍王行雨潤、遮身向上數重雲、一聲霹靂驚天下、散作千邦萬國春、大衆還見麼、所以道、顯諸仁藏諸用、鼓萬物而不與聖人同憂、盛德大業至矣哉。

上堂、殷人以柏、周人以栗、一二三四五、五四三二一、伸手不見掌、大地黑如漆屈堪逃、大鵬一展九萬里、老鼠從敎鬧啾唧。

上堂、三句前兩句後、無同說無有同說、有一著不到時、面南看北斗、因甚如此、德山卓牌、定光招手。

佛涅槃上堂、今朝二月半、瞿曇示寂滅、人天悲不徹、波旬喜不徹、同不同、別不別、船漏水滿、桶漏水竭。

上堂、道不屬知、不屬不知、鐵蒺藜鎚轉弄轉危、堪笑臨濟小厮兒、電光影中卓紅旗。

上堂、凫頸太長、鶴頸太短、四七二三、和贓納款、老夫罪犯、諸人還救得也無、良久云、三生六十劫。

上堂、與麼也得、不與麼也得、與麼不與麼總得、與麼也不得、不與麼也不得、與麼不與麼總不得、畢竟如何卽得、我也理會不得。

上堂、牛頭向北、馬頭向南、釋迦彌勒不是同參、因甚如此、前三三後三三。

上堂、上山不避虎豹、樵夫之勇也、入水不避蛟龍、漁人之勇也、建長大開門戶、只要諸人單刀直入、良久云、玄沙道底。

除夜小參、僧問、家家守歲接長筵、人人早起賀新年、學人上來願聞提唱、師云、露柱笑咍咍、進云、如何是人中境、師云、出門唯恐不先到、進云、如何是境中人、師云、倆是草賊、進云、如何是扶桑國、師云、日出連山、月圓當戶、進云、如何是關東境、師云、貔貅三十萬、宿將坐重圍、進云、如何是巨福山、師云、天高蓋不盡、復有僧問、記得、北禪除夜小參、示衆云、年窮歲盡、無可與諸人分歲、烹箇露地白牛、此意如何、師云、村裏獅子村裏弄、進云、深夜維那上來報云、縣裏有公人到勾和尙、意作麼生、師云、家富兒嬌、進云、禪云、作什麼、維那云、和尙私宰耕牛、不納皮角、又作麼生、師云、非但東土、西天令嚴、進云、北禪便將帽子擲向地上、師云、和贓納款、進云、維那就地拾帽便行、意作麼生。師云、一字入公門、進云、北禪跳下禪床、攔胸搊住、叫云、賊賊、意旨如何、師云、對面繇款、進云、維那便將帽子覆師頂上、云、天寒還和尙帽子、此意又作麼生、師云、趁得轉來打失一牛、進云、今日巨福年窮歲盡、未審和尙將什麼與大衆分歲、師云、殿前雪獅子、進云、還許學人通箇消息也無、師云、好、進云、莫嫌冷淡無滋味、一飽能消萬劫飢、師云、偶然挨著、僧禮拜。師乃云、聲前一句、蹈著不嗔、波波浪浪、刹刹塵塵、鉢裏飯、桶裏水、主中主、賓中賓、一對眼

晴雪白、悠然萬里孤身、大白峰頭疊足打坐、扶桑國裏踏雪迎春、今歲梅明歲柳、新者自新、舊者自舊、南來北來、東走西走、一條拄杖驀刺梨、不但登山兼打狗。　復擧、馬大師令藏和尙傳語徑山欽和尙、十二時中以何爲境、山云、待汝回時、我却有信、藏云、卽今便回、山云、傳語馬大師、問取曹溪、師拈云、馬大師一隻破草鞋、東擎西擎、也是慣得其便、徑山將胡蘆馬杓、一時飜轉、也是專出急家、潙山恁麼批判、還有過也無、喝一喝下座。

上堂、鳴鼓了也、祝香了也、問訊了也、諸人若要聽病僧說佛說法、且待別時。

上堂、參禪無妙訣、只要打教徹、疑情若斷時、生死路自絕、問諸人瞥不瞥、富士山頭、六月下雪。

上堂、如印印泥、如印印水、四七二三是甚面觜、咄。

上堂、結夏已半月、水牯牛作麼生、觜對觜、蹄蹈蹄、大衆見麼、昨夜淸風生八極、今朝流水漲前溪。

上堂、佛法無人說、雖慧不能了、又云、當求無師智自然智、釋迦老子、布三道寶街、諸人向那一門中、與建長相見、良久、喝一喝下座。

上堂、一莫去、二莫留、子湖看狗、雪峰輥毬、雲巖弄獅子、潙山牧水牛、良久拊膝、一片月生海、幾家人上樓。

上堂、吾有一句、千門萬戶、遠不在西天、近不在東土、曲底曲兮直底直、甜者甜兮苦者苦、因甚如此、鵓鴣語鴿。

大覺禪師請拈香、昔年今日恁麼去、今日昔年恁麼來、來來去去非今昔、太虛無處可安排、[illegible]

鉤四海、塔戸長開、一爐香散千山碧、千古萬古生雲雷。

上堂、參禪須是悟、悟了須是見人、見人須是盡却今時、若不盡却今時、十箇有五雙、觸髏前見鬼、因甚如此、雪峰道底。

太守血書諸經、保扶國土、請陞座、若論此事、只貴當頭、若論戰也、妙在轉處、如金剛寶劍、擬之則横屍萬里、如帝釋幢、一切邪風不能傾動、如輪王珠、一切惡毒悉皆遠離、如獅子王、一吼則百獸腦裂、如大日輪、一照則陰魔絶跡、高而無上、大而無雙、横亙十方、竪窮三際、護法護民、要見全鋒敵勝、摧邪顯正、掃開虎穴魔宮、佛力與天力共運、聖力與凡力齊新、正恁麼時、奏凱一句作麼生道、萬人齊仰處、一箭定天山。

結座、菩薩發大心、不可思議力、剝皮與析骨、書寫佛功德、拔濟苦衆生、皆獲勝妙樂、我此日本國主帥平朝臣、深心學般若、爲保億兆民、外魔四來侵、舉國生怖畏、朝臣發勇猛、出血書大經、金剛與圓覺、及於諸般若、精誠所感處、滴血化滄海、滄海渺無際、皆是佛功德、重重香水海、照見浮幢刹、諸佛坐寶蓮、常說如是經、一句與一偈、一字與一畫、悉化爲神兵、猶如天帝釋與彼脩羅戰、念此般若力、皆獲於勝捷、今此日本國、亦願佛加被、諸聖神武威、彼魔悉降伏、生靈皆得安、皆佛神力故、世世學般若、報佛威猛力。

上堂、八月秋何處熱、雨不顛風不颭、狼烟已掃除、五穀皆成結、好箇太平底時節、石人笑不徹木人喜不徹、燈籠歌不徹、露柱舞不徹、大地山河似掌平、十方世界一團鐵、報諸人打教徹、頂門歡瞎是何人、的的天無第二月、良久云、達磨西來有口無舌。

上堂、現成公案不用思算、鶴頸自長、鳧頸自短、離中虛、坎中滿、召大衆云、會麼、人心難似水長流、世事但將公道斷。

上堂、尋常說一句行一步、未嘗不與諸人開方便門、若也將有所得心湊泊、如將大空入螻蟻穴中、却怪山僧不得。

東山日長老相訪上堂、東山下事、雞犬斜陽、淸谿七里五里、松竹千莖萬莖、祖翁活業更沒隱藏、良久云、家肥生孝子、馬瘦見毛長。

長樂一翁訃音至上堂、火裏汲淸泉、已七十二年、蟭螟飜身去、觸破於大千、黃梅渡口、雞足山前、甜如木蜜、苦似黃連、贓物現在、父子不傳、過鋒疾欻一步在先、正宗滅却瞎驢邊、雖然五逆不成寃。

上堂、尺璧寸陰、車鐵寸金、召大衆、會麼莫將閑學解埋沒祖師心。

重陽上堂、堂前鳴鼓了也、大衆問訊了也、良久、若是陶淵明、攢眉便歸去。

上堂、識得一萬事畢、金剛杵打、鐵山摧、大地漫漫黑如漆、彌勒呵呵大笑、文殊額上汗出、陝府鐵牛踍跳、嘉州大象咬斷拇指、因甚如此、家肥生孝子、國覇有謀臣。

上堂、歷歷歷、寂寂寂、益益益、昔昔昔、方者自方、圓者自圓、曲者自曲、直者自直、扶桑人種陝西田、文殊殿裏見彌勒。

上堂、老胡西來、擔茅引火、白日堂堂、漆桶話墮、良久、俊鶻捎空、瞎驢推磨。

開爐上堂、山寒水冷見衰形、獨坐時聞落葉頻、又撥地爐開宿火、嶺南猶有未歸人、卓拄杖下

座。

上堂、要透吾家向上機、急須薦我惡鉗鎚、風雷迸出那吒面、賣與飜身獅子兒、下得一轉語、明窻下安排、其或未然、一任南北。

上堂、火燄爲三世諸佛說法、三世諸佛立地聽、推倒門前大案山、九州四海平如鏡、鏡君兩眼似流星、未免白日落深井。

上堂、作麼生休得也、沒處去、之乎者、釋迦老漢六年雪山、達磨老胡九載少林、驀召大衆、卓拄杖云、漆桶喫茶去。

解夏小參、山僧別無長處、四十餘年行脚、見得一丈、行一丈、見得一尺、行一尺、不曾將古人陳年破草鞋、掛在拄杖頭上、東抛西擲以當宗乘、而今長期已滿、聖制已圓、兄弟東去西去、南來北來、有兩件事、說與諸人、第一舊路不可再行、第二新路不可蹈破、因甚如此、枯木有龍吟。

復擧、乾峰示衆、法身有三種病二種光、一一透得、許爾歸家穩坐、雲門云、庵內人因甚不知庵外事、峰呵呵大笑、門云、猶是學人疑處、峰云、子是何心行、門云、也要和尙委悉、峰云、若與麼始解穩坐、師頌云、曲曲蘆汀對蓼灣、山藏水了水藏出、誰云寂寞煙磯外、更有漁翁把釣竿。

解夏上堂、一夏與諸人東語西語、只要諸人各有生涯、今日聖制已滿、還有悟證得諦當者、出來、老僧與爾證據、其或未然、丈頭且自挑去。

太守請掛興國山額、正可格邪、小能敵大、皇天無私、功歸有德、日本千年社稷、遠邦萬里孤征、風雷一掃成空、佛天震怒難遏、不發一箭而煙塵息、不血一刄而天地淸、偉哉雄猛之尊、再造

乾坤之運、鳥獸魚鱉咸若、漁樵耕牧如新、揭此興國之名、昭示太平之業、良久云、萬古千秋出雲雨、十洲三島起清風。

太守夢見虛堂和尚、翌日請師拈香、虛堂無背面、無在無不在、夜來過扶桑、夢裏與妖怪、夢中形、像中眞、夢中像中、兩彩一賽、老和尚一香、聊是當慇懃、謝師遠來誠不易。

冬夜小參、僧問、堂前鳴鼓已三通、蹴蹈人天與象龍、時節因緣在今夜、願師一句振家風、正與麼時、願聞法要、師云、露柱證明、燈籠失笑、進云、記得洞山和尚、冬夜問泰首座云、有一物黑似漆、常在動用中、動用中收不得、過在甚麼處、意作麼生、師云、貧作富裝裏、進云、泰首座云、過在動用中、還契洞山意也無、師云、若教下涙滄海也乾、進云、洞山令行者撥退菓卓、又且如何、師云、飜手雲、覆手雨、進云、只如和尚這裏、也無菓子也無首座、且道、與洞山相去多少、師云、咬牙封齒、泣血斬丁公、進云、望和尚更向古人說不到處、指示大衆、師云、猶嫌少在、進云、便將這箇眞消息、且去三條椽下參、師云、天寒日短飯不要滿。　師乃云、冬至寒食一百五、甜者甜兮苦者苦、凍鎖寒潭不見蹤、達磨不會轉身句、召大衆云、會麼、一句在寒暑之外、一句在寒暑之內、若在寒暑外、薦得許他受用寒暑、若在寒暑內、薦得許儞擺脫寒暑、便見仰山叉手、香嚴進前、昨日與今日不同、溪山與雲月有異、良久云、精陽不剪霜前竹、水墨徒誇海上龍。　復舉、馬祖寄一圓相與徑山、山開封就圓相下一點封回、忠國師云、欽師却被馬師惑、拈云、忠國師慣得其便、爭奈馬師不甘、我此一衆、還有爲馬祖雪屈底麼、喝一喝。

記夢上堂、空中書字、水底成文、金光晃耀、星月平分、無情說法不思議、要汝諸人著眼看。

除夜小參、僧問、南泉有僧問、如何是本身盧舍那、泉云、與我過淨瓶來、意旨如何、師云、儞牢記話頭、進云、僧過淨瓶、泉云、安舊處著、意又作麼生、師云、儞若打倒一場好笑、進云、僧安舊處了、復來如是問、泉云、古佛過去久矣、又且如何、師云、儞背後底是甚麼、進云、南泉恁麼答話、還契和尚意也無、師云、猶較老僧三步在、進云、學人問和尚、如何是本身盧舍那、師云、觸著打儞腦破、僧禮拜、師云、我與儞捻兩手汗。 師乃云、年窮歲盡、無可與諸人分歲、未免抖擻破囊、把陳年曆日、念與諸人、作箇鬧熱、正月雨水、二月穀雨、三月清明、四月夏至、五月小滿、六月大暑、七月秋分、八月白露、九月霜降、十月小寒、十一月小雪、十二月大雪、召大衆云、還會麼、若也會得、日日是好日、時時是好時、其或未然、舊歲今宵去、明年明日來。 復舉、僧問歸宗、此事久遠、如何用心、宗云、牛皮鞔露柱、露柱啾啾叫、凡耳聽不聞、諸聖呵呵笑、拈云、歸宗大似貧子樗蒲、動著臂膊便露、雖然如此、阿誰免得。

上元上堂、氷霜不自寒、日月不自照、一句透千門、萬象齊踍跳、卓拄杖下座。

謝雲巖吉長老上堂、本是射鵰手、曾收百戰功、再整鐵旗鐵鼓、同扶日本宗風、奔流度刃、疾燄過鋒、旋嵐偃岳、鶻眼迷蹤、何似東山大脫空、擊拂子下座。

謝允・賢二上人栽松上堂、黃檗會裏、亘福山前、栽松種栝、公案宛然、已見龍蛇影動、重重翠蓋參天、和風四合、禽鳥聲喧、釃茶三五盌、意在钁頭邊、參。

上堂、道不及處、萬機齊赴、落華流水太忙生、嶺上白雲攔不住、良久、擊拂子云、甜瓜徹蔕甜、苦瓠連根苦。

上堂、偏中正、正中偏、千華影裏、一色明邊、良久云、幾度醉歸明月夜、笙歌擁入畫堂前。

佛涅槃上堂、最初句、末後句、枯木裏龍吟、鐵蛇橫古路、若也悟去、親見如來、其或未然、黃連未是苦。

上堂、擧、僧問古德、泗州大聖因甚楊州出現、德云、君子愛財、取之以道、若問福山、只對他道、事不過三、更問意旨如何、向道、無孔鐵鎚、有甚共語處。

上堂、昨日山僧將拄杖一揮、諸人隨呼而至、今日打鼓三通、諸人簇簇上來、是汝脚頭到處、諸佛法藏盡空、山僧隱身無地、且道、嫌箇甚麼、卓拄杖下座。

上堂、不是目前法、非耳目之所到、直鉤釣鯤鯨、曲鉤釣魚鱉、問諸人瞥不瞥、無孔鐵鎚休下楔。

上堂、靈雲客路遇玄沙、直至于今未到家、迷却武陵深處路、一溪流水隔天涯。

上堂、夜來山僧得一夢、夢見一機之中、四輪俱轉、或竪轉者、或橫轉者、或左轉者、或右轉者、此夢此輪、此輪此夢、是汝諸人、向那裏與山僧相見、喝一喝、卓拄杖下座。

上堂、密說顯說、直說曲說、橫說竪說、事說理說、一切智智淸淨、無二無二分、無別無斷故、良久云、西河弄獅子、南泉斬猫兒。

上堂、無也莫將來、有也莫將去、懷州牛喫禾、益州馬腹脹、卓拄杖云、蝴蝶夢回家萬里、子規啼斷月三更。

佛鑑禪師忌日拈香、六十拄杖一攢兜樓、恩將冤報、甜將苦酬、山悠悠、水悠悠、大海若知足、百川應倒流。

最明寺殿忌日上堂、一靈眞性、通徹虛玄、三際不留朕跡、十方更沒中邊、處處全彰、頭頭顯露、所以道、極大同小、不見邊表、極小同大、忘絕境界、便見大海無風金波自涌、古鏡不磨萬象齊照、空無能照之影、境無可觀之形、這裏一跳跳出、飜轉面皮、金剛正眼輝乾坤、刹刹塵塵行異類、諸人還見麼、白雲迸斷青山外、七佛靈蹤在上方、 復云、人間抛卻舊榮華、慈氏宮中是故家、菩提果熟菩提樹、子子孫孫自著華、召大衆云、喚什麼作菩提樹、阿那箇是菩提果、卓拄杖云、知恩者少、負恩者多。

上堂、參禪當以悟爲期、不悟重添滿肚癡、借問五湖雲水客、南泉因甚斬猫兒、喝一喝、卓拄杖下座。

上堂、正中來、衆中至、鐵壁銀山通身泥水、是汝諸人還護惜也無、卓拄杖云、有智無智較三十里。

上堂、拈拄杖云、拄杖子長七尺、也被汝累、也得汝力、我且問儞、只如黃檗打臨濟六十下、儞還記得麼、云、記得、儞與我舉一遍看、卓拄杖一下云、與我見處略相似、中間也有些子誵訛。

浴佛上堂、黃面老漢、才出母胎、便有萬千不唧𠺕事、千古之下、累及兒孫、建長香水一杓、也有恩也有怨、也有褒也有貶、諸人若也緇素得出、許儞親見如來、其或未然、坐具頭邊摸索。

結夏小參、僧問、句裏呈機、言前定旨、請師親切一句、師云、半句也無、進云、記得、龍牙問翠微、如何是祖師西來意、微云、與我過禪版來、微接得便打、意旨如何、師云、猶較建長三步在、進云、牙復問臨濟、濟云、與我過蒲團來、濟接得亦打、此意如何、師云、喚來與我洗脚、進云、後來雪竇頌

云、龍牙山裏龍無眼、死水何曾振古風、此意如何、師云、死虎足人看、進云、又云、盧公付了亦何憑、坐倚休將繼祖燈、此意又如何、師云、私酒多人喫、進云、學人問和尚、如何是祖師西來意、師云、謝汝證明、僧便禮拜。　師乃拈拄杖云、拄杖頭邊豁開戶牖、廓周沙界沒遮闌、圓覺伽藍空蕩蕩、便見釋迦・彌勒・文殊・普賢、大海江河、昆蟲草木、同此安居、同此禁足、不可以智知、不可以識識、所以道、一塵入正受、諸塵三昧起、諸塵入正受、一塵三昧起、幽巖華笑杜鵑啼、牛頭出兮馬頭沒、雖然只如拄杖闕卻拄杖、還有這箇消息也無、以拄杖畫一畫云、弄泥團漢、

擧、僧問投子、大死底人、却活時如何、子云、不許夜行、投明須到、拈云、擔枷過狀不無者僧、據款結案還他投子老人、中間有些子詣訛、今夜請四頭首再與評定。

結夏上堂、僧問、趙州問南泉、如何是道、泉云、平常心是道、意旨如何、師云、月似彎弓、少雨多風、進云、州云、還假趣向也無、泉云、擬向即乖、又作麼生、師云、蹈地塵飛、進云、州云、不擬爭知是道、泉云、道不屬知、不屬不知、師云、八角磨盤空裏走、進云、州大悟、甕、師云、雖行畜生行、不得畜生報、僧便禮拜。　師乃召大衆云、從文殊門入者、墻壁瓦礫爲汝發機、從觀音門入者、蝦蟆蚯蚓、爲汝發機、從普賢門入者、不動步而到、九旬一夏、一線雙勾、月冷風高、山青水綠、是汝諸人作麼生、良久云、向道莫行山下路、果然猿叫斷腸聲。

謝頭首秉拂上堂、王庫寶刀、千鈞之弩、雖是陳年器具、妙處用之在人、四人頭首、法戰場中、韜略雙全、全鋒敵勝、萬人悚觀、大家喝采、不樹賞、不立功、四海狼煙靜、鵰鶚在秋空、擊拂一下下座。

上堂、二乘人藏身於三界、不能藏身於菩提、祖師藏身處沒踪跡、沒跡踪處不藏身、良久云、知

事少時煩惱少、識人多處是非多。

上堂、擧、黃檗示衆云、達磨來中國、以佛傳佛、不說餘佛、以法傳法、不說餘法、法即不可說之法、佛即不可取之佛、拈拄杖召大衆云、燕雀不棲巖竇、虎豹不行城市、鳳凰不宿枳棘、蛟龍不臥死水、喝一喝、靠拄杖下座。

上堂、法無定相、遇緣即宗、拂子不在、拄杖子自展神通、擲下拄杖云、風從虎兮雲從龍。

端午上堂、竪起拂子、召大衆云、見麼、山僧拂子頭上寛廣、四十二恒沙佛國、三十三天、二鐵圍山、總在裏許、吾今收攝、行病鬼王・五蘊鬼王、盡向這裏安居禁足、一切災疫、老僧身自代受、汝等鬼王不得有再惱害國內人民、聽吾令者、三十三天任其往來、不聽吾令者、永鎖二鐵圍山、聽吾呪曰、揭諦、揭諦・波羅揭諦、波羅僧揭諦、諦揭僧羅波諦、揭羅波諦、揭諦揭、不得違犯急急如律令敕。

上堂、大圓鏡智性淸淨、平等性智心無病、妙觀察智見非功、成所作智同圓鏡、五八六七果因轉、但有名言無實性、若於轉處不留情、繁興永處那伽定、召大衆云、會麼、能向者裏透得玲瓏斬得淨潔、便知昔香底消息。

上堂、現成底勿造作、也莫惜凡慕聖、亦莫續鳧截鶴、雲出岫、水歸壑、達磨西來、千錯萬錯。

上堂、一切諸佛、及諸佛阿耨多羅三藐三菩提、皆從此經出、良久云、僧投寺裏宿、賊打不防家。

上堂、青絹扇子足風涼、二八佳人出畫堂、雙陸暗抛紅瑪瑙、紫微華下打潘郎。

上堂、熱熱熱熱、農夫耘田背皮裂、滿鉢盛來取他喰、粒粒無非農汗血、報諸人打教徹、拽耙牽

車酬飯錢、莫道老夫不會說。

上堂、一句江南、兩句江北、淸風月下守株人、凉兎漸遙春草綠、建長老漢發癡發狂、白日靑天、騎牛上屋、喝一喝下座。

上堂、一夏將滿、汝等諸人還得自己契券分曉也未、若得分曉、出來說看、與老僧挨起合同文印、藉拄杖下座。

解夏小參、僧問、南泉、兩堂首座爭猫兒、南泉提起云、道得即不斬、衆無語、泉斬卻猫兒、意作麼生、師云、好與奪卻猫兒、進云、泉擧似趙州、州戴草鞋出去、又作麼生、師云、卻將鵓鴣快作鶯啼、僧禮拜。　師乃云、萬里無寸草、出門便是草、洞山則固是、石霜還免得麼、若向這裏見得、便見洞山、見得洞山、便見石霜、見得石霜、便見得無學老漢過犯彌天、所以道、九烏射盡一翳猶存、一箭墮地天下黑暗、驀拈拄杖畫一畫云、阿剌剌。　復擧、僧問曹山、撥塵見佛時如何、山云、直須揮劍、若不揮劍、漁父棲巢、拈云、趙孟之所貴、趙孟能賤之、五日前足可觀光、十日後不敢相許、何也、建長從來柳下惠。

上堂、毗盧師、法身主、白骨積成山、寒蛩泣秋露、不是法爾如然、不是眞常流注、不是背覺合塵、不是拋迷就悟、擊拂子云、發機須是千鈞弩。

中秋上堂、若論此事、如午夜之月、不住於空、不離於空、或東或西、乍缺乍圓、高低俱到、十萬八千、謝家人不在漁船。

上堂、釋迦慳、彌勒富、八十老人分夜燈、烏龜鑽破須彌柱、象骨阿師空輥毬、何似禾山解打鼓

咄、不得寐語。

觀音長老至上堂、人從京師來、去作住山翁、說盡山雲海月、聲前一語不通、事存函蓋、理拄箭鋒、儞如啞、我若聾、虎在靑山咬大蟲。

上堂、竺土大仙心、東西密相付、芳草萋萋鸚鵡洲、秦川歷歷漢陽路、天似水、月如勾、少年爲客處、今日送君遊。

上堂、一夜思量上堂、黃昏坐到三更、抖擻更無一句、今朝口裏膠生、良久云、人貧智短、馬瘦毛長。

上堂、多得不如少得、少得不如現得、現得不如不得、擊拂子云、我見燈明佛、本光瑞如此。

上堂、獅子吼無畏說、河沙諸佛同一舌、針頭不用重添鐵、良久云、大小建長弄巧成拙。

開爐太守至上堂、火爐頭邊有一轉語、蘊在胸中、未曾容易拈出、檀那到來拈出作箇暖熱、拈拄杖移向東邊云、山悠悠、水悠悠、幽州江口、采石渡頭、華山歸馬、桃林放牛、與麼告報、拄杖子還甘也無、卓拄杖一下云、曾經霜雪苦、楊華落也愁。

達磨忌拈香、嗚咿嗚咿、對面是誰、眼圓齒闕、我不識伊、無德可報、無恩可酬、茫茫滄海浪打石頭。

上堂、祖師未來已前、諸人喫醋未曾道酸、既來之後、諸人上山不道脚濕、大都法爾如然、何必添此荆棘、建長數到吾祖、已得二十七代、阿師數到迦文、已是二十八枝、東西兩段不同、不知有甚傳授、諸人若也會得、祖師猶在、若也不會、蒼天寃苦。

上堂、千種言、萬般語、三尺竹篦頭、黃金如糞土、諸人若也盡掀翻、也是泗州人見大聖。

上堂、光陰似箭、日月如梭、雲埋少室、凍鎖黃河、良久云、衣穿肘露也、靜處薩婆訶。

上堂、入理深談全無照對、迦葉聞鈴作舞、老盧半夜踏碓、白雲斷處是青山、行人更在青山外。

參至小參、枯桑知天風、海水知天寒、祖師門下客、只貴髑髏乾、與麼與麼、威音那畔全沒來由、不與麼不與麼、濟北家風卻較些子、衲僧家自是無彼無此、飽參人、何須按短論長、青山不礙往來、夜深狗吠露柱、張公卻報李公、說道石牛生子、以拄杖畫一畫云、勞而無功。　復舉、僧問投子、大死底人卻活時如何、子云、不許夜行、投明須到、拈云、金針刺眼、擬之還差、烈士成功發乎狂矢、是汝諸人甚處與古人相見、連喝兩喝。

上堂、拈拄杖云、透得這裏、許儞出地獄、透得那邊、許儞入地獄、其或未然、驢唇先生道底、葉拄杖。

上堂、月冷霜天道者孤、五臺山上有文殊、諸人若也悟去、一生參學事畢、其或未然、三條椽下黹盧都、且看趙州狗子佛性無、忽然伸手不見掌、烈燄光中釣鯉魚。

除夜小參、僧問、圓悟禪師、推佛燈珣禪師入水潭中、問云、牛頭未見四祖時如何、燈云、潭深魚聚、還諦當也無、師云、焦甎打著連底凍、進云、見後如何、燈云、樹高招風、又作麼生、師云、賊入空屋、進云、見與未見時如何、燈云、伸脚只在縮脚裏、此意又作麼生、師云、不入紅爐爭辨眞僞、進云、和尚每室中舉百丈捲席話、香嚴擊竹頌、道聲未絕竹篦隨至、意作麼生、師云、猛火灼龜要見吉凶、進云、還有衲僧知痛癢也無、師云、點、僧便禮拜。　師乃云、化工才動凍痕開、露柱燈籠

笑滿腮、消息盡時重會面、赤洪崖打白洪崖、大衆會麼、一句在新年頭、一句在舊年尾、新年頭薦得、便知舊年不去、舊年尾薦得、便知新年不來、舊既不去、新既不來、南有泰華、東有天台、西有峨眉、北有五臺、阿呵呵、富嫌千口少、貧恨一身多。 復云、流泉是命、湛寂是身、子湖看狗、夫子獲麟。

歳旦上堂、僧問、記得大慧禪師、每擧竹篦云、喚作竹篦則觸、不篦作竹篦則背、如何、師云、墮坑落塹、進云、只如背觸外如何相見、師喝云、倆頭在什麼處、僧禮拜。 師乃云、元正添喜色、瑞雪滿長空、爲祝邦君壽、華開萬歲松。

上堂、一二三四五、從頭爲君擧、謹白參玄人、光陰莫虛度、卓拄杖下座。

上堂、道不及處說一句、說了還如不說時、氷泮雪銷春色動、老梅紅拆去年枝、擊拂子下座。

元宵上堂、天上月圓、人間月半、燈明如來和贓納款。

上堂、山萬朶水萬支、明月乍圓乍缺、白雲乍合乍離、老胡九年面壁、賣弄無孔鐵鎚。

上堂、山僧方丈內出、諸人僧堂中來、坐底自坐、立底自立、有甚斷缺處、若也好肉剜瘡、過在諸人、不干山僧事。

上堂、二由一有、一亦莫守、十里牌五里堠、張婆店李公酒、水北雲南、驢前馬後、是汝諸人還護惜也無、良久云、正狗不偸油、雞銜燈盞走。

上堂、內不放出、外不放入、全火祇候、且無階級、雖然如此、枯木巖前差路多。

上堂、山僧別無長處、對衆不曾脫空、所以道、文殊・普賢・觀音・彌勒、狐狼、野干、鼬貍、鼯鼠、守宮、百

足、蟒蜒、蜈蚣、卓拄杖云、依俙似曲才堪聽、又被風吹別調中。

佛涅槃上堂、瞿曇今朝示寂滅、波旬作舞、人天悲、拈拄杖云、南去北來人自老、夕陽長送釣船歸、卓拄杖下座。

東福無關至上堂、慈明訪神鼎、東福見福山、不弄西河獅子、哮吼更無兩般、盤走珠珠走盤、古兮今兮諸人自看。

建仁虛庵至上堂、賓看主主看賓、儞底我不會、我底儞不聞、一對鐵鎚無孔打成、一合乾坤同倚闌干無一語、同看海山生暮雲。

上堂、東山下事、如節度使信旗相似、南來北來只可觀瞻、不可犯著、犯著則千里橫屍、靠拄杖下座。

上堂、仰面不見天、低頭不見地、召大衆云、會麼、達磨不將來、迦葉門前底、卓拄杖。

上堂、明月雙溪八詠樓、少年爲客送君遊、青山不礙行人路、自是行人嘆白頭。

浴佛上堂、老胡呱地一聲時、開大言牌語甚癡、不是年年澆惡水、洗他到老不知非、卓拄杖下座。

結夏小參、僧問、九旬禁足、埋沒英靈、三月護生、守株待兎、如何是衲僧本分事、師云、鐘聲穿破髑髏、進云、記得、龐居士云、十方同聚會、箇箇學無爲、此是選佛場、心空及第歸、此意如何、師云、太虛無掛針之路、進云、德山小參不答話、還有爲人處也無、師云、龍宿鳳巢、進云、趙州小參要答話、又且如何、師云、貧作富裝裹、進云、三句已蒙師指示、向上宗乘事若何、師云、一老一不

老僧禮拜。師乃云、十五日以前、十五日以後、撥開一線路、結却布袋口、與諸人九十日內安頓水牯牛子、貴要百不知百不解、臥月眠雲、東倒西擂、所以道、太陽門下日日三秋、明月堂前時時九夏、擲寶劍於荒草堆頭、卓紅旗於千聖頂上、便可以獨步大方、出頭天外、雖然如是、切忌頭角生。 復擧、僧問洛浦、魔佛不到處如何體會、浦云、燈明千里象、暗室老僧迷、拈云、洛浦好語、只是答這僧話不了、我欲點向諸人、恐成負累、來日請四頭首、各呈所解。

謝頭首秉拂上堂、落賴家風折脚鐺、大家扶竪大家撐、老來不怕揚家醜、管甚眉毛落又生。

上堂、諸佛說不到處、正是藥忌之譚、老僧不曾屈抑諸人、諸人各各水洒不著。

上堂、思量不到處、構赴不及時、鳥棲無影樹、華發不萠枝。

上堂、拈拄杖召大衆云、殺人冤賊、已被老僧收下了、也普請諸人、各各安心、卓拄杖下座。

上堂、一夏只有三箇月、眨眼過了兩箇月、曠大劫來生死根、七尺單前打教徹。

太守書金光明經請陞座、師拈起拂子云、要見信相菩薩所夢金鼓麼、以拂子左邊擊一下云、只是這、要見建長老漢拂子麼、右邊擊一下云、只者是、只如金鼓聲中、具一切言詞、具一切妙義、開甘露門、入甘露城、處甘露室、令諸衆生食甘露味、懺一切罪愆、滅一切過患、啞者能言、盲者能視、聾者能聽、跛者能行、此名別別解脫、老僧拂子也有些少變化、能縱能奪、能殺能活、有體有用、有照有權、破凡聖窟穴、斷佛祖性命、其堅也、天魔呵手有分、其橫也、外道窺覰無門、若喚作一、夢時與覺時不同、若喚作二、覺時與夢時無別、若向夢時薦得、便見釋迦如來本不曾生、亦不曾滅、成等正覺、亦不曾說法度生、亦不曾付法眼藏、若見覺中薦得、便見釋迦如來壽

命無量、福德無量、說法無量、化度無量、恁麼見得、夢時即是覺時道理、覺時即是夢時消息、元長老拂子、穿過信相菩薩鼻孔、信相菩薩金鼓、撞破元長老面門、良久云、青蓮映水華開久、自是行人未到家。　復說偈曰、諸佛本是虛空體、修證成佛亦如幻、於諸幻中說實義、實義了了亦非實、如來金光示衆相、略示緣起方便說、捨身飼虎出王宮、負水救魚入空澤、如來捨身不思議、此是恆河一沙耳、檀那書經報亡者、一念普通諸佛剎、香煙處處作佛事、幽冥之路盡豁開、老僧說此空空法、爲薦亡靈空覺體、一靈不昧湛然存、即證無生空法忍。

上堂、骨打骨打、如聾如啞、上下三指、彼此七馬、因甚如此可知禮也。

解夏小參、法身有三種病二種光、九十日內、山僧時時說與諸人、諸人還透得也未、若也透得、許儞橫肩拄杖、緊悄草鞋、南瞻部州展鉢西瞿耶尼喫飯、大洋海底走馬、鐵輪頂上輥毬不妨、是箇洒洒落落衲僧、也道曾見福山老漢來、若不如此、漿水錢且置、草鞋錢教阿誰還。　復舉、仰山參巖頭、頭豎起拂子、仰山展坐具、頭拈起拂子置背後、仰山將坐具搭肩上而出、頭云、我不肯儞放、只肯儞收、師拈云、大小巖頭、向分毫上取利。

解夏上堂、要來便來、要去便去、脚是自家脚、路是官中路、驀召大衆云、會麼、掛著絲毫西秦東魯、卓拄杖下座。

謝新舊知事上堂、秋風凉秋氣清、烏飛兔走、斗轉參橫、老僧落得展脚睡、自有人扶折脚鐺。

上堂、露冷天高不著秋毫、山遙海濶一塵不到、正與麼時、諸人作麼生、良久云、也是鬼爭漆桶。

武州太守忌、鑽法華楞嚴請陞座、妙性圓明、離諸名相、妙音普應、遍滿十方、塵塵不留朕迹、法

法更沒遮攔、在天同天、在人同人、偏圓不礙往來、迷悟更無差別、在法華則純圓獨妙、在楞嚴則披妄析眞、法華深固幽遠、楞嚴明白洞達、法華示眞實相、楞嚴開方便門、一道清淨、無壞無雜、果滿眞常、功歸無得、攝盡廓周沙界、一塵不寄中邊、此是祕密總持、亦名一乘圓頓、佛佛異口同音、不出這箇時節、只如今日、武州太守一周霜露、忌日斯臨、覺性湛然、如來光中出沒自在、要向這裏轉步、以拂子指云、阿那青青黯黯處去、復云、僧祇大劫前頭路、無依無欲無今古、蕩蕩圓成百萬門、此是老僧行履處、汝要透吾向上關、須向者裏急進步、莫思量、莫回顧、撒手堂堂掉臂行、吾在那裏相接汝、黃金城郭妙高臺、夜半子時日卓午。

太守繪釋迦如來一鋪、寫法華・金剛・圓覺、請爲最明寺殿陞座、如來法性、不離所說之法、所說之法、即是如來之體、迥迥廓然無寄、頭頭運用無方、一即三、三即一、法華・金剛・圓覺、不同不別、此即彼、彼即此、醍醐乳酪更無異味、佛佛異口同音、句句全超報化、一氣回春、萬彙自然發秀、一月出海、萬邦無不昭明、此名金剛正體、亦名諸佛頂句、塵毛刹海、動地放光、塵點劫前、菩提具足、且道、最明寺殿生何報地、塵塵刹刹是家鄉、千佛光中同授記。　復云、年年霜露念慈容、罔極恩深報莫窮、回首廓然三際斷、靈山一會起香風。

冬至小參、僧問、夾山與定山同行、定山云、生死中有物、即不迷生死、意旨如何、師云、鷄銜燈盞走、進云、夾山云、生死中無物、即無生死、又作麼生、師云、土宿騎黃牛、進云、二人互相不許、同往問大梅常禪師、那箇親那箇踈、梅云、一親一踈、師云、鉤在不疑之地、進云、次日再往問、那箇親那箇踈、梅云、親者不問、問者不親、此意又且如何、師云、劍握餓人手、僧禮拜。　師乃云、屈堪述、

一字入公門、九牛車不出、嚴頭呈橈舞棹、祕魔一向擎叉、臨濟胡喝亂喝、德山打雨打風、這一隊漢、總未有轉身處、福山不解屋下架屋、要施脫胎換骨之手、諸人還會麼、所以道、華岳有參天之勢、一塵不減其高、紅日有麗天之明、一草不遺其影、正當今日一陽來復、今夜分冬、因甚與麼說話、卓拄杖一下云、玉箭撐虎口。　復舉、雪峰示衆云、世界濶一丈、古鏡濶一丈、世界濶一尺、古鏡濶一尺、玄沙云、火爐濶多少、峰云、如古鏡濶、師拈云、大衆看看山門騎卻佛殿、從汝等諸人鼻孔裏去也。

冬至上堂、冬至寒食一百五、二十四番華信風、蠢從者裏流出、錯錯、拄杖夜來生八角、何似龍牙破木杓。

月旦謝新舊頭首上堂、舉一不得舉二、放過一著落在第二、良久云、謂語助者焉哉乎也。

開山忌日請拈香、不證涅槃、不住生死、茫茫大地絕行蹤、蟭螟眼中遊夜市、父為子隱、借手拈香、知恩報恩句、日午打三更。

上堂、菩薩子喫飯來、卓拄杖云、今年田又熟、更放肚皮開。

上堂、拈拄杖召大衆云、白日莫空過、青春不再來、堂前露明柱、歲歲長蒼苔、顧視左右、靠拄杖下座。

淨智寺請掛曇華堂額、武州埋玉在茲山、縹緲金仙楚宇寬、鐘鼓一新龍象集、優曇華放正高寒、大衆要見優曇華瑞現處麼、以手指額云、優曇華考清淨無垢、不住色塵、是諸佛之妙容、乃人天之景仰、猶如寶洲能生一切妙寶、猶如朗月能照一切幽冥、猶如良藥能療一切煩惱、猶

如甘露能滅一切焦熱、莊嚴一切諸善功德、成就一切菩提行願、若向者裏薦得、便可入清淨解脱之門、其或未然、堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層層。

中秋上堂、千般惺惺、萬般歷歷、不如百不知百不解、此名彌勒內院、若證此三昧、免百劫千生流浪之苦、卓拄杖。

上堂、入水入泥句、萬仞崖頭步、獼猻坐鐵砧、孩兒弄華鼓、古兮今兮沒奈何、發機須是千鈞弩、卓拄杖。

上堂、山僧幾日做得箇上堂、直是玄妙、直是奇特、夜來三更三點、打箇噴嚏、不覺打失了也、不知落在何處、是汝諸人各各爲老僧尋看、東廊下、西廊下、眠單前、蒲團上、忽然摸著、卻將把來呈似山僧、良久下座。

太守送十六應眞拈香、應供四天下、處處成狼藉、神通妙用不如尊者、若是佛法還老僧始得、不要儞觀空入定、不要儞指東說西、不要儞降龍伏虎、不要儞騰躑須彌、建長寺裏掛搭、且喫老漢竹篦。

上堂、正說知見時、知見即是心、當心說知見、知見即如今、大衆、老僧大唐人、今年五十八歲、戌生人命屬狗、良久云、豈不見道、佛殿堦前狗尿天、卓拄杖。

開爐上堂、挑撥些子火種、自古自今、難得其人、千萬人中有一箇半箇、大衆歲晚天寒、山空葉落、諸人喚作行脚之士、不得說著少室九年面壁底時節、卓拄杖。

初祖忌上堂、老和尙何所有、金陵一番打脫、少林尤更出醜、吾今要與遮掩、阿誰同・其出手卓

拄杖云、走狗不偸油、雞銜燈盞走。

間拈香、盆將火驗、人將財驗、法孫將此一炷、要驗這碧眼老胡、是有鼻孔、是無鼻孔、插香良久、顧視大衆云、山蒼蒼水茫茫、人貧智短馬瘦毛長。

上堂、召大衆云、赤肉團上有一無位眞人、常在面門出入、未證據出來、朝打三千、暮打八百、因甚如此、良久云、韓信放鐵鷂。

佛成道上堂、豎起拄杖云、看看釋迦老子、昨夜三更三點、將大地衆生性命、箚在針鋒頭上、入三眼國土、作自恣佛事、是汝諸人還知也無、若也知得、各各道箇轉身句、良久云、罕逢穿耳客、多遇刻舟人。

謝長樂・長興・光福三長老上堂、短者自短長者長、森森密密可憐生、學翁門下無凡木、葉葉枝枝總是香、卓拄杖下座。

上堂、小隱居山、大隱居市、福山老漢倒泥擂水、是汝諸人還救得也無、良久擊拂子云、三生六十劫。

除夜小參、僧問、僧問瑞巖云、如何是佛、巖云、石牛此意如何、師云、白月則現、進云、如何是法、巖云、石牛兒此意又且如何、師云、黑月則隱、進云、恁麼則不同去也、巖云、合不得又作麼生、師云近朱者赤、進云、因甚麼合不得、巖云、無同可同、又且如何、師云、近墨者黑、進云、落何階級、巖云、排不出又且如何、師云、東西南北、進云、因甚排不出、巖云、從前無階級、又作麼生、師云、一二三、進云、未審居何位次、巖云、不坐普光殿、此意又且如何、師云、晝夜一百八。　師乃云、老僧有不

傷物義、句、不曾擧著、此時分歲、爲諸人擧一遍著、諸人子細聽取、今冬三箇月、二月總是大、此夕是歲除、團爐團欒坐、坐到漏殘時、一滴分新舊、金烏出海門、雞拍欄干曉、燈籠添得一歲、露柱減卻一年、嘉州大像呵呵大笑、黃梅石女大叫蒼天、因甚如此、朱顏明鏡裏、古劍髑髏前。

復擧、長生因雪峰問、光境俱忘時如何、生云、放皎然過、有箇道處、峯云、放汝過、作麼生道、生云、皎然亦放和尚過、峰云、放汝二十棒、師乃拈云、雪峯如獅子教兒踞地翻空、蹉眼不得、皎然生生獰獰哮吼一聲、便有噬母之作。

上元上堂、拈拄杖云、柳色黃金嫩、梨華白雪香、召大衆云、會麼、此是然燈如來說、熾盛光明神咒、諸人若會、玉樓巢翡翠、若也不會、金殿鎖鴛鴦、卓拄杖下座。

上堂、參百千諸佛、不如參一無事道人、參百千無事道人、不如參一箇枯樁、召大衆云、且道、枯樁有甚長處、卓拄杖云、深夜一爐火、渾家身上衣。

佛涅槃上堂、如是如是、不是不是、鰲咬魚竿、虎生雞觜、拈拄杖召大衆云、會麼、佛滅二千年、比丘少慚愧。

上堂、粒米分明抵粒珠、千般痛苦是田夫、盛來滿鉢都拋擲、當念賣身來納租。

結夏小參、僧問、僧問古德、如何是清淨法身、德云、山華開似錦、澗水湛如藍、此意如何、師云、磕破髑髏、進云、又有一古德云、膿滴滴地、又且如何、師云、九九八十一、進云、今夜問和尚、如何是清淨法身、師云、自小爲僧今六十、不曾擡手揖公卿、僧禮拜。　師乃云、以大圓覺爲我伽藍、身心安居、平等性智、山僧從福山過瑞鹿、自瑞鹿復過福山、不見其他、但見風卷黃塵撲面、車行

平地成溝、馬蹄畢栗撥刺、自南自北、牛角崢崢嶸嶸、或短或長、山僧不覺吐舌、何也、精陽不剪霜前竹、水墨徒誇海上龍。　復擧、法本法無法、無法法亦法、今付無法時、法法何曾法、拈云、世尊此偈如黑石蜜中邊皆甜、如黃連木根莖皆苦、是汝諸人、作麼生吞、作麼生吐、喝一喝。

上堂、古人道、擧不顧即差互、擬思量何劫悟、師云、古德恁麼說話、去一取一、黏皮綴骨、如獼猴弄黐膠、有甚撇脫、福山這裏眼不見眉毛、方是眞得也、卓拄杖下座。

上堂、說而默、默而說、直鉤釣鯤鯨、曲鉤釣魚鱉、寬兮廓兮、錯古礲今、瀰兮渺兮、非巧非拙、驀拈拄杖、卓一下云、何似銀盌裏盛雪。

端午上堂、法離見聞覺知、見聞覺知是法、山僧普請大地人、不動一塵入大安樂之地去也、卓拄杖云、唵唵唵、急急急、敕敕敕、攧攧攧。

上堂、一夏已過一半、水牯牛作麼生、是儞諸人、各各牽到法堂上、頭角全備甚生次第、奈何甘自埋沒、不肯承當、卓拄杖下座。

上堂、月出桂林輝、天香發舊枝、東山水上立、姹女鬢垂絲、擧拂子下座。

解夏小參、道非物外、物外非道、豈不見道、捫空追響、勞汝心神、夢覺覺非、覺亦非覺、這裏轉得身來、那邊騰身一擲、大洋海底火星飛、泥牛哮吼飛霜雹、赤條條空索索、擬回頭重遭撲、不能赤脚上舟梯、南北東西任名邈。　復擧、僧問大同、如何是本來人、同云、共坐不知名、僧云、恁麼則禮拜去也、同云、暗寫愁腸寄與誰、師拈云、大同開門待客、此僧入國觀光、殊不知三代禮樂、乃五霸諸侯之兵器也、擊拂子下座。

上堂、走偏天崖無下脚處、閲盡大藏無開口處、行不及說不到、今年勝去年、一老一不老、呵呵呵、拍膝云、投子道底。

開山忌日請拈香、生耶死耶、不道不道、蒼天悠悠、紅日杲杲、阿師靈骨兮、東邊西邊、洪波浩渺兮、白浪滔天、沈水一炷兮、恩怨歷然、儉生不孝兮、義出豐年。

謝頭首上堂、一二三三二一、題目甚分明、上下無等匹、栴檀叢林兮、栴檀吹香、獅子窟穴兮、獅子返躑。

上堂、涅槃後大人相、月落寒潭雲收碧嶂、是汝諸人不得動著、動著打破髑髏。

上堂、乾坤之內、宇宙之間、中有一寶、祕在形山、咄、猛虎不飡伏肉、獅子豈食鵰殘。

上堂、淺聞深悟、深聞淺悟、波斯鼻孔三尺長、無角鐵牛被蟲蛀、卓拄杖云、飯袋子、江西湖南、便恁麼去。

初祖忌上堂、阿師未來時、眉毛安眼上、阿師既來後、鼻孔大頭垂、山遙海濶、木落霜飛、嗚咿嗚咿、以手搖曳云、不許老胡會、只許老胡知。

無象西堂至上堂、白雲庵裏、太白峯前、有一句子、落在傍邊、無學老漢、也是窮曹司檢舊案、十萬里水面、要尋此句、上窮碧落、下入黃泉、六七年內、方得見面、見則見了、不可得而說、不可得而言、只得低頭覷地仰面看天、寃憎會苦、黑蜜黃連、卓拄杖云、無象無象、尙餘骨面堪承掌、不用重施肋下拳。

冬至小參、橫按拄杖、顧視大衆云、北風吹而走石飛砂、等是恁麼時節、諸人且作麼生、若是家

裏人、便道雪似楊華、若是門外漢、卻道楊華似雪、火爐頭話幾千般、不是江南便江北、山僧恁麼品量、諸人還甘也無、卓拄杖云、草繩謾接黃金索、獅子難尋老鼠梯。　復舉、僧問長沙、如何轉得山河大地歸自己去、沙云、如何轉得自己歸山河大地去、僧云、不會、沙云、湖南城裏好養民、米賤柴多足四隣、師拈云、山河自己、自己山河、良久云、龍王宮殿裏、行客少經過。

書雲上堂、書雲佳節、寶鑑當臺、春回空劫已前、華綻不萌枝上、良久云、漆桶不會、打鼓普請看。

上堂、閻浮世界衆生、有六種障礙、有八種自在、只是諸人頭出頭沒、總不覺知、若也悟去、許汝證不動智地、卓拄杖下座。

佛成道上堂、老瞿曇何不撒、指空說空、半生半滅、福山雖是兒孫、活計與他各別、鐵船打就泛滄溟、麥浪堆中釣龜鱉、卓拄杖下座。

歲節小參、僧問、記得長髭到石頭、頭云、大庾嶺頭、一鋪功德成就也未、此意如何、師云、事生也、進云、髭云成就久矣、只缺點眼、此意作麼生、師云、擔枷過狀、進云、頭云、欲點眼麼、髭云、便請、頭乃垂下一足、髭禮、師云、掘地深埋、進云、髭禮拜、還諦當也無、師云、一死更不再活、進云、頭云、汝見何道理便禮拜、髭云、如紅爐上一點雪、此意又且如何、師云、猶有這箇消息在、進云、學人也有一鋪功德、和尚如何點眼、師云、不點、進云、因甚不點、師云、眼不點不盲、僧禮拜。　師乃拈拄杖云、今夜烹露地白牛、與諸人分歲、諸人若也悟去、已是十分飽足、若不悟去、不免薄批細切去也、良久云、上是天、下是地、雲生碧嶂、水赴滄溟、寒星三點五點、老松十株五株、阿呵呵、會也無、趙錢孫李周吳鄭王、一任取飽、無令後悔、雖然如是、不得動著我蹄角、靠拄杖。　復舉、古德頌

云、五蘊山頭一段空、同門出入不相逢、無量劫來賃屋住、到頭不識主人翁、建長則不然、五蘊山頭一段空、同門出入不相逢、無量劫來賃屋住、回頭撞倒破燈籠、豈不見道、龍樓吹鳳曲、不示刈茅童、卓拄杖下座。

正旦上堂、獅子吼無畏說、衆魔不能壞眞說、凍拆黃河九地裂、優曇華放千林雪、卓拄杖下座。

上堂、贈以之中上下三指、李白元來是秀才、閻羅大王不是鬼、鉢裏飯桶裏水、多口阿師難下觜、道吾打動關南鼓、德山卓牌於鬧市、丈林山下竹筋鞭、趙州庭前柏樹子、阿刺刺、卓拄杖下座。

佛涅槃上堂、拈拄杖云、三百餘會九年之弓、摩胸告衆飯籮一空、面前背後、儞儂我儂、召大衆云、會麼、猫有歃血之德、虎有起屍之功、靠拄杖下座。

上堂、獨對春風立片時、闌干不覺晝陰移、東山下事堪惆悵、點點楊華作雪飛。

上堂、祖師門下逈絕階梯、卓拄杖云、最愛江南春雨後、青山綠樹囀黃鸝。

檀那法光寺殿周忌、慶懺寶藏陞座、圓滿妙覺大毘盧藏、廓然遍周沙界、混然量等太虛、窮之不見其踪、體之不見其形、萬化同源、三際不住、一音普遍河沙佛國河沙佛土、攝在微塵、非半滿權實之可名、非迷悟聖凡之可狀、含靈全體作用而不自知、菩薩證悟之所不及、此是如來秘密三昧、亦是衆生本覺妙明、只如今日撥開一塵豁開寶藏、諸佛菩薩龍天八部、燦然出現、且道、從甚處得來、卓拄杖、喝一喝云、毘婆尸佛早留心、直至如今不得妙。　復說偈云、一周霜露尙銜哀、天上人間去又來、信脚蹋飜華藏海、十方佛土寶蓮開。

揭圓覺興聖禪寺額、大解脫門無在不在、十虛無際關闢自由、故我大檀那、建立圓覺道場、成就廣大佛事、梵宇插霄漢、橫呑覩史夜摩、鐘鼓振坤維、撼動浮幢刹海、願力所持、福被一切、六凡四聖何莫由斯、便見海晏河清、雨順風調、野老謳歌、漁人鼓棹、只如今日高揭寺額、有何祥瑞、金色照開三界外、玉毫長繞五須彌。

慶懺釋迦圖繪像陞座、淨法界身無有出沒、愍衆生故示去來相、太虛無際、我佛法身亦無邊際、衆生無盡我佛誓願亦無窮盡、蕩蕩十方而普應、恢恢歷劫而常存、故我釋迦世尊、從無住相成無住法、廓眞實理住眞實地、一音普演、萬化同源、一極悲心、拯救含識、衆生有禱、如月臨水、如來救世、如谷答響、只如今日藤氏妙圓圖寫聖像、功歸何處、將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩。　復云、我佛世尊、從無量劫來行難行苦行、布施頭目髓腦、盡將三千大千世界、抹爲微塵、如是塵數菩薩捨身、其數復過於此、所以如來栽種衆生田中、慈悲根芽、徧滿三千大千世界、恩惠深廣、衆生界中聞佛之一字、無有不生善心者、人間若綵畫、若鑄造金銀銅鐵聖像、所獲功德、世世不失人天之道、世世長命富足、世世無諸惡事、世世夫婦子女團圞、世世見佛聞法、此是決定底事、今日檀那寫此如來尊像、所願必得圓滿。　復說偈曰、繪寫如來妙色身、十方諸佛咸懽悅、龍華一會在今朝、必定當來成記莂。

浴佛上堂、毘藍園裏、尼連河畔、雖然洗得毛艸、要且痒處不曾抓著、不肖孫只揹背一下、待它轉腦回頭、卻與連腮兩掌、更若如何若何、便與屎水便潑、卓拄杖云、狗不擇家貧、子不嫌母醜。

結夏小參、圓覺伽藍、前三後三、平等性智、開口取氣、今日晴明日雨、華自笑鳥自啼、村南村北、

野水橫流、谿東谿西、雲煙出沒、無知老翁、也無煩惱可斷、也無實相可證、只是飽喫了飯、伸脚打一覺睡、起來摩挲兩眼、卻道、太虛與古鏡交參、法身與草木齊長、無適無莫、樓頭浪宕、苦不在地獄、樂不在天上、有時拊背乞錢、有時伸手搔痒、阿呵呵、拍膝云、誌公不是閑和尚。　復擧、趙州問投子、大死底人卻活時如何、子云、不許夜行、投明須到、州云、我早候白更侯黑、師拈云、投子老人外面足可觀光、其中猶缺一著、趙州老漢所得不償所失、福山恁麼批判、還有救處也無、良久云、波斯喫胡椒。

上堂、優曇華世無比、絕見絕聞、非色非相、諸人若也悟去、九十日內、入甘露門食甘露味、若也不然、有寒暑兮促君壽、有鬼神兮妬君福。

上堂、擧、臨濟有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境兩俱奪、有時人境俱不奪、召大衆云、若作四句下語、又墮人境中、山僧不在人境內、若作一句下語、又離卻人境、山僧不在人境外、是汝諸人作麼與吾相見、擲下拄杖云、漆桶喫茶去。

上堂、等是恁麼時節、是汝諸人、因甚有富有貧、有飽有飢、只緣汝勤墮不同、功力不齊、所以如此、如今長夏將滿、更更做夢、方是好手、卓拄杖云、爍石流金不著力、露冷秋深恨無極。

弘安八年六月二十四日、太守請讃龍祈雨、讃後雷鳴雨至、三日連注、因此上堂、僧問、嵩山破竈墮和尚一日山行次、見一古廟血祭無數、師乃以拄杖敲竈云、此是泥瓦合成、靈從何來、聖從何起、恁麼烹宰物命、復以拄杖敲三下、其竈自墮、乃云、破也墮也、此意如何、師云、墮與不墮總是堆塵、進云、少頃有青衣人設拜於前云、蒙師說無生法、已得生天、又且如何、師云、魚投臭

水、進云、侍者云、某甲久侍和尚、不蒙法要、竈神卻蒙和尚指示、卻得生天、師云、我不說什麼、只道、破也墮也、侍者亦乃悟道、又作麼生、師云、蔗咬甜頭、進云、只如某甲侍和尚入檀那府中、檀那以天久晴、請和尚讚水墨畫龍、師讚云、偉哉戴角擎頭、觸處崩崖裂石、蒼生久矣焦枯、快奮一聲霹靂、讚罷、即時雷聲震地、大雨隨至、一連三日、天下普潤、和尚法力可謂過於古人耶、師云、癡人面前、不可說夢、進云、竈是泥瓦合成、龍是水墨畫底、且道、靈從何來、聖從何起、師云、三祇大劫修、無此閑消息、進云、某甲亦隨侍和尚、大地蒙恩、某甲未沾法雨、願師慈悲乞垂方便、師云、莫妄想、僧禮拜。　師乃云、上天久不雨、大地生塵埃、苗稼將就槁、將軍請吾齋、就讚水墨龍、展卷雲作、誰信手聊一揮、劃然起風雷、連日注甘雨、霑足遍九垓、旱禾已結子、晚禾皆出胎、萬民悉鼓舞、將軍笑盈腮、且喫滿鉢飯、處處可羅齋、諸天副我願、甚慰憂民懷、拈拄杖云、拄杖子儞且來、唱起豐年太平曲、卓拄杖曰、三臺須是大家催。

解夏小參、僧問、瑯琊和尚示衆云、有時一棒、作漫天網、打俊鷹快鷂、有時一棒、作布絲網、撓蜆撈蝦、有時一棒、作金毛獅子、有時一棒、作蝦麻蚯蚓、此意如何、師云、赤膊輥繡毬、進云、敢問和尚、如何是一棒作漫天網、師云、我不可答者話不得、進云、如何是一棒、作布絲網、師云、且道、與儞說答儞話、進云、如何是一棒作金毛獅子、師云、儞不得謗老僧、進云、如何是一棒、作蝦麻蚯蚓、師云、添得一場愁、進云、此四棒中、那一棒最親、師云、高聲問進云、和尚尋常竹箆頭下、是打俊鷹快鷂、是撓蜆撈蝦、師云、老僧不敢辜負闍梨、進云、今日長期已滿、鷹鷹蝦蜆、如何緇素、師云、燈籠沿壁上天台、僧禮拜。　師乃云、西天以蠟人為驗、建長亦以蠟人為驗、等是與麼時節、

中間有些子誵訛、令汝諸人各呈所解、諸人所見如衆盲摸象、摸見足者曰、象如杵、摸見耳者曰、象如箕、摸見腹者曰、象如甕、摸見尾者曰、象如箒、有底不曾摸見、在千里萬里外、卻指茅聚影子、說道我亦見象、虛勞神用、只添妄想、苦哉苦哉、如是參禪、有何所益、或有箇漢出來道、和尙如何是全象、驀拈拄杖云、蝦蟆老鼠蚊蟲蟣蝨、儞曉甚七十三八十四、我二十年出世、不曾與人過話、拈拄杖一時捍散。　復舉、大寧寬和尙有僧問、如何是露地白牛、寧以火筯挿火爐中曰、會也、僧云、不會、寧曰、頭不欠尾不剩、師拈云、富與貴是人之所欲、貧與賤是人所惡、不以其道得之不處也、不以其道得之不去也。

上堂、朝碌碌、暮碌碌、破塊落空谷、飛蛾赴明燭、或時東南、或時西北、寂兮寥兮、鵠白烏玄、寬兮廓兮、松直棘曲、卓拄杖下座。

中秋上堂、舉馬祖翫月公案頌云、馬師父子弄琵琶、無奈西江月色何、更聽江南吹玉笛、水流無限月尤多、復召大衆云、瞎禿子、參。

上堂、西天胡子沒髭鬚、楚鷄不是丹山鳳、會則塵毛刹海、不會則當處生芽、摘楊華摘楊華、卓拄杖云、釣絲絞水、熨斗煎茶。

開爐上堂、孤迥迥峭巍巍、堂下草深一丈、灼然到者方知、霜空月冷露白星稀、釣魚船上客、攜手不同歸。

達磨忌上堂、霜飛大野、黃葉窮邊、大法所傳、天無私蓋、二千年事、病在今朝、顧視大衆、良久云欲報師恩、以悟爲則。

上堂、法身有三種病二種光、一一透得、許儞歸家穩坐、召大衆云、黃葉與赤葉齊飛、萬木與崖石俱露、無學老漢一場出醜、儞等諸人作麼生與我相見、良久卓拄杖云、仁義盡從貧處斷、世情多向有錢家。

因事上堂、今日笑昨日哭、悲喜相凌、自飜自覆傾出、摩尼十萬斛、何似卞和三獻玉。良久卓拄杖云、一枝付鶺鴒、萬里付鴻鵠。

越州太守夫人、請慶讚釋迦像楞嚴經、陞座、我佛釋迦世尊、從無住法中、從無量劫來、修無功用行、遍無邊刹土、度無量衆生、三身不借、十號非彰、大千沙界一毫端、度盡衆生無所度、三祇非遠、萬德非功、降兜率陀天、示雪山苦行、玉毫宛轉破彼幽冥、擲弃金輪統御三界、五天竺國室羅筏城、示大經卷、量等太虛、纔開口時、拈起拂子云、便露出這一著子、其他諸經百匝千重、不露線索、不露脚跡、如越大陣、只是點過、會者默默自知、不會者任他不會、唯是楞嚴一會分毫剖釐、八還辨見、七處徵心、貴要阿難便得入門、兜羅綿手放百寶光、射阿難肩、阿難左右顧視、如將清淨大海、攪作一鼎沸湯、急索回頭、早已十方無路、窮諸玄辨、一絲不掛、機前塵毛刹海了無蹤、四聖六凡俱絕蹤、借他絃管醉我韶華、萬劫空流般若名、一句不留元字脚、文殊設揀圓通、觀音舌頭拖地、楞嚴一會即在于今、草木叢林更無異說、機智盡路頭絕、面皮飜轉沒來由、十方世界一團鐵、泥牛昨夜吼西風、火裏烏龜頭戴雪、卓拄杖云、華放優曇劫外春、珊瑚枝枝撐著月。　復云、我大唐儒家、有不信佛者、以十二部經、爲漫頂無有統緒、秀才家乍看諸經、如樵夫乍入大海、心目俱眩、東西南北不知方向、千箇有九百九箇興謗、唯看此經者、皆得

入門、皆悟本法、皆知信向、方知如來的徹之處、有恨見此經之晚者、蓋此經、破相顯理指意慥
的、一句兩句如白石蜜中邊皆甜、如雪山草寸寸是藥、奇哉不可思議也、方秋崖宋之名儒、因
見儒家謗佛、作書云、楞嚴・圓覺兩書、佛之兵將也、佛之士馬也、佛之城郭也、若欲破彼、吾儒中
有如此士馬城郭乎、若欲破彼、須當堅甲利兵、亦當如彼圓覺・楞嚴二書、方可與之立敵、若無
此不可輕議釋教也、吁此經如帝釋髻中之珠、能消一切衆毒、能降一切魔事、禪和家做工夫、
未得自在、未得受用、十二時中鑿山討路正如世尊開門閉門趕阿難、狂猿意馬、到萬仞崖頭、
無著手腳處、一蹴起來和贓納款、卻道、我今覓者即是我心、釋迦老子、恐阿難死在這裏、咄云、
此非汝心、阿難瞿然避席云、此若非我心、心心即同龜毛兎角、阿呵呵、釋迦老漢、盡將三千大
千世界、捏作一塵、付與阿難、阿難不肯承當、咄莫謗法也、卓拄杖。　復說偈曰、一念情消曠劫
前、豁開塵網透塵緣、十方佛土無遮礙、百寶光中坐寶蓮。

謝首座上堂、二十四路三十七著、築壇拜將妙在機先、恁麼悟去、便見諸侯玉帛奔走如雷、良
久云、海晏河清、也誰上東封書、卓拄杖云、喏。

冬至小參、萬仞崖頭一步子、自古自今、蹈得著者、千中無一人、非但千中無一人、亦乃萬中無
一箇、老僧尋常與諸人火爐邊說話、不曾取次相瞞、蓋緣江北與江南、今日不知明日事、高高
低低、冷冷落落、寒梅一點破孤芳、無影枝頭香馥郁、斷橋流水沒人扶、孤客駸回十里足、呵呵
阿、向爾道、拄杖不曾孤負諸人、擲下拄杖。　復舉、陸亘大夫問南泉、肇法師也奇怪、解道天地
與我同根、萬物與我一體、泉召大夫云、時人見此一株華、如夢相似、師云、陸亘大夫有舒卷天

地之手、爭奈活葬牡丹華下、南泉透出聲色之外、無奈被人按劍。

臘八上堂、拈拄杖云、老瞿曇儞來也、三日不相見、莫作舊時看、我問儞、正覺山前悟道之後、卻道、我觀大地衆生、具有如來智慧德相、但以妄想不能證入、衆生妄想豈不是如來智慧德相、若去此妄想、別求智慧、別求證入、宛然生滅斷見、試下一轉語看、速道速道、良久云、將謂茅長短、元來地不平。

臘八拈香、三祇路遠、萬德功洗、六年冷坐、海底摸針、借我手臂拈香、借儞鼻孔出氣、瞎驢滅卻正法眼、灼然不受當來記。

上堂、明明百草頭、明明祖師意、九曲黃河徹底清、雲遮劍閣三千里、若也悟去、且歸林下看、若不悟去、更待月明時、卓拄杖下座。

除夜小參、僧問記得、金牛因臨濟來、乃橫拄杖方丈前、濟見遂拊掌三下歸堂、師云、賊打哨家、進云、牛卻下去、人事便問、賓主相見各有軌儀、上座何得無禮、意在於何、師云、若不酬價爭辨眞假、進云、濟云、道甚麼、牛擬開口、濟便打一坐具、牛作倒勢、此意又作麼生、師云、囊砂不如背水、進云、濟又打一坐具、牛云、今日不著便、乃歸方丈、蹔、師云、將謂甕吞蛇、卻是蛇吞甕、進云、只如和尚拈云、金牛只解作舞、也有陷虎之機、節文落在何處、師云、老來牙齒不關、僧禮拜。

師乃云、有時道一句、也有權也有實、有時道一句、也無權也無實、是汝諸人作麼生與相見、所以道、歲盡年窮、賣卻帽籠、年窮歲盡、換卻飯甑、五步一皺眉、十步一彈指、小室千年人未歸、晚伯臺前看流水、止不止擬不擬、老龐活討付湘江、摩詰計窮搏妙喜、且道、因甚如此、素貧賤行。

乎貧賤、素富貴行乎富貴。　復擧卽心卽佛公案、拈云、綠樹鶯啼春日遲、去等時節正芳菲、山雲海月添新色、付與嬌郎潤打眉、靠拄杖下座。

上堂、僧問、記得、僧問長沙云、如何轉得山河大地爲自己去、沙云、如何轉得自己爲山河大地去、此意如何、師云、隔、進云、僧不會、沙云、湖南城裏好養民、此意又作麼生、師云、汝不禮拜更待何時、僧乃禮謝退、復有僧問、記得、僧問慈明、大衆已臨於座側、西來祖意事如何、明云、月上移松影、雲行山自迎、此意如何、師云、頭大尾小、進云、學人今朝請益和尚、如何是祖師西來意師云我是慈明九世孫、僧禮拜。　師乃拈拄杖云、但得一萬事畢、牛進千頭馬進百疋、忽有箇漢出來道、既是長老因甚愛計多畜生、向他道、急行騎馬、緩行騎牛、卓拄杖。

上堂、普天匝地凍雲交、九九陽生第一爻十二曲闌屛半掩、且看金鳳宿龍巢。

上元上堂、祖師巴鼻、衲僧巴鼻、須彌山大海水、地獄天堂、畜生餓鬼、馬載驢駝、魚腮鳥觜、驀拈拄杖卓一下云、摘楊華摘楊華、我見燈明佛、本光瑞如此。

二月朔上堂、一月去了又一月、杏華開後梨華開、只知事逐眼前過、不覺老從頭上來、離四句絕百非、誰有餘誰不足、莫把閑錢補笊籬、風光只在闌干曲。

上堂、聖福寺裏、西海岸邊、吾有一句、落在汝邊、昨朝問汝、擧未完全、若要渾崙包萬象、直須一度眼皮穿。

佛涅槃上堂、雲綻家家月、春行處處華、瞿曇失錢遭罪、福山賣弄死蛇、大衆見麼、不得動著、動著打儞骨檛。

法光寺殿第三年忌、覺山大師自書華嚴大經、請陞座、毘盧藏海性覺寶王無起無滅、無終無始、不立一塵、周遍法界、不倚一物、含攝十方、湛湛虛明獨耀、澄澄海印發光、東西南北沒遮攔、明暗色空俱不著、千靈絕跡、萬化同根、迎之不見其形、背之不迷其跡、千日不可比其明、衆寶不可奪其色、全超象外、獨拔無雙、此是衆生覺地、亦名如來法身、天地依此而建立、日月依此而照臨、星宿依此而轉運、雷霆依此而發聲、十地菩薩依此而圓滿種智、四果聲聞依此而策發大乘、山川依此而負載、草木依此而敷榮、江海依此而流注、六道依此而往來、鬼神依此而變化、鳥獸依此而飛騰、大哉性覺如斯廣大、如斯雄猛、重重無盡、無盡重重、十方諸佛、宣之不盡、四果四向、如瘂若聾、此是毘盧遮那之體、普遍十方國土、調伏一切衆生、入諸塵勞、方便善巧、而法性本來空寂、只如覺山上人不周一年、書寫華嚴妙典八十一卷、報薦法光寺殿、功歸何處、轉身一步超方便、果滿園林劫外春。　復云、人生百歲、七十者稀、法光寺殿、齒不滿四十、成就功業、卻在七十歲人之上、看他治國平定天下、不見有喜怒之色、不見有矜誇衒耀氣象、此天下之人傑也自如、弘安四年虜兵百萬在博多、略不經意、但每月請老僧、與諸僧下語、以法喜禪悅自樂、後果佛天響應、家國貼然、奇哉有此力量、此亦佛法中再來人也、佛說、菩薩人進修梵行、復有菩薩、或爲妻子眷屬、種種成就菩薩修諸梵行、令其圓滿、今日覺山上人、與法光寺殿曠劫以前、毘盧遮那會中、誓願深重、示生人間、示作王臣、示作夫婦、示作權貴、示爲生死、示爲虛幻、示爲悲悼、發大勇猛、書此大經、行人之所難行、令天下人感動發菩提心、成就阿耨多羅三藐三菩提、奇哉讚莫能盡、伏願、法光寺殿一靈不昧、十地頓超、芘祐子孫、永隆吉慶、

復說偈云、毘盧大經等太虛、只在衆生心識裏、衆生迷背自不覺、破一微塵齊顯現、四大海水渺無邊、不抵上人一滴墨、盡大地上不可量、上人點墨勝千倍、十地菩薩發大心、河沙聲聞非可比、速證菩提行願海、盡在上人筆端上、一洗恩愛浮幻塵、回看洗者亦是幻、水月光中了此身、金剛三昧悉圓滿。

佛鑑禪師忌日拈香、師之禪我參不得、師之道我學不得、師之峻機、我湊泊不得良久擘胸云、一棒一條痕、一摑一掌血、一度思量一度愁、一回飲水一回噎、今朝遠忌斯臨、畢竟將何爲報、拈起香云、爇此一瓣兜樓、也有甜、也有苦、也有恩、也有怨、屈屈、先師靈骨只者是、不須重入蒼龍窟。

四月朔上堂、休去歇去、一條白練去、古廟香爐去、冷湫湫地去、彩鳳出丹山、鐵蛇橫古渡、昨日風今日雨、卓拄杖云、百尺竿頭更進一步。

佛生日上堂、離天宮、錯、下閻浮、錯、才出母胎、卻道、天上天下唯我獨尊、錯錯錯、再別九州無此一錯、二鐵圍山難鑄此錯、錯錯眞箇錯非常錯、錯錯惡水驀頭澆一杓、不知誰跨楊州鶴。

結夏小參、僧問、記得、良遂初參麻谷、谷見來便荷鋤入薗、此意如何、師云、坐久成勞、僧云、良至薗、谷驟步歸方丈閉卻門、又作麼生、師云、家貧難接客、僧云、明日良敲門、谷云、誰、遂稱名忽然大悟、且道、得箇甚麼消息、師云、并州不是故鄉、僧云、今日學人雖無入處、也要與和尚相見、師云、謝子遠來、僧云、不因柳毅信、爭到洞庭湖、師云、月不破五、復有僧問、宗乘一唱三藏絕詮、祖令當行十方坐斷、如何是福山巴鼻、師云、也好一問、僧云、記得、僧問白雲端和尚云、人天交接

兩得相見、如何是相見底事、端云、爭敢相瞞、此意如何、師云、師翁語拙、僧云、久經沙塞苦、今日遇良知、端云、儞卻跟下事作麼生、又且如何、師云、又是從頭起、僧云、衆水含孤月、群星拱北辰、端云、李白依前是秀才、意在於何、師云、喚鐘作甕、僧云、九江千里內、草木盡霑恩、端云、笑殺衲僧、是什麼道理、師云、知即得、僧云、僧將坐具一拂便行、端云、依俙越國、髣髴楊州、節文在何處、師云、彼此失良宜、僧云、學人今夜請益和尚、如何是相見底事、師云、孟夏漸熱、汝合知時、僧禮拜。　師乃云、佛滅二千年、比丘少慚愧、箇箇說圓覺伽藍、人人道平等性智、大似望梅林止渴、福山雖無長處、不敎諸人蹈古人卻跡、只要儞得一寸破一寸、得一尺破一尺、鄭旗推倒張旗、東壁打飜西壁、驀拈主丈云、有功無功、莫使腹空蛇吞鱉鼻、虎咬大蟲、會麼、卓主丈一下云、髮從今日白、華似去年紅。　復擧、雪峰示衆云、望州亭與儞相見了也、烏石嶺與儞相見了也、僧堂前與儞相見了也、保福擧似鵝湖、鵝湖驟步歸方丈、保福低頭入僧堂、師頌云、望州烏石與僧堂、父子擔枷上鐵床、若打福山門下過、更須刖足了追贓、福山與麼檢點、古人還有過也無。

結制上堂、僧問、記得僧問芙蓉楷和尚云、夜半正明、天曉不露時如何、楷云、滿船空載月、漁父宿蘆華、此意如何、師云、隱身無地、僧云、不落今時句、妙在未聞前、楷云、鐵狗吠開巖上月、泥牛觸散嶺頭雲、又且如何、師云、再犯不容、復有僧問云、月未圓時如何、師云、箚、僧云、月圓後又作麼生、師云、收、僧云、投子道、吞卻三箇、四箇、吐卻七箇八箇、意有於何、師云、關、僧云、除卻吞吐外還許學人通箇消息也無、師云、月彎。　師乃云、一夏九十日、諸人意馬狂象、東觸西觸、如何調伏、老僧有一方便、設鐵關五重、要汝等逐關透過、方是行腳之士、擊拂子下座。

謝頭首秉拂上堂、離四句兮絕百非、珊瑚紅照碧琉璃、樓臺日暖楊華舞、簾幕風清燕子飛、卓主丈下座。

上堂、窮不過五貫、富不過五貫、山僧從方丈下法堂前、自法堂上木棚頂、一步步不敢慢、賺汝等、雖然老漢龍鍾有欲有反、有緩有慢、諸人且莫怪笑、卓拄杖下座。

端午上堂、吾有一顆大還丹、無量劫來覓即難、便能如此吞得下、透出萬重生死關、卓拄杖。

上堂、是過現未來、非過現未來、大海攪作酥酪、須彌吹作塵埃、召大衆云、會麼、東行謾說西行利、德雲不下妙高臺、擊拂子下座。

中夏上堂、無量劫來頑惡牛、一般頭角實難收、諸人等是施功力、收取難收這一頭、此牛獲得始奇哉、鐵壁銀山盡觸開、更參無學玄玄路、別有鄉關待汝來。

上堂、僧問、一夏將盡、此事猶未明、師云、是誰之咎、進云、忽然明後如何、師云、著衣喫飯、進云、如何是函蓋乾坤句、師云、截斷衆流、進云、如何是截斷衆流句、師云、函蓋乾坤、進云、如何是隨波逐浪句、師云、自去參、進云、此三句外請師道、師云、我不會辜負汝。 師乃云、萬仞崖頭句、入水入泥句、恁麼一蹈蹈透、便見三世諸佛、六代祖師、異口同音、出廣長舌、福山聾、良久云、只得一橛。

因雷雨上堂、震法雷擊法鼓、布慈雲兮洒甘露、報諸人打教徹、雲是龍王身上衣、雨是龍王身上血。

解夏小參、參問、記得、阿育王問賓頭盧尊者云、承聞、尊者親見佛來、是否、尊者策起眉毛、意作

麼生、師云、面皮厚三寸、進云、王罔措、聻、師云、爭怪得他、進云、尊者云、阿耨達池龍王請佛齋、老僧亦預其數、此意又且如何、師云、何不早與麼道、進云、只如和尚傳持正法、已是五十五傳、傳持底事在甚麼處、師云、點、進云、與麼則正宗滅在瞎驢邊、盡大地人扶不起、師云、三十烏藤賞汝大膽、僧禮拜、復有僧問、一把香芻拈未暇、六鐶金錫響遙空、學人上來願聞提唱、師云、脚下看、進云、大火西流、涼風入野時如何、師云、切忌隨他去、進云、與麼則珊瑚枝枝撐著月、師云、月、聻、進云、記得、仰山參東寺、寺云、已相見了也、不用上來、此意如何、師云、相見事作麼生、進云、仰云、恁麼相見莫不當麼、寺便歸方丈閉卻門、又且作麼生、師云、彼此失便宜、進云、仰山擧似潙山、潙云、寂子是甚心行、仰云、若不恁麼爭識得伊、還端的也無、師云、外面失利、屋裏拔本、進云、和尚拈云、東寺險何似潙山險、意在那裏、師云、老僧罪過、進云、一夏已過、蠟人眼開、親切一句請師指示、師云、鳴咿鳴咿、進云、不因夜來雁、爭見海門秋、師云、未敢相許。　師乃云、太虛掛劍、水洩不通、鞭影纔分、青天撲落、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、九十日中、只要諸人有一箇半箇透過獨脚寨子、打開五重鐵關、向萬仞崖頭哮吼一聲、這箇便是生獅子兒、喚作銅頭鐵額漢、我甘向無人處斫額望汝、因甚如此、採石渡頭山似錦、藤王閣上水如天。　復擧、雪峯上堂云、要會此事、如古鏡當臺、胡來胡現、漢來漢現、玄沙云、明鏡來時如何、峯云、胡漢俱隱、沙云、這老漢脚跟未點地在、師拈云、曾郞向古鏡裏藏身、謝郞向明鏡外出手、父有迷子之訣、子有打爺之拳、雖然要見福山、猶隔關在。

解夏上堂、僧問、秋風纔動、布袋頭開、去者自去、來者自來、正與麼時、願聞提唱、師云、夜行莫踏

白、進云、恁麼則出門唯恐不先到、當路有誰長待來、只如心空及第歸底人、如何接他、師云、非汝不才、老僧年邁、進云、先聖道、一言纔擧、千車同轍、該括微塵、猶是化門之說、是甚麼道理、師云、石上不栽蓮、進云、記得、翠巖夏末示衆云、一夏已來、爲兄弟說話、看翠巖眉毛在麼、此意如何、師云、作僞心勞日拙、進云、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、雲門云、關、又且如何、師云、關東紙貴一狀領過、進云、這四尊宿恁麼道、畢竟誵訛在甚麼處、師云、長者自長、短者自短、進云、和尙今夏爲兄弟說話、添得幾莖眉毛、師云、向道莫行山下路、果然猿叫斷腸聲、進云、還許學人擎展也無、師云、無牛使馬、進云、千山萬水穿雲去、撥草瞻風褁帽歸、師云、三十年後此話大行、次有僧問、懸泉千尺瀉龍湫、一葉蕭蕭萬水秋、坐看孤雲行看月、更無佛法掛心頭、師云、非汝境界、進云、四月十五日結、上下四圍一圍鐵、七月十五日解、百川倒流聒聒、正恁麼時請師祝聖、師云、萬年松在祝融峯、進云、記得、趙州訪臨濟、州纔洗脚、濟便下來問、如何是祖師西來意、州云、正値老僧洗脚、此意如何、師云、須是趙州始得、進云、濟則近前側聽、州云、會則便會、啗啄作麼、又作麼生、師曰、猶缺一著、進云、濟拂袖便行、州云、三十年行脚、今日爲人錯下注脚、意在於何、師云、瓜州賣瓜漢、進云、如何是祖師西來意、師云、祖師在汝脚底、進云、如何是三十年行脚事、師云、東風西水、進云、與麼則蘆華兩岸雪、江水一天秋、師云、弄物不知名、次有僧問、記得龐居士問馬大師云、不與萬法爲侶者是甚麼人、大師云、待汝一口吸盡西江水、卽向儞道、此意如何、師云、脚跟下好與三十棒、進云、龐居士當下大悟、還諦當也無、師云、泥牛觸折蒼龍角、進云、士有偈云、十方同聚會、箇箇學無爲、此是選佛場、心空及第歸、師還肯他也無、師云、不

肯他、進云、一口吸盡西江水、豈不是馬大師殺人刀、師云、倆不要胡說、進云、十方同聚會、箇箇學無爲、豈不是龐居士活人劍、師云、卻較些子、進云、今日和尚、出他古人指示某甲看、師云、殺人刀活人劍、復有僧問、昨夜西風生八極、今朝檀越入山來、大衆臨筵、請師提唱、師云、老僧幾乎喫顚、進云、只如風穴云、祖師心印狀似鐵牛之機、如何是印、師云、天象無定形、進云、恁麼則八面清風藏不得、一輪皎潔在今朝、僧云、不是這箇道理、進云、如何是鐵牛機、師云、動著則失、進云、風穴又云、去即印住、住即印破、意作麼生、師云、湘南潭北、進云、今日福山門下、法歲已周、功行已圓、未審和尚、如何分付此印、師云、五五二十五、僧禮拜。　師乃云、向上一著、如清涼大池、菩薩見之則爲寶明空海、諸天見之則爲琉璃宮殿、世人見之則爲水漿、餓鬼見之則爲膿血、魚龍見之則爲窟宅、有箇衲僧出道、無漏之法、不可作有漏之談、只向他道、若要明此話頭、更參三生六十劫、卓拄杖下座。

開山忌日請拈香、寬兮曠兮、寂兮寥兮、是恩怨何處求蹤、一甌香散秋天碧、滄海依然浪拍空、插香。

上堂、金井梧桐一葉飛、十方諸佛眼如眉、有些巴鼻沒巴鼻、古道從來不拾遺。

中秋上堂、靈山指月、曹溪畫月、見月須忘指、開口非干舌、別別、清冥風露飄桂華、玉兎三更臥深雪、絕瀟洒瀟洒絕、學翁出醜沒人知、只有謝郎驚吐舌、卓拄杖下座。

佛光圓滿常照國師語錄卷三　終

佛光圓滿常照國師語錄卷四

相州瑞鹿山圓覺興聖禪寺開山語錄

侍者　眞慧　等編

弘安五年十二月八日開堂、大光明殿慶懺陞座、

拈香云、此一瓣香、根萌於忠孝之地、枝生於般若之林、爇向爐中、恭爲祝延

今上皇帝聖壽無疆、洎文武洎宋咸臻祿位。

次拈香云、此一瓣香、脫落根塵、更無枝葉、清淨彌滿不墮一切、爇向爐中、供養見坐道場毘盧遮那佛、十方諸佛、洎圓覺會上十二菩薩、觀世音菩薩、一切菩薩、護法天龍一切聖衆、遂趺座、拈拄杖召大衆云、會麼、無上法王有大陀羅尼門、名爲圓覺、流出一切清淨眞如菩提涅槃、過去諸如來、斯門已成就、現在諸菩薩、今各入圓明、未來修學人、當依如是住、恁麼見得、便見無方清淨、無邊虛空、一身清淨、一身清淨故、多身清淨、多身清淨故、乃至十方衆生無不清淨、盡於虛空、一切平等清淨、顧視大衆云、靑山左轉、滄海右盤、日從東出、斗向南移、爍迦羅眼不停機、萬象森羅轉轆轆、是汝諸人若向這裏、意不停玄、眼不掛戶、便可登清淨法殿、證大圓覺、滿

廷菩提、卓拄杖云、猿啼碧嶂千峯外、更有靈蹤在上方、復云、太守入於眞空三昧中、遊泳性空眞海、而不住於空寂之中、而顯現如幻佛事、現造圓覺精藍、不日之間、造出普光明殿、遮那妙體、補陀大士、十二菩薩、天龍八部、僧堂廚庫、皆已畢備、又一日、書寫五大部經及圓覺修多羅經、今日開堂、延請諸佛菩薩天龍八部、入此道場、廣開禪席、廣納禪侶、仍請山僧、擧揚正法眼藏、涅槃妙心、仰讚慈尊及諸菩薩、種種功德、種種佛事、眞實不虛、功德難量、雖虛空包裹不及、千佛讚之不盡、所以參禪人、要明此理、不住空寂之門、不住有爲之相、幻出如幻三昧、顯出無功用行、頭頭妙體、刹刹全彰、不出這箇時節、釋迦老漢二千年前、將恒沙劫事、促在四十九年說盡、後來將四十九年說、促在一日寫畢、亦不出這箇時節、我衲僧家、將一日所寫之經、向一棒一喝上、掃蕩更無餘蘊、到這裏、控千百萬劫、亦出見其長、石火電光不見其短、證盡玄妙聖量境界、亦不增一絲毫、居愚癡暗閉、亦不減一絲毫、無來無去、無暗無明、非大非小、非愚非智、非濶非狹、非短非長、非有爲非無爲、非自然非不自然、非造作非不造作、非莊嚴非不莊嚴、指出一塵之內、擘開圓覺伽藍、遮那妙體遍滿塵沙、十萬菩薩面面相對、光明照徹十方華雨遍周沙界、水鳥樹林齊放寶光、山色溪聲同演妙法、所以道、極大同小、不見邊表、極小同大、忘絕境界、恒沙諸佛儼然存、廣長舌相聲浩浩、且道、又是箇什麼時節、喝一喝。　復說偈曰、偉哉菩薩現宰官、能具深廣大願力、深樂法喜禪悅味、悟此摩尼大寶王、只此寶王具衆相、變幻五百億寶冠、只此摩尼寶冠裏、變現五百億瓔珞、一一瓔珞寶冠內、豁開五百億宮殿、一一五百億宮殿、湧出五百億寶光、一一光中具衆色、開敷五百億寶蓮、一一寶蓮微妙相、顯現五百億佛

土、一一佛土各差別、各坐五百億如來、一一如來示實相、廣說五百億三昧、三昧之中無彼我、無有。一切諸寃親、覺空空覺等太虛、空覺覺空無所有、離名離相絕對待、諸佛方便亦復然、等度一切諸有情、不斷煩惱談實相、一切菩薩證此法、滅寂回旋生死海、回途法界廓無邊、一切衆生悉成佛、將此深心奉塵刹、護法護民只者是、卓拄杖。

掛佛殿額、解脫門開正覺場、十虛無際露堂堂、毘盧藏海乾坤濶、樓閣門前白晝長、故我大檀那相模元帥、性天廓徹功行雙全、具大信力入佛知見、一彈指間、湧出華嚴法界、從無住相擎出遮那妙身、塵塵刹刹、寶印光寒、物物頭頭、妙莊嚴域、回機轉位、全主全賓、一會靈山、乃擧手云、只這便是、只如今日高揭牌扁、有何祥瑞、蕩蕩金光動霄漢、萬年千載鎭坤維。

謝檀那泊兩序上堂、任賢使能住山之職也、截長補短梓匠之職也、今則檀那新建圓覺伽藍、非一木可支、圓者作柱、方者作梁、大者爲桷、小者爲楶、一長一短、有方有圓、各任其責、各呈其能、便見樓觀翔空、叢林雍肅、一新壯麗、和氣藹然、雖然如是、老僧手舞足蹈作場、燕嘗相待去也、いろはにほへと、囉囉哩哩囉囉囉、勸君飮盡樽中酒、老僧陪笑又陪歌、且道、是何曲調、卓拄杖云、萬年歡。

臘八上堂、老瞿曇見地不親、卻道覩明星悟道、正是人貧智短、馬瘦毛長、兎頭截角、龜背刮毛、累及後代兒孫、出頭不得、山悠悠水悠悠、寃深難報、恩大難酬、末上輸他這一籌、擲下拄杖。

上堂、歲律云暮、萬象崢嶸、老胡不會、歡瞎眼睛。

上堂、召大衆云、一念欺則漂爲大海、一念疑則結爲高山、不如一齊放下、百不會百不知、騰騰

任運、任運騰騰、行不知其所之、坐不知其所爲、三文買箇油糍喫、喫了油糍肚不飢、擊拂子下座。

歲夜小參、日日日東上、日日日西下、循環沒終始、今古空悠哉、衲僧家、逆造化參、順造化領、恁麼見得、便見青山與白雲不同、明月與滄海非約、三世諸佛、弄眞成假、六代祖師、變贓考賊、賊賊天上無彌勒、地下無彌勒、卓拄杖。　復擧、洞山與密師伯、路逢白兎、密云、大似白衣拜相、洞云、積代簪纓暫時落魄、師拈云、密師伯從貧入富、老洞山從富入貧、總是依草附木、若是山僧則不然、豈不見道、如蓮華不著水、清淨過於彼、咄、說得道理好、歸依佛法僧。

上堂、了了知了了見、綠樹囀嬌鶯、畫梁鳴乳燕、五陵公子踏青行、卻把青羅扇遮面。

佛涅槃上堂、常無常義、動不動法、潘閬倒騎驢、梵志飜著襪、卓拄杖下座。

上堂、色空空色、空色色空、柳搖淺綠、華發深紅、良久云、未明三八九、且逐馬蹄風。

上堂、鐘中無鼓響、鼓中無鐘聲、鐘鼓不相參、句句無前後、觀音菩薩入三眼國土、作自恣佛事了也、卓拄杖云、知事少時煩惱少、識人多處是非多。

上堂、王子寶刀喩、衆盲摸象喩、灼然是有、灼然是無、大衆會麼、拈卻門前案山子、不須論劫走長途。

上堂、一是一、二是二、公案甚分明、衲子無慚愧、良久云、猢猻食毛蟲、波斯入鬧市。

洛佛上堂、離兜率降閻浮、是凡是聖、一網俱收、雲門棒頭雖短、一棒也有來由、豈不見道、知我者春秋、罪我者春秋、良久卓拄杖云、如今四海平如鏡、行人莫與路爲讎。

結夏小參、僧問、記得僧問馬祖、如何是佛、祖云、卽心是佛、意旨如何、師云、彩鳳舞丹霄、進云、南堂靜和尚拈云、卽心卽佛、鐵牛無骨、此意作麼生、師云、我道鐵鎚無孔、進云、兩人恁麼提唱、且道具何眼目、師擧拂子云、不得向者裏會、進云、只如和尚恁麼與古人相去多少、師云、不知、進云、此曲只應天上有、人間能得幾回聞、師云、老僧罪過、僧禮拜。　師乃云、黃面老漢、二千年前畫箇影子、喚作圓覺伽藍、可悠相讓、二千年後日本國內有大開士、破一微塵、揷一莖草、便見黃金仄布、鐘梵鏗鍧、亦名圓覺伽藍、凡聖同此禁足、法孫小比丘、就此開箇鋪子、藏山於山、藏天下於天下、雖然今古不同、面目更無兩樣、諸人還見麼、若也見得、鯤鯨變化在乎頃刻、若也不見、九十日內、長連床上有粥有飯。　擧、僧問婺州寶資和尚、如何是金剛一隻箭、資云、道什麼、僧再擧前話、資云、過新羅國去也、頌云、金剛寶箭過新羅、百戰場中馬伏波、古往今來未歸客、且看新月掛松蘿。

上堂、選佛場開、題目見在、透得過者、金榜狀元。

上堂、今朝五月一、半雨還半晴、楊柳影邊風動、何人掉臂經行、良久云、一字入公門、九牛車不出。

端午上堂、拈拄杖云、一除作病、二去止病、三空任病、四了滅病、是病是藥、最藥是病、卓拄杖云、九天甘露洒、醍醐大地蒼生熱惱除。

上堂、結夏已一月、即心即佛話作麼生、吉凶爻象、角徵宮商、總不出這箇時節。

上堂、老牛挽車行、小牛隨母後、棒喝忽交馳、各各競頭走、拈華微笑、鉢水投針、總成剩法。

上堂、薫風涼夏日長、園林陰翳、草木吹香、堪笑老胡來此土、無端剜肉卻成瘡。

上堂、聲色堆頭、業風浩浩、兜率宮中日月長、雪山步步無閑草。

鳴鐘、偉哉正覺王、大開談空口、一音演說法、震動大千界、無情顯有情之體、空覺極妙覺之元、熾然說而寂然不動、不思議而運化無窮、諸佛於此證阿耨多羅、諸佛於此轉法輪、此土彼土、乃至河沙佛土、無幽不濟、一天二天及三十三天、無門不開、此是解脫空宗、亦名諸佛實相、鳴鐘一下云、皇帝萬歲、重臣千秋、又鳴一下云、大檀那福壽嵩海高深、衆檀信祿算、椿松齊茂、又鳴一下云、圓覺道場永無魔事、大心衲子早悟上乘、復連鳴三下云、劫石有消日、洪音無盡時。

解夏小參、僧問、翠嵒示衆、與兄弟東語西話、看翠嵒眉毛在麼、意旨如何、師云、非人得其便、進云、保福云、作賊人心虛、意作麼生、師云、老僧不曾負儞諸人、進云、長慶云、生也、又作麼生、師云、引出樂、豐年、進云、雲門云、關、又且如何、師云、臭肉來蠅、復有僧問、趙州問南泉、如何是道、泉云、平常心是道、意旨如何、師云、平常心無意旨、進云、州云、還假趣向也無、泉云、擬向即乖、釁、師云、背亦不失、進云、州云、不擬爭知是道、泉云、道不屬知、不屬不知、若達不擬之道、廓然如太虛空、豈可強是非耶、師云、一塵飛而翳天、進云、趙州悟去、還諦當也無、師云、葫蘆棚上掛猪頭。　師乃云、我今夏一夏、待儞諸人有箇悟處、與儞證據、自四月待到五月、五月待到六月、六月待到如今、晝戶不閉、夜戶不扃、風前月下、雙眼青寒、不望儞陞吾堂入吾室、能向簷前砌下、行得一遭、也喚儞作家裏人、明日看看解夏也、諸人作麼生、良久拍膝云、離亭不折依依柳、灞岸空添

遠客愁。　擧、僧問香嚴、如何是道、嚴云、枯木裏龍吟、師拈云、香嚴好語爭奈坐在空劫前、不知
路轉峯回底時節。
上堂、拈拄杖云、山僧鉤線初無影跡、要汝諸人、去卻情識、離卻見聞、三寸外吞吐、良久靠拄杖
下座。
上堂、一句現成是何題目、天地日月、東西南北、參禪人莫莽速、打破萬重關、看取遼空鏃。
上堂、祖師無妙訣、諸人瞥不瞥、白胳樹頭魚散子、急水灘頭鳥作窠、阿呵呵、我王庫內無如是
刀。
中秋上堂、靈山指月、曹溪畫月、老兎推輪桂飄香雪、靑冥風露太高寒、與誰同共倚欄干。
上堂、得無所得、無所不得、既無所得、云何得得、金剛手揮八楞棒、須彌白浪飜空立、陝府鐵牛
大哮吼、東海烏龜眼睛赤、且道、是何道理、良久云、不知。
開爐上堂、佛法淡泊、叢林凋零、古來老禿丁、有底拈柴吹火、或將丈撥火、皆是隔窻看弄馬騎
一般、慢賺後昆、令入切齒、無學老比丘、不作這般去就、諸人各自歸堂、靠拄杖下座。
達磨忌上堂、霜露既降、木落天寒、嗟嗟此時景、吾祖返西天、相憶更相憶、今年又明年、蒼海幾
時乾、生鐵打心肝。　同拈香、應化非眞佛、非眞不應化、顧視大衆云、若也絲毫及之不盡、要見
祖師、天地懸隔。
上堂、千句萬句、百千萬億句、恆河沙句、百千萬億恆河沙句、只作一句說與諸人、卓拄杖云、我
不敢輕於汝等、汝等皆當作佛。

謝東山日長老相訪上堂、雪峯門下備頭陀、逢人偏唱脫空歌、行脚不出飛鳶嶺、把火燒山提田螺、阿呵呵會也麼、瞎驢滅卻正法眼、奈此一天明月何、卓拄杖下座。

新開正法眼上上堂、檀那深證深法忍、作諸如幻三昧事、命工未及一百日、幻出此堂、欲飛動、今朝綵畫已畢備、如幻種種諸莊嚴、衆寶妙妙開戶牖、刹刹塵塵無罣礙、老僧深坐此堂中、拋擲金圈與栗棘、三千世界龍象奔、須彌作舞日月走、只將此句利群生、大地衆生普成佛。

冬至小參、僧問、僧問慈明和尚、古鏡未磨時如何、明云、新羅打鼓、意作麼生、師云、近不得、僧云、磨後如何、明云、西天作舞、又且如何、師云、遠不得、僧云、今日學人問和尚、古鏡未磨時如何、師云、今日不知明日事、僧云、磨後如何、師云、少年偏惡白頭人、僧禮拜。　師乃云、白髮蕭蕭又一年、且看雲物遍山川、自慚行脚無聊賴、滴滴泉聲落枕邊、所以道、去年貧未是貧、今年貧方是貧、去年貧無卓錐之地、今年貧錐也無、卓、窮則變、變則通、一線長長一線、撥轉畫屏推開門扇、珊瑚樹林白玉樓、紫旃檀塔黃金殿、因甚如此、卓拄杖云、遇貴則賤、靠拄杖。　舉、雲門示衆云、大用現前、不存軌則、有僧便問、如何是大用現前、門拈拄杖高聲云、釋迦老子來也、師拈云、雲門老子、有些好處、雖然吾愛其長、不愛其短、是汝諸人作麼生。

至節上堂、鳶飛戾天、魚躍于淵、一氣無作而作、萬化不然而然、豎起拳云、者箇因甚喚作拳。

謝兩序上堂、佛法至要、與國家治兵一般、六韜三略付與諸人、若是將將、老夫卻有寸長、見麼、旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高。

佛成道上堂、王宮不肯居、六年空妄想、深雪凍不死、一場沒伎倆、賊入空屋、犬吠荒村、一天星

月白、以拄杖畫一畫、云。與儞兩平分、顧視大衆云、汝諸人不得眼熱、卓拄杖下座。

上堂、勞生擾擾對勞生、夢想重重結作城、良久云、撞斷曉鐘殊未醒、空餘殘月照疏欞、卓拄杖下座。

除夜小參、僧問、僧問徑山、掩息如灰時如何、山云、猶是時人功幹、意作麼生、師云、阿誰免得、進云、幹後如何、山云、耕人田不種、又且如何、師云、眞本客作漢、進云、僧云、畢竟如何、山云、禾熟不臨場、又作麼生、師云、二年同一春、僧禮拜退、復有僧問、記得、僧問法昌遇和尚云、今夜分歲、有何施設、昌云、臘雪連天白、春風逼戶寒、意旨如何、師云、東家不知西家、進云、僧云、大衆喫箇什麼、昌云、莫嫌冷淡沒滋味、一飽能消萬劫飢、此意如何、師云、天寒日短、兩人共一椀、進云、今夜和尚分歲、聻、師云、猶嫌少在。　師乃云、冬至未及四十日、看看又是歲除夜、時光易過、日月如梭、轉息來生只在眨眼、非唯年變、又兼月化、非唯月　、又兼日遷、髮白面皺、如火成灰、刹那刹那、密移暗換、撞到此時、人不自覺、顧視大衆、良久云、老僧與麼告報、且道、意在於何、華須連夜發、莫待曉風催。　復擧、長慶示衆云、淨潔打疊了也、近前來我劈脊與汝一棒、有一棒與汝、須生慚愧、無一棒與汝、作麼生會、師拈云、長慶向者裏廝、老僧不道無、也較他三步五步、有人爲長慶作主底、出來與老僧相見、喝一喝。

歲旦上堂、昨夜思量今日禪、一半是新一半舊、今朝對衆抖擻看、零零落落　風走、劈歸去年梅、依俙今歲柳、雨過雲山片段青、學翁面目俱出醜、是汝諸人有爲吾蓋覆者麼、咄、我行荒草裏、汝又入深村。

上堂、拈　杖云、萬年一念貴癡獸、死盡偸心活眼開、百億毛頭獅子吼、塵塵刹刹起風雷、卓拄杖下座。

上堂、山僧尋常說法、只是一句、一半留與汝看、一半付與汝參、參得透許爾會主中主、看得破許爾會賓中主、諸人且作麼生會、良久云、打麪還他秋土麥、唱歌須是帝鄉人、卓拄杖下座。

因雪上堂、夜來一番雪、大地光皎潔、高兮低兮、無處不到、遠兮近兮、無空無缺、色前有路不留蹤、聲外出門眼添屑、絕瀟洒瀟洒絕、諸人於此定誵訛、莫喚烏龜作白鱉。

佛涅槃上堂、今朝二月半、瞿曇供死款、雙林俱變白、百華紅爛熳、一箇臭死屍、命根猶未斷、我有七尺紅釘、信采下一針看、卓拄杖良久、召大衆云、且道、是耆婆是盧扁。

上堂、烏石嶺相見了也、望州亭相見了也、望州亭即不問、烏石嶺頭事作麼生、卓拄杖云、弄泥團漢、又恁麼去。

上堂、銅沙鑼裏滿盛油、大家會麼、東州西州、南州北州、桃華似錦、新月如鈎、卓拄杖云、如今馬上看山色、不似騎牛得自由。

上堂、妙中妙、玄中玄、曉色連雲白、松聲帶雨寒、卓拄杖云、靈龜無卦兆、空殼不勞鑽。

佛生日上堂、今朝四月八、中天生悉達、雲門棒頭短、可惜打不殺、瑞鹿今日又作麼生、一爐沈水一盆湯、毒藥醍醐一道行。

結夏小參、僧問、記得臨濟訪德山、作瞌睡勢、意在於何、師云、作賊護關、進云、濟敲繩床一下、又作麼生、師云、客是主人相師、進云、山云、作甚麼、意作麼生、師云、一釣便上、進云、濟云、和尚且瞌

睡、又且如何、師云、雖得一場榮、刖却一雙足、僧禮拜。　師乃云、一切障礙卽究竟覺、顧視大衆良久云、豈不見、阿耨達池出四大河、一名恒伽河、二名辛頭河、三名博叉河、四名私陀河、或從金象口、或從銀牛口、或從琉璃馬口、或從頗梨獅子口、流出清淨香水、一一皆達阿耨達池、一匝而趣大海、召大衆云、會麼、若也悟去、不妨這裏安居禁足、其或未然、不得虛度光陰。　擧、僧伽難提尊者、因風吹殿角鈴鳴、問伽耶舍多尊者曰、風鳴耶鈴鳴耶、多曰、非風鈴鳴、我心鳴爾、提曰、心復誰乎、多曰、倶寂靜故、拈云、圓覺卽不然、心復誰乎、答雖寂靜相、若下得此語、後代兒孫、不坐在死水裏。

結夏上堂、清淨彌滿中不容他良久云、老來無伎倆、石上種蓮華、卓拄杖下座。

三聖東山至上堂、卓拄杖云、三聖師姪老叔、得佛鑑先師折脚鐺子、眞是可憐生、擬來日本豎擲橫抛、及乎到此、分文不直、吾姪臂端有力、賴其提上挈下、便見死灰復燄、枯木重榮、使未見者見、未聞者聞、良久顧視、卓拄杖云、疾風知勁草、版蕩識貞臣。

上堂、語證也不可示人、說理也非證不了、南山華映北山紅、東邊日出西邊曉、良久云、莫守寒巖異草靑、坐斷白雲宗不妙。

端午上堂、拈拄杖云、諸人還會麼、若也會去、如烈漢服藥、莫問黃連附子甘草細辛、直下服之不疑、自然百病銷滅、何也設有一法過於涅槃、吾說亦如幻、卓拄杖下座。

上堂、江月照松風吹、永夜清宵何所爲、以拂子敲禪床云、莫怪坐來頻勸酒、自從別後見君稀

上堂、拈拄杖云、昭昭於心目之間、恍恍於色塵之內、咄哉無位眞人、一向東到西擂、是汝諸人

還救得也無、將拄杖劃一劃云、一。

上堂、鳳凰生鸑鷟、獅子咬麒麟、千聞不如一見、路富不若家貧、學翁恁麼告報、是汝諸人還甘也無、卓拄杖云、己所不欲勿施於人。

解夏小參、卽心卽佛、非心非佛、不是心、不是佛、不是物、諸人作麼生會、這箇話頭、山僧五六年寫也寫數百幅了、擧也擧數千遍了、只要諸人去卻佛見法見、向無依無欲中、撥開一條路自行、見一寸之丁、便見一寸之鐵、視千里之波、便見千里之海、諸人不道不解相辭、只是抓老僧痒處不著、何故出門不入戶、東魯望西秦。　擧、僧參水潦、畫一圓相、放潦肩上、潦三撥復作一圓相指僧、僧禮拜、潦便打云、這弄虛頭漢、師拈云、己所不欲勿施於　、水潦知而故犯、雖然得牛還馬、拋玉引磚、中間奢儉不同、彼此要知劍手。

解制上堂、鴉鳴鵲噪、入焉讀闕、一切智智清淨、是汝諸人、若能拔卻眼中丈二木楔、許爾自在神通遊戲

上堂、拈拄杖云、胡盧胡盧、五支九魚、卓拄杖云、觀音不在、分付文殊。

上堂、拈拄杖云、鼓角動也、贈以之中、昨日患瘂、今日患聾、諸人還會麼、卓拄杖云、犀牛翫明月、蚊子弄狂風。

上堂、夜來好風吹折、門前一枝松、有些奇特處、露出最高峯、卓拄杖下座。

達磨忌拈香、拈起香云、諸人要見祖師麼、祖師只在這裏、祖師既在、諸人不可徒然、請各各下一轉語、顧視大衆、便展坐具。

上堂、鐵蒺藜錐轉弄轉危、擧一不得、擧二、放過一著、落在第二、諸人作麼生、若無擧鼎拔山力、千里烏騅不易騎。

冬至小參、僧問、記得南泉、兩堂首座爭猫兒、南泉提起猫兒示衆云、道得卽不斬、此意如何、師云、千聖少者一刀不得、進云、衆無語、泉斬御猫兒、意作麼生、師云、死猫成隊走、不斬亦何妨、進云、趙州從外回、泉擧前語、趙州戴草鞋出去、又且如何、師云、鼠子飜油甕、進云、泉云、子若在救得猫兒、此意又作麼生、師云、飜身倒上樹、進云、學人今夜到師室中、方見活底猫兒也、師云、老僧罪過、僧禮拜而退、復有僧問、記得藥山問石頭云、如何是直指人心、見性成佛、頭云、恁麼也不得、不恁麼也不得、意旨如何、師云、油煎石磉盤、進云、山復問馬大師、大師云、我有時教伊揚眉瞬目、有時不教伊揚眉瞬目、此意如何、師云、牛皮鞔露柱、進云、山云、我在石頭處、如蚊子上鐵牛、此意又且如何、師云、先行不及、末後太過、進云、今夜學人問和尚、如何是西來意、師云、供養空踈、汝莫相怪、僧禮拜。　師乃云、冬至前冬至後、初六初八、全無本據、霜華枯木夜號寒、有客不隨流水去、草鞋帶斷又無跟、拄杖皮穿俱骨露、一年攛到結交頭、歲月忽忽攔不住、攔不住、歸何處、一年上燈籠、一年入露柱、豈不見道、是柱不見柱、非柱不見柱、是非已去了、是非裏薦取、連噓兩聲。　擧、裴相國一日、托尊佛、跪膝於黃檗前云、請師安名、檗召相公、公云、謝師安名、師拈云、住世界如蓮華、清淨過於彼、良久云、會麼、檀那向這裏直下擔荷去、便見三十二相圓滿具足。

至節上堂、天悠悠、地悠悠、驀拈拄杖云、前人腰帶後人收、擲下拄杖云、更有收人在後頭。

謝秉拂上堂、山僧有四賓主句、昨日作一句、分付四頭首、打日本鄉談、說日本條貫、示汝諸人了也、諸人若也見得分明、卻來室中、一一吐露、是則與汝證據、不是則再贈竹篦、卓拄杖下座。

上堂、天寒日短、兩人一盌、明月淸風、河滿海滿、卓拄杖云、西天人不會唐言、世事但將公道斷、

謝兩班上堂、一切賢聖、皆以無爲法而有差別、車行直撞馬行、一曲一尖、黃河九曲、出自崑崙、大海邊須彌山腳、大衆會麼、卓拄杖云、參。

佛成道上堂、紫禁煙銷春正濃、日高金殿影重重、一聲天樂香風轉、萬柳絲絲盡向東、卓拄杖下座。

上堂、有句無句、月不過五、卓拄杖云、喫粥了也、洗鉢盂去。

退院上堂、前年臘月住此山、今年臘月離此山、一去一來無定度、碧天雲外不相關。

佛光圓滿常照國師語錄卷四　終

國譯五家參詳要路門

解題

五家參詳要路門は白隱禪師の高弟、伊豆國龍澤寺の東嶺和尙が天明年間に編述し、後四十餘年を經て文政十年、丹波國法常寺の大觀和尙、之を校訂して開板せしものなり。五家とは臨濟、雲門、曹洞、潙仰、法眼の五宗にして、支那に於ける禪宗の五流なり。本書は先づ第一に、臨濟宗の宗風と機鋒とを論じ、第二に雲門宗の言句と其の親疎とを說き、第三に曹洞宗の心地と修道の方法とを說明し、第四に潙仰宗の宗要と其の作用とを明かし、第五に法眼宗の利濟を先にするに全提半提の別あることを論じ、以て此の五宗の門戶各別なりと雖も、向上の大事を究明するの根本に於ては、咸同一なる所以を說示したるものなり。而して附錄に、臘八示衆、看經榜の二篇を添へて、參禪學道の士の爲に日常指針の要に供したり。其の說示の懇到なる、其の兒を愍んで醜を忘るゝの狀、古德親切の一端を窺ふに足るべし。

傳を案ずるに、東嶺字は圓慈、近江國神崎の人、俗姓は佐々木氏、中御門帝の享保六年を以て生る。九歲の時、父の許しを得て鄕の高山和尙に就いて得度し、十七歲にして出遊し、初め日向の古月禪材に謁し、又翠巖和尙に依る。後、鄕里に歸り、草庵を結んで打坐す。寛保三年、白隱慧鶴に見えて侍者と

なる。數年の間、盡く室內の事に參得し、辛錬苦修を積み、遂に重患に罹り、百藥效なし。自ら謂へらく、「我れ既に宗趣を究むと雖も、若し一旦溘死せば、何ぞ法門に益あらん」と。因つて以て宗門無盡燈論一編を著はして白隱に呈す。曰く、「此の中若し採るべきあらば、請ふ以て後に貽さん。若しそれ杜撰ならば、速かに火中に投ぜよ」と。白隱一見して便ち云く、「是れ以て後世の點眼藥となすべし」と。師遂に白隱を辭して京師に往き、白河の邊に幽隱して專ら病を養ふ。而して死も亦得たり生も亦得たり任運自在、以て日月を消す。一日、無心の中より白隱和尙、平生の受用底を徹見す。是れより病も隨つて輕安す。師歡喜に堪へず、直に書を馳せて白隱老師に報ず。白隱披見して大いに喜び、即ち裁答して曰く、「必ず速かに歸來せよ」と。師因つて以て東歸し、復た白隱に從ふ。白隱、法衣を出し、之を附して曰く、「此の金襴衣は、我れ曾て之を服し、四たび碧巖錄を講ぜり。今以て汝に傳へん、宜しく後世をして斷絕するなからしむべし」と。師頂戴して之を受く。是れより師資商論、宗旨を建立し、五位・十重禁戒等微細の旨要に至るまで、師實に究め盡せり。故を以て當時、白隱衆中に、『微細東嶺、大器遂翁』の稱あり。

　白隱和尙、晚年氣力漸く衰ふるや、師力めて學者を鞭勵す。凡そ白隱の晚年に從事するもの、其の得力多くは鹵莽たり。然れども峨山、頑極の如き諸子は、往々師の穿鑿に與り、是を以て瞥脫せり。偶々白隱、京の等持寺の請に遇ふ。時に年八十四、老病殊に甚だし、是を以て師に代らしむ。師、等持の請に

赴き、人天眼目を提唱す。參聽の衆凡て四百餘、大いに白隱の宗風を振ふ。會未だ畢らずして白隱の訃至る。解制を待ちて速かに松蔭寺（駿河國原町にあり）に歸り、遂翁と倶に葬事を行ふ。是より先、師伊豆に龍澤寺を開き、白隱和尙を請じて開山となし、自ら第二代となり、住すること二十年。又寛政三年、尾張の瑞泉寺の請に應じ、又輝東庵を再興す。後、鄕里に歸り、嶺仙精舍に在つて日々三法孝經を講ず。又師曾て夏を江戶の至道庵に過して虛堂錄を講ず、乾峯法身三種病に到りて便ち曰く、「此の一段の因緣、實に格外たり、今日且く置かん。峨山和尙解制後、永田より來ると聞く、其の時當に講ずべし」と。峨山至るや、師乃ち之を講じ、大いに他日に異なる所ありきと云ふ。師又江戶の東北庵に於て碧巖錄を講じ、第三則に到り、擧揚して曰く、「日面佛月面佛」と。時に柴田元養の母あり、年六十餘、坐下に在つて之を聽き、胸宇之がために豁然たり。講後、師に見えて其の所解を呈す。師大いに喜ぶ。後、母氏、臨終に其の女孫を誡めて曰く、「汝、幼艾なりと雖も、宜しく勉めて佛乘に歸依すべし。何となれば我れ曾て東嶺和尙の日面佛月面佛を擧するを聽き、一旦にして開悟し、直に今に到れり。胸中復た一點の塵滓なし。卽今死去するも、安然として歸するが如し。それ復た何をか患へんや。汝若し佛乘に歸依せざれば、我が女孫にあらず、記取せよ」と。言ひ訖つて泊然として化せりといふ。斯くして師は光格帝の寛政四年閏二月十九日に寂す。壽七十二、法臘六十三。門人相謀りて塔を龍澤、輝東の兩刹に建つ。著作は本書の外、達磨多羅禪經疏（七卷）、宗門無盡燈論（二卷）、快馬鞭（一卷）、白隱和尙年

譜等あり。嗣法の弟子、大津、萬元、天先、快鱗、大觀、泰門、天眞などあり。滅後、敕して諡を佛護神照禪師と賜ふ。

國譯五家參詳要路門序

夫れ(イ)五家の宗は、我が宗乘向上の大事を傳へんと欲するのみ。然るに只だ世間流布の文字を解するが如く、妄に解して以て要と爲す、故に宗祖各々其の宗の要路を敎訓して、門戶を分ち、自ら五つの一宗風と爲る。知んぬべし、根本は只だ向上の大事なることを。五家は即ち差別の要門なり。第一、(ロ)臨濟の機鋒を戰はしむるに、亦(ハ)全提半提の別あり。第二、(ニ)雲門の言句を擇ぶに、亦全提半提の別あり。第三、(ホ)曹洞の心地を究むるに、亦全提半提の別あり。第四、(ヘ)潙仰の作用を明すに、亦全提半提の別あり。第五、(ト)法眼の利濟を先んずるに、亦全提半提の別あり。全提と曰ふは、如來の正法眼藏全分に荷擔受用するの義なり。半提とは未だ全提に及ばず、或は半、或は十が一に及ぶものなり。半提の言、類多くして分ちがたし、學者、半途に止りて究竟と爲すもの、誠に憐愍すべきか。予、三十年前、先師の命を聞くと雖も、變盡して五と成るの大事と、雲門の言句、老

(イ)五家。支那には唐末より禪に五つの分流あり、(一)臨濟、(二)曹洞、(三)雲門、(四)潙仰、(五)法眼なり、此の五家は支那禪宗の第五祖弘忍の門下、惠能禪師の餘流にして、南宗禪と稱するものなり。

(ロ)臨濟。臨濟の祖は義玄惠照禪師なり。

(ハ)全提、半提。全分、半分、或は全部、一部と云ふが如し。

(ニ)雲門。雲門の祖は文偃禪師なり。

(ホ)曹洞。曹洞の祖は良价悟本禪師なり。

(ヘ)潙仰。潙仰の祖は靈祐大圓禪師なり。

(ト)法眼。法眼の祖は文益禪師な

僧、今日徹して、言句林中に遊ぶ等の㋠密意に至りては、漸く聞いて信受して、而も尙ほ未だ徹せず、參究已に三十餘霜を經て、頗る其の要領を得たり。㋷天明戊申の歲、予、八幡の圓福の選に應ず。㋦結夏の日、諸子に告げて曰く、「夫れ此の山は、初祖大師と聖德太子との、神佛値遇の靈迹、吾が邦無比の祖場なり、老僧德無くして、其の選に當るものは、人なきを以てなり。古人道く、『法あり食ある處には住すべし、法あり食なき處にも住すべし、法なくして食ある處には住すべからず』と。諸禪德、此の山實に食なし。一夏枉げて㋸碧巖一百則を擧揚して、法食に當つるのみ。法に勇にして、衣食に管せざるもの、已に十より百に至る。」又衆に告げて曰く、「往日、㋾峩山棹公、予に眼目を折衷し、五家の法要を提裝せんことを請ふ。果さゞること已に十年、今再び㋻太靈鑑公、左右に逼近し、その果さざることを責む。諸禪德、若し自己を究明することを得んと欲せば、五家の階位に登らずんば、我が家の種子にあらず、豈に達磨の眞孫と道はんや。是の故に先づ曹洞の道體を得るを初めと爲し、雲門の宗旨を究むるを最極とするのみ。」㋕五月望、㋵智門蓮花の話を講じ了る時に、諸子各々五家の

り。

㋠密意。眞意と云ふが如し。

㋷天明戊申。天明八年にして光格天皇の御代なり。

㋦結夏。印度の季節四月より七月に至る九十日は、每年霖雨烈しくして行旅遊方に適せず、こゝを以て釋尊在世の當時、此の季節を以て所在の窟等に蟄居し、專ら各自の修養に努めしめて化他の勞を避けしむ、之を雨安居、或は夏安居、又は略して夏と稱す、後世佛教の恒例となり、支那、日本、今に此の制に倣ひて諷經、修行の儀を行ふ、卽ち、四月十五日より七月十六日までの九十日を夏と云ふ。

㋸碧巖。碧巖集のこと、宋の佛果圜悟禪師の著、師、政和中、張無盡居士の請に應じて碧巖に住み、雪竇禪師の一百則の頌古集を評唱す、門弟子之を

門戸を立して、激發請益す。老僧、間を求めて、河西の西郁柳庵が宅に往かんと擬す。晨を凌ぎ駕に乘じて、山を下り河を過ぐ。道西の濱に至り、途中忽然として先師叮囑の境界に撞着す。歡踊の餘り一偈を打して曰く、「去年今日始めて語を爲す、今歳斯の時自ら門に入る。仲夏望を過ぎて辰、巳に向ふ、五家の要路是れ緣々。」于時天明戊申五月既望なり。宅に入りて坐斷前日の事に異なり、柳庵が宅に在ること五日、山に歸りて諸子を試む。日夜㋟參詳懈らず、五家の兒孫、將に其の人を獲んとす。時に一人あり、問うて曰く、「五家の宗要是れ何事とかする。」予曰く、「何を以てか然く問ふ。」曰く、「根本の事に徹するすら、未だ其の人を得ず、而るに五家の宗要に參ずるは、竝に一箇半箇も無からん。然るときは則ち五家の辯、用ふるところなけん。」予曰く、「然らず、汝種子の華果を結ぶを觀るや、㋹荊棘を種うれば則ち荊棘を得、華果を種うれば則ち華果を得。この故に吾が㋞大應老祖、參詳他に異なり。」㋡虛堂㋧識して曰く、「明々に說與す虛堂叟、東海の兒孫日に轉々多からん」と云。㋤大燈已に佛國の印を受けて、一箇の種草と爲る、甚麼に因つてか、還つて老祖に嗣ぐや。是の故に㋶關

編纂して碧巖錄又は碧巖集と云ふ。

㋾峩山樟公。江戸麟祥院の峩山慈樟なり、初め月僊和尚に剃除し、三十余人の知識に參じ、後白隱和尚に依りて大事を決す、白隱門下の俊秀なり。

㋻太靈。太靈和尚なり、臨濟禪鵠林門下近世の大德なり。

㋕五月望。五月十五日を云ふ、望は月の滿つるを意味す。

㋵智門蓮花。此の話は碧巖集第二十一則にあり。

㋟參詳。參禪修道の意なり。

㋹荊棘。「いばら」を云ふ。

㋞大應老祖。大應國師のことなり、師諱は紹明、南浦と號す、初め蘭溪の敎を受け、入宋して諸老宿に參じ、後、虛堂智愚禪師に依りて大成し、歸朝して、鎌倉建長寺開山となる。

山國師遺誡に曰く、「宿昔、吾が大應老僧、正元の間、風波大難の地を越えて、㋰蚤に宋域に入つて、虛堂老禪に淨慈に遇着して、眞參實證し、末後㋒徑山に其の蘊奧を盡す。是の故に㋼路頭再過の稱を得、兒孫日多の記を受け、㋨楊岐の正脈を吾が朝に單傳するものは、老僧の功なり。次に先師大燈老人、老僧に西京に參得し、京輦巨峰に侍者たり。其の隨從の際、脇席に到らざる者多年、頗る古尊宿の風あり。卒に㋔老祖淵粹の命を受けて、長養するもの二十年、果して大應遠大の高德を彰し、佛祖已墜の綱宗を起し、眞風不地の遺誡を貽して、㋗後昆を鞭策する者は、先師の功なり。老僧、爰に花園先帝の敕請を受けて、㋳此の山を創開するも、先師飯を嚼んで嬰兒を養ふ、後昆直饒ひ老僧を忘卻するの日あるとも、㋮應燈二祖の深恩を忘卻せば、老僧が兒孫にあらず、爾等請ふ其の本を務めよ。白雲は百丈の大功を感じ、虎丘は白雲の遺訓を歎ず。先規玆の如し、誤つて葉を摘み枝を尋ぬることなくんば好し。」已上。我が關山國師の如きは、凡を越え聖を超え、獨り物外に出づる底、慧眼が這裏に生死なきの句、老僧が屋を管して什麼にか爲ん。高梨を逐うて門を出す等の機、吾が祖宗の大事、

㋡虛堂。虛堂智愚禪師なり。

㋧讃して。路頭再過の偈をいふ。

㋤大燈。大燈國師の事なり、師諱は妙超、宗峰と號す、法を大應國師に承く、大德寺開山なり。

㋶關山國師。諱は慧玄、關山は其の號なり、法を大燈國師に承け、妙心寺開山となる。

㋰蚤に。早く、或は先きにの意なり。

㋒徑山。支那の徑山にして、地名、臨安府にあり、虛堂禪師、咸淳改元の秋、淨慈より此處に遷る。大應亦倶に從ひ來る。

㋼路頭再過云云。虛堂智愚禪師の大應國師に贈られたる偈にして、曰く、「門庭を敲磕して細に揣摩す、路頭通ずる處再び經過す、明々に說與す虛堂叟、東海の兒孫日に轉た多からん。」

(ケ)諄乎として諄なる者なり。(フ)向上の事の外、擬議すべからざるの宗風、辛辣當りがたき底の國師、又何の妄分別ありてか、獨り此の佛法、人を得ざるの嘆息と、五家の風彩、兒孫眼なきの哀憐とに於て、何ぞ是の如く遺誡するや、何ぞ是の如く悲傷するや。日多の眞孫、豈に(コ)拋身捨命の策勵なかる可けんや。請ふ思を回して再三熟讀して子細に觀察し、容易の看を作すことなかれ。至囑、至禱。

于旹天明第七歲戊申雨安居之日

前住豆之(エ)龍澤(テ)東嶺頭陀圓慈撰焉

(リ)楊岐。楊岐方會禪師の臨濟禪を云ふ。

(オ)老祖淵粹の命を受け。大燈國師、大應國師より法を承けたる時、應師曰く「吾が宗汝に到りて大に世に興らん、只だ是れ二十年長養して、然して後、人をして吾が證明を知らしめよ」と、之れを指すなり。

(ク)後昆。後裔又は子弟と云ふ意なり。

(ヤ)此の山を云々。正法山妙心寺

を飜開するを云ふ。

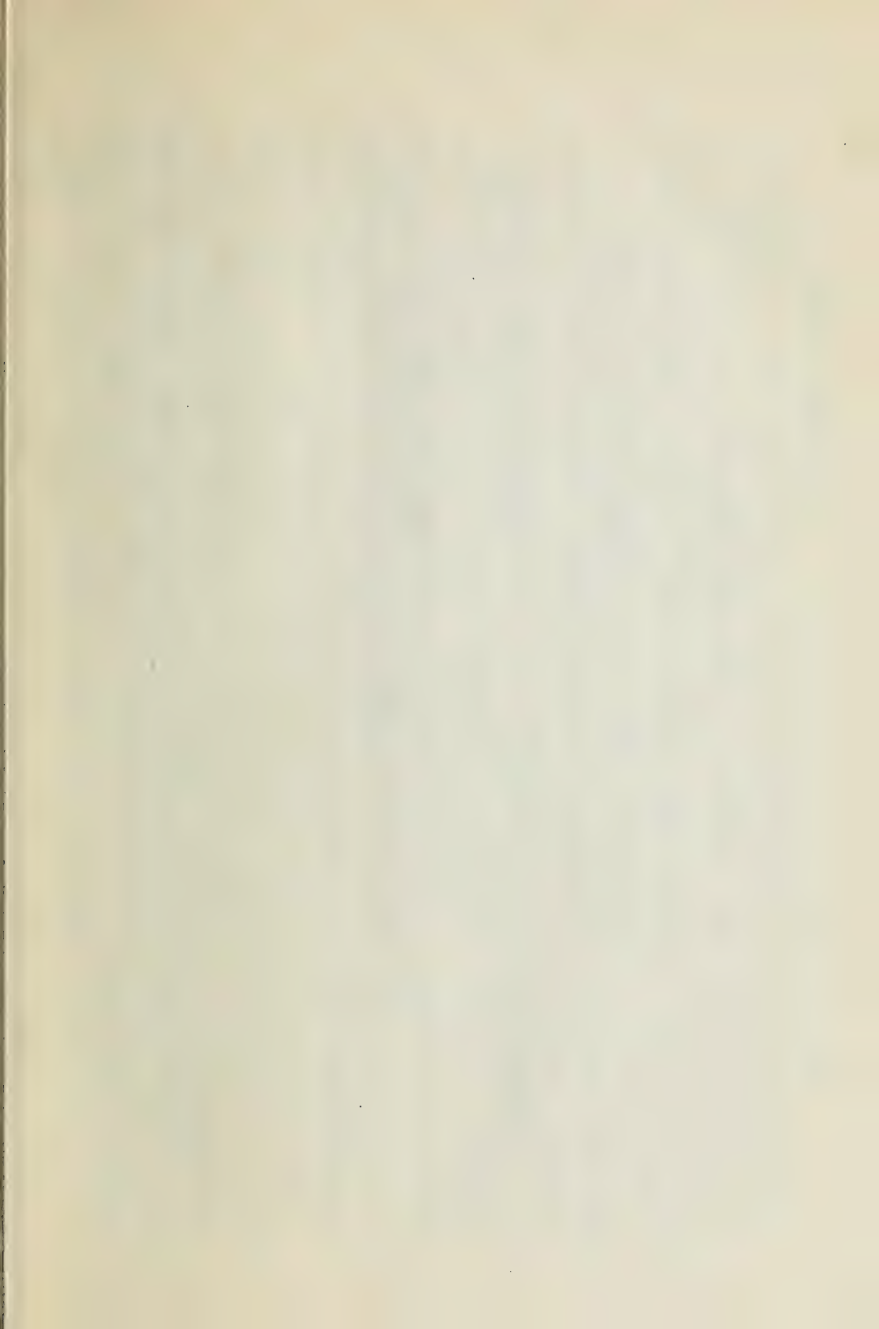
(マ)應燈。大應國師、大燈國師のことなり。

(ケ)諄乎。純然の如し。

(フ)向上の事。究明見性の一大事と云ふが如し。

(コ)拋身捨命。古語の法の爲には喪身失命を避けずの意なり。

(エ)龍澤。伊豆國田方郡北上村字澤池に在り、白隱和尙之を中興す、妙心寺派に屬す。

(テ)東嶺。諱は圓慈、不々庵主、三光室といふ、白隱に嗣ぐ。

國譯五家參詳要路門第一

前住豆之龍澤臨濟正宗東嶺圓慈編
前住丹之大梅賜紫比丘大觀文珠校

第一　臨濟宗は機鋒を戰はし親疎を論ずるを旨と爲す

㋑師初め㋺黃檗の會下に在つて行業純一なり。首座乃ち歎じて曰く、「是れ後生なりと雖も、衆と異なることあり。」遂に上座に問ふ、「此に在ること多少時ぞ。」師曰く、「三年。」首座云く、「曾て參問するや也た無や。」師曰く、「曾て參問せず、知らず箇の什麼をか問はん。」首座云く、「汝何ぞ去つて堂頭和尚に問はざる、如何なるか是れ佛法㋩的々の大意と。」師便ち去つて問ふ。聲未だ絶えざるに、黃檗便ち打つ。師下り來る。首座云く、「問話作麼生。」師曰く、「某甲が問聲未だ絶えざるに、和尚便ち打つ、某甲會せず。」首座云く、「但だ更に去つて問へ。」師又去つて問ふ、黃檗又打つ。是の如くすること三度、問を發して三度打せらる。師來つて首座に白して云く、「幸に慈悲を蒙つて、某甲をして和尚に問訊せしむ、三度問を發して三度打せらる、自ら恨む、障緣あつて深旨を領せざることを。今且く辭し

㋑師。臨濟義玄惠照禪師を云ふ。
㋺黃檗。黃檗希運禪師なり。
㋩的々。眞實、或は本眞の意なり。

去らん。」首座云く、「汝若し去るとき、須らく和尚を辭し去るべし。」師禮拜して退く。首座先づ和尚の處に到つて云く、「問話底の後生、甚だ是れ如法なり。若し來つて辭せんとき、方便して他を接せよ、向後㊁穿鑿して一株の大樹と成りて、天下の人のために蔭涼と作り去ることあらん。」師去つて辭す。黃檗云く、「別處に往き去ることを得ざれ、高安灘頭の大愚の處に往け、必ず汝が爲に說かん」と。師、大愚に到る。大愚問ふ、「什麼より來る。」師云く、「黃檗の處より來る」。大愚云く、「黃檗何の言句か有りし。」師云く、「某甲、三度佛法的々の大意を問うて、三度打たる、知らず某甲過ありや過なしや。」大愚云く、「黃檗㋭與麼に㋬老婆なり、汝が爲に徹困なることを得たり、更に這裏に來りて、有過か無過かと問へ。」師言下に大悟して云く、「元來黃檗の佛法、多子なし。」大愚搊住して言く、「這の尿牀の鬼子、適來は有過か無過かと道ふ、如今卻つて黃檗の佛法、多子なしと道ふ、倆箇の什麼の道理をか見る、速かに道へ、速かに道へ」と。師、大愚の脅下に於て、築くこと三拳。大愚托開して云く、「汝が師は黃檗なり、我が事に干るに非ず」と。師、大愚を辭して黃檗に㋣卻回す。黃檗來るを見て、便ち問ふ、「這の漢、來々去々して什麼の了期か有らん。」師云く、「祇だ老婆親切なるが爲なり。」便ち人事し了つて侍立す。黃檗問ふ、「什麼の處より去來す。」師云く、「昨に㋠慈旨を奉じて、大愚に參じて去來せしむ。」黃檗云く、「大愚何の言句か有りし。」師遂に㋷前話を擧す。黃檗

㊁穿鑿。究明辨道の意なり。
㋭與麼。如是の意なり。
㋬老婆。老婆親切の意なり。
㋣卻回。還り行くの意なり。
㋠慈旨を奉じ。黃檗の慈悲深き旨を受けての意なり。

云く、「(ヌ)作麼生か這の漢の來ることを得て、待つて痛く一頓を與へん。」師云く、「什麼の來るを待つとか說かん、卽今便ち喫せよ」と云つて、後に隨つて便ち掌す。黃檗云く、「這の風顚漢、卻つて(ル)這裏に來つて、虎鬚を捋づ。」師便ち喝す。黃檗云く、「侍者、這の風顚漢を引いて、參堂し去らしめよ。」後に潙山此の話を擧して、仰山に問ふ、「臨濟、當時大愚の力を得るか、黃檗の力を得るか。」仰山云く、「但だ虎頭に騎るのみにあらず、亦虎尾を把ることを解す。」

臨濟慧照禪師、最初入處痛快、悟後參禪瞥脫、五家各々宗旨を立することありと雖も、初中後の事は、頭正しく尾正しく、如來の(ヲ)正法眼藏を中興し、祖師西來の密旨を明了にする者は、只だ此の臨濟の一宗、最も至當と爲すのみ。是の故に古來本錄を以て、錄中の王と稱す。元帝、臨濟院の現住に賜ふに、臨濟正宗の印を以てす、是れ乃ち(ワ)冠旁の初めなり。所謂臨濟は是れ正宗基源の義なり。

師、松を栽うる次で、黃檗問ふ、「深山裏に許多を栽ゑて、什麼をか作す。」師云く、「一には山門の與に(カ)境致と作し、二には後人の與に標榜と作す。」

(リ)前話を擧す。大愚に遇ふた顚末を話すの意なり。

(ヌ)作麼生。「怎麼生」、「做麼生」「但麼生」等同意なり、疑問詞にして如何と云ふに當る、「さあどうだ」、「直ちに言へ」と云ふ詰問詞。宋、明以來頻りに用ひらるゝなり、多く禪家語錄に見ゆ。

(ル)這裏。此の處の意なり。

(ヲ)正法眼藏。釋尊、靈山會上にありし時、一語をも說かず、梵天の捧ぐる金波羅華を拈じたまひしに、八萬の大衆中一人として其の意を解するものなかりしが、唯だ摩訶迦葉一人、其の意を了じて破顏微笑せり。仍つて佛、迦葉に宣はく「我れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に附屬す」と、本文の出據蓋し此の故事による。文は卽ち釋尊が自ら大悟

道ひ了つて㋵钁頭を將つて、地を打つこと三下す。黄檗云く、「然も是の如くなりと雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。」師又钁頭を以て、地を打つこと三下し、噓々の聲を作す。黄檗云く、「吾が宗、汝に到つて大いに世に興らん。」後に潙山此の話を擧して、仰山に問ふ、「黄檗、當時㋟祇だ臨濟一人に囑するか、更に人の在るあるか。」仰山云く、「有り、祇だ年代深遠なり、和尚に擧似せんことを欲せず。」潙山云く、「然も是の如くなりと雖も、吾れも亦知らんことを要す、汝但だ擧せよ看ん。」仰山云く、「一人は南を指して㋹吳越に令を行じ、大風に遇はゞ即ち止らん。」

仰山の讖語、㋞風穴は則ち近うして當らず。曇橘洲曰く、「㋡大慧は當つて穩かならず、然して理事を以て總ぶるときは、風穴を理とし、大慧を事とす。大三災、㋤應庵の語を以て、最も的當と爲す歟。」夫れ臨濟の一宗、他に超出するものは、五事を具する所以なり。第一、入處痛快とは、已に序門に詳かなり。第二、悟後の明正とは、大愚に證徹し、黄檗に卻回してより後、師資參詳し、甚だ以て明了なり。加之、潙山に參じ、德山に侍す、他師の及ばざる所、是の如く著明なり。第三、德を樹る孫を蔭ふ者、此の栽松の一則、

徹底し給へる甚深秘密の悟境なる精神狀態を言ひ顯はせるなり。此の狀態は唯だ以心傳心にて知見するを得るのみ、されば此の語は正しく禪宗の據つて起る淵源を表はせるものにして、かの禪家に「直指人心見性成佛」と云ひ、「本來の面目」と云へる敎語、みな此の語と其の意を同じうせるものと知るべし。

㋻冠勞。文書及び書畫等の初めにある印を云ふ。

㋕境致。境内の風致を云ふ。

㋵钁頭。钁は鋤のことなり、鋤頭と云ふに同じ。

㋟祇だ。只だに同じ。

㋹吳越。支那の國名、吳及び越なり。

㋞風穴。風穴延沼禪師なり。

㋡大慧。大慧宗杲禪師なり。

㋤應庵。應庵曇華禪師なり。

兒孫に垂るゝに堪へたり。末後、三聖との問答、遺偈、遺誡も亦及ぶ可からざる歟。第三、道を試み人を待つとは、破夏の因緣、百丈再參の則に和して、是れ又臨濟の外、誰か敢て恁麼なる。第五、受用眞脫とは、㋤佛々印する所、祖々證する所、彼此明照、天鑑を見るが如し。然りと雖も、先師常に我が徒に謂つて曰く、「五家の宗要は人々兼ねずんば、我が宗全からず、宜しく省察すべき爾。」

師因に半夏、黃檗に上る。和尙の看經するを見て、師云く、「我れ將に謂へり、是れ箇の人と、元來是れ揞黑豆の老和尙」と。住すること數日にして、乃ち辭し去る。黃檗云く、「汝㋶夏を破りて來り、夏を終へずして去る。」師云く、「某甲暫く來つて、和尙を禮拜す。」黃檗遂に打つて趁ひ去らしむ。師行くこと數里にして、此の事を疑ふ、卻囘して夏を終ふ。師一日、黃檗を辭す。檗問ふ、「什麼の處にか去る。」師云く、「是れ河南にあらずんば便ち河北に歸せん。」黃檗便ち打つ。師約住して一掌を與ふ。黃檗大笑して乃ち侍者を喚んで、「㋰百丈先師の禪版机案を將ち來れ。」師云く、「侍者、火を將ち來れ。」黃檗云く、「然も是の如くなりと雖も、汝但だ將ち去れ、已後、天下の人の舌頭を坐卻し去ること在らん。」後に潙山、仰山に問ふ、「臨濟、他の黃檗に辜負すること莫しや、也た無や。」仰山云く、「然らず。」潙山云く、

㋤佛々印する。唯佛與佛の境界にて唯佛と佛とのみ能く之を知り、餘人の窺ふを許さず、乃ち以心傳心の秘境なり、祖々證するも同意なり。
㋶夏を破りて來り、夏を終へずして去る。夏制中の途中から來て、又夏安居を終へずして途中に去るを云ふ。
㋰百丈先師。百丈懷海禪師のことなり。

「子又作麼生。」仰山云く、「恩を知つては方に恩を報することを解す。」潙山云く、「從上の古人、還つて相似たる㋒底の有りや也た無や。」仰山云く、「有り、祇だ是れ年代深遠なり、和尚に擧似せんことを欲せず。」潙山云く、「然も是の如くなりと雖も、吾れも亦知らんことを要す、子但だ擧せよ看ん。」仰山云く、「祇だ楞嚴會上に㋼阿難、佛を讃して云ふが如き、此の深心を將つて、塵刹に奉す、是れ則ち名けて、佛恩を報ずと爲す、豈に是れ報恩の事にあらずや。」潙山云く、「如是如是。」見、師と齊しきときは、師の半德を減ず。見、師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり。

臨濟の一宗、古人評論して曰く、「百丈の再參、㋨馬祖の三日耳聾の大事と此の破夏の因緣と、古今獨步の榜樣なり。衲子の依行すべき底の大事なり。」㋔公案を躰と爲し、言句を衣と爲し、心地を宗と爲し、體用を行と爲し、利濟を旨と爲す。師の上堂、小參是れを以て宗と爲す、五を含んで一に歸す、貴ぶべき歟。

上堂云く、「㋗赤肉團上に一無位の眞人有り、常に汝等諸人の面門より出入す、未だ證據せざらんものは看よ看よ」と。時に僧あり出でて問ふ、「如何なるか是れ無位の眞人。」師、禪牀を下つて把住して曰く、「道へ道へ。」其の僧擬議す。師托開して云く、「無位の眞人、是れ什麼の㋳乾屎橛ぞ」とい

㋒底。禪家の語錄中に多く見ゆ、「程」の意を有する助字なり。

㋼阿難。阿難陀(Ānanda.)の略、釋尊の從弟にして佛成道の年に生れ、釋尊五十五歲の時より二十餘年間侍者となり、東西の化導に隨行し、入滅の際にも其の左右に仕へし弟子なり。多聞强記を以て知らる、釋尊の遺敎を編集するに當りて、經文の大部分は此の人の記憶裡に存せしものを原案とせられたり。

㋨馬祖。馬祖道一禪師なり。

つて、便ち方丈に歸る。

定上座と云ふもの有り、到り參ず。問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師、牀繩を下つて擒住して、一掌を與へて便ち托開す。定佇立す。傍僧云く、「定上座何ぞ禮拜せざる。」定禮拜するに方つて、忽然として大悟す。

師、初め河北に至つて住院す。普化、克符の二上座を見る、乃ち謂つて曰く、「我れ是に於て黃檗の宗旨を建立せんと欲す。汝我れを成褫すべし」と。二人㋮珍重して下り去る。三日の後、普化卻つて上來して問うて曰く、「和尚三日の前、什麼をか說く。」師便ち打つ。三日の後、克符上來して問ふ、「和尚昨日、普化を打つて甚麼をか作す。」師亦打つ。晚に至つて小參、云く、「有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境俱奪、有る時は人境俱不奪。」「如何なるか是れ奪人不奪境。」師云く、「煦日發生して地に鋪く錦、嬰孩髮を垂れて白きこと絲の如し。」「如何なるか是れ奪境不奪人。」師云く、「王令已に行れて天下に徧し、將軍㋘塞外に㋫烟塵を絕す。」「如何なるか是れ人境俱奪。」師云く、「幷汾絕信、獨處一方。」「如何なるか是れ人境俱不奪。」師云く、「王、寶殿に登れば野老謳歌す。」

㋔公案。禪宗にて修行する時、師家より與へられる問題と云ふが如し。公案は公府の案牘なり、公は聖賢其の轍を一にし其の道を同じうするの至理なり、案は聖賢の理を爲す所を記するなり。凡そ天下を持つものは公案なかるべからず、公案行はるれば天下正しうして王道治る、佛祖の機緣之を名けて公案と云ふ。之れ凡聖の面目を見るの禪鏡なり、佛心之に依つて開顯す。

㋗赤肉團。肉團心、或は一團の心識とも云ふ、血肉身中の一團其の狀蓮華の開合するに似たる心臟は意識の依託する處なりと考へられ、遂に心臟を以て直に一團の心識と解する說あるに至る、これ所謂心王心所の總稱なりと見るべし。

㋾乾屎橛。糞箆を云ふ。

㋮珍重。挨拶、或は低頭といふ

上堂、兩堂首座相見す、同時に喝と下す。僧、師に問ふ、「還つて㋙賓主ありや也た無や。」師云く、「賓主歷然。」師云く、「大衆、臨濟が賓主の句を會せんと要せば、堂中の二首座に問取せよ。」

師、一日示衆に云く、「參學の人、大いに須らく子細にすべし、賓主相見の如き、便ち言論往來あり。或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は機權を把つて喜怒し、或は半身を現じ、或は獅子に乘り、或は象王に乘り、眞正の學人あるが如く、便ち喝して先づ一箇の膠盆子を拈出す。㋓善知識是れ境なることを辨せず、便ち他の境上に上つて、模を做し樣を做す。學人又喝す、前人肯て放たず、此は是れ㋢膏肓の病、醫治するに堪へず、喚んで賓、主を看ると作す。或は是れ善知識、物を拈出せず、學人の問處に隨つて卽ち奪ふ、學人奪はれて死に抵るまで放たず、此は是れ主、賓を看る。或は學人あつて、一箇淸淨の境界に應じて、善知識の前に出づ、善知識是れ境なることを辨得して、把得住して坑裏に抛向す。學人言く、『大好善知識』と。」卽ち曰く、「咄哉、好惡を識らず、學人便ち禮拜す、此を喚んで、主、主を看ると作す。或は學人あり、枷を披し鎖を帶びて、善知識

程の意なり。

㋗ 塞外。國外と云ふが如し。

㋫ 烟塵を絕す。戰を止むるを云ふ。

㋙ 賓主。客と主との意なり。

㋓ 善知識。華首經に依れば一には能く人をして善法中に入らしむ、二には能く諸の不善法を障碍す、三には能く人をして正法に住せしむ、四には常に能く隨順敎化す。

㋢ 膏肓。春秋の時、秦に姓を高、名を緩と云ふ醫あり、晉の景公疾み、緩を呼び治せしめんとす、未だ室に入らざる時夢む、二豎子あり、相謂つて曰く「我れは肓の上に居らん、汝は膏の下に居れ」と、緩室に入りて曰く「疾膏肓に在り、藥を以て治すべからず」と。不治の病をいふ。

㋐ 鉗は眉なり、攢は集むなり。

㋚ 雙瞳。兩眼と云ふが如し、譬

の前に出づ。善知識更に與に一重の枷鎖を安ず。學人懽喜して彼此辨ぜず、喚んで賓、賓を看ると作す。大德、山僧が擧する所、皆是れ魔を辨し異を揀んで、其の邪正を知る。」

僧、風穴に問ふ、「如何なるか是れ賓中の賓。」穴曰く、「㋐眉を攢めて白雲に坐す。」「如何なるか是れ賓中の主。」穴云く、「市に入つて㋚雙瞳瞽す。」「如何なるか是れ主中の賓。」穴曰く、「回鸞兩曜新たなり。」「如何なるか是れ主中の主。」穴云く、「三尺の劒を㋖磨礲して、不平の人を斬らんことを待つ。」

臨濟賓主の句を㋴會せんと要せば、先づ須らく賓主歷然の則に參ずべし。四賓主の妙處、自然に徹底、明了なることを得ん。此の風穴の問答、豈に但だ四賓主のみならんや。全提半提の大事、自然に妙を盡せり矣。

師㋱遷化に臨むとき、座に據つて云く、「吾が滅後、吾が正法眼藏を滅卻することを得ざれ。」㋯三聖出でゝ云く、「爭か敢て和尙の正法眼藏を滅卻せん。」師云く、「已後人有りて爾に問はゞ、他に向つて什麼とか道はん。」三聖便ち喝す。師云く、「誰か知らん、吾が正法眼藏、這の㋛瞎驢邊に向つて、滅卻することを。」言ひ訖つ

は盲の意あり。
㋖磨礲。磨ぐの意なり。
㋴會せん。理解、或は了解の意なり。
㋱遷化。逝去、或は死去なり、僧侶の死に用ふ。
㋯三聖。院號なり、鎭州にあり、慧然師のことを云ふ。
㋛瞎驢邊。瞎驢の馬脚下に蹂躪し去るといふ意なり。
㋼擧揚。宣揚、或は發揚の意なり。
㋪穩密純眞。親切にして而も他人の窺ふを許さず、純一、眞實なるを云ふ。
㋲他物影を絶す。純一眞實なるを云ふ。
㋝受行自在。活動應用自由自在なるを云ふ。
㋜根に錯謬なし。人の機を見るに缺きことを云ふ。

て、端然として示寂す。

凡そ師の上堂、小參等の語、(ヱ)舉揚開示すること、法身を本となす。脫體現成して、老婆禪に似たり。(ヒ)穩密純眞、言句を衣と爲し、暗號密令、他の知ることを許さず。見性交へず、(モ)他物影を絕す。眞實諦當にして、法に依つて則を立つ。體用如々、法界を出です。(セ)受行自在、誰か敢て窺覦せん。緣に任せて導利して、間に髮を容れず。(ス)根に錯謬なし、攝入を貴しとす。是の如き五家の要路、自ら兼ぬ、眞の宗風と謂つべきなり。

國譯五家參詳要路門第二

第二　雲門宗は言句を擇び親疎を論ずるを旨と爲す

師、初め睦州に參ず。州、(イ)旋機電轉、直に是れ湊泊し難し。尋常人を接するに、纔かに門を跨れば、便ち搊住して云く、「道へ道へ。」(ロ)擬議不來なれば、便ち推し出して云く、「秦の時の轆轢鑽」と。師凡そ去つて見ゆること、第三回に至る。纔かに門を敲く。州曰く、「誰ぞ。」師云く、「文偃。」纔かに門を開く、便ち跳り入る。州、搊住して云く、「道へ道へ。」師、擬議す。便ち推し出さる。師の一足、(ハ)門閫の内に在つて、州に急に門を合されて、師の脚を拶折す。師、(ニ)忍痛して聲を作す、忽然として大悟す。後來、語脈人を接するに、一摸に脱出す。雲門、後陳操尙書の宅に於て、住すること三年、睦州指して、雪峰の處に往き去らしむ。師、峰の莊に至りて、僧を見て問ふ、「上座山に上り去るや。」僧云く、「是。」師云く、「一則の語を寄せて、堂頭和尙に問へ、是れ別人の語と道ふことを得ず。」僧云く、「諾。」師云く、「上座山に到つて、和尙の上堂、衆の集るを見ば便ち出でゝ、腕を握つて地に立つて曰へ、『者の老漢、頂上鐵枷、何ぞ脫卻せざる』と。」其の僧、師の

(イ)旋機電轉。應機說法の銳敏なることを云ふ。
(ロ)擬議。躊躇の意なり。
(ハ)門閫。閫(しきみ)なり。
(ニ)忍痛。痛みを辛棒しての意なり。

教に依る。峯、者の僧の與麼に道ふを見て、便ち下座して、攔胸に把住して曰く、「速かに道へ、速かに道へ。」僧、無語。峯、拓開して曰く、「是れ汝が語にあらず。」僧曰く、「是れ某が語」と。峰曰く、「侍者、繩棒を將ち來れ。」僧曰く、「是れ某が語にあらず、是れ莊上に一の浙中の上座、某に教へ來つて道はしむ。」峰曰く、「大衆、莊上に去つて、五百人の善知識を迎へ取り來れ。」師次の日、山に上る。峯、一見して便ち曰く、「甚に因つてか到ることを得ること與麼なる。」師、手を以て目を拭ふて趨り出づ。峯、之れを奇とす。師、又衆を出でて問ふ、「如何なるか是れ佛。」峰曰く、「寐語すること莫れ。」師便ち禮拜す。一住三年。峰一日問ふ、「子が見處如何。」師云く、「某が見處、從上の諸聖と一絲毫許りも移易せず。」後陳操尙書に到る。尙書、裴休李翺と同時なり。凡そ一僧の來るを見て、先づ請じて齋せしむ。錢三百を襯して、是の勘辨を須ふ。一日師到る。相看して便ち問ふ、「儒書の中は卽ち問はず、(ホ)三乘(ヘ)十二分教は自ら座主あり、作麼生か是れ衲僧家行脚の事。」師曰く、「尙書曾て幾人にか問ひ來る。」操云く、「卽今上座に問ふ。」師云く、「卽今は且く置く、作麼生か是れ教意。」操云く、「黃卷赤軸。」師曰く、「這箇は是れ文字語言、作麼生か是れ教意。」操曰く、「口、談せんと欲して(ト)辭喪し、心、緣せんと欲して慮亡ず。」師曰く、「口、談せんと欲して辭喪するは有言に對するが爲なり。心、緣せんと欲して慮亡ず

(ホ)三乘。聲聞、緣覺、菩薩なり。
(ヘ)十二分教。十二分經、或は十二部教とも云ふ、釋尊說法の樣式に十二種あるに因ると雖も、實は結集せられたる經卷の說相區別に過ぎず、一に修多羅、法本とも契經とも譯す、長行の說相にして散文體のものなり。二に祇夜、重頌と譯す、散文體の說相た、更

るは、妄想に對するが爲なり。作麼生か是れ教意。」操無語。師曰く、「尙書、法華經を看すと、是なりや否や。」操曰く、「是。」師曰く、「經中に道く、『一切治生產業、皆實相と相違背せず』と。且く道へ、㋠非々想天、卽今幾人有りてか退位す。」操又無語。師曰く、「尙書、且つ草々なること莫れ。師僧家、三經五論を抛卻し來つて、叢林に入つて十年二十年、尙ほ自ら奈何ともせず、尙書又爭か會することを得ん。」操禮拜して云く、「某が罪過。」又一日衆官と樓に登る次で、數僧の來るを望み見て、一官人曰く、「來る者は總に是れ禪僧」と。操云く、「不是。」官云く、「焉ぞ不是なることを知らん。」操云く、「近く來るを待つて、儞が與に勘過せん。」僧、樓前に至る。操、慈に召して云く、「上座。」僧、頭を擧す。操、衆官に謂つて云く、「道ふことを信せすや。」

㋷馬大師曰く、「㋦楞伽經は佛語心を以て宗と爲し、無門を法門と爲す。」又曰く、「凡そ言句あるは是れ㋸提婆宗、只だ此箇を以て主と爲す。」㋾圜悟曰く、「諸人盡く是れ衲僧門下の客、還つて曾て提婆宗を體究得す麼。若し言句是と道はゞ也た沒交涉。若し言句不是と道はゞ、也た沒交涉。且く道

に四字、五字、七字等の偈句にて重說せるものなり。三に和加羅、授記と譯す、佛弟子の未來記にして、未來に於ける證語、または出生等を豫言せるものなり。四に伽陀、不重頌、或は孤起と譯す、重頌にあらざる單獨の偈頌なり。五に優陀那、無問自說と譯す、佛、問者を待たずして法を自說したまふものなり。六に尼陀那、因緣と譯す、過去世の因緣等を說き給ふものなり。七に阿波陀那、譬喩と譯す、譬喩を用ひて說きたまふものなり。八に伊帝目多伽、本事と譯す、佛の過去世における生處事緣等を說くをいふ。九には闍陀伽、本生と譯す、佛弟子の過去世の事を說けるものなり。十に毘佛略、方廣と譯す、法理の圓滿平等なるを說き給ふものなり。十

へ、馬大師の意、什麽の處にか在る。」後來雲門拈じて道く、「馬大師好言語、只だ是れ人の問ふなし。」僧あり、便ち問ふ、「如何なるか是れ提婆宗。」門云く、「九十六種、汝は是れ最下の一種。」

㋻擧す。師、㋕拄杖を以て衆に示して曰く、「拄杖子化して龍と爲る、㋵乾坤を呑却し了れり、山河大地、甚の處より得來る。」雪竇頌して曰く、「拄杖子乾坤を呑む、徒らに説く桃花の浪に奔ると。尾を燒く者雲を拏へ霧を攫むに在らず、腮を曝す者何ぞ必ずしも膽を喪し魂を亡せん。拈了也、聞くや聞かずや。直に須らく灑々落々たるべし、更に紛々紜々たることを休めよ。七十二棒且つ輕恕す、一百五十、君に放し難し。」賓、驀に拄杖を拈じて下座す。大衆一時に走散す。

一に阿浮陀達磨、未曾有と譯す、不思議の事蹟を說き給ふものなり。十二に優婆提舍、論議と譯す、論議して法理を闡明したまふものなり。此の十二を大乘十二分經と云ふ。

㋣斷喪、喪亡。心亡慮絕、或に言語道斷等と云ふに同じ。

㋠非々想天。非想非々想天なり、三界中無色界の第四天、即ち三界の最高天界を云ふ、或は有頂天とも云ふ、此の境界は八萬劫の壽命を保持するに過ぎす、尙ほ必滅の憂にあふことあり、之れ三界の世相無常の苦患を離るゝ能はざるを現はすなり。

㋷馬大師。馬祖道一禪師なり。

㋦楞伽經。梵語の Laṅkāvatāra-Sūtra. にして、具に「楞伽阿跋多羅寶經」と云ふ、四譯あり。（一）楞伽經、四卷、天竺の曇無讖譯、今傳はらず。（二）楞伽阿跋多羅寶經、三卷、中印度の求那跋陀羅譯、唯一品にして文未だ足らず。（三）入楞伽經、十卷、後魏の菩提流支譯。（四）大乘入楞迦經、七卷、唐の實叉難陀譯、右の中、求那跋陀羅の譯出せし楞伽阿跋多羅寶經、尤も世に行はる。要するに本經は離名絕相の第一義心を以て宗となし、妄想無性を旨趣と爲し、五法三自性八識二無我を以て教相と爲し、自覺聖智を以て體となし、小を斥け邪を辨ずるを以て其の用と爲す。

㋸提婆。梵語の Deva のことにて、譯して天、或は天神と云ふ、一般に婆羅門教の諸神を稱す、然し此に云ふ提婆宗は提婆菩薩の宗旨と云ふことなり、故に詳しくは提婆菩薩、(Āryadeva)と云ふ、聖天と譯す、南天竺の人、姓は毘舍

擧す。翠巖夏末、示衆に云く、「一夏以來、兄弟の爲に說話す、看よ㋟翠巖が眉毛在り麼。」保福云く、「賊と作る人、心㋹虛る。」長慶云く、「生也。」師云く、「關。」雪竇頌して云く、「翠巖、徒に示す。千古對無し、關字相酬ゆ。失錢遭罪、潦倒たる保福、抑揚得難し。嘮々たる翠巖、分明に是れ賊。白圭、玷無し、誰か眞假を辨ぜん。長慶相諳んず、眉毛生也。」

擧す。乾峯、衆に示して云く、「法身に三種の病、二種の光有り。汝等諸人、還つて委悉す麼。」時に師、衆を出でゝ云く、「庵內の人、甚麼としてか庵外の事を知らざる。」峰、呵々大笑す。師云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峰云く、「汝是れ甚麼の心行ぞ。」師云く、「和尙亦委悉せんことを要す。」峰云く、「汝恁麼にして、始めて穩坐地を得べし。」

先師拈じて云く、「息畊錄を見んと欲せば、先づ須らく此の話に參ずべし。」二大老の說話、見徹分明ならば、汝に許す、親しく息畊老人に見ゆることを。

三光拈じて云く、「大凡そ乾峯三種の病を降治せんに、三種の法有り、所謂外療と本道となり。耆婆を請じて、㋞診脈の師と爲し、扁鵲を請じて、配劑の師と爲し、卻つて仲景が傷寒論に向つて、商量せよ。」時に僧あり、出でゝ曰く、「和尙自らの病、未だ除くこと能はず。人の病を論じて、什麼

羅、長者の子にして龍樹菩薩の上足たり、天資穎悟、才辨に長じ、よく諸種の外道を摧伏せり、師なる龍樹の宗を祖述し、龍樹の「中論」「十二門論」につぎて、「百論」を著はし、以て三論宗義を確立せり。

㋾圓悟。圓悟克勤禪師なり。

㋻本則は碧巖集第六十則なり。

㋕拄杖。杖なり。

㋵乾坤。天地と云ふが如し。

㋟翠巖の眉毛。碧巖集第八則にあり。

㋹虛。僞るなり。

㋞診脈。診察に同じ。

をか作さん。」光曰く、「汝道へ、老僧何の病か有る。」僧喝して云く、「(ぬ)瞎漢、鐵枷鐵鎖、膿滴々地。」光笑つて曰く、「恰も汝を傭ふて療せん耶。」僧云く、「某甲、公事有り、乞ふ別人を請せば好し。」光、杖を拏つこと三下して曰く、「春山行く處、興極り難し、春鳥春花、唱拍新なり。」僧便ち禮拜す。光、「蒼天蒼天」と道ふて、答拜す。

擧す。乾峯示衆に云く、「一を擧して二を擧することを得ざれ。一著を放過すれば、第二に落在す。」師、衆を出でゝ云く、「昨日一僧あり、(る)天台より來る。卻つて(を)南嶽に往き去る。」乾峯云く、「典座、今日普請することを得ざれ。」

先師、或時太平山中平坦の處に到つて、一座の(わ)磐石あり、石上に於て(か)晏坐すること數刻、忽然として頭を擧げて、世歌を拈起して(よ)省あり。曰く、「見あげて觀れば鷲頭山、見おろせば亦獅毛鹿濱の釣船。」先師、此の時雲門大師に相看す。三十年後、大乘堂中碧巖會に於て、復た其の骨髓を知る。

擧す。(た)五祖和尚、太平に在つて上堂。僧問ふ、「如何なるか是れ臨濟下の事。」祖云く、「五逆、雷を聞く。」僧問ふ、「如何なるか是れ雲門下の事。」祖云く、「紅旗閃爍。」僧問ふ、「如

(ぬ)瞎漢。「どめくら」、盲目といふ程の意なり。
(る)天台。山名なり、支那天台縣の西百十里に在りと、高さ一萬八千丈、周回八百里と道書にあり。智者大師、此の山に天台宗を唱へ、遂にここに入寂せらる。
(を)南嶽。支那湖南省にある山名なり。陳代の慧思禪師、此の山に住せられしを以て、師を呼ぶに亦南嶽大師と云ふ。
(わ)磐石。大石なり。
(か)晏坐。安坐の意なり。
(よ)省あり。悟るの意なり。
(た)五祖和尚。支那の五祖法演禪師なり。

何なるか是れ曹洞下の事。」祖云く、「書を馳せて家に到らず。」僧問ふ、「如何なるか是れ潙仰下の事。」祖云く、「斷碑、古路に横ふ。」僧禮拜す。祖云く、「何ぞ法眼下の事を問はざる。」僧云く、「和尚に留與す。」祖云く、「巡人犯夜。」

是れ眞實入證の者は、五家共に之れに隨ふ、本據なり。然りと雖も一齊に念取して、請益の意なき者は、參じて(ノ)彌勒下生に到るとも、亦得ざるなり。愼しめ哉。

擧す。五祖和尚、黄梅東山に住する時、拈香して云く、「此の(オ)一炷の香、舒郡に在つて二十七年、三所に住院す。諸人、總に知る、遂に燒かんと欲するを。」次で復た云く、「得ざるなり、須らく說破すべし。某、十五年(ク)行脚し、初め遷和尚に參じて、其の毛を得たり。次に四海に於て、尊宿に參見して、其の皮を得たり。又浮山圓鑑老の處に到つて、其の骨を得たり。後(ヤ)白雲端和尚の處に在つて、其の髓を得たり。方に取つて承受して、人の與に師と爲る。今日爐中に爇向して、從敎あれ天に薫じ地に炙ることを。(マ)耳朶ある者は辨取せよ。」

(ケ)五祖大師、始め破頭山に松を栽ゑしより以來、山を下つて水に投じ、

(ノ)彌勒下生。彌勒は梵語、昧怛履曳(Maitreya)の化して、菩薩の名なり、慈氏と譯す、本姓は阿逸多、無能勝と譯す、其の慈悲及び智惠、餘人の及ぶ處に非ざるが故に、かく名くと云ふ、此の菩薩、釋尊に先つこと四十二劫の過去、善思佛の下にありて發心し、今現に兜率の內院に居玉ひ、釋尊の入滅に後るること五十六億七千萬年にして成佛して娑婆に出で、釋尊の後を補ひ、人天を化益し玉ふといふ、「彌勒下生の曉」とは卽ち之れなり。

(オ)一炷。「一しゆ」とも云ふ、僧堂に於て時計の代りに線香を

路傍に㋾行乞し、面たり㋙四祖に謁し、黃梅に母を養ひ、赤縣に孫を留め、流れて東海に入つて、日多の識と爲る底の消息なり。

先師、六十九歲、寶曆三年癸酉、夏、甲府能成禪刹に於て、人天眼目を提唱す。㋓開筵示衆に云く、

「人天の雙眼目を瞎却して、波斯、夜半空谷に落つ。歸り來つて譫語、人の量るなし。各々左邊を袒いで、背觸を訪ふ。夫れ以れば、人天眼目の秘訣、佛海の狂浪、禪苑の毒花。」

是れ作者未だ吾が家の妙を盡さざることを明す。其の出す所の事、宜しく五宗を見るべし。先師常に道ふ「古德判じて云く、『人天眼目は卻つて盲目と成る』と。又甚だ故あり。若し以て依行せば、恐らくは後人を誤らん。」

昔晦巖老人親しく輯編す。孫を顧み、子を思ふ。近ごろ鰲背老漢、註解を間ふ。惡を逐ひ邪に隨ふ、疑咒を千載の當來に貽し、家醜を五家の衰末に揚ぐ。

作者、只だ兒孫大いに誤り、註主、又事實を示すの違ふべきことを恐る

用ひ、一本の香の消ゆる間を云ふ。

㋗行脚。僧の道心修練のため、名師善友を訪ひて、諸國を遊歷するを云ふ。

㋳白雲端和尙。白雲守端禪師なり。

㋮耳朶ある者。耳あるものの謂にて、心あるもの、或は理解の力あるものゝ意なり。

㋘五祖大師。支那臨濟禪の五祖弘忍大滿禪師なり。

㋾行乞。乞食、或は托鉢の意なり。

㋙四祖。支那臨濟禪の四祖道心大醫禪師なり。

㋓開筵。開講の意なり。

㋢三玄三要。宗乘を演唱するに、一語の中須らく三玄を具し、一玄中に三要を具せざる可らずと、即ち一語を說く中にも、權、實、照、用、或は體、相、用を具足して闕くる

のみ。

㊅三玄三要、淨地上に土を抛ち屙を撒す。五位君臣、澆末代、徒を匡し衆を導く。位を轉じて功に就くの大事を開示し、賊を認めて子と爲すの鈍根を震殺す。

臨濟の嚴呵する所の者は、恐らくは㊆七の無分別識を認めて、錯つて根本㊇如來藏と爲すことを。曹洞の指示する所の者は、只だ恐らくは七地の有功の用智を認めて、偏に八地の無功用の行を守る。是れ賊を認めて子と爲すの鈍根なり。

法眼を殿後と爲し、臨濟を先鋒と爲す、豈に優劣を其の際に容れんや。雲門を天子と爲し、潙仰を公卿と爲す。須らく知るべし、宗風、高下なきに非ざることを。

殿後たることは、㊈八宗皆人を利するを以て、究竟と爲す。㊉五家共に學者を導く、是れ基本なり。宗旨は高を以て貴と爲すと雖も、其の敎示する所、自ら高下前後の分ある而已。

常に恨む、顧、鑑、咦、時の人盡く錯つて會することを。爲に報ず、

なきを云ふ。

㊆七の無分別識。眼、耳、鼻、舌、身、意の六識及び第七末那識を云ふ。

㊇如來藏。眞如と云ふに同じ。眞如（Bhūtatathatā）は萬有の實體なり、之を眞如と譯せるは、現象の假相に對して、眞實相なること、萬有の變化無常なるに反して、其の常住不變なることを示せるなり、或は之を一如と云ひ、法性と云ひ、佛性と云ふは、絶對なる諸法の本質、衆生の本性なることを示せるなり。

㊈八宗。倶舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、天台宗、華嚴宗、眞言宗の八宗なり。

㊉五家。臨濟、雲門、曹洞、潙仰、法眼の五宗を云ふ、之に楊岐と黃龍とを加へて七宗と云ふ、楊岐、黃龍共に臨濟なり。世に之を五家七宗とも云ふ

六相義、須らく親切に參究すべし。

眼目に曰く、「師、僧を見る每に、之れを顧みて即ち曰く、「鑑。」僧擬議す。師即ち曰く、「咦。」而して之を錄する者、顧鑑咦と曰ふ。」又頌を作りて曰く、「擧するに顧みず、即ち差互す、思量せんと擬すれば、何の劫にか悟らん。」先師久しく雲門宗の大事に參ず。始めて㊆三字の旨を會す。之れに依つて三字を宗と爲す、別に格外に通ず。㊇六相の義、法眼宗第一、法を表す、本書の註に見えたり。玆に易解の爲別に一譬を設く。是れ男、是れ女の如きは、是れ總相。六根在るが如きは是れ別相。辨用に依るが如きは是れ同相。眼見、耳聞是れ異相。聚めて身を成すが如きは是れ成相。四大分死の如きは是れ壞相。宗に通じて後に參訣せよ。

從頭、五派の秘訣、盡く至要を究明すべし。澆季末代、法滅盡の効驗、諸方盡く言ふ、「話頭に參せざれ、文字を知らざれ。唯だ一向に無念無心にし去れ、是れ向上の禪」と。爾知らずや、佛の言く、「㊈法門無量誓願學、佛道無上誓願成」と。

此の示衆に依れば、先師の意、五家を尊重すること是の如く明著なることを。若し其の事なき者に至つては、搜索足らず、參詳及ばざるの致す所なり。

臨濟上堂。僧問ふ、「如何なるか是れ第一句。」濟云く、「三要印開して朱點側つ、未だ擬議を容れざる

ふ。
㊆三字。顧、鑑、咦の三字なり。
㊇六相。總相、別相、同相、異相、成相、壞相、是れなり。
㊈四句誓願の後の二、即ち一、衆生無邊誓願度、二、煩惱無盡誓願斷、三、法門無量誓願學、四、佛道無上誓願成。

に主賓分る。」「如何なるか第二句。」濟云く、「妙解豈に無著の問を容れんや、漚和爭か截流の機を負はん。」問ふ、「如何なるか是れ第三句。」濟云く、「棚頭に傀儡を弄ずるを看取せよ、抽牽都來裏に人有り。」濟又云く、「一句語に須らく三玄門を具すべし。一玄門に須らく三要を具すべし。權あり、實あり。汝等諸人、作麼生か會す。」下座。

先師曰く、「此の三句に於て、甚だ深理あり、參詳を盡すべし。彼の函蓋、乾坤等の句の如きは、眞の宗意に非ず。此の上堂に至つて、始めて知る、雲門、臨濟同一三昧なることを。若し復た此の旨を知らざる底は、即ち虛堂日多の眞孫に非ざること必せり。」

國譯五家參詳要路門第三

第三　曹洞宗は心地を究め親疎を論ずるを旨と爲す

師諱は良价、雲巖に嗣ぐ。越州諸曁の人、姓は兪氏、初め忠國師に謁して、無情説法を問ふ。契はず。後溈山に到る。山問ふ、「聞く、㊀闍黎曾て國師に無情説法を問ふと、是なりや否や。」師云く、「是。」溈云く、「試みに擧せよ看ん。」師擧し了る。溈云く、「我が這裏も也た些子あり、只だ是れ其の人に遇ふこと㊁罕なり。」師云く、「便ち請ふ。」溈、拂子を以て點一點す。師云く、「請ふ和尙、某甲が爲に説け。」溈云く、「父母所生の口、終に子が爲に説かず。」師云く、「此間、同時に道を慕ふ者あること莫らんや。」溈、雲巖に見えしむ。師辭して直に雲巖に㊂造る。前話を請益す。巖云く、「見ずや、彌陀經に云く、『水鳥樹林悉く皆念佛念法』と。」師因つて省あり。偈を作つて云く、「㊃也太奇、也太奇、無情説法不思議。若し耳を將つて聽かば、終に會し難し。眼處に聲を聞いて方に知ることを得ん。」一日巖に問ふ、「某甲餘習あり、未だ盡きず。」巖云く、「汝曾て甚麼をか作し來

㊀闍黎。阿闍黎の略、梵語、阿闍黎耶(Ācārya)の略、軌範師或は正行と譯す、天台宗、眞言宗等には阿闍梨に種々あるも、普通には子弟の僧俗を指導すべき師範職、或は授戒の職を勤むるものを云ふ。

㊁罕。稀なり。

㊂造る。到るなり。

㊃也太奇。也は又の意なり、太奇は甚だ奇なりの意にて、奇妙不思議の意なり。

る。」云く、「聖諦も亦爲さず。」曰く、「還つて(ホ)歡喜地を得るや、也た未だしや。」云く、「歡喜は卽ち無きにあらず、糞堆頭に(ヘ)一顆の明珠を拾ひ得るか。」師、巖を辭して問ふ、「百年後忽ち人あり、還つて和尙の眞を邈得すと問はゞ、如何が(ト)祇對せん。」巖良久して云く、「只だ者れ是れ。」師、沈吟す。巖云く、「价闍黎、箇の事を承當することは、大いに須らく審細にすべし。」師猶ほ疑に渉る。後因に水を過ぎて、影を視て方に頓悟することを得たり。偈を作つて云く、「切に忌む從他あれ覓むることを、(チ)迢迢として我れと疎なり、我れ今獨り自ら往く、處々渠に逢ふことを得たり、(リ)渠今正に是れ我れ、我れ今是れ渠にあらず、應に須らく恁麼に會して、方に如々に契ふことを得べし。」示衆に云く、「末法の時代、人多く乾慧なり、若し眞僞を辨驗せんと要せば、三種の滲漏あり。一には見滲漏、機、位を離れざれば、毒海に墮在す。二には情滲漏、智常に向背して見處偏枯なり。三には語滲漏、體妙、宗を失す、機、終始を昧す。」曹山辭する次で、師、山に先雲巖が付する所の寶鏡三昧、(ヌ)五位顯訣を授け畢んぬ。山再拜して去る。

正中偏。三更初夜月明の前、怪むこと莫れ相逢ふて相識らざることを、

(ホ)歡喜地。菩薩十地階級の中、初地を歡喜地と云ふ、菩薩此の地に入れば、決して惡趣及び凡夫地に退轉せず、必ず成佛すべきを以て歡喜を得ること比なし、故に歡喜地と名づく。
(ヘ)一顆。一個と云ふ意なり。
(ト)祇對。答ふるの意なり。
(チ)迢々。高き貌なり、或は遙かなるの意なり。
(リ)渠。彼の意なり。
(ヌ)五位顯訣。五位説は達磨十一代の法孫たる洞山良价禪師の創作する處にして、其の説は涅槃經の嬰兒の五相より出づ、而して師、遷化の後は、其の嗣曹山、能く五位の要旨を受けて、五位に揀語を下し、之を流布せしむ、名けて五位顯訣と云ふ、然るに曹山の法系は僅か三世にして絕滅

隱々として猶ほ舊日の嫌を懷く。

偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明に覿面更に眞なし、更に頭に迷ふて還つて影を認むることを休めよ。

正中來。無中に路有り塵埃を出づ、但だ能く當今の諱に觸れず、也た前朝斷舌の才に勝れり。

兼中至。兩刄鋒を交へて避くることを須ひず、好手還つて火裏の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の氣あり。

兼中到、有無に落ちず誰か敢て和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、折合還つて炭裏に歸して坐す。

⑫寶鏡三昧

是の如きの法、佛祖密に付す、汝今之を得たり、

宜しく善く保護せよ、銀盌に雪を盛る、明月に鷺を藏す、

類して齊しからず、混じて處を知る、意、言に在らざれば、

來機も亦赴く、動ずれば窠臼を成し、差へば顧佇に落つ、

背觸、倶に非なり、大火聚の如し、但だ文彩に形せば、

せしかば、此の書も亦漸く隱没したり、後宋朝を經て元朝に至り、老謙なるものあり、宋本を得て之を刊行し、中統元年晦然之れに補注を加へて世に弘む、現今我國に傳はるものは即ち是なり、而して我國に初めて傳へしは道元禪師なりと云はる。(一)正中偏は起信論の隨緣眞如の如く、又哲學の實在即現象の意義に等し。(二)偏中正は、千變萬化の差別が即ち平等の實在界なることを意味す、即ち正中偏を反對に云へるものなり。(三)正中來は正偏に基づける修行の工夫を明せるものなり、即ち其究極は正偏兼帶の一位にあれども、それに到達する工夫に於て正中より來るあり、偏中より來るありて自ら二方面なり。(四)偏中至とは前の正偏に基ける修行の功

即ち染汚に屬す、
夜半正明、
天曉不露、
物の爲に則を作す、
用ひて諸苦を拔く、
有爲に非ずと雖も、
是れ無語にあらず、
寶鏡に臨むが如し、
形影相覩る、
汝是れ渠にあらず、
渠正に是れ汝、
世の嬰兒の、
五相完具するが如し、
不去不來、
不起不住、
婆々和々、
有句無句、
終に物を得ず、
語未だ正からざるが故に、
❼重離の六爻、
偏正回互、
疊んで三と爲り、
變盡して五と成る、
荎草の味の如く、
金剛の杵の如し、
正中妙挾、
敲唱雙擧す、
宗に通じ塗に通ず、
挾帶挾路、
錯然として吉なり、
犯忤すべからず、
天眞にして妙なり、
迷悟に屬せず、
因緣時節、
寂然として昭著す、
細、無間に入り、
大、方所を絕す、
毫忽も差へば、
律呂に應せず、
今頓漸有り、
宗趣を立するに緣る、
宗趣分る、
即ち是れ規矩、
宗通じ趣極る、
眞常流注、

夫を明せるなり。(五)兼中到とは正、偏、來、至、毫も障碍することなく、互に融攝して自由自在の妙用を顯現する位を云ふ。

⑪寶鏡三昧。本書は「傳燈」、「禪門諸祖偈頌」等に載せざれば古來作者に就いて異說多し、五燈會元洞山章に「師(洞山)因に辭す、遂に囑して曰く、吾れ雲巖先師の處にあり、親しく寶鏡三昧を印せらる、事窮めて的要なり、今汝に付す」と記せるより、本書の作者は彼の五位說を唱へたる洞山良价禪師なりと云はる。內容は本文に見ゆる如く、一篇、四言、九十四句、三百七十六字より成る。寶鏡は靈明にして能く物を照すの義、三昧は大論の王三昧なり。即ち王三昧に安住する時は、自ら諸佛の受用せる大圓鏡智の大光明を

外寂に內搖ぐ、　繫駒伏鼠、　先聖之れを悲んで、
法の檀度と爲り、　其の顚倒に隨つて、　緇を以て素と爲す、
顚倒想滅すれば、　肯心自ら許す、　古轍に合せんと要せば、
請ふ前古を觀よ、　佛道成ずるに垂として、　十劫樹を觀ず、
虎の㋻缺の如く、　馬の㋕馵の如し、　下劣有るを以て、
寶几珍御、　驚異有るを以て、　貍奴白㋵牯、
㋟羿、巧力を以て、　射て百步に中つ、　箭鋒相直る、
巧力何ぞ預らん、　木人方に歌ひ、　石女起つて舞ふ、
情識の到るに非ず、　寧ろ思量を容れんや、　臣、君に奉じ、
子、父に順ず、　順ならずんば孝に非ず、　奉ぜざれば輔に非ず、
潛行密用、　愚の如く㋹魯の若く、　但だ能く相續するを、
主中の主と名づく。

寬延庚午の春、先師駿州庵原大乘に在つて、碧巖集を提唱す。會中一朝、予を召して曰く、「夫れ法は隨つて入れば益々深し。」昔日、正受の室に在つて參詳尤も久し矣。變盡して五と成るの大事を、格師兄に究むと雖も、行住穩かならざるこ

現前し、大自在を獲得す、本書は此の微妙なる王三昧の消息を詠ぜし絕妙の歌なり。

㋾重離。易の☲☲離上離下、即ち離爲火の卦なり、此の卦は臣の君に事ふる道は、其の君に諛はず、其の身の分を犯さず、而して正を以てするを貴ぶの意なり、六爻は易の卦をなす六つの畫段の稱、變化の象をあらはすなり。

㋻缺。缺は「きず」の意、虎、人を傷づくること一度すれば、耳に一缺生ずと。

㋕馵。馬の足を縛るを云ふ。

㋵牯。牝牛のことなり。

㋟羿。射師、弓の達人にして、百步の外に居て能く楊柳の葉を射て百發百中なりといふ。

㋹魯。愚の如し。

と、凡そ三十餘年なり、今日に至つて始めて徹底して、其の蘊奥を盡す。前の所得に比すれば、懸響の如し。是の故に書して以て諸子に與ふ。

洞上五位偏正口訣

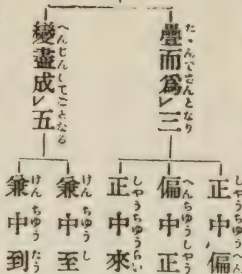
寶鏡三昧に曰く、「重離の六爻、偏正回互、疊んで三と爲り、變盡して五と成る。」

重離 ☲☲ 六爻

回互疊變の義は、衆說繁絮たり、今之れを記さす。

━ 正也、空也、眞也、黑也、暗也、理也、陰也。

━ ━ 偏也、色也、俗也、白也、明也、事也、陽也。

五位
- 疊而爲レ三
  - 正中偏
  - 偏中正
  - 正中來
- 變盡成レ五
  - 兼中至
  - 兼中到

蓋し寶鏡三昧は誰人の所述といふことを知らず。石頭和尚、藥山和尚及び雲巖和尚、祖々相傳し密室相承して、容易に漏泄すること無く、傳へて洞山和尚に到りて、五位の階漸を著はす。位毎に一偈

を安著して、以て佛道の大綱を提く。謂つべし、夜途の㋞玉炬、迷津の船筏なりと。悲しい哉、近代禪苑荒蕪し、無智昏愚を以て、向上直指の禪と稱し、寶鏡三昧、五位偏正等の無上の大法財を以て、老屋裏の破古器と爲して、總に顧みず。恰も瞽者の杖子を拋擲して、㋡閑具なりと言ふに似たり。殊に知らず、自ら小果の見泥裏に顚墜して、死に到るまで出離することを得ず。何ぞ計らん、五位は是れ正位の雜毒海を驀過するの舟航、㋧二空の堅牢獄を輾破するの寶輪なることを。往々、進修の要路を知らず、者般の秘訣を諳んせず。故に㋤辟支小果の死水裏に陷溺し、焦芽敗種の黑暗坑に顚沒す。終に佛手も救ひ難きに到る。是の故に四十年前、正受の室内に在つて、信受する所の大略を以て法施に當つ。眞正參玄、大死一番底の上士を得て、宜しく須らく密付すべし。中下の機の爲に、設くる所以の者に非ず。謹んで輕忽すること勿れ矣。

大凡そ敎海は浩渺なり、法門は無量なり。其の中間秘授あり、口訣あり、未だ曾て五位の紛煩なる者を見ず。重離の煩評、疊變の鑿說、枝上に枝を添へ、蔓上に蔓を結ぶ、畢竟五位は㋶胡爲の法理の爲に、施設する所以の者を知らず。法門に㋰小補なきに非ず、學者をして轉々迷悶を增さしむ。縱ひ㋒鶖子、慶喜の大智も了別しがたき者に似たり。予謂へらく、「祖

㋞玉炬。「たいまつ」なり。
㋡閑具。不用品の意なり。
㋧二空。人空、法空の二を云ふ。
㋤辟支。辟支佛の事なり、緣覺とも云ふ、詳しくは梵語、辟支佛陀(Pratyeka-Buddha)のことなり、十二因緣の法を觀じて、我執を除き涅槃に悟入す、小乘の佛果なり。
㋶胡爲。何れの意なり。
㋰小補。小助の意なり。
㋒鶖子。舍利弗(Sāriputra.)の事なり、佛十大弟子の一、父

師豈に無用の煩語を留め得て、後昆を勞役する者ならん乎。」我れ之を怪しむこと久し矣。正受の室に入るに及んで、從上の疑兇乍ち鬆る矣。學者若し之に依つて進修せば、大いに利益あらん。洞上知識の口授に非ずと爲して、疑惑すること莫れ。須らく知るべし、正受は專ら洞山の頌に參究して後、判斷し將ち來ることを。洞上知識の口授に非ずと爲して、輕忽すること勿れ。正受老人曰く、「祖師初め五位を施設する大意は、學者をして㋥四智を證得せしむるの大悲善巧なり。大凡そ佛に四智あり、所謂大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、是れなり。道流、直饒ひ三學精錬して、多劫を經るとも、未だ四智を證得せずんば、眞の佛子と稱することを許さず。須らく知るべし、道流眞正參究して、㋭八識賴耶の暗窟を打破するとき、大圓鏡智の寶光、㋬立地に煥發す。卻つて怪しむ、大圓鏡光黑うして漆の如くなることを。此れを正中偏の一位と道ふ。此に於て偏中正の一位に入つて、寶鏡三昧を修すること多時、果して平等性智を證得して、初めて㋣理事無礙法界の境致に入る。行者、此を以て足れりと爲す、親しく正中來の一位に入り、兼中至の眞修に依つて、妙觀察智、成所作智等、

な帝沙、母を舍利と名づけ、那蘭陀に生る、佛弟子中智慧第一の稱あり、四衆の爲に尊崇せらる、其の眼、舍利鳥(鶖鷺と云ふ水鳥)に似る、故に舍利、又は鶖子と云ふ、弗は其の母舍利の生めるより名づく、即ち弗は弗多羅(Putra)のの略、子の梵語なり。

㋥四智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四なり、凡そ佛果を極むる時は、此の四智圓備して至妙なるを以て、四智圓妙と云ふ、之に法界體性智を加へて又五智とも云ふ。

㋭八識賴耶。佛教にて意識を分ちて八とし、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識と第七末那識と第八阿賴耶識とを立つ。

㋬立地。立ち處にの意なり。

㋣理事無礙。理は理性にして、一切諸法の緣起の本體を云

の四智を獲得し、最後に兼中到の一位に到つて折合、還つて炭裏に歸して坐す。知らず何の謂ぞや。精金萬鍛、再び鑛ならず。唯だ恐らくは小を得て足れりと爲ることを。貴ぶべし、五位偏正の㋳功勳に依つて、但だ四智を證するのみに非ず、三身も亦體中に圓かなり。見ずや大乘莊嚴論に曰く、「八識を轉じて四智と成し、四智を束ねて三身を具す」と。是の故に曹溪大師偈あり、曰く、「自性㋮三身を具す、發明すれば四智を成す。」又曰く、「清淨法身は儞が性、圓滿報身は儞が智、百億化身は儞が行。」

洞山良价和尚五位偏正の頌

正中偏。三更初夜月明の前、怪しむこと莫れ相逢ふて相識らざることを、隱々として猶ほ舊日の嫌を懷く。

夫れ正中偏の一位は、大死一番、団地一下、見道入理の正位を指す者なり。若し其れ眞正參玄の上士有つて、密參功積み、潛修力充ちて、忽然として打發するときは、虛空消隕し鐵山摧く。上、片瓦の頭を蓋ふなく、下、寸土の足を卓するなし。煩惱なく菩提なく、生死なく涅槃なし。一片虛凝にして㋘澄潭の底なきが如く、太虛の痕を絶するに似たり。往

ふ、事は一切諸法の緣起の事實にして、十界差別の有樣なり、本體たる眞如常住の理體と、一切諸法の事とは別處に別在するものに非ずして事のまゝに理なり、理のまゝに事なること恰も水と波の如し、理事相即相入して障碍あることなく圓融無碍なるを云ふ。

㋳功勳。功勳五位なり、作者に異說あること偏正五位の如し、然し洞山禪師の作と云はる。(一)向、(二)奉、(三)功、(四)共功、(五)功々、是なり、偏正五位は宇宙の眞相、諸法の本末を明かにしたるものにして、此の功勳五位は其の究竟地に到達する進修の功を明かにしたるものなり。

㋮三身。法身、報身、化身なり、又化身の代りに應身を入るゝこともあり。

㋘澄潭。澄み渡りたる淵のこと

往此の一位を認得して、以て㋑大事了畢と爲し、以て佛道成辨すと謂つて、死守して放つこと無し。其れ此を之れ死水裏の禪と道ひ、棺木裏の守屍鬼と爲す。㋺任使ひ耽著して三四十年を經るも、獨覺自了の小窠窟を出づること能はず。所以に言ふ、機、位を離れず、毒海に墮在すと。此れは是れ法華に謂ふ所の正位に、證を取る底の大癡人なり。假設ひ平等無差別の眞智を明了すること有るとも、萬法差別の妙智を煥發すること能はず。是の故に寂靜無爲、空閑陰處に在つては、内外玲瓏、了々分明なりと雖も、觀照纔かに動搖騷閙、憎愛差別の塵緣に涉れば、則ち半點の氣力なし。衆苦逼迫す。此の㋩重痾を救はんが爲に、假に且く偏中正の一位を設く。

偏中正。失曉の老婆古鏡に逢ふ、分明に覿面更に眞なし、更に頭に迷ふて還つて影を認むることを休めよ。

行者、若し彼の正中偏に住著するときは、則ち智常に向背して、見處㋥偏枯なり。是の故に參玄の上士は常に動中、種々差別塵境の上に坐臥して、悉く目前の老幼尊卑堂閣廊廡、草木山川等の萬法を把つて、以て我が自己本來具足、眞正清淨の面目と爲し、明鏡に對して、自ら面目を見るが如し。一切處に於て是の如く觀照して、歲月を重ぬるときは、自然に彼此、我が家一枚の寶鏡と

㋑大事了畢。大悟徹底の意なり。
㋺任使。「たとひ」なり。
㋩重痾。重き持病の意なり。
㋥偏枯。偏狹なるを云ふ。

為る。是に於て兩鏡の相照して、中心一點の影像なきが如く、心境一如、物我不二、白馬蘆花に入り、銀盌に雪を盛る、此れを寶鏡三昧と謂ふ。❼涅槃經に謂ゆる如來は目に佛性を見ると、是の謂なり。此の三昧に入得するときは大白牛兒推せども去らず、立地に眞俗不二、唯有一乘、中道實相、第一義諦、平等性智を證得して、目前に運出す。學者若し此の田地に到つて以て足れりとせば、則ち亦是れ舊に因つて❽二乘小果の深坑に墮す。何が故ぞ、菩薩の威儀を知らず、佛國土の因緣を了せざるが故に、祖師此の患難を救はんが為に、重ねて假に正中來の一位を設く。

正中來。無中に路あり塵埃を出でず、但だ能く當今の諱に觸れず、也た前朝斷舌の才に勝れり。

此の一位は、正乘の菩薩、上位に證を取らざることを明す。菩薩既に如上の所證を以て足れりと為す、轉た進んで退かず、無功用海中、無緣の大悲を煥發し、四弘清淨の大誓に依つて、上求菩提下化衆生の願輪に鞭つ。所謂向去中の卻來、卻來中の向去なる者乎。明暗雙々底の受用を知らしめんが為に、且く兼中至の一位を設く。

兼中至。兩刃鋒を交へて避くることを須ひず、好手還つて火裏の蓮に同じ、宛然として自ら衝天の氣

❼涅槃經。涅槃は梵語涅槃那(Nirvāṇa)の略にして、寂滅、圓寂、滅度、無爲などと譯す、涅槃經は「大般涅槃經」の略、釋尊將に入滅せられんとする時、純陀長者より最後の供養を受け、爲に大衆に向つて、「一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易」の深理を說き玉ひし經なり。北涼、曇無讖の譯、南北兩本あり、南本は三十六卷、北本は四十卷あり。

❽二乘小果。聲聞、緣覺の所入する小乘の劣果を云ふ。

あり。

此の一位は、菩薩、明暗不二の法輪を撥轉し、紅塵堆裏灰頭土面、聲色隊中七狂八顚、火裏の蓮華の火に逢ふて、色香轉々鮮明なるが如し。入鄽垂手の他受用、謂ゆる途中に在つて家舍を離れず、家舍を離れて途中に在らず。是れ凡、是れ聖、魔外も辨ずること能はず、佛祖も手を挾むこと能はず。心を擧して向はんと擬すれば、兎角龜毛別山を過ぐ。者裏猶は是れ、他の穩坐地に非ず。是の故に謂ふ、宛然として自ら衝天の氣有りと、畢竟如何。須らく知るべし猶ほ兼中到の一位あることを。

兼中到。有無に落ちず誰か敢て和せん、人々盡く常流を出でんと欲す、
折合還つて炭裏に歸して坐す。

㊉鵠林、著語して曰く、「德雲の閑古錐、幾か妙峯頂を下る、他の癡聖人を傭ふて、雪を擔つて共に井を塡む。學者若し洞山の兼中到の一位を透得せんと欲せば、先づ須らく此の頌に參ずべし。寬延第三庚午の天林鐘吉祥辰、沙羅樹下白隱老衲述ぶ。」

或時、先師予に語つて曰く、「洞山五位の頌、各々美を盡せり矣。中に於て兼中到の一頌、善を盡さざるに似たるか、子、奈如とか思へる。」予曰く、「然り矣。若し雲門・臨濟の宗旨を以て言はば、此の一頌大いに劣れり、洞山の作に非ざるに似たり。彼の宗風は審細に義を論ず、是の故に此の頌、是

㊉鵠林。白隱禪師の號なり、師以後此の法流にあるものを鵠林派と云ふ、現今臨濟の宗旨、大概れ此の末流に非ざるはなし。

の如く指示して、全く一字子の失なし。若し東山下の事を以て之を頌せば、雪竇の德雲の閑古錐(ハ)偈、誠に善盡し美盡すと謂つべきか。尊意如何。」先師應諾々々して曰く、「誠に然り。」因つて此の偈を以て、洞山に代別して茲に著くる而已。

國譯五家參詳要路門第四

第四　潙仰宗は作用を明かにし親疎を論ずるを旨と爲す

師諱は靈祐、百丈に嗣ぐ。福州趙氏の子、初め百丈に參ず。侍立する次で、夜深けぬ。丈曰く、「看よ、爐中火有りや否や。」師之を撥ひて曰く、「無し。」丈、身を起して深く撥ひて少火を得たり。擧して之を示して曰く、「汝無しと道ふ、者箇、聻。」師大悟す、禮謝して所見を陳ぶ。丈曰く、「此れは是れ暫時の岐路のみ。經に云く、『佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし。時節既に至りぬれば迷の忽ち悟るが如く、忘の忽ち憶するが如し。方に己が物を省みるに、他より得ず。』故に祖師曰く、『悟了同未悟、無心亦無法』と、只だ是れ虛妄凡聖等の心なければ、本來の心法元自ら具足す。汝今既に然り、善く自ら護持せよ。」

仰山諱は慧寂、潙山に嗣ぐ。韶州葉氏の子、仰、親を辭して㋑遊方の日、人之に戯ぶる者あり。仰の扇上に於て題して曰く、「寂子去つて行脚、諸魔誰をしてか滅せしむ。」仰續いで曰く、「龍、蛇腹の中に生ず、他の十箇月を借る。」人皆之を異とす。蓋し仰は屠門に出づ、諸魔或は猪毛と曰ふ。初め耽源に參す。已に㋺玄

㋑遊方。遊歷、或は行脚の意なり。
㋺玄旨。深旨なり、蘊奥なり。

旨を悟る。源、仰に謂つて曰く、「國師當時、六代祖師の圓相共に九十六箇を傳へ得て、老僧に授與して曰く、『吾が滅後三十年、南方に一の沙彌あり、到り來つて大いに此の教を興さん。次第に轉授して斷絶せしむること毋れ』と。我れ今汝に付す、汝當に奉持すべし。」遂に其の本を將つて仰に付す。仰一覽して便ち火卻す。源、一日、仰に問ふ、「前來の諸相甚だ宜しく秘惜すべし。」曰く、「當時看了つて便ち燒卻せり。」源曰く、「吾が此の法門、人能く會することなし、唯だ先師及び諸祖、諸大聖人方に㋩委悉すべし、子何ぞ燒くことを得たる。」仰曰く、「某甲、一覽して便ち其の意を知る、但だ用ひ得て本を執るべからず。」源曰く、「然も此の如くなりと雖も子に於て卽ち得たり、後人、之を信じ及ぼさず。」仰曰く、「和尙若し要せば、重ねて錄せんこと難からず。」卽ち重ねて一本を集めて上呈す。且つ遺失することなし。源曰く、「然り。」

香嚴智閑禪師、潙山に參ず。山問ふ、「我れ聞く、汝百丈先師の處に在つて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと。此れは是れ汝聰明靈利、意解識想、生死の根本、父母未生の時、試みに一句を將道へ看ん。」嚴、一問せられて、直に得たり茫然たることを。㋥寮に歸つて平日看過する底の文字を將つて、從頭に一句を尋ねて㋭酬對せんと要すれども、竟に得ること能はず。乃ち嘆じて曰く、「畫餠、餓に充つべからず。」屢々潙山の說破を乞ふ。山曰く、「我れ若し汝に說似せば、汝已後我れを罵り去ら

㋩委悉。詳細に知るを云ふ。
㋥寮。室の意なり。
㋭酬對。應答の意なり。

ん、我が說く底は是れ我が底、終に汝が事に（へ）干らず。」嚴遂に平昔看過する底の文字を將つて、燒卻して曰く、「此の生に佛法を學ばず、也た且つ箇の長行の粥飯僧と作つて、心神を役することを免れん。」乃ち泣いて潙山を辭して、直に南陽に過ぎて、忠國師の遺蹟を覩て、遂に憩止す焉。一日草木を（ト）芟除す。偶々瓦礫を拋つて、竹を擊つて聲を作す。忽然として省悟す。遂に歸つて沐浴し、香を焚いて遙かに潙山を禮す。讚して曰く、「和尙の大慈恩、父母に（チ）逾ゆ、當時若し我が爲に說破せば、何ぞ今日の事有らん。」

潙仰の宗風、審細にして老婆の臭乳に似たりと雖も、宗旨の嶮なること、他師に過ぐることは、香嚴の爲に一言を與へず、他の存せざる所、依行すべきに堪へたるを以てなり。後人是を以て宗極に通ずべき耶。

潙山茶を摘む次で、仰山に謂つて曰く、「終日茶を摘む、只だ子が聲を聞いて、子が形を見ず。」仰、茶樹を撼す。潙曰く、「子只だ其の用を得て、其の體を得ず。」仰曰く、「未審し和尙如何。」潙良久す。仰曰く、「和尙只だ其の體を得て、其の用を得ず。」潙曰く、「子に三十棒を放す。」仰曰く、「和尙の棒は某甲喫す、某甲が棒は誰をしてか喫せしめん。」潙曰く、「子に三十棒を放す。」

潙山睡る次で、仰山の來るを見て、潙便ち（リ）面壁す。仰曰く、「和尙何ぞ此の如くなることを得たる。」潙起つて曰く、「我れ適來一夢を得たり、儞試みに我が爲に原ね看ん。」仰一盆の水を度す。潙便ち

（へ）干らず。關與せずとの意なり。
（ト）芟除。不用の雜草木を刈り取るの意なり。
（チ）逾ゆ。超ゆなり。
（リ）面壁。壁に向つて坐す。今は人なき方を向いて坐禪するをいふ。達磨の少林九年面壁に倣ふ。

面を洗ふ、少頃あつて香嚴至る。潙曰く、「我れ適來一夢を得たり、寂子我が爲に原ね了る、汝更に原ね看ん。」嚴一盞の茶を點じ來る。潙曰く、「二子の神通、鶖子(ヌ)目連に過ぎたり。」

潙山因に仰山に問ふ、「寂子、心識微細の流注、無にし來ること幾年をか得たる。」仰山敢て答へず、却つて云く、「和尚、無にし來ること幾年ぞ矣。」潙曰く、「老僧、無にし來ること已に七年。」潙又問ふ、「寂子如何。」仰曰く、「惠寂正に鬧し。」虛堂拈じて曰く、「古人、玄微を及盡するすら猶ほ走作を恐る、今人只管孟八郎にして道ふ、總に是れ(ル)五逆の人、雷を聞くと。」

潙山、仰山に問うて云く、「寂子如何。」仰云く、「和尚、他の見解を問ふか、他の行解を問ふか。若し他の行解を問はゞ、某甲知らず。若し是れ見解ならば、一瓶の水を一瓶の水に注ぐが如し。」雲門云く、「某甲が見處、從上の諸聖と(ヲ)一絲毫許りも移易せず。」

仰山、潙山に問うて曰く、「百千萬境、一時に來るとき如何。」潙山云く、「青是れ黃にあらず、長是れ短にあらず、諸法各々自位に住す、汝が事に干るに非ず。」仰山則ち作禮す。

中邑洪恩禪師、僧の來るを見る毎に、手を拍して和々の聲を作す。仰山謝戒す。邑、來るを見て、禪牀上に於て口を拍して曰く、「和々。」仰山卽ち西より東に過ぐ。邑又口を拍して、和々の聲を作

(ヌ)目連。大目揵連（Mahāmaudgalyāyana.）の略、釋尊十大弟子の一人にして、神通第一なりしと云ふ。

(ル)五逆の人。五逆罪を犯せる人の意なり。

(ヲ)一糸毫。少しもの意なり。

す。仰山又東より西に過ぐ。邑、口を拍して和々の聲を作す。仰山又中心に立つ、然して後に謝戒し了る、卻つて退いて後に立つ。邑云く、「什麼の處より此の三昧を得來る。」仰山云く、「曹溪の印子上に於て脫し將ち來る。」邑云く、「汝道ふ、曹溪、此の三昧を用つて、什麼人をか接す。」仰云く、「一宿覺を接す。」仰又復た中邑に問うて云く、「和尙、什麼の處より此の三昧を得來る。」邑云く、「我れ馬祖の處に於て、此の三昧を得來る。」

此の中邑の一則は、潙仰宗の所據と爲すべき歟。

擧す。王太傅、招慶に入つて煎茶す。時に朗上座、明招の與に銚を把る。朗、㋑茶銚を飜卻す。太傅見て上座に問ふ、「茶爐下是れ什麼ぞ。」朗云く、「捧爐神。」太傅云く、「既に是れ捧爐神、什麼としてか茶銚を飜卻す。」朗云く、「仕官千日、失一朝に在り。」太傅拂袖して便ち去る。明招云く、「朗上座、招慶の飯を喫卻し了れり、卻つて江外に去つて野榸を打せん。」朗云く、「和尙作麼生。」招云く、「非人其の便を得たり。」雪竇云く、「當時茶爐を踏倒せん。」

㋑茶銚飜卻。碧巖集第四十八則にあり。

碧巖集第四十八則、茶道も亦向上出身の作用有ることを明す。茶道に本末中の三節あり。本とは人を成すなり。人各々皆散亂麤動の器のみ。故に恒事を以て、自然に定を敎ふ、我れを誡むるを戒と爲す、亂れざるを定と爲す、物に徹するを慧と爲す。是を以て點茶に約して親疎を論ずるのみ。

主に五事あり。一に室を掃ひ、二に物を㋑居ゑ、三に具を改め、四に茶を點ず、五に客を接す。客と作るに五あり、一に室に進み、二に座に著く、三に衣を改め、四に茶を喫す、五に物に徹す。夫れ人、平生を精錬すれば、作用自ら清し。是を本を成すと曰ふ。宗旨に參詳し、渴仰の理に至る、是を末を成すと曰ふ。事理に通達し、物々惑ふことなし、是れを中道の理を得ると曰ふ。凡そ三義を得、十道に通ずるときは、則ち謂つべし、茶道の要を究盡すと。此の問答の如き三義、眼瞎す、笑ふべきに堪へたるのみ。雪竇の拈語、茶道を蘇活す、請ふ高く眼を著けよ。

㋑居ゑ。据ゑるなり、茶室内に器物を配置するなり。

國譯五家參詳要路門第五

第五　法眼宗は利濟を先にし親疎を論ずるを旨と爲す

師諱は文益、餘杭魯氏の子、祝髮して開元寺覺律師に詣して、具戒を受く。覺、化を四明に盛にするに及んで、師往いて㋑毘尼を習ふ。文章に工なり、覺之れを奇とす、目けて吾が門の游夏と爲す。師、玄機一發するを以て、雜務倶に捐つ、錫を振つて南邁して、福州に抵る。初め長慶に見ゆ、契悟する所なし、進修の輩と湖外に之かんと擬す。既に發して雨に値ふ、㋺少く城西の地藏に憩ふ。堂に入つて、藏の地爐に坐するを見る。師に問ふ、「此の行何くにか之く。」曰く、「行脚し去る。」曰く「行脚の事作麽生。」曰く、「知らず。」曰く、「知らざる最も親し。」三人火に附く。因に肇論を擧す、「天地と我れと同根」の處に至つて、藏又曰く、「山河大地と自己と是れ同か是れ別か。」修曰く、「同。」藏、兩指を竪てゝ熟々之を視て、兩箇と云つて便ち起ち去る。雨霽れて辭して行く。藏之れを送つて問うて曰く、「上座、尋常三界唯心と説く。」乃ち庭下の石を指して曰く、「且く道へ、此の石心内に在るか心外に在るか。」師曰く、「心内に在り。」曰く、「行脚の人、甚の來由を著

㋑毘尼。毘奈耶(Vinaya)の略、調伏、離行とも譯す、舊譯に律と云へると同じ、道德的規律なり、能く衆生の身、口、意の三業を調和し、諸の惡業を伏滅して、諸の善業を作さしむるが故に此の名あり。

㋺少く。暫くなり。

にか、塊石を安じて心頭に在るや。」師、㊃竄して以て對ふること無し。遂に包を放つて倶に決擇を求む。㊄月餘に近うして見解を呈し、道理を說く。藏曰く、「佛法は是れ恁麼にあらず。」曰く、「某甲此に到つて辭窮り理絕せり。」藏曰く、「若し佛法を論せば、一切現成。」師大悟す。臨川・崇壽に出世す。

㊅僧、師に問ふ、「慧超、和尚に咨す、如何なるか是れ佛と。」師云く、「汝は是れ慧超し。」則監院の如き師の會中に在つて、也た曾て參請入室せず。師一日問うて云く、「則監院、何ぞ來つて入室せざる。」則云く、「和尚豈に知らずや、某甲青林の處に於て箇の入頭あり。」師云く、「汝試みに我が爲に擧せよ看ん。」則云く、「某甲問ふ、如何なるか是れ佛。林云く、丙丁童子、來求火と。」師云く、「好語、恐らくは錯つて會せん。更に說くべし看ん。」則云く、「丙丁は火に屬す、火を以て火を求む、某甲が如きは是れ佛、更に去つて佛を覓む。」師云く、「監院、果然として錯つて會し了る。」則、不愜して便ち㊆起單す、江を渡つて去る。師云く、「此の人、若し回らば救ふべし、若し回らずんば救ひ得ず。」則、中路に到つて自ら㊇忖つて云く、「他は是れ五百人の善知識、豈に我れを賺すべけんや。」遂に回つて再び參す。師云く、「儞但だ我れに問へ、我れ儞が爲に答へん。」則便ち問ふ、「如何なるか是れ佛。」師云く、「丙丁童子、來求火。」則言下に大悟す。如今有る者は只管瞪眼して、解會を作す、所謂彼れ既に瘡なし、之を傷ること勿れ。這般の公案、久參の者は一擧

㊃竄。「ゆきつまる」の意なり。
㊄月餘。一ヶ月餘にしてなり。
㊅慧超問佛は碧巖第七則なり。
㊆起單。單は僧堂にて雲水の坐する處を云ふ。
㊇忖。思ふ、或は度（はかる）ふなり。

して、便ち落處を知る。法眼下、之を箭鋒㋠相拄ふと謂ふ。更に五位、㋷君臣、㋦四料簡を用ひず、直に箭鋒相拄ふることを論ず。是れ他の家風、此の如し。一句下に便ち見ば、當陽に便ち透らん。若し句下に向つて尋思せば、卒に摸索不着ならん。師出世して五百衆あり、是の時佛法大いに興る。時に韶國師久しく疎山に依る、自ら旨を得たりと謂へり。乃ち疎山平生の文字頂相を集めて、衆を領じて行脚す。師の會下に至つて、他亦去つて入室せず。只だ參徒をして衆に隨つて入室せしむ。一日、師陞座。僧あり問ふ、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」師云く、「是れ曹源の一滴水。」其の僧惘然として退く。韶、衆に在つて之を聞いて、忽然として大悟す。後出世して師に承嗣す。頌あり、呈して曰く、「通玄峯頂、是れ人間にあらず、心外無法、滿目青山。」師印して云く、「只だ這の一頌、吾が宗を繼ぐべし。子後に王侯の敬重あらん、吾れ汝に如かず。」師、圓成實性の頌に云く、「理窮つて情謂を忘ず、如何が喩齊あらん。到頭霜夜の月、㋸任運に前溪に落つ、菓熟して猿を兼ねて重く、山長うして路迷ふに似たり、頭を擧ぐれば殘照在り、元是れ住居の西。」

㋾擧す。陸亘大夫、南泉と語話する次で、陸云く、「肇法師道く、「天地と我れと同根、萬物と我れと一體なり。」と。甚だ奇怪なり。」南泉、庭前の花を指して、大夫を召して曰く、「時の人此の一株の花を見

㋠相拄ふ。相支ふなり。
㋷君臣。君臣五位にして、作者不明、洞山の作とも其の弟子曹山の作とも云ふ。
㋦四料簡。臨濟禪師の四料簡を云ふ、洞山の五位と共に廣く禪門に行はる。
㋸任運。自然の意なり。
㋾之れは碧巖第四十則なり。

ることし、夢の如く相似たり。」

石頭、因に肇論を閲して、此の萬物を會して、自己と爲すと云ふ處に至つて、豁然として大悟す。後一本の參同契を作る、亦此の意を出でず、看よ他、恁麼に問ふ。且く道へ、什麼の根にか同じく、那箇の體にか同じき。這裏に到つて也た奇特なることを妨げず、豈に他の常人、天の高き地の厚きを知らざるに同じからんや。豈に恁麼の事あらんや。陸亘大夫恁麼に問ふ。奇なることは甚だ奇なり、只だ是れ教意を出でず、若し教意是れ極則なりと道はゞ、世尊何が故ぞ、更に花を拈じ、祖師更に西來して什麼にかせん。南泉の答處、衲僧の鼻巴を用ひて、他の爲に痛處を拈出して、他の窠窟を破る。遂に庭前の花を指して、大夫を召して云く、「時の人此の一株の花を見ること、夢の如くに相似たり。」人を引いて萬丈の懸崖上に向つて、打一推して他の命根をして斷せしむるが如し。巖頭道く、「此れは是れ向上の人の活計。只だ目前の些子を露して、電拂に如同す。」南泉の大意是の如し、虎兒を擒へ龍蛇を定むる底の手脚ありて、這裏に到つて、也た須らく是れ自ら會して始めて得べし。道ふことを見ずや、向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。看よ他の雪竇頌出することを。曰く、「聞見覺知一々に非ず、山河は鏡中に在つて觀ず、霜天月落ちて夜將に半ならんとす、誰と共にか澄潭影を照して寒じ。」

南泉一株花の話、是れ宗門の骨髓なり。先師、雲山老宿と商量するが如き、夫れ雲門法眼の二宗

は、大徴詩の通韻、叶韻の如し。本（ヲ）巖頭雪峯下より出づ。巖頭は瑞巖主人公に出でて、遊化三昧、受用縦横たり。故に潙仰の作用、高貴尊勝の風を出す。雪峰は即ち玄沙雲門を出す。玄沙一轉して地藏を得たり。又一轉して法眼宗を得たり、故に雲門法眼の二宗は言句迷ひ易し。五祖弘忍大師、深く願輪に乘じ、再來して（カ）法演と爲る。雲門臨濟の受風を發し得て、車の兩輪の如し。是れを東山下の暗號密令と道ふ。圓覺佛光國師、大宋に在つて虛堂室中に往いて、參詳許多の次で、卒に言句三昧を得たり。雲門大師、心（ヨ）嫌然ならず、再び大燈國師と作つて、我が宗を扶起す、別に生涯あることを示す。又（タ）關山（レ）一休等、專ら五家に來由あることを教喩す。祖師、兒孫を加助すること是の如く親切なり。眞淨文禪師頌あり、曰く、「雲門臨濟百花の春、一一靈機總に神あり。總に神あり、祖庭復た春ならずや。」

（ヲ）巖頭。雲巖禪師を指す。
（カ）法演。五祖法演禪師なり。
（ヨ）嫌然ならず。飽き足らず、即ち不滿の意なり。
（タ）關山。關山慧玄禪師、即ち妙心寺開山無相大師なり。
（レ）一休。大德寺の一休宗純禪師なり。

國譯五家參詳要路門附錄　二門

㋑臘八示衆　第一

朔日夜示衆に曰く、「夫れ禪定を修する者は、先づ須らく厚く蒲團を敷き ㋺結跏趺坐して、寛く衣帶を繋け、㋩脊梁骨を竪起し、身體をして齊整ならしむべし。而して始め數息觀を爲すべし。無量三昧の中には、數息を以て最上と爲す。氣をして㋥丹田に滿たさしむ、而して後に一則の公案を拈じて、直に須らく㋭斷命根を要すべし。若し是の如く歲月を積んで怠らずんば、驀け大地を打つて失すること有るも、見性は決定して錯らず。豈に努力せざらんや、豈に努力せざらんや。」

第二夜示衆に曰く、「㋬楞嚴經に曰く、『一人道を成じて眞に歸すれば、十方虛空悉く消殞す』と。凡そ道を修する處、必ず護法神あり、魔障神あり。譬へば城市に人多く聚れば、賊盜亦隨つて聚るが如し。心願強きときは、護法神力を得、心魔動くときは障神力を得。是の故に學道は、先づ須

㋑臘八。臘月、即ち十二月八日のこと、此の日釋尊、菩提樹下に於て成道し玉へりとて、各宗法會を執行す、之を成道會と云ふ、禪宗の各道場にては十二月一日より八日まで、臘八接心とて最も嚴重なる接心會を行ひ、雲水の修行を進め、又一兩禪錄成道の旨を學ぶなり。

㋺結跏趺坐。圓滿安坐の義、身體疲倦せず、精神また安穩、覺王も佛弟子の之を行ふを見ては稱揚すといへり。これに全跏趺坐と半跏趺坐の二種あり、足の表を趺といひ、裏を跏といふ、兩足互に蟠結して

らく大誓願を發し、辭讓謙遜を專にし、心を一切衆生の下に置き、咸く皆度脫せんことを要すべし。佛祖の大道、願力なくして能く徹底する者あることなし。譬へば射を學ぶ者の如く、一箭一箭、(リ)鵠に中らんことを欲す。始め中らずと雖も、久しくして已まざれば、必ず其の妙を得。參學も亦復た然り。一念々々、大憤志を起し、精神を抖擻して、須らく大道の淵源に徹せんことを要すべし。是の如く念々退かざるときは、一切の法理、現前せずと云ふことなし。無上菩提、猶ほ俯して(チ)地芥を拾ふが如くならんと。

第三夜示衆に曰く、「如來の正法眼藏、的々相承、是れを(ヌ)傳燈の菩薩と謂ふ。如來の正法眼藏、能く護持する、是を護法の菩薩と謂ふ。傳燈と護法とは猶ほ師家と檀越との如し、師檀合はざるときは、大法獨り行れず、而して護法を最上と爲す。昔弘法大師嘗て大日如來を祈請して曰く、『誰か是れ護法の最上なる耶。』如來告げて曰く、『辯才天に如くはなし』と。是れ傳燈は第一たりと雖も、若し護法の力なきときは、佛法只だ獨り行はれざる所以なり。是の故に護法を最上と爲す。又坐禪は一切諸道に通ず。若し神道

坐するなり、即ち右足を以て左腿上に安じ、左足を以て右腿上に安ずる坐相を全跏趺坐と云ひ、右足を以て左腿上に安ずるのみを半跏趺坐と云ふ。

(ハ) 脊梁骨。脊骨(せぼね)のことなり。

(ニ) 丹田。下腹部なり。

(ホ) 斷命根。一生懸命、或は無我に入るの意なり。

(ヘ) 楞嚴經。梵語 Śūraṅgama-sūtra. 具には「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」と云ひ、又略して「首楞嚴經」とも云ふ、唐の神龍元年天竺沙門、般剌密諦譯す。

(ト) 鵠。的なり、的の眞中を云ふ。

(チ) 地芥。芥は「ちり」なり、地上に落ちてある塵芥を云ふ。

(ヌ) 傳燈。傳法と云ふが如し。

を以て之れを道はゞ、身は即ち天地の小なる者なり、天地は即ち身の大なる者なり。天神七代、地神五代、並に八百萬神、悉く皆身中に鎮坐せり。此の如く鎮坐の諸神を祭祀せんと欲せば、神道に謂ゆる靈宗の神祭に非ずんば、之れを祭ること能はず。靈宗の神祭は禪定に非ずんば、之を祭ること能はざるなり。脊梁骨を豎起し、氣を丹田に充して、正身端坐、眼見耳聞、一點の妄想を(六)雜へず、(七)六根清淨を獲るときは、則ち是れ天神地祇を祭るなり。一炷の坐と雖も、其の功德鮮しと爲す。是の故に(八)道元禪師曰く、『勤むべきの一日は、貴ぶべきの一日なり。勤めざるの百年は、恨むべきの百年なり』と。嗚呼、恐るべく愼しむべし。」

第四夜示衆に曰く、「數息觀に六妙門あり。所謂、數、隨、止、觀、還、淨なり。息を數へて三昧に入る、是を數と謂ふ。息を數へて漸く熟すれば、唯だ出入の息に任せて、三昧に入る、是を隨と謂ふ。十六特勝等、要を以て之れを言はゞ數隨の二字に歸す。故に(九)初祖大師曰く『外諸緣を息して、内心喘ぐことなく、心牆壁の如くにして、以て道に入るべし』と。内心喘ぐことなしとは、根本に依らざるなり。心牆壁の如くとは、直向進前することなり。此の偈甚深なり、汝等請ふ試みに本參の話頭を取つて、牆壁の如く、直に進み去れ。使令ひ土を以て大地を擊つて失することあるとも、見性は決定して徹せざることなけん。努力せよや、努力せよや。」

(六)雜。交、或は混の意なり。
(七)六根。眼、耳、鼻、舌、身、意の六なり。
(八)道元禪師。日本曹洞宗の祖、承陽大師なり。
(九)初祖大師。達磨大師なり。

第五夜示衆に曰く、「所謂、接心は長期百二十日、中期九十日、下期八十日なり。尅期決定して、大戸を閉めんと欲す、故に一衆戸外に出でず、況んや雜談をや。參禪は只但だ勇猛の一機のみ。汝等聞かずや、近頃、㋕庵原に平四郎と云ふものあり、不動尊の石像を彫刻して、以て吉原山中瀑布の處に安置す。忽ち瀑水の漲落するを覺るに、水泡、珠を跳して前泡後泡、或は流るゝこと一尺にして消し去り。或は二尺三尺にして消し去り、乃至二間三間にして消し盡く。宿緣の感ずる所、竟に世間の無常、都べて水泡の如くなるを覺知す。殆んど一身に逼つて、安處するに堪へず。偶々人の瀑水法語を讀むを聽くに、曰く、『勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に亘る』と。因つて忽ち大憤志を發して、獨り浴室に入つて、堅く㋵戸牖を鎖し、脊梁骨を竪起し、兩拳を握り、雙眼を㋟瞪り、純一に坐禪す。妄想魔境、蜂午紛起し、法戰一場して、終に斷命根を得て、深く無想定に入る。天明に及んで鳥雀の舍を繞つて啼くを聞き、自ら全身を求むるに終に得べからず。唯だ兩眼脫出して、地上に在るを看る。須臾にして忽ち爪際の痛を覺ゆ、而して兩眼位に歸る、四支還つて之を獲たり。是の如くすること三夜、坐起一に前の如し。第三日の朝に及んで、面を洗ふて庭樹を視るに、大いに平日の所見に異なり、甚だ奇異と爲す。仍つて隣僧に問ふ、總に辨せず、因つて鵠林に見えんと欲す、轎を昇いて薩埵嶺を踰ゆ。㋛子浦の風景を眺望して、始めて知る、先に得る所

㋕庵原。靜岡縣庵原郡なり。
㋵戸牖。戸や窓を云ふ。
㋟瞪。見つめる、或は見ひらくなり。
㋛子浦。田子浦のことなり。

[illegible]悉皆成佛底の端的なることを。後に鶴林に見えて、屢々㋞鑪鞴に入つて、數段の因縁を透過す。彼は是れ一个の凡夫なり、未だ曾て參學の事を知らず。然れども纔かに兩三夜にして、是の如きの事を證す、唯だ勇猛の㋡一機、妄想と相戰つて勝つことを得る者なり。汝等何ぞ勇猛の憤志を發せざるや。」

[illegible]に曰く、「時に侍者茶を行く。」建仁開山千光祖師、入宋の時、偶々病に中つて㋧瘴を患ふ。一老翁あり、爲に茶を飲ましむ。瘴速かに治す。因つて茶の實を齎し來りて、㋤禁廷に貢して、之を宇治縣に種ゑしむ。又㋶明惠上人に贈る。上人亦之を栂尾に種う。故に千光・明惠を以て茶の祖と爲す矣。夫れ茶の能たる、苦を以て體と爲す、故に能く心の臓を養ふ。心の臓治るときは、四臓自ら平かなり。明惠上人曰く、『茶は能く睡眠を除く、修道の人喫すべき者なり』と。又外に之を論ずれば、心の臓を養ふに苦修を第一と爲す。專ら精彩を著けて、苦修骨に徹するときは、神氣朗然たり。故に慈明曰く、『古人の刻苦なる、光明必ず盛大なり』と。禪關策進に曰く、『心を役して已まざれば、果證を得る』と。果證は決定の義なり。是の故に汝等宜しく苦修を貴ぶべし。近頃奥州に交寘和尚と云ふ者あり、予に見えんと欲して百計すること六年、遂に來つて掛搭を求む。予が曰く、『賜

㋞鑪鞴。鑄物師の用ふる「ふいご」なり、之は其の會下或は門下となりて訓練を施さるゝを云ふ、禪門にて能く用ひらるる語なり。
㋡一機。一念の意なり。
㋧瘴。黄疸のことなり。
㋤禁廷。宮廷に同じ。
㋶明惠上人。栂尾高山寺に住す、華嚴、禪、密等の諸宗を兼修せらる。

紫の大和尚なるも、法眼未だ明かならざれば、予に於ては小僧と爲す、呵罵すれども猶ほ未だ足らず。若し身に世儀を存し、意に尊大を抱かば、予に見えて何の益かあらんや。」曰く、『某、誠に大法の爲に㊃乍入叢林の沙彌なり、請ふ和尚、慈悲を惜まず接得せよ。喝雷棒雨、豈に敢て命を惜しまん哉。』因つて入室を許す、一夏九旬の間、刻苦精錬、予が手中の棒を喫すること、擧げて計るべからず。果して我が宗向上の大事を契證す。行くに臨んで長く弟子の禮を取ることを約す。然れば則ち勇猛の一機、竟に法成就に至る、愼まざる可けんや。」

第七夜示衆に曰く、「一子出家すれば九族、天に生ずと。夫れ出家は、須らく眞の出家を要すべし。所謂、眞の出家とは、大誓願を憤起し、勇猛精進にして、直に命根を斷すれば、豁然として法性現前す、是れを眞の出家と謂ふ。九族生天も、亦眞實にして虛しからず。昔、播州に一りの女人あり、懷胎の夜に當つて、自ら願を發して曰く『此の兒若し男兒ならば、必ず當に出家せしむべし』と。其の夜夢に一りの老人あり、來り告げて曰く、『吾れは此の家九代已前の祖なり、死して㊈冥府に墮して無量の苦を受く、而今汝が勝願力に依恃して、永く地獄の苦を脱することを得たり。』又甲州に良山和尚と云ふ者あり。徒を匡し衆を領す。臘八、例に依つて衆と禪坐す。一夜其の亡母、刀を携へ來つて腋下に刺す、大いに叫ぶこと一聲、血を吐いて悶絶す矣。山、良久して㊉蘇す。次の日俄かに衆

㊃乍入。今入、或は新參の意なり。
㊈冥府。冥途、或は地獄と云ふが如し。
㊉蘇す。蘇生、「甦る」なり。

と別れて行脚す。一鉢三衣、風喰露宿、師を尋ね道を訪ふ。年を經て禪定頗る熟す、三昧に入らんと欲す。時に亡母復た來り現ず、纔かに眼を擧すれば、卽ち隱れ去る。他日深く三昧に入る、恰も海の湛然たるが如し。亡母來りて復た告げて曰く、『吾れ始め冥府に入る、鬼卒皆敬して曰く、是れ出家の母なりと。都べて苦惱なし、豈に思はんや、公の壯なるに及んで、獄卒皆曰ふ、將に謂へり、是れ出家の母なりと、卻つて是れ俗漢の母なりと。鐵棒鐵枷、呵責言ふべからず。其の恨骨に徹す、是の故に先の夜、來つて汝を刺す。然して汝悔いて寺を出でて行脚す。中ごろ來つて公を見る、生滅の念猶ほ未だ盡きず、故に隱れ去る。今定慧殆んど明かなり、吾が苦患亦盡きたり矣。㋣特に天上に生ずることを得たり、故に來つて謝を告ぐるのみ。』茲を以て之れを觀れば、汝等皆父母あり、兄弟あり、眷屬あり、生々を以て之れを數ふれば、豈に惟だ千萬人のみならんや、悉く皆六道に輪廻して、無量の苦を受く。汝等の成道を待つことは、猶ほ大旱に雲霓を望むが如くならん者なり。如何ぞ悠々として坐ながら之を見て大願を發せざらん乎。光陰惜む可し、時人を待たず、旃れを勉めよ、旃れを勉めよ。」

師一日、侍者に示して曰く、「予、侍者を使ふこと數十年、熟々之を見るに、三等の侍者あり、曰く孝、曰く正、曰く平なり。所謂、孝は唯だ事ふるに純業を以てして、能く常に師の意を安んずる者なり。所謂、正は一諾して能く命を須ひて、常に怠らざる者なり。所謂、平は孝正なくして、事ふるに㋔

㋣特に。ことさらに、おまけになり。
㋔庸常。普通、或は人並と云ふこと。

庸常を以てし、半須ひ半違ふ者なり。其の餘は言ふに足らざるのみ焉。在昔、阿難、佛に侍すること三十年、頗る聖意に合へり、佛、總持第一と稱し玉ふ。香林、雲門に侍すること十八年、紙衣に語句を錄して、鑒咦の宗を繼ぎ得たりき。天源の栢庵は大應に事へて、生前に自ら肖像を彫つて、師の點眼を受け、滅後常に此の像に奉じて在世に異ならず。入宋の時、但だ畫容を褁んで暫くも身を離さず。吾が先師白隱老漢は、祖翁透鱗に松蔭に侍して、寒夜、被㋨の衾褁に入つて、老軀を抱持して以て之を溫む。古人其の師に侍する、槩して此の如し、今人何ぞ之を懷はざるや。」

又示衆に曰く、「夫れ大法の關繋は至つて重し矣。命、懸絲の如し。若し一箇半箇、眞正の種草を打出して、這の的々相承、向上の大事を傳ふるにあらずんば、我れ亦佛法中の罪人のみ。風穴、已に此の嘆あり、況んや其の他をや。我れ熟々舊參の諸子を顧みるに、半箇も亦堪忍するなし。縱令ひ少分得力の者有るも、兩三世に過ぎず、泯然たる而已、豈に痛まざらんや。我が此の正宗は、㋳支竺扶桑、地を掃ふて盡く矣。北鬱東弗亦知んぬ可きのみ。我れ自ら之を證す、我が此の正宗、正に一日の天に在るが如し。汝等何ぞ大勇猛の心を憤起して、之れを明むることを欲せざらん乎。汝等、若し果して此の志なきときは、倶に是れ佛法中の罪人なり。此の日既に沒せば、四天下咸暗黑にして、護法の星辰も亦誰に依つてか世に出でん耶。乞ふ各々急に須らく志を起すべし。」言ひ訖つて涙屢々下る。

㋨衾。蒲團なり。
㋳支竺扶桑。支那、天竺、日本なり。

看經榜　第二

眞言門に三密相應の法あり。所謂印相明正なる、是れを身密と爲す。㊀神咒清朗なる、是れを口密と爲す。本尊と自身と不二なりと觀ず、是れを意密と爲す。禪門の諷誦に亦三密あり、正身端坐、㊁根に空缺なき、是れ身密。二には朗聲耳に徹して、能所不二なる、是れ口密。三には眼耳相交へて念念正眞なり、是れ意密のみ。若し能く通達して大自在を得ば、動と不動と當體寂滅、語と不語と眞箇圓融、念と無念と究竟平等、是れを衲僧門下眞正看經諷咒の法と爲すなり。學者宜しく委悉すべし。

夫れ如法の看經は自他の上に於て、各々四德を具す。初めに自の四德とは、一には三昧を助く、音聲、神に入つて、耳根圓通を得るが故に。二には障碍を滅す、善神來り護り、惡鬼怖れ潛むが故に。三には病患を除く、音㊂四大に徹して、氣血流溢するが故に。四には心願を滿す、運命日に改り、天眞に隨順するが故に。次に他の四德とは、一には諸天を歡ばしむ、威神を增長し、階位を升進するが故に。二には幽魂を救ふ、業報を消除して菩提心を發するが故に。三には見聞を益す、惡念を遠離し、信種を成就するが故に。四には畜類を利す、音聲の及ぶ所、普く勝緣を結ぶが故に。

論じて曰く、「見性修定は、禪門の正行、看經禮佛は、禪門の助道分のみ。㊃少林九坐、曾て看經の

㊀神咒。陀羅尼等をいふ。
㊁根。六根なり。
㊂四大。地水火風のことにて、全身の意なり。
㊃少林九坐。達磨大師が少林寺に九年間面壁修定せられたるを云ふ。

名なし。曹溪一世、何ぞ禮佛の勢有らん。然りと雖も、消業養道の方便たるに至つては、又先德必ず之れを破敗すること有るに非ず。是の故に、藥山看經、黃檗禮佛、薦福の弘辨、宣宗の問に答へ、永明の智覺、法華の業を兼ね、汾陽の一榻坐三閲藏、明教の三昧稱福祈懺、趙州三五夜にして、兩蛇口を爭ふの相を變じ、古鼎二十年にして、四眼、軀に萃まるの業を改む。舜老夫、日に定課あり、老に垂として益々堅し、即ち一日作さゞれば一日食はざるの語あり。杲佛照、深夜修敬して、未だ嘗て少しも懈らず。遂に雪頂手姿二人、堂に入つて異を顯すことを感ず。阿難、盡形壽、佛に事へて未だ究竟を得ず、滅後迦葉の惡手段に逢ふて、哭泣懺謝して、漸く室に入ることを得たり。俱胝三十年、咒を持して入證なしと雖も、後天龍に見え、㊀一指頭に透脱圓融、始めて驗を發するに及ぶ。爰に二義あり、彼の傳へ道ふが如き、關山三年、密に兩宮に祈り、南山每日恭しく一塔を營むの類、即ち悟後、傳法度生の壽を祈る。又大瘤多歲、馬祖の塔を禮し、乾峯七日、文殊の智を祈る者に至つては、未悟已前哀求懇禱得道の大願なり。玆に出つて之れを見れば、看經禮佛、亦捨つ可からざる底の理ある歟。間々宗匠ありて、之れを斥け之れを呵する者は、初心他佛を求めて、自佛を求めず、或は福壽を求め、或は利養を祈る。佛祖不傳の妙道を以て、胸間に掛在せざるときは、皆是れ邪魔の種族に墮す。最も祖師の

㊀一指頭。傳燈卷十一、俱胝の傳に、俱胝、一日實際に勘破せられ、憤慨やる方なく、偶杭州の天龍和尙の來るに會ふ、俱胝依つて問ふに、天龍一指頭を示す、俱胝玆に於て大悟す、之れより以後、他の所問に對し、言語を以て答へず、常に一指頭を竪つ。

眞風を戕害するに堪へたるが故なり。若し亦一等に之れを敗するを以て、是れを爲せば、內外障難、隙を窺ふて日に加はらん焉。我れ恐らくは佛法夫れ久しからざらん歟。故に無因和尙曰く、『我が門の禮樂は佛法久住の相のみ』と。學者宜しく之れを詳かにすべし。」

國譯五家參詳要路門　終

國譯五家參詳要路門に跋す

(イ)三光老師の五家要路を著述するや、諒に其れ故ある哉。今時、(ロ)知見解會を以て、正悟と爲すものあり、無事甲裏に坐在して、正修と爲すものあり、(ハ)不知不會を是れを向上の禪と爲すものあり、(ニ)昭昭靈靈を認めて、自己と爲すものあり、(ホ)湛湛寂寂に著して、禪定と稱するものあり、言句上に向つて、死模樣を作すものあり、(ヘ)古人の糟粕を嘗めて、奇特玄妙と爲すものあり、(ト)一聯の偈頌を綴つて、死活を論ずるものあり、(チ)胡喝亂棒を以て、(リ)大機大用と爲すものあり。中に就いて下劣なるは、念佛を以て公案と爲し、誦呪を以て(ヌ)定課と爲すものを生ず。看經禮拜して、淨土を願ひ、天堂を樂み、匆匆忙忙として、終日心身を勞役す。皆是れ(ル)禪病にして、

(イ)三光老師。東嶺和尚は三光窟又は不不庵主と號す、師年六十七にしてこの書を述す。

(ロ)知見解會。智慧や分別を以てなり。

(ハ)不知不會。知はしりた顏、會はひとりがてんなり。

(ニ)昭々靈々。目のさきにも鼻の先にもぶらついてゐるなど。

(ホ)湛々寂々。たゞ靜かに心をすましてゐればなどなり。

(ヘ)古人糟粕。古人の語言文字詩偈等をいふ。

(ト)一聯偈頌。一首の偈や頌をいふ。

(チ)胡喝亂棒。みだりに喝を下しむやみに棒を施すこと。

(リ)大機大用。これが禪宗の極意でござるのとの意。

(ヌ)定課。日々のきまりのしごとなり。

(ル)禪病。吾が宗では絶後に蘇生せぬ、悟は皆だめなり、病的ではほんたうの佛法の見解ではなしと。

(ヲ)誵訛因緣。佛祖向上の要路をとりつまんでの意。

(ワ)晦岩。名は照、越山に住す、

眞正の見解に非ず、豈に是れを五家の宗要と謂はんや。是の故に、三光老師、慈悲箇の痼疾を救はんが爲に、且く各家一二の㋾誵訛の因緣を撮出して、以て釘を拔き楔を抽く底の一方便と爲すのみ。若し或は㋻晦岩眼目あり、㋕希叟讃辭あり、何ぞ者般の杜撰を用ひんやと謂はば、阿呵呵。㋵君に勸む此の一盃の酒を盡せよ、西陽關を出でて故人なけん。咄。今也、㋟松雲主人、五家の要路に徹見するもの、實に今時の指南車と爲し、乃し衣資を喜捨し以て上梓して、之を世に共ふ矣。庶幾はくは鵠林の門風を扶起せんと欲するものか、其の志以て嘉尚すべし焉。且つ附錄二門は、初心禪者の座右に供して、以て睡魔を警むるものなり。因つて數語を綴つて、以て之を卷尾に贅すといふ。

時に㋹文政丁亥の秋九月　　㋞阿鼻窟老衲大觀叟

宋の淳熙年中、人天眼目三卷を著す、師承未詳なり。

㋕希叟。名は紹曇、宋の人、無準範に嗣ぐ、理宗の寶祐二年五家正宗贊一篇を編す。

㋵勸君。この詩は古人の詩の末句なり、こゝで己が一ぺんの擧揚をせずばの意にて、この著語をしるすなり。

㋟松雲主人。攝津國豐島郡池田在中川原松雲禪寺の住持某なり、師の參徒といふ。

㋹文政丁亥。丁亥は十年なり、仁孝天皇の御宇。

㋞阿鼻窟。大觀諱は文珠、別號擔雪、又阿鼻窟と號す、東嶺慈に嗣ぐ、丹州法常皇寺十世なり、この書及び宗門無盡燈論なども校訂し、この書の原本の板は師が自ら書せしを刻したるものなり。

五家參詳要路門序

夫五家之宗者、欲傳我宗乘向上大事而已、然只如解世間流布文字、妄解以爲要、故宗祖各各敎訓其宗要路、而分門戶、自爲五之一宗風、可知根本只向上大事也、五家即差別要門也、第一、臨濟之戰機鋒、亦有全提半提之別、第二、雲門之擇言句、亦有全提半提之別、第三、曹洞之究心地、亦有全提半提之別、第四、潙仰之明作用、亦有全提半提之別、第五、法眼之先利濟、亦有全提半提之別、曰全提者、如來正法眼藏、全分荷擔受用之義也、半提者、未及全提、或半或及十之一者也、半提之言類多難分、學者止于半途、爲究竟者、誠可憐愍邪、予三十年前、雖聞先師之命、至于變盡成五之大事、與雲門言句老僧今日徹、遊言句林中等之密意、漸聞信受、而尚未徹、參究已經三十餘霜、頗得其要領矣、天明戊申歲、予應八幡圓福之選、結夏之日告諸子曰、夫此山者、初祖大師與聖德太子、神佛値遇之靈迹、吾邦無比之祖場也、老僧無德當其選者、時以無人也、古人道、有法有食處應住、有法無食處應住、無法有食處不應住、諸禪德、此山實無食、一夏枉擧揚碧巖一百則、當法食耳、勇于法不管衣食者、已自十至百、又告衆曰、往日義山棹公、請予于折衷眼目提裝五家法要、不果已十年、今再太靈鑑公、逼近左右、責其不果、諸禪德若欲得究明自己、不登五家階位、非我家種子、豈道達磨眞孫、是故先得曹洞道體爲初、究雲門宗旨爲最極焉耳、五月望講智門蓮花話了時、諸子各立五家門戶、激發請

益、老僧求間擬往河西西都柳庵宅、淩晨乘駕、下山過河、至道西之濱、途中忽然撞着先師可、喝境界、歎踊之餘、打一偈曰、去年今日始爲語、今歲斯時自入門、仲夏過望辰向巳、五家要路是綠綠、于時天明戊申五月旣望也、入宅坐臥異前日事、在柳庵宅五日、歸山試諸子、日夜參詳不懈、五家兒孫將獲其人、時有一人、問曰、五家宗要是爲何事、予曰、何以然問、曰、徹根本事、尙未得其人、而參五家宗要、竝無一箇半箇、然則五家之辯、無所用焉、予曰、不然、汝觀種子結華果、種荊棘則得荊棘、種華果則得華果、是故吾大應老祖、參詳異他、虛堂讖曰、明明說與虛堂叟、東海兒孫日轉多云、大燈已受佛國印、爲一箇種草、因甚麼還嗣老祖麼、是故關山國師遺誡曰、宿昔吾大應老祖、正元之間、越風波大難地、蚤入宋域、遇著虛堂老禪于淨慈、眞參實證、末後徑山盡其蘊奧、是故得路頭再過之稱、受兒孫日多之記、單傳楊岐正脈於吾朝者老祖之功也、次先師大燈老人、參得老祖于西京、侍者京輦巨峯、其隨從之際、脇不到席者多年、頗有古尊宿之風、卒受老祖淵粹之命、長養者二十年、果彰大應遠大之高德、起佛祖已墜之綱宗、貽眞風不地之遺誡、鞭策後昆者先師之功也、老僧爰受華園先帝勅請、創開此山、先師囑飯養嬰兒、後昆直饒有忘卻老僧之日、忘卻應燈二祖之深恩、不老僧兒孫、儞等請務其本、白雲感百丈之大功、虎丘歎白雲之遺訓、先規如茲、誤而莫摘葉尋枝好、(已上)如我關山國師者、越凡超聖、獨出物外底、慧眼這裏無生死句、管老僧屋爲什麼、逐高梨出門等機、吾祖宗大事、諄乎諄者也、向上事外、不可擬議之宗風、辛辣難當底國師、又有何妄分別、獨於此佛法不得人之嘆息、兼五家風彩、兒孫無眼之哀憐、何如是遺誡耶、何如是悲傷耶、日多眞孫、豈可無

抛身捨命策勵、請回思再三熟讀、子細觀察、莫作容易之看、至囑至禱。

于昔天明第七歲戊申雨安居之日

前住豆之龍澤東嶺頭陀圓慈撰焉

五家參詳要路門第一

前住豆之龍澤臨濟正宗東嶺圓慈編
前住丹之大梅賜紫比丘大觀文珠校

第一　臨濟宗戰機鋒論親疎爲旨

師初在黃檗會下、行業純一、首座乃歎曰、雖是後生、與衆有異、遂問、上座在此多少時、師曰、三年、首座云、曾參問也無、師曰、不曾參問、不知問箇什麼、首座云、汝何不去問堂頭和尚、如何是佛法的的大意、師便去問、聲未絕、黃檗便打、師下來、首座云、問話作麼生、師曰、某甲問聲未絕、和尚便打、某甲不會、首座云、但更去問、師又去問、黃檗又打、如是三度發問三度被打、師來白首座云、幸蒙慈悲、令某甲問訊和尚、三度發問三度被打、自恨障緣不領深旨、今且辭去、首座云、汝若去時、須辭和尚去、師禮拜退、首座先到和尚處云、問話底後生、甚是如法、若來辭時、方便接他、後向穿鑿成一株大樹、與天下人作蔭涼去在、師去辭、黃檗云、不得往別處去、汝向高安灘頭大愚處去、必爲汝說、師到大愚、大愚問、什麼處來、師云、黃檗處來、大愚云、黃檗有何言句、師云、某甲三度問佛法的的大意、三度被打、不知某甲有過無過、大愚云、黃檗與麼老婆、爲汝得徹困、更來這裏問有過無過、師於言下大悟云、元來黃檗佛法無多子、大愚搊住言、這尿牀鬼子、適來道有過無過、如今卻道黃檗佛法無多子、儞見箇什麼道理、速道速道、師於大愚

脅下築三拳、大愚托開云、汝師黃蘗、非干我事、師辭大愚、卻回黃蘗、黃蘗見來便問、這漢來來去去有什麼了期、師云、祇爲老婆親切、便人事了侍立、黃蘗問、什麼處去來、師云、昨奉慈旨、令參大愚去來、黃蘗云、大愚有何言句、師遂擧前話、黃蘗云、作麼生得這漢來、待痛與一頓、師云、說什麼待來、卽今便喫、隨後便掌、黃蘗云、這風顚漢、卻來這裏捋虎鬚、師便喝、黃蘗云、侍者引這風顚漢參堂去、後潙山擧此話問仰山、臨濟當時得大愚力得黃蘗力、仰山云、非但騎虎頭、亦解把虎尾。

臨濟慧照禪師、最初入處痛快、悟後參禪警股、雖有五家各立宗旨、初中後事、頭正尾正、中興如來正法眼藏、明了祖師西來密旨者、只此臨濟一宗最爲至當而已、是故古來以本錄稱錄中之王、元帝賜臨濟院現住、以臨濟正宗之印、是乃冠旁之初也、所謂臨濟是正宗基源義也。

師栽松次、黃蘗問、深山裏栽許多作什麼、師云、一與山門作境致、二與後人作標榜、道了將钁頭打地三下、黃蘗云、雖然如是、子已喫吾三十棒了也、師又以钁頭打地三下、作噓噓聲、黃蘗云、吾宗到汝大興於世、後潙山擧此話問仰山、黃蘗當時、祇囑臨濟一人、更有人在、仰山云、有、祇年代深遠、不欲擧似和尙、潙山云、雖然如是、吾亦要知、汝但擧看、仰山云、一人指南吳越令行、遇大風卽止。

仰山讖語、風穴則近而不當、曇橋洲曰、大慧則當而不穩、然以理事總、則風穴爲理、大慧爲事、以大三災應庵之語最爲的當歟、夫臨濟之一宗、超出他者、所以具五事也、第一、入處痛

快、已詳序門也、第二、悟後明正者、自從大愚證徹黃檗卻回後、師資參詳甚以明了、加之參潙山、侍德山、他師所不及、如是著明也、第三、樹德蔭孫者、此栽松一則、堪垂兒孫、末後與三聖問答・遺偈・遺誡、亦不可及歟、第四、試道待人者、破夏因緣、和百丈再參之則、是又臨濟之外、誰敢恁麼、第五、受用眞脫者、佛佛所印、祖祖所證、彼此明照、如見天鑑、雖然先師常謂我徒曰、五家宗要、人人不兼、我宗不全、宜省察爾。

師因半夏上黃檗、見和尚看經、師云、我將謂、是箇人、元來是揞黑豆老和尚、住數日乃辭去、黃檗云、汝破夏來、不終夏去、師云、某甲暫來禮拜和尚、黃檗遂打趁令去、師行數里疑此事、卻回終夏、師一日辭黃檗、檗問、什麼處去、師云、不是河南便歸河北、黃檗便打、師約住與一掌、黃檗大笑乃喚侍者、將百丈先師禪版机案來、師云、侍者將火來、黃檗云、雖然如是、汝但將去、已後坐卻天下人舌頭去在、後潙山問仰山、臨濟莫辜負他黃檗也無、仰山云、不然、潙山云、子又作麼生、仰山云、知恩方解報恩、潙山云、從上古人、還有相似底也無、仰山云、有、祇是年代深遠、不欲舉似和尚、潙山云、雖然如是、吾亦要知、子但舉看、仰山云、祇如楞嚴會上阿難讚佛云、將此深心奉塵刹、是則名爲報佛恩、豈不是報恩之事、潙山云、如是如是、見與師齊、減師半德、見過於師方堪傳授。

臨濟一宗、古人評論曰、百丈再參、馬祖三日耳聾之大事、與此破夏因緣、古今獨步之榜樣、衲子可依行底之大事、公案爲體、言句爲衣、心地爲宗、體用爲行、利濟爲旨、師上堂小參以是爲宗、令五歸一可貴歟。

上堂云、赤肉團上有一無位眞人、常從汝等諸人面門出入、未證據者看看、時有僧出問、如何是無位眞人、師下禪牀把住云、道道、其僧擬議、師托開云、無位眞人是什麼乾屎橛、便歸方丈。有定上座到參、問、如何是佛法大意、師下牀縄擒住、與一掌便托開、定佇立、傍僧云、定上座何不禮拜、定方禮拜、忽然大悟。

師初至河北住院、見普化克符二上座、乃謂曰、我欲於是建立黃檗宗旨、汝可成褫我、二人珍重下去、三日後、普化却上來問云、和尚三日前、說什麼、師便打、三日後、克符上來問、和尚昨日、打普化作甚麼、師亦打、至晚小參云、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、如何是奪人不奪境、師云、煦日發生鋪地錦、嬰孩垂髮白如絲、如何是奪境不奪人、師云、王令已行天下徧、將軍塞外絕烟塵、如何是人境俱奪、師云、幷汾絕信、獨處一方、如何是人境俱不奪、師云、王登寶殿、野老謳歌。

上堂、兩堂首座相見、同時下喝、僧問師、還有賓主也無、師云、賓主歷然、師云、大衆要會臨濟賓主句、問取堂中二首座。

師一日示衆云、參學人大須子細、如賓主相見、便有言論往來、或應物現形、或全體作用、或把機權喜怒、或現半身、或乘獅子、或乘象王、如有眞正學人、便喝先拈出一箇膠盆子、善知識不辨是境、便上他境上、做模做樣、學人又喝、前人不肯放、此是膏肓之病、不堪醫治、喚作賓看主、或是善知識、不拈出物、隨學人問處即奪、學人被奪抵死不放、此是主看賓、或有學人、應一箇淸淨境界、出善知識前、善知識辨得是境、把得住拋向坑裏、學人言、大好善知識、卽曰、咄哉、不

識好惡、學人便禮拜、此喚作主看主、或有學人、披枷帶鎖、出善知識前、善知識更與安一重枷鎖、學人懽喜彼此不辨、喚作賓看賓、大德山僧所舉、皆是辨魔揀異、知其邪正。

僧問風穴、如何是賓中賓、穴曰、攢眉坐白雲、如何是賓中主、穴云、入市雙瞳瞽、如何是主中賓穴云、回鸞兩曜新、如何是主中主、穴云、磨礲三尺劒、待斬不平人。

要會臨濟賓主句、先須參賓主歷然則、四賓主妙處、自然徹底得明了、此風穴問答、豈但四賓主、全提半提大事、自然盡妙矣。

師臨遷化時、據座云、吾滅後不得滅却吾正法眼藏、三聖出云、爭敢滅却和尚正法眼藏、師云、已後有人問儞、向他道什麼、三聖便喝、師云、誰知吾正法眼藏、向這瞎驢邊滅却、言訖端然示寂。

凡師上堂小參等語、舉揚開示、法身爲本、脫體現成、似老婆禪、穩密純眞、言句爲衣、暗號密令、不許他知、見性不交、他物絕影、眞實諦當、依法立則、體用如如、不出法界、受行自在、誰敢窺覦、任緣導利、間不容髮、根無錯謬、攝入爲貴、如是五家要路自兼、可謂眞之宗風也。

五家參詳要路門第二

第二　雲門宗擇言句論親疎爲旨

師初參睦州、州旋機電轉、直是難湊泊、尋常接人、纔跨門便搊住云、道道、擬議不來、便推出云、秦時轢轢鑽、師凡去見至第三回、纔敲門、州云、誰、師云、文偃、纔開門、便跳入、州搊住云、道道、師擬議、便被推出、師一足在門閫內、被州急合門、拶折師脚、師忍痛作聲、忽然大悟、後來語脈接人、一模脫出、雲門後於陳操尙書宅住三年、睦州指往雪峰處去、師至峯莊、見僧問、上座上山去耶、僧云、是、師云、寄一則語問堂頭和尙、不得道是別人語、僧云、諾、師云、上座到山見和尙上堂衆集、便出握腕立地曰、者老漢頂上鐵枷、何不脫卻、其僧依師敎、峯見者僧與麼道、便下座攔胸把住曰、速道速道、僧無語、峯拓開曰、不是汝語、僧曰、是某語、峯曰、侍者將繩棒來、僧曰、不是某語、是莊上一浙中上座、敎某來道、峯曰、大衆去莊上迎取五百人善知識來、師次日上山、峯一見便曰、因甚得到與麼、師以手拭目趨出、峯奇之、師又出衆問、如何是佛、峯曰、莫寱語、師便禮拜、一住三年、峯一日問、子見處如何、師云、某見處、與從上諸聖不移易一絲毫許、後到陳操尙書、尙書與裴休李翺同時、凡見一僧來、先請齋、襯錢三百、須是勘辨、一日師到、相看便問、儒書中卽不問、三乘十二分敎自有座主、作麼生是衲僧家行脚事、師曰、尙書曾問幾人來、操云、卽今問上座、師云、卽今且置、作麼生是敎意、操云、黃卷赤軸、師曰、這箇是文字語言、作麼生

是敎意、操曰、口欲談而辭喪、心欲緣而慮亡、師曰、口談欲而辭喪、爲對有言、心欲緣而慮亡、爲對妄想、作麼生是敎意、操無語、師曰、尙書看法華經是否、操曰、是、師曰、經中道、一切治生産業、皆與實相不相違背、且道、非非想天、卽今有幾人退位、操又無語、師曰、尙書且莫草草、師僧家抛卻三經五論來、入叢林十年二十年、尙自不奈何、尙書又爭得會、操禮拜云、某罪過、又一日與衆官登樓次、望見數僧來、一官人云、來者總是禪僧、操云、不是、官云、焉知不是、操云、待近來、與爾勘過、僧至樓前、操驀召云、上座、僧擧頭、操謂衆官云、不信道。

馬大師曰、楞伽經以佛語心爲宗、無門爲法門、又曰、凡有言句是提婆宗、只以此箇爲主、圓悟曰、諸人盡是衲僧門下客、還曾體究得提婆宗麼、若道言句是、也沒交涉、若道言句不是、也沒交涉、且道、馬大師意在什麼處、後來雲門拈道、馬大師好言語、只是無人問、有僧便問、如何是提婆宗、門云、九十六種、汝是最下一種。

擧、師以拄杖示衆云、拄杖子化爲龍、呑卻乾坤了也、山河大地、甚處得來、雪竇頌云、拄杖子呑乾坤、徒說桃花浪奔、燒尾者不在拏雲攫霧、曝腮者何必喪膽亡魂、拈了也、聞不聞、直須灑灑落落、休更紛紛紜紜、七十二棒且輕恕、一百五十難放君、雪竇驀拈拄杖下座、大衆一時走散。

擧、翠巖夏末示衆云、一夏以來、爲兄弟說話、看翠巖眉毛在麼、保福云、作賊人心虛、長慶云、生也、師云、關、雪竇頌曰、翠巖示徒、千古無對、關字相酬、失錢遭罪、潦倒保福、抑揚難得、嘮嘮翠巖、分明是賊、白圭無玷、誰辨眞假、長慶相諳、眉毛生也。

擧、乾峯示衆云、法身有三種病二種光、汝等諸人還委悉麼、時師出衆云、庵內人爲甚麼不知

庵外事、峯呵呵大笑、師云、猶是學人疑處、峯云、汝是甚麼心行、師云、和尚亦要委悉、峯云、汝恁麼而可始得穩坐地。

先師拈云、若人欲見息畊錄、先須參此話、二大老說話、見徹分明、許汝親見息畊老人。

三光拈云、大凡醫治乾峯三種病、有三種法、所謂外療與本道也、請耆婆爲診脈師、請扁鵲爲配劑師、卻向仲景傷寒論商量、時有僧出曰、和尚自病未能除、論人病作什麼、光曰、汝道、老僧有何病、僧喝云、瞎漢、鐵枷鐵鎖、膿滴滴地、光笑曰、恰備汝療耶、僧曰、某甲有公事乞請別人好、光擊杖三下曰、春山行處與難極、春鳥春花唱拍新、僧便禮拜、光道蒼天蒼天答拜。

擧、乾峯示衆云、擧一不得擧二、放過一著落在第二、師出衆云、昨日有一僧、從天台來、卻往南嶽去、乾峯云、典座今日不得普請。

先師或時到太平山中平坦處、有一座磐石、因於石上晏坐數刻、忽然擧頭拈起世歌有省、曰、見擧而覯則鷲頭山、見降則亦獅毛鹿滾之釣船、先師此時相看雲門大師三十年後、於大乘堂中碧巖會、復知其骨髓。

擧、五祖和尚在太平上堂、僧問、如何是臨濟下事、祖云、五逆聞雷、僧問、如何是雲門下事、祖云、紅旗閃爍、僧問、如何是曹洞下事、祖云、馳書不到家、僧問、如何是潙仰下事、祖云、斷碑橫古路、僧禮拜、祖云、何不問法眼下事、僧云、留與和尚、祖云、巡人犯夜。

是眞實入證者、五家共隨之本據也、雖然一齊念取、無請益意者、參到彌勒下生、亦不可得也、愼哉。

舉、五祖和尙住黃梅東山時、拈香云、此一炷香、在舒郡二十七年、三所住院、諸人總知、遂欲燒、次復云、不得也、須說破、某十五年行脚、初參遷和尙得其毛、次於四海參見尊宿得其皮、又到浮山圓鑑老處、得其骨、後在白雲端和尙處、得其髓、方取承受、與人爲師、今日爇向爐中、從敎薰天炙地、有耳朶者辨取。

五祖大師、始自破頭山栽松以來、下山投水、行乞路傍、面謁四祖、黃梅養母、赤縣留孫、流入東海、爲日多識底之消息也。

先師六十九歲、寶曆三年癸酉夏、於甲府能成禪刹、提唱人天眼目、開筵示衆云。

瞎卻人天雙眼目、波斯夜半落空谷、歸來譫語無人量、各祖左邊訪背觸、夫以、人天眼目秘訣、佛海狂浪、禪苑毒花。

是明作者未盡吾家妙、其所出事、宜見五宗、先師常道、古德判云、人天眼目卻成盲目、又甚有故、若以依行、恐誤後人。

昔晦巖老人親輯編、顧孫思子、近驚背老漢間註解、逐惡隨邪、髮疑兒於千載當來、揚家醜於五家衰末。

作者只恐兒孫大誤、註主文示事實可達而已。

三玄三要、淨地上拋土撒屙、五位君臣、澆末代匡徒導衆、開示轉位就功之大事、震殺認賊爲子之鈍根。

臨濟所嚴呵者、恐認七之無分別識、錯爲根本如來藏也、曹洞所指示者、只恐認七地之有

功用智、偏守二八地之無功用行一、是認レ賊爲レ子之鈍根也。

法眼爲二殿後一、臨濟爲二先鋒一、豈其容二優劣於其際一、雲門爲二天子一、潙仰爲二公卿一、須レ知非二宗風無二高下一、爲二殿後一者、八宗皆以レ利レ人爲二究竟一、五家共導二學者一、是基本也、雖二宗旨以レ高爲レ貴、其所レ敎示一、自有二高下前後之分一而已。

常恨、顧・鑑・咦・時人盡錯會、爲レ報、六相義須二親切參究一。

眼目曰、師每レ見レ僧、顧レ之卽云、鑑、僧擬議、師卽曰、咦、而錄レ之者曰二顧鑑咦一、又作レ頌曰、擧不レ顧、卽差互、擬二思量一、何劫悟、先師久參二雲門宗大事一、始會二三字旨一、依レ之三字爲レ宗、別通二格外一、六相義、法眼宗第一表レ法、見二本書註一、玆爲レ易レ解、別設二一譬一、如二是男是女一、是總相、如二六根在一是別相、如レ依レ辨レ用、是同相、眼見耳聞、是異相、如二聚成レ身、是成相、如二四大分死一、是壞相、通レ宗而後參訣。

從頭五派秘訣、盡可レ究二明至要一也、澆季末代、法滅盡之効驗、諸方盡言、不レ參二話頭一、不レ知二文字一、唯一向無念無心去、是向上禪、儞不レ知麼、佛言、法門無量誓願學、佛道無上誓願成。

依二此示衆一、先師之意、尊二重五家一、如レ是明著、若至下無二其事一者上、搜索不レ足、參詳不レ及之所レ致也。

臨濟上堂、僧問、如何是第一句、濟云、三要印開朱點側、未レ容二擬議一主賓分、問、如何是第二句、濟云、妙解豈容二無著問一、漚和爭負二截流機一、問、如何是第三句、濟云、看二取棚頭弄二傀儡一、抽牽都來裏有レ人、濟又云、一句語須レ具二三玄門一、一玄門須レ具二三要一、有レ權有レ實、汝等諸人作麼生會、下座。

先師曰、於二此三句一甚有二深理一、可二盡參詳一、如二彼函蓋乾坤等句一、非二眞宗意一、至二此上堂一、始知雲門臨濟同一三昧、若復不レ知二此旨一底、卽非二虛堂日多眞孫一必也。

五家參詳要路門第三

第三　曹洞宗究心地論親疎爲旨

師諱良价、嗣雲巖、越州諸曁人、姓兪氏、初謁忠國師、問無情說法、不契、後到潙山、山問、聞闍黎曾問國師無情說法、是否、師云、是、潙云、試擧看、師擧了、潙云、我者裏也有些子、只是罕遇其人、師云、便請、潙以拂子點一點、師云、請和尙爲某甲說、潙云、父母所生口、終不爲子說、師云、此間莫有同時慕道者麼、潙令見雲巖、師辭直造雲巖、請益前話、巖云、不見彌陀經云、水鳥樹林、悉皆念佛念法、師因有省、作偈云、也太奇、也太奇、無情說法不思議、若將耳聽終難會、眼處聞聲方得知、一日問巖、某甲有餘習未盡、巖云、汝曾作甚麼來、云、聖諦亦不爲、曰、還得歡喜地也未、云、歡喜卽不無、如糞堆頭拾得一顆明珠、師辭巖問、百年後忽有人問、還邈得和尙眞、如何祗對、巖良久云、只者是、師沈吟、巖云、价闍黎、承當箇事、大須審細、師猶涉疑、後因過水覩影、方得頓悟、作偈云、切忌從他覓、迢迢與我疎、我今獨自往、處處得逢渠、渠今正是我、我今不是渠、應須恁麼會方得契如如、示衆云、末法時代、人多乾慧、若要辨驗眞僞、有三種滲漏、一見滲漏、機不離位、墮在毒海、二情滲漏、智常向背、見處偏枯、三語滲漏、體妙失宗、機昧終始、曹山辭次、師授山先雲巖所付寶鏡三昧五位顯訣、畢、山再拜而去。

正中偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不相識、隱隱猶懷舊日嫌。

偏中正、失曉老婆逢古鏡、分明覿面更無眞、休更迷頭還認影。
正中來、無中有路出塵埃、但能不觸當今諱、也勝前朝斷舌才。
兼中至、兩刃交鋒不須避、好手還同火裏蓮、宛然自有衝天氣。
兼中到、不落有無誰敢和、人人盡欲出常流、折合還歸炭裏坐。

寶鏡三昧

如是之法。佛祖密付。汝今得之。宜善保護。銀盌盛雪。明月藏鷺。類之弗齊。混則知處。意不在言。來機亦赴。動成窠臼。差落顧佇。背觸俱非。如大火聚。但形文彩。即屬染汚。夜半正明。天曉不露。爲物作則。用拔諸苦。雖非有爲。不是無語。如臨寶鏡。形影相覩。汝不是渠。渠正是汝。如世嬰兒。五相完具。不去不來。不起不住。婆婆和和。有句無句。終不得物。語未正故。重離六爻。偏正回互。疊而爲三。變盡成五。如荎草味。如金剛杵。正中妙挾。敲唱雙擧。通宗通途。挾帶挾路。錯然則吉。不可犯忤。天眞而妙。不屬迷悟。因縁時節。寂然昭著。細入無間。大絕方所。毫忽之差。不應律呂。今有頓漸。縁立宗趣。宗趣分矣。即是規矩。宗通趣極。眞常流注。外寂内搖。繋駒伏鼠。先聖悲之。爲法檀度。隨其顚倒。以緇爲素。顚倒想滅。肯心自許。要合古轍。請觀前古。佛道垂成。十劫觀樹。如虎之缺。如馬之馵。以有下劣。寶几珍御。以有驚異。貍奴白牯。羿以巧力。射中百歩。箭鋒相直。巧力何預。木人方歌。石女起舞。非情識到。寧容思量。臣奉於君。子順於父。不順非孝。不奉非輔。潛行密用。如愚若魯。但能相續。名主中主。

寛延庚午之春、先師在駿州庵原大乘、提唱碧巖集、會中一朝召予曰、夫法隨入益深、昔日在正受室參詳尤久矣、雖究變盡成五之大事於格師兄、行住不穩凡三十餘年也、至于今日、始徹底盡其蘊奥、比前所得如影響、是故書以與諸子。

洞上五位偏正口訣

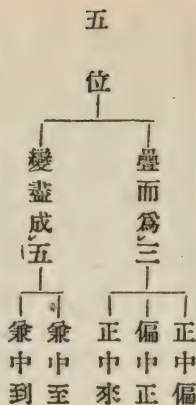
寶鏡三昧曰、重離六爻、偏正回互、疊而爲三、變盡成五、

重離 ☲ ☲ 六爻.

回互疊變之義者、衆説繁絮、今不記之。

⚊ 正也、空也、眞也、黑也、暗也、理也、陰也。

⚋ 偏也、色也、俗也、白也、明也、事也、陽也。

五位
- 疊而爲三
  - 正中偏
  - 偏中正
  - 正中來
- 變盡成五
  - 兼中至
  - 兼中到

蓋寶鏡三昧者、不知誰人之所述、石頭和尚・藥山和尚及雲巖和尚、歷祖相傳、密室相承、無容易漏泄、傳到洞山和尚、著五位階漸、每位安著一偈、以提佛道大綱、可謂夜途玉炬迷津船筏、悲哉、近代禪苑荒蕪、以無智昏愚、稱向上直指禪、以寶鏡三昧五位偏正等無上大法財、爲老

屋裏破古器、總不顧、恰似瞽者拋擲杖子、言閑具、殊不知、自蹟墜小果見泥裏、到死不得出離何計五位是驀過正位雜毒海之舟航、輾破二空堅牢獄之寶輪、往往不知進修要路、不諳者般秘訣、故陷溺辟支小果死水裏、蹟沒焦芽敗種黑暗坑、終到佛手難救、是故四十年前、在正受室內、所信受大略、以當法施、得眞正參玄大死一番底上士、宜須密付、非所以爲中下機設者、謹勿輕忽矣。

大凡教海浩渺、法門無量、其中間有秘授有口訣、未曾見如五位紛煩者、重離煩評、疊變鑿說、枝上添枝、蔓上結蔓、不知畢竟五位者、所以爲胡爲法理施設者矣、非無小補於法門、令學者轉增迷悶、似縱鷲子慶喜大智難了別者、予謂、祖師豈留得無用煩語、勞役後昆者乎、我怪之久矣、及入正受室、從上疑兒乍解矣、學者若依之進修、大有利益、莫爲非洞上知識口授疑惑、須知、正受專參究洞山頌、而後判斷將來、勿爲非洞上知識口授輕忽、正受老人曰、祖師初施設五位大意者、令學者證得四智之大悲善巧也、大凡佛有四智、所謂大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智是也、道流直饒三學精錬經多劫、未證得四智、不許稱眞佛子、須知道流眞正參究、打破八識賴耶暗窟時、大圓鏡智寶光立地煥發、卻怪、大圓鏡光黑如漆、此道正中偏一位、於此入偏中正一位、修寶鏡三昧多時、果證得平等性智、初入理事無礙法界境致、行者以此不爲足、親入正中來一位、依兼中至眞修、獲得妙觀察智成所作智等四智、最後到兼中到一位折合、還歸炭裏坐、不知何謂、精金萬鍛、不再鑛、唯恐得小爲足、可貴依五位偏正功勳非但證四智、三身亦體中圓焉、不見、大乘莊嚴論曰、轉八識成四智、束四智具三身、是故曹溪

大師有偈、曰、自性具三身、發明成四智、又曰、淸淨法身儞之性、圓滿報身儞之智、百億化身儞之行。

洞山良价和尙五位偏正頌

正中偏、三更初夜月明前、莫怪相逢不相識、隱隱猶懷舊日嫌。

夫正中偏一位者、指大死一番、因地一下、見道入理之正位者也、若其有眞正參玄上士、密參功積、潛修力充、忽然打發、則虛空消隕鐵山摧、上無片瓦蓋頭、下無寸土卓足、無煩惱無菩提、無生死無涅槃、一片虛凝、如澄潭無底、似大虛絕痕、往往認得此一位、以爲大事了畢、以謂佛道成辨、死守無放、其此之道、死水裏禪、爲棺木裏守屍鬼、任使耽著經三四十年、不能出獨覺自了小窠窟、所以言、機不離位墮在毒海、此是法華所謂正位取證底大癡人也、假設有明了平等無差別眞智、不能煥發萬法差別妙智、是故在寂靜無爲空閑陰處、雖內外玲瓏了了分明、觀照纔涉動搖騷鬧憎愛差別塵緣、則無半點氣力、衆苦逼迫、爲救此重痾、假且設偏中正一位。

偏中正、失曉老婆逢古鏡、分明覿面更無眞、休更迷頭還認影。

行者、若住著彼正中偏、則智常向背、見處偏枯也、是故參玄上士、常坐臥動中種種差別塵境上、悉把目前老幼尊卑、堂閣廊廡、草木山川等之萬法、以爲我自己本來具足、眞正淸淨面目、如對明鏡見自面目、於一切處、如是觀照重歲月、則自然彼此爲我家一枚寶鏡、於此如兩鏡相照中心無一點影像、心境一如、物我不二、白馬入蘆花、銀盌盛雪、此謂寶鏡三昧、

涅槃經所謂、如來自見佛性、是之謂也、入得此三昧時、大白牛兒推不去、立地證得、眞俗不二、唯有一乘、中道實相、第一義諦、平等性智、迸出目前、學者若到此田地、以爲足、則亦是依舊墮二乘小果深坑、何故、不知菩薩威儀、不了佛國土因緣、故祖師爲救此患難、重假設正中來一位、

正中來、無中有路出塵埃、但能不觸當今諱、也勝前朝斷舌才、

此一位者、明上乘菩薩不正位取證、菩薩既不以如上所證爲足、轉進不退、無功用海中、煥發無緣大悲、依四弘淸淨大誓願、上求菩提下化衆生願輪、所謂向去中卻來、卻來中向去者乎、爲令知明暗雙雙底受用、且設兼中至一位、

兼中至、兩刃交鋒不須避、好手還同火裏蓮、宛然自有衝天氣、

此一位、菩薩撥轉明暗不二法輪、紅塵堆裏灰頭土面、聲色隊中七狂八顚、如火裏蓮華逢火色香轉鮮明、入鄽垂手他受用、所謂在途中不離家舍、離家舍不在途中、是凡是聖、魔外不能辨、佛祖不能挾手、擬擧心向、兎角龜毛過別山、者裏猶是非他穩坐地、是故謂宛然自有衝天氣、畢竟如何、須知猶有兼中到一位、

兼中到、不落有無誰敢和、人人盡欲出常流、折合還歸炭裏坐、

鵠林著語曰、德雲閑古錐、幾下妙峯頂、傭他癡聖人、擔雪共塡井、學者若欲透得洞山兼中到一位、先須參此頌、　寬延第三庚午天林鐘吉祥辰、沙羅樹下自隱老衲述、

或時、先師語予曰、洞山五位頌、各各盡美矣、於中兼中到一頌、似不盡善乎、予思奈如、予曰、

然矣、若以雲門臨濟宗旨而言、則此一頌大劣、似非洞山作也、彼宗風審細論義、是故此頌、
如是指示而全無一字子之失、若以東山下事頌之、雪竇德雲閑古錐之偈、誠可謂盡善盡
美歟、尊意如何、先師應諾諾曰、誠然也、因以此偈代別洞山、著于茲而已

五家參詳要路門第四

第四　潙仰宗明作用論親疎爲旨

師諱靈祐、嗣百丈、福州趙氏子、初參百丈、侍立次、夜深、丈曰、看、爐中有火否、師撥之曰、無、丈起身深撥得少火、舉而示之曰、汝道無、者箇聻、師大悟、禮謝陳所見、丈曰、此是暫時岐路耳、經云、欲識佛性義、當觀時節因緣、時節既至、如迷忽悟、如忘忽憶、方省己物不從他得、故祖師曰、悟了同未悟、無心亦無法、只是無虛妄凡聖等心、本來心法元自具足、汝今既然、善自護持

仰山諱慧寂、嗣潙山、韶州葉氏子、仰辭親遊方日、人有獻之者、於仰扇上題曰、寂子去行腳、諸魔使誰滅、仰續曰、龍生蛇腹中、借他十箇月、人皆異之、蓋仰出居門、諸魔或曰豬毛、初參耽源、已悟玄旨、源謂仰曰、國師當時、傳得六代祖師圓相共九十六箇、授與老僧曰、吾滅後三十年、南方有一沙彌到來大興此敎、次第傳授、毋令斷絕、我今付汝、汝當奉持、遂將其本付仰、仰一覽便火卻、源一日問仰、前來諸相、甚宜秘惜、曰、當時看了便燒卻也、源曰、吾此法門無人能會、唯先師及諸祖諸大聖人、方可委悉、子何得燒之、仰曰、某甲一覽便知其意、但用得不可執本也、源曰、雖然如此、於子即得、後人信之不及、仰曰、和尚若要、重錄不難、即重集一本上呈、且無遺失、源曰、然。

香嚴智閑禪師參潙山、山問、我聞汝在百丈先師處、問一答十、問十答百、此是汝聰明靈利、意

解識想、生死根本父母未生時、試道一句看、嚴被一問、直得茫然、歸寮將平日看過底文字、從頭要尋一句酬對、竟不能得、乃自嘆曰、畫餅不可充饑、屢乞溈山說破、山曰、我若說似汝、汝已後罵我去、我說底是我底、終不干汝事、嚴遂將平昔看過底文字燒卻曰、此生不學佛法、也且作箇長行粥飯僧、免役心神、乃泣辭溈山、直過南陽、覩忠國師遺跡、遂憩止焉、一日芟除草木、偶拋瓦礫擊竹作聲、忽然省悟、遽歸沐浴、焚香遙禮溈山、讚曰、和尚大慈恩逾父母、當時若為我說破、何有今日之事。

溈仰宗風、審細雖似老婆臭乳、宗旨之嶮、過于他師者、以為香嚴不與一言、他所不存、堪可依行也、後人以是可通宗極耶。

溈山摘茶次、謂仰山曰、終日摘茶、只聞子聲、不見子形、仰撼茶樹、溈曰、子只得其用、不得其體、仰曰、未審和尚如何、溈良久、仰曰、和尚只得其體、不得其用、溈曰、放子三十棒、仰曰、和尚棒某甲喫、某甲棒教誰喫、溈曰、放子三十棒。

溈山睡次、見仰山來、溈便面壁、仰曰、和尚何得如此、溈起曰、我適來得一夢、儞試為我原看、仰度一盆水、溈便洗面、少頃香嚴至、溈曰、我適來得一夢、寂子為我原了、汝更為原看、嚴點一盞茶來、溈曰、二子神通、過於鶖子目連。

溈山因問仰山、寂子心識、微細流注、無來得幾年、仰山不敢答、卻云、和尚無來幾年矣、溈曰、老僧無來已七年、溈又問、寂子如何、仰曰、惠寂正鬧、虛堂拈曰、古人及盡玄微、猶恐走作、今人只管孟八郎道、總是五逆人聞雷。

潙山問仰山云、寂子如何、仰云、和尙問他見解、問他行解、若問他行解、某甲不知、若是見解、如一瓶水注一瓶水、雲門云、某甲見處、與從上諸聖、不移易一絲毫許。

仰山問潙山曰、百千萬境、一時來時如何、潙山云、青不是黃、長不是短、諸法各住自位、非干汝事、仰山則作禮。

中邑洪恩禪師、每見僧來、拍手作和和聲、仰山謝戒、邑見來、於禪牀上拍口曰、和和、仰山卽從西過東、邑又拍口作和和聲、仰山又從東過西、邑拍口作和和聲、仰山又於中心立、然後謝戒了、卻退後立、邑云、什麼處得此三昧來、仰山云、於曹溪印子上脫將來、邑云、汝道、曹溪用此三昧接什麼人、仰云、接一宿覺、仰又復問中邑云、和尙什麼處得此三昧來、邑云、我於馬祖處得此三昧來。

此中邑之一則、可爲潙仰宗之所據歟。

擧、王太傅入招慶煎茶、時朗上座與明招把銚、朗飜卻茶銚、太傅見問上座、茶爐下是什麼、朗云、捧爐神、太傅云、既是捧爐神、爲什麼飜卻茶銚、朗云、仕官千日失在一朝、太傅拂袖便去、明招云、朗上座喫卻招慶飯了、卻去江外打野榸、朗云、和尙作麼生、招云、非人得其便、雪竇云、當時但踏倒茶爐。

碧巖集第四十八則、明茶道亦有向上出身作用、茶道有本末中之三節、本者成人也、人各皆散亂蠢動器耳、故以恒事自然斂定、誠我爲戒、不亂爲定、徹物爲慧、是以約點茶論親疎焉耳、主有五事、一掃室、二居物、三改具、四點茶、五接客、作客有五、一進室、二著座、三改衣、四

喫茶、五接客、作客有五、一進室、二著座、三改衣、四喫茶、五徹物、夫人精錬平生作用自淸、是曰成本、參詳宗旨、至潙仰理、是曰成末、通達事理、物物無惑、是曰得中道之理、凡得三義通于道、則可謂究盡茶道之要、如此問答、三義眼睛、堪可笑爾、雪竇拈語、蘇活茶道、請高著眼、

五家參詳要路門第五

第五　法眼宗先利濟論親疎爲旨

師諱文益、餘杭魯氏子、祝髮詣開元寺覺律師受具戒、及覺盛化四明、師往習毘尼、工文章、覺奇之、目爲吾門之游夏也、師以玄機一發、雜務俱捐、振錫南邁抵福州、初見長慶、無所契悟、與進修暈擬之湖外、既發値雨、少憩城西地藏、入堂見藏坐地爐、問師、此行何之、曰、行脚去、曰、行脚事作麼生、曰、不知、曰、不知最親、三人附火、因擧肇論至天地與我同根之處、藏又曰、山河大地與自己是同是別、修曰、同、藏豎兩指熟視之、兩箇便起去、雨霽辭行、藏送之問曰、上座尋常說三界唯心、乃指庭下石曰、且道、此石在心內在心外、師曰、在心內、曰、行脚人著甚來由、安塊石在心頭耶、師窘無以對、遂放包倶求決擇、近月餘呈見解說道理、藏曰、佛法不是恁麼、曰、某甲到此辭窮理絕也、藏曰、若論佛法、一切見成、師大悟、出世臨川・崇壽。

僧問師慧超咨和尚、如何是佛、師云、汝是慧超、如則監院在師會中也不會參請入室、一日師問云、則監院何不來入室、則云、和尚豈不知、某甲於青林處有箇入頭、師云、汝試爲我擧看、則云、某甲問、如何是佛、林云、丙丁童子來求火、師云、好語、恐儞錯會、可更說看、則云、丙丁屬火、以火求火、如某甲是佛、更去覓佛、師云、監院果然錯會了也、則不憤便起單渡江去、師云、此人若回可救、若不回救不得也、則到中路自忖云、他是五百人善知識、豈可賺我耶、遂回再參、師云、

儞但問我、我爲儞答、則便問、如何是佛、師云、丙丁童子、來求火、則於言下大悟、如今有者、只管
蹬眼作解會、所謂彼既無瘡、勿傷之也、這般公案、久參者一舉便知落處、法眼下謂之箭鋒相
拄、更不用五位君臣四料簡、直論箭鋒相拄、是他家風如此、一句下便見、當陽便透、若向句下
尋思、卒摸索不着、師出世有五百衆、是時佛法大興、時韶國師久依疎山、自謂得旨、乃集疎山
平生文字頂相、領衆行脚、至師會下、他亦不去入室、只令參徒隨衆入室、一日師陞座、有僧問、
如何是曹源一滴水、師云、是曹源一滴水、其僧惘然而退、韶在衆聞之、忽然大悟、後出世承嗣
師、有頌、呈云、通玄峯頂、不是人間、心外無法、滿目青山、師印云、只這一頌、可繼吾宗、子後有王
侯敬重、吾不如汝、師圓成實性頌云、理窮忘情謂、如何有喩齊、到頭霜夜月、任運落前溪、菓熟
兼猿重、山長似路迷、舉頭殘照在、元是住居西。

舉、陸亘大夫與南泉語話次、陸云、肇法師道、天地與我同根、萬物與我一體也、甚奇怪、南泉指
庭前花、召大夫曰、時人見此一株花、如夢相似。

石頭因閲肇論、至會此萬物爲自己處、豁然大悟、後作一本參同契、亦不出此意、看他恁麼
問、且道、同什麼根、同那箇體、到這裏也不妨奇特、豈同他常人不知天之高地之厚、豈有恁
麼事、陸亘大夫恁麼問、奇則甚奇、只是不出教意、若道教意是極則、世尊何故更拈花、祖師
更西來作麼、南泉答處、用衲僧鼻巴、與他拈出痛處、破他窠窟、遂指庭前花、召大夫云、時人
見此一株花、如夢相似、如引人向萬丈懸崖上、打一推令他命根斷、巖頭道、此是向上人活
計、只露目前些子、如同電拂、南泉大意如是、有擒虎兕定龍蛇底手脚、到這裏也須是自會

始得、不見道、向上一路、千聖不傳、學者勞形如猿捉影、看他雪竇頌出、曰、聞見覺知非一一、山河不在鏡中觀、霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒、南泉一株花話、是宗門之骨髓、如先師與雲山老宿商量、夫雲門法眼二宗、大概如詩之通韻叶韻、本出自巖頭雪峯下、巖頭出瑞巖主人公、遊化三昧、受用確乎、故出潙仰作用高貴尊勝之風、雪峯即出玄沙雲門、玄沙一轉得地藏、又一轉得法眼宗、故雲門法眼二宗、言句易迷。

五祖弘忍大師、深乘願輪、再來爲法演、弄得雲門臨濟受用、如車兩輪、是道東山下暗號密令、圓覺佛光國師在大宋、往盧堂室中、參詳許多次、卒得言句三昧、雲門大師心不賺然、再作大燈國師、扶起我宗、別示有生涯、又關山一休等、專教喩五家有來由、祖師加助兒孫、如是親切也。

眞淨文禪師有頌、曰、雲門臨濟百花春、一一靈機總有神、總有神、祖庭不復春耶。

五家參詳要路門附錄

二門

臘八示衆第一

朔日夜示衆曰、夫修禪定者、先須厚敷蒲團、結跏趺坐寬緊衣帶、竪起脊梁骨、令身體齊整、而始爲數息觀、無量三昧中、以數息爲最上、令氣滿丹田、而後拈一則公案、直須要斷命根、若如是積歲月、不怠、縱打大地有失、見性決定不錯、豈不努力乎、豈不努力乎。

第二夜示衆曰、楞嚴經曰、一人成道歸眞、十方虛空悉消殞、凡修道處、必有護法神、有魔障神、譬如城市人多聚、則賊盜亦隨聚、心願强、則護法神得力、心魔動、則障神得力、是故學道者、先須要發大誓願、專辭讓謙遜、置心於一切衆生下、咸皆度脫、佛祖大道、無有無願力而能徹底者、譬如學射者、一箭一箭、欲中鵠、始雖不中、久而不已、必得其妙、參學亦復然、一念一念、起大憤志、抖擻精神、須要徹大道淵源、如是念念不退、一切法理、無不現前、無上菩提、猶如俯拾地芥焉也。

第三夜示衆曰、如來正法眼藏、的的相承、是謂傳燈菩薩、如來正法眼藏、能護持、是謂護法菩薩、傳燈護法、猶如師家與檀越、師檀不合、大法獨不行、而護法爲最上、昔弘法大師、嘗祈請大日如來曰、誰是護法最上耶、如來告曰、無如辯才天、是雖傳燈爲第一、若無護法之力、則所以佛法只獨不行也、是故護法爲最上也、又坐禪通一切諸道、若以神道言之、則身即天地小者

也、天地卽身大者也、天神七代、地神五代、並八百萬神、悉皆身中鎭坐矣、如此欲祭祀鎭坐諸神者、神史所謂非靈宗神祭、則不能祭之、靈宗神祭者、非禪定則不能祭之也、豎起脊梁骨、充氣丹田、正身端坐、眼見耳聞、不雜一點忘想、獲六根清淨、則是祭天神地祇也、雖一炷坐、其功德不爲鮮矣、是故道元禪師曰、可勤之一日、可貴之一日也、不勤之百年、可恨之百年也、嗚呼可恐可愼。

第四夜示衆曰、數息觀有六妙門、所謂數・隨・止・觀・還・淨也、數息入三昧、是謂數、數息漸熟、唯任出入息入三昧、是謂隨、十六特勝等、以要言之、歸數・隨二字、故初祖大師曰、外息諸緣、內心無喘、心如牆壁、可以入道、內心無喘者、不依根本也、心如牆壁者、直向進前也、此偈甚深、汝等請試取本參話頭、如牆壁直進去、使令以土擊大地有失、見性決定無不徹、努力乎、努力乎。

第五夜示衆曰、所謂接心長期百二十日、中期九十日、下期八十日也、尅期決定、欲明大事、故一衆不出戶外、況雜談乎、參禪只但勇猛一機而已、汝等不聞乎、近頃庵原有平四郞者、彫刻不動尊石像、以安置吉原山中瀑布處、忽覺瀑水漲落、水泡跳珠、前泡後泡、或流一尺消去、或二尺三尺消去、乃至二間三間消盡、宿緣所感、竟覺知世間無常都如水泡、殆遍一身不堪安處、偶聽人讀澤水法語、曰、爲勇猛衆生、成佛在一念、爲懈怠衆生、亘涅槃三祇、因忽發大憤志、獨入浴室、堅鎖戶牖、豎起脊梁骨、握兩拳、瞪雙眼、純一坐禪、妄想魔境、蜂午紛起、法戰一場、終得斷命根、深入無相定、及天明、聞鳥雀繞舍啼、自求全身、終不可得、唯看兩眼脫出在地上、須臾忽覺爪際痛、而兩眼歸位、四支獲起、如是三夜、坐起一如前、及第三日朝、洗面而視庭樹、大

異於平日所見、甚爲奇異、仍問鄰僧、總不辨、因欲見鵠林、昇轎踰薩埵嶺、眺望子浦風景、始知、先所得草木國土悉皆成佛底端的、徑見鵠林、屢入爐鞴、透過數段因緣、彼是一个凡夫、未曾知參學事、然纔兩三夜、而證知是事、唯勇猛一機、與妄想相戰得勝者也、汝等何不發起勇猛憤志乎、

第六夜示衆曰、于時侍者行茶、建仁開山千光祖師、入宋時、偶中暑患瘴、有一老翁、爲飲茶、瘴速治、因齎茶實來、貢禁廷、種之於宇治縣、又贈明惠上人、上人亦種之於栂尾、故以千光明惠爲茶之祖矣、夫茶之爲能、以苦爲體、故能養心臟、心臟治則四臟自平也、明惠上人曰、茶能除睡眠、修道人可喫者也、又外論之、則養心臟、苦修爲第一、專著精彩、苦修徹骨、則神氣朗然、故慈明曰、古人刻苦、光明必盛大也、禪關策進曰、役心不已、得果證、果證決定義也、是故汝等宜貴苦修也、近頃奧州有文溟和尚者、欲見予、百計六年、遂來求掛搭、予曰、縱賜紫大和尚法服未明、於予爲小僧、呵罵猶未足、若身存世儀、意抱尊大、見予何益之有哉、曰、某誠爲大法、乍入叢林一沙彌也、請和尚不惜慈悲接得焉、喝雷棒雨、豈敢惜命哉、因許入室、一夏九旬之間、刻苦精鍊、喫予手中棒、擧不可計、果契證我宗向上大事、臨行長約取弟子禮、然則勇猛一機、竟至法成就、可不愼哉。

第七夜示衆曰、一子出家、九族生天、夫出家、須要眞出家、所謂眞出家者、憤起大誓願、勇猛精進、直斷命根、豁然法性現前、是謂眞出家、九族生天、亦眞實不虛矣、昔播州有一女人、當懷胎之夜、自發願曰、此兒若男子、必當令出家、其夜夢有一老人、來告曰、吾此家九代已前祖也、死

而墮冥府受無量苦、而今依恃汝勝願力、永得脫地獄苦矣、又甲州有良山和尚者、匡徒領衆、臘八依例、與衆禪坐、一夜其亡母、携刀來直刺腋下、大叫一聲、吐血悶絕矣、山良久蘇、次日俄與衆別行脚、一鉢三衣、風喰露宿、尋師訪道、經年禪定頗熟、欲入三昧、時亡母復來現、纔擧眼即隱去、他日深入三昧、恰如海湛然、亡母來復告曰、吾始入冥府、鬼卒皆敬曰、是出家母也、都無苦惱、豈思及公壯、獄卒皆曰、將謂是出家母也、卻是俗漢母也、鐵棒鐵枷、呵責不可言也、其恨徹骨、是故先夜來刺汝、然而汝悔出寺行脚、中來見公、生滅念猶未盡、故隱去、今定慧殆明吾苦患亦盡矣、特得生天上、故來告謝而已、以茲觀之、汝等咸皆有父母、有兄弟、有眷屬、以生生數之、則豈惟千萬人哉、悉皆輪廻六道、受無量苦、待汝等成道者、猶如大旱望雲霓者也、如何悠悠坐見之、而不發大願乎、光陰可惜、時不待人、勉旃勉旃。

師一日示侍者曰、予使侍者數十年、而熟見之、則有三等侍者、曰孝、曰正、曰平也、所謂孝、唯事以純素、而能常安師意者也、所謂正、一諾而能須命、常不怠者也、所謂平無孝正、而事以庸常、半須半違者也、其餘不足言耳焉、在昔阿難侍佛三十年、頗合聖意、佛稱總持第一、香林侍雲門十八年、紙衣錄語句、纔得鑒咦宗、天源柏庵事大應、生前自彫肖像、受師之點眼、滅後常奉此像、不異在世、入宋時、但裹盡容、不暫離身、吾先師白隱老漢、侍祖翁透鱗于松蔭、寒夜入被衾裏、抱住老軀以溫之、古人侍其師、槩而如此、今人何不懷之哉。

又示衆曰、夫大法關繫至重矣、命如懸絲、若不打出一箇半箇眞正種草、傳這的的相承向上大事、我亦佛法中罪人而已、風穴已有此嘆、況其他乎、我熟顧舊參諸子、半箇亦無堪忍、縱令

有少分得力者、不過兩三世、泯然而已、豈不痛乎、我此正宗、支竺扶桑掃地盡矣、北鬱東弗、亦可知耳、我自證之、我此正宗正如一日在天、汝等何不憤起大勇猛心、而欲明之乎、汝等若果無此志、則俱是佛法中罪人也、此日既沒、四天下咸暗黑、護法星辰亦依誰出於世耶、乞各各急須起志、言訖淚壓下。

看經榜第二

眞言門有三密相應之法、所謂印相明正、是爲身密、神咒淸朗、是爲口密、觀本尊與自身不二、是爲意密、禪門諷誦亦有三密、正身端坐、根無空缺、是身密、二者、朗聲徹耳、能所不二、是口密、三者、眼耳相交、念念正眞、是意密而已、若能通達、得大自在、動與不動、當體寂滅、語與不語、眞箇圓融、念與無念、究竟平等、是爲衲僧門下眞正看經諷咒之法也、學者宜委悉。

夫如法看經者、於自他上各具四德、初自四德者、一助三昧、音聲入神、得耳根圓通故、二滅障碍、善神來護、惡鬼怖潛故、三除病患、音徹四大、氣血流溢故、四滿心願、運命日改、隨順天眞故、次他四德者、一歡諸天、增長威神、升進階位故、二救幽魂、消除業報、發菩提心故、三益見聞、遠離惡念、成就信種故、四利畜類、音聲所及、普結勝緣故

論曰、見性修定者、禪門之正行、看經禮佛者、禪門之助道分而已、少林九坐、曾無看經之名、曹溪一世、何有禮佛之勞、雖然、至爲消業養道之方便者、又非先德必有破敗之、是故藥山看經、黃檗禮佛、爲福弘辨、答宣宗問、永明智覺、乘法華業、汾陽一榻坐三閱藏、明教三昧稱萬祈懺、趙州三五夜、而變兩蛇爭口之相、古鼎二十年、而改四賤萃軀之業、舜老夫日有定課、垂老益

堅、即有一日不作、一日不食之語、呆佛照深夜修敬、未嘗少懈、遂感雪頂丰委二人入堂顯異、阿難盡形壽、事佛未得究竟、滅後逢迦葉惡手段、哭泣懺謝漸得入室、倶胝三十年、持咒雖無入證、後見天龍、一指頭透脫圓融、始及發驗、爰有二義、如彼傳道、關山三年密祈兩宮、南山每日恭營一塔之類、即悟後祈傳法度生之壽、又至大瘤多歲、禮馬祖塔、乾峰七日祈文殊智者、未悟已前、哀求懇禱得道之大願也、由茲見之、看經禮佛、亦有不可捨底理歟、間有宗匠、斥之呵之者、初心求他佛不求自佛、或求福壽或祈利養、不以佛祖不傳妙道而掛在胸間、則皆是墮邪魔種族、最堪戕害祖師眞風故也、若亦一等以敗之爲是、内外障難、窺隙日加焉、我恐佛法夫不久歟、故無因和尚曰、我門禮樂者、佛法久住之相而已、學者宜詳之、

五家參詳要路門終

跋五家參詳要路門

三光老師之著述五家要路也、諒其有故哉、今時有以知見解會而爲正悟者、有坐在無事甲裏而爲正修者、有不知不會、是爲向上禪者、有認昭昭靈靈而爲自己者、有著湛湛寂寂而稱禪定者、有向言句上而作死模樣者、有嘗古人糟粕、而爲奇特玄妙者、有綴一聯偈頌、而論死活者、以胡喝亂棒而爲大機大用者、就中生下劣以念佛爲公案、以誦呪爲定課、看經禮拜願淨土樂天堂、匆匆忙忙、終日勞役心身、皆是禪病而非眞正見解、豈謂是五家之宗要邪、是故三光老師、慈悲爲救箇痼疾、且撮出各家一二誵訛之因緣、而以爲拔釘抽楔底之一方便而已、若或謂晦岩有眼目、希叟有讃辭、何用者般杜撰邪、阿呵呵、勸君盡此一盃酒、西出陽關無故人、咄、今也松雲主人、徹見五家要路者、實爲今時之指南車、乃喜捨衣資、以上梓、共之於世矣、庶幾欲扶起鵠林門風者歟、其志可嘉尚焉、且附錄二門者、供初心禪者之座右、而以警睡魔者也、因綴數語以贅之卷尾云。

于時文政丁亥之秋九月

阿鼻窟老衲大觀叟

國譯禪學大成奥付

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年九月二十日發行

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者　藤本茂人
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

印刷所　藤本印刷所
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

發行所　一松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番